姫路市

南通り遺跡

国道250号（飾磨バイパス）沿道環境改善事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22（2010）年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

南通り遺跡

国道250号（飾磨バイパス）沿道環境改善事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22（2010）年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本書は兵庫県姫路市飾磨区に所在する、南通り遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は国道250号（飾磨バイパス）沿道環境改善事業に伴うもので、兵庫県中播磨県民局姫路土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成14年度に本発掘調査を実施した。

3．出土品整理は兵庫県中播磨県民局長の依頼を受けて、兵庫県立考古博物館が平成20年度と平成21年度に実施した。

4．本書に使用した方位は国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。（世界測地系に換算）

5．出土品の分析は、土器の胎土分析および木器の樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

6．地図は、図版１：国土地理院「姫路」 1/200,000
図版３：国土地理院「姫路南部」 1/25,000
図版４：明治31年陸軍測地部発行「姫路・飾磨」 1/20,000
図版５：姫路市基本地形図「飾磨・阿成・飾磨港・妻鹿」 1/2,500
第11図：姫路市史第７巻上付図１「姫路市地形・地質図」
を一部改変して使用した。

7．執筆は、第４章第１節を産業技術総合研究所招聘研究員寒川旭、
第２節・第３節をパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
上記以外は篠宮　正が行った。

8．編集は篠宮が行った。

9．本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県立考古博物館に保管している。

10　発掘調査および報告書作成にあたり、
姫路市教育委員会・姫路市埋蔵文化財センター・姫路市史編纂室の各機関および、
秋枝　芳・今里幾次・大谷輝彦・小柴治子・小林基信・多田暢久・中川　猛・長谷川眞・福井　優・森　恒裕・森岡秀人・山本和子・山本博利
の各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

例言

目　　次

第１章　遺跡をとりまく環境…… 1
　第１節　地理的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 1

第２章　調査の契機と経過…… 5
　第１節　調査の契機…… 5
　第２節　確認調査の経過と成果…… 5
　第３節　本発掘調査の経過…… 7
　第４節　出土品整理の経過…… 8

第３章　発掘調査の成果…… 9
　第１節　調査の概要…… 9
　第２節　第１面の調査…… 9
　第３節　第２面の調査…… 19
　第４節　第３面の調査…… 22

第４章　自然科学的調査の成果…… 24
　第１節　南通り遺跡で検出された液状化現象の痕跡…… 24
　第２節　南通り遺跡出土土器の胎土分析…… 30
　第３節　南通り遺跡出土木器の樹種同定…… 35

第５章　ま　と　め…… 37
　第１節　要　　約…… 37
　第２節　南通り遺跡の立地…… 37
　第３節　南通り遺跡の性格…… 39

遺物一覧…… 43～46
図　　版…… 1～44
写真図版…… 1～60
報告書抄録

挿図目次

第１図　確認調査出土遺物…… 6
第２図　液状化現象と墳砂…… 24
第３図　砂脈の平面図…… 25
第４図　液状化現象の痕跡の断面形…… 26
第５図　液状化跡の断面図（その１）…… 27
第６図　液状化跡の断面図（その２）…… 27
第７図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度…… 32
第８図　胎土中の砂の粒径組成…… 32
第９図　砕屑物・基質・孔隙の割合…… 32
第10図　南通り遺跡の木材…… 36
第11図　南通り遺跡周辺の地質図…… 38
第12図　確認調査出土遺物写真……写真図版扉裏

表目次

第１表　胎土分析試料一覧…… 30
第２表　薄片観察結果…… 31
第３表　南通り遺跡土器一覧 (1)・(2)…… 43・44
第４表　南通り遺跡土錘一覧…… 45
第５表　南通り遺跡石器一覧…… 46
第６表　南通り遺跡鉄器一覧…… 46
第７表　南通り遺跡木器一覧…… 46

図 版 目 次

図版 1　遺跡　１兵庫県の位置　２姫路市の位置　３南通り遺跡の位置 (1/200,000)
図版 2　遺跡　南通り遺跡周辺の主要遺跡一覧
図版 3　遺跡　南通り遺跡周辺の主要遺跡（1/25,000）
図版 4　遺跡　明治40年の南通り遺跡周辺（1/20,000)
図版 5　遺跡　確認調査位置図（1/1,000）
図版 6　遺跡　本発掘調査位置図（1/500）
図版 7 第1面　遺構　遺構平面図（1/200）
図版 8 第1面　遺構　西半遺構平面図（1/100）
図版 9 第1面　遺構　東半遺構平面図（1/100）
図版 10　遺構　地震痕跡（1/200）
図版 11 第2面　遺構　遺構平面図（1/200）
図版 12 第3面　遺構　遺構平面図（1/200）
図版 13　遺構　壁面土層断面図（1/50・1/200）
図版 14 第1面　遺構　溝 SD002（1/20）　溝 SD004（1/20）　溝 SD006（1/20）　溝 SD023北（1/20）
溝 SD023南（1/20）　溝 SD020（1/20）　溝 SD013（1/20）　溝 SD057（1/20）
図版 15 第1面　遺構　溝 SD001①（1/20）　溝 SD001②（1/20）　溝 SD001③（1/20）
溝 SD039（1/20）溝 SD003（1/20）　溝 SD168（1/20）
図版 16 第1面　遺構　土坑 SK148（1/20）　土坑 SK008（1/20）　土坑 SK005（1/20）
図版 17 第1面　遺構　土坑 SK007（1/20）　土坑 SK030（1/20）　土坑 SK029（1/20）
土坑 SK027（1/20）　土坑 SK063（1/20）　土坑 SK094（1/20）
図版 18 第1面　遺構　土坑 SK032（1/10）　土坑 SK009（1/40）　土坑 SK048（1/40）
図版 19 第1面　遺構　土坑 SK044（1/20）　土坑 SK045（1/20）　土坑 SK062（1/20)
土坑 SK049（1/20）　土坑 SK047（1/20）
図版 20 第1面　遺構　土坑 SK055（1/40）　土坑 SK056（1/40）　土坑 SK072（1/40）
図版 21 第1面　遺構　土坑 SK053（1/20）　土坑 SK059（1/20）　土坑 SK054（1/20）
図版 22 第1面　遺構　土坑 SK058（1/10）
図版 23 第1面　遺構　井戸 SE040（1/20）
図版 24 第1面　遺構　井戸 SE040（1/20）
図版 25 第1面　遺構　掘立柱建物 SB101（1/60）　掘立柱建物 SB104（1/60）
図版 26 第1面　遺構　掘立柱建物 SB102（1/60）　柱穴 P140（1/10）
図版 27 第1面　遺構　掘立柱建物 SB103・SB105（1/60）
図版 28 第2面　遺構　土器群 175（1/20）　土器群 151（1/10）　土坑 SK186（1/10）
図版 29 第2面　遺構　柱穴 P041（1/10）　土坑 SK177（1/10）　土坑 SK158（1/10）　土坑 SK179（1/10）
図版 30 第3面　遺構　土器群 180（1/10）　土器群 189（1/10）
図版 31 第1面　遺物　溝 SD001出土鍋
図版 32 第1面　遺物　溝 SD001出土土器
図版 33 第1面　遺物　溝 SD001出土備前焼
図版 34 第1面　遺物　溝 SD001他、中世溝出土土器
図版 35 第1面　遺物　中世土坑・井戸 SE040出土土器
図版 36 第2面　遺物　古代土坑・土器群・柱穴出土土器
図版 37 第2面　遺物　古代包含層出土土器
図版 38 第3面　遺物　土器群 180・181・189出土土器
図版 39 第3面　遺物　弥生包含層出土土器
図版 40　遺物　土錘（１）
図版 41　遺物　土錘（２）
図版 42　遺物　石器（１）
図版 43　遺物　石器（２）　鉄器
図版 44　遺物　木器

写真図版目次

写真図版 1　遺跡　1 .南通り遺跡 遠景(北から)　2.南通り遺跡 遠景(西から)
写真図版 2　遺跡　3 .調査区全体(真上から、上が西)
写真図版 3　遺跡　4 .調査区 近景(北から)　5.調査区 全景(東から)
写真図版 4　遺構　6 .溝 SD001 礫検出状況(西から)　7.土坑 SK058 遺物検出状況(南から)
写真図版 5　遺構　8 .液状化痕跡検出状況 (1)　9 .液状化痕跡検出状況 (2)
10.液状化痕跡断面Ⅲ(南東から)　11.液状化痕跡断面Ⅳ(北西から)
12.液状化痕跡断面Ⅰ(南東から)　13.液状化痕跡断面Ⅱ(北西から)
写真図版 6 第 1面　遺物　溝 SD001出土大型土錘　第 1面出土陶磁器
写真図版 7 第 3面　遺物　第 3面出土 弥生土器　第 3面土器群出土 弥生土器
写真図版 8　分析　土器胎土の顕微鏡写真
写真図版 9 第 1面　遺構　14.調査区 全景(西から)
写真図版 10 第 1面　遺構　15.調査区 全景(西から)　16.調査区 全景(東から)
写真図版 11 第 1面　遺構　17.調査区西半 (東から)　18.調査区西半(西から)
写真図版 12 第 1面　遺構　19.礫群(西から)　20.溝 SD001(東から)
写真図版 13 第 1面　遺構　21.溝 SD001礫検出状況(西から)　22.溝 SD001 断面(西から)
写真図版 14 第 1面　遺構　23.溝 SD001 礫検出状況(西から)　24.溝 SD006 断面(西から)
写真図版 15 第 1面　遺構　25.溝 SD001 遺物出土状況(西から)　26.溝 SD001 遺物出土状況(南西から)
27.溝 SD001 遺物出土状況(南西から)
写真図版 16 第 1面　遺構　28.溝 SD002 断面(東から)　29.溝 SD004 断面(南から)　30.溝 SD006 断面(南から)
31.溝 SD023 断面(南から)
写真図版 17 第 1面　遺構　32.溝 SD010 断面(南から)　33.溝 SD020 断面(南から)
34.溝 SD013 断面(南から)　35.溝 SD057 断面(南から)
写真図版 18 第 1面　遺構　36.溝 SD039 断面(東から)　37.溝 SD003 断面(東から)　38.土坑 SK168 断面(東から)
写真図版 19 第 1面　遺構　39.土坑 SK148 断面(南東から)　40.土坑 SK005 断面(東から)　41.土坑 SK008 断面(南から)
写真図版 20 第 1面　遺構　42.土坑 SK007 断面(南から)　43.土坑 SK030 断面(南から)　44.土坑 SK063 断面(南から)
写真図版 21 第 1面　遺構　45.土坑 SK027 断面(南から)　46.土坑 SK094 断面(北から)　47.土坑 SK009 断面(南から)
写真図版 22 第 1面　遺構　48.土坑 SK048 断面(北から)　49.土坑 SK029 断面(南から)　50.土坑 SK047 断面(東から)
写真図版 23 第 1面　遺構　51.土坑 SK032 断面(南から)　52.土坑 SK032 遺物出土状況(南西から)
53.土坑 SK055 断面(南から)
写真図版 24 第 1面　遺構　54.土坑 SK062 断面(南から)　55.土坑 SK044 断面(南から)　56.土坑 SK045 断面(東から)
写真図版 25 第 1面　遺構　57.土坑 SK056 断面(南から)　58.土坑 SK049 断面(南から)　59.土坑 SK072 断面(南から)
写真図版 26 第 1面　遺構　60.土坑 SK058 礫検出状況(南から)　61.土坑 SK058 断面(南から)
写真図版 27 第 1面　遺構　62.土坑 SK059 断面(南から)　63.土坑 SK053 断面(西から)　64.土坑 SK054 断面(西から)
写真図版 28 第 1面　遺構　65.井戸 SE040 検出状況(南から)　66.井戸 SE040 完掘状況(南から)
写真図版 29 第 1面　遺構　67.柱穴 P022 鉄器出土状況 (南東から)　68.柱穴 P140 石臼出土状況(東から)
69.柱穴 P125 断ち割り断面(東から)
写真図版 30 第 2面　遺構　70.土坑 SK158 完掘状況(南から)　71.土坑 SK158 断ち割り断面(東から)
写真図版 31 第 2面　遺構　72.土器群 175 遺物出土状況(南から)　73.土器群 151 遺物出土状況(南東から)
写真図版 32 第 2面　遺構　74.土坑 SK179 完掘状況(北から)　75.柱穴 P041 遺物出土状況(西から)
写真図版 33 第 3面　遺構　76.調査区 全景(西から)　77.調査区 全景(東から)
写真図版 34 第 3面　遺構　78.土器群 189 遺物出土状況(東から)　79.土器群 180 遺物出土状況(東から)
写真図版 35　調査状況　80.寒川先生 液状化痕跡の調査 (1)　81.寒川先生 液状化痕跡の調査 (2)
82.今里先生 調査状況見学　83.姫路市立飾磨小学校 6 年生 見学会
84.現地説明会 (1)　85.現地説明会 (2)
写真図版 36　遺物　溝 SD001出土 鍋
写真図版 37　遺物　溝 SD001出土 鍋
写真図版 38　遺物　溝 SD001出土 鍋
写真図版 39　遺物　溝 SD001出土 備前焼壺・甕
写真図版 40　遺物　溝 SD001出土 備前焼擂鉢
写真図版 41　遺物　溝 SD001出土 備前焼甕 その他土器
写真図版 42　遺物　溝 SD001出土 磁器
写真図版 43　遺物　第 1面出土 土器
写真図版 44　遺物　第 1面出土 土器
写真図版 45　遺物　第 1・2面出土 土器
写真図版 46　遺物　第 2面出土 土器
写真図版 47　遺物　第 2面出土 土器
写真図版 48　遺物　第 2面包含層出土 土器
写真図版 49　遺物　第 3面出土 土器
写真図版 50　遺物　第 3面出土 土器
写真図版 51　遺物　第 3面出土 土器
写真図版 52　遺物　土錘 (1)
写真図版 53　遺物　土錘 (2)
写真図版 54　遺物　石器 (1)
写真図版 55　遺物　石器 (2)
写真図版 56　遺物　石器 (3)
写真図版 57　遺物　石器 (4)
写真図版 58　遺物　石器 (5)・鉄器
写真図版 59　遺物　木器 (1)
写真図版 60　遺物　木器 (2)

第１章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境　（図版１・３）

南通り遺跡は兵庫県姫路市飾磨区中島に所在する。姫路市は兵庫県の中西部に位置しており、南は瀬戸内海に面し、南東は高砂市、東は加古川市、北東は加西市、北は神崎郡福崎町・市川町・神河町、北西は宍粟市、西はたつの市と揖保郡太子町と接している。

南通り遺跡は姫路市の南端の市川の河口右岸から野田川河口左岸の播磨灘沿岸に位置する。市川は姫路平野を形成する一級河川で、中国山地の東端を構成している播但山地の朝来市生野町の標高 855mの三国岳付近を源とし、南流する。市川左岸には俗称御旅山・甲山・仁寿山などの基盤岩の突出が認められる独立丘陵も散在するが、大部分は市川の氾濫原である完新世段丘面である。

南通り遺跡の南側約 200mには標高 5.2m、長さ約 1,700m、幅約 150mを測る東西方向に長い高浜松林がある砂州が海岸に平行して存在する。遺跡が存在していた当時、この砂州のすぐ南側は遠浅の海浜が広がっていたと考えられる。さらに南通り遺跡の北側約 200mには標高 2.0m、長さ約 500m、幅約 200mを測る東西方向に長い下中島集落がのる砂州が海岸に平行して存在する。

南通り遺跡は標高 1.4mであり、この２帯の砂州の中間の後背湿地に立地していることになる。西側には市川下流域を網状に流れる高浜川が、東側には阿成川が流れている。

完新世段丘面を細分すると、現在の集落や耕作地が立地することが多い微高地と帯状に長く延びる凹地をなす旧河道、いずれにも属さない平坦地からなっている。これらのうち旧河道は、ほとんどのものが現在の流路と比べ蛇行した流れを有している。微高地はこれまでの分類では自然堤防とされてきたが、大礫から小礫で構成されている場合が多く、中州として形成されたものと考えられる。また、平坦部は小規模な旧河道や旧中州が氾濫堆積物で埋められたものと考えられる。以上のことから、完新世段丘面もかつては扇状地として形成されたものであることがわかる。

低位の地形面である氾濫原は河川の影響のみで形成された自然堤防帯と、海と河川が形成に関与した三角州帯、海によって形成された砂堆帯に細分できる。自然堤防帯は完新世段丘面と氾濫原面の境界が形成された後で発達した新しい地形である。

縄文海進時の海岸線は現在のT.P.４ｍ～５ｍ付近に位置していたと考えられている。

第２節　歴史的環境　（図版２・３）

南通り遺跡は姫路市の南部に所在する。南通り遺跡周辺には古墳時代から中世の遺物散布地である西通り遺跡やヒジ倉遺跡が存在しているが、遺跡の数が非常に少なく、調査例もまったくない。これは遺跡が存在していないのではなく、沖積作用によって深く埋もれているため、発見されていない遺跡が存在している可能性が高い。

今回中心となる遺構と遺物は弥生時代と古代・中世である。したがって、南通り遺跡周辺地域、特に市川下流域の弥生時代と古代・中世を中心に前後の時代も含めて時代ごとに概観する。

１．旧石器・縄文時代

旧石器時代の遺跡は姫路市南部では調査が行われていない。唯一兼田遺跡でナイフ型石器が採集されているのみである。

縄文時代は、仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）・橋詰遺跡・仮称船場川東区整遺跡第３地点などで調査が行われている。

仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）では後期の土坑が調査されているほか、晩期の土器が出土している。橋詰遺跡では包含層から後期と晩期の土器が出土している。仮称船場川東区整遺跡第3地点では晩期後半の溝や土坑などを調査している。

他に石ヶ坪遺跡などで後期の土器が、小山遺跡などで晩期の土器が見つかっている。

２．弥生時代

弥生時代の遺跡は、南通り遺跡のほかに仮称姫路駅周辺第３地点（市之郷遺跡）・仮称姫路駅周辺第２地点・仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）・豆腐町遺跡・南畝町遺跡・橋詰遺跡・仮称船場川東区整遺跡第６地点・兼田遺跡などで調査が行われており、甲山遺跡で遺物が採集されている。

仮称姫路駅周辺第３地点（市之郷遺跡）では弥生時代全般の遺構・遺物を調査している。前期末には溝・土坑などの他、木棺墓がある。遺構が最も集中するのは中期後半の段階で、竪穴住居などの居住域と周溝墓・木棺墓の墓域にかけての範囲を調査している。後期では溝と土坑がある。仮称姫路駅周辺第２地点では、前期の溝・土坑、中期後半の土坑・竪穴住居・溝・土器溜りなどを調査している。仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）では、前期の溝・土坑・旧河道、中期後半の土器溜り、後期の竪穴住居などを調査している。豆腐町遺跡では前期の溝を調査している。南畝町遺跡では中期と後期の溝を調査している。橋詰遺跡では遺物包含層が確認され、前期から後期にかけての土器が出土している。仮称船場川東区整遺跡第６地点では中期の竪穴住居・土坑墓、後期の竪穴住居・柵列・溝・井戸・円形周溝墓を調査している。兼田遺跡は市川の左岸山頂に立地し、後期の竪穴住居を調査している。

甲山遺跡は高地性集落で、弥生時代中期後半の土器・石器が採集されている。

３．古墳時代

市川下流域左岸の古墳は山塊から山麓にかけて、市川右岸側の古墳は船場川右岸の山塊に分布している。市川下流域の左岸の古墳には御旅山古墳群・兼田古墳群がある。船場川右岸の古墳には手柄山北丘古墳群、手柄山南丘古墳群などがある。

御旅山古墳群は御旅山６号墳の前方後方墳を最古として、三角縁神獣鏡が出土している御旅山３号墳などの７基の前期古墳から御旅山９号墳・ 10号墳・ 11号墳など横穴石室を埋葬施設とする７基の後期古墳まで 14基以上の古墳の存在が知られていた。

兼田古墳群は兼田丸山古墳を盟主とする前期の古墳群である。

古墳時代の集落遺跡は仮称姫路駅周辺第３地点（市之郷遺跡）・仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）・仮称船場川東区整遺跡第６地点・長越遺跡・飯田湯田遺跡などで調査が行われている。

仮称姫路駅周辺第３地点（市之郷遺跡）の古墳時代中期には居住域として長期間にわたって建て替えられた竪穴住居・掘立柱建物を検出しており、韓式土器や初期須恵器など良好な資料が出土している。仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）では古墳時代前期と後期の竪穴住居・掘立柱建物を検出している。仮称船場川東区整遺跡第６地点では古墳時代初頭の竪穴住居・柵列・溝・井戸、中期の竪穴住居・掘立柱建物、後期の竪穴住居・掘立柱建物を調査している。長越遺跡・飯田湯田遺跡では古墳時代初頭の竪穴住居・井堰・大溝などを調査している。

４．古代

奈良時代において、この地域は播磨国餝磨郡に含まれていた。７世紀後半の藤原宮出土の木簡に「志加麻評」とあり、シカマの初見である。『播磨国風土記』には餝磨郡は16里が記されており、南通り遺跡周辺は安師里に比定されている。平安時代の『和名類聚抄』には餝磨郡は14郷が記載されており、穴无郷に比定されている。

播磨国府・播磨国分寺・播磨国分尼寺はいずれも餝磨郡に所在している。播磨国府が本町遺跡に推定されており、播磨国分寺・播磨国分尼寺は市川左岸に位置する。

『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条には播磨国に９駅が記載されている。南通り遺跡の北側約５kmには古代山陽道が東西方向に推定されており、佐突駅と草上の駅家の中間に当たる。『延喜式』神名帳に記載のあるいわゆる式内社は餝磨郡に４座あり、射楯平主神社２座・白国神社・高岡神社がある。

餝磨郡には古代寺院が多く、市之郷廃寺、辻井廃寺、見野廃寺、今宿廃寺などがある。市川流域には南通り遺跡の上流約４kmには古くから塔心礎の存在が報告されている市之郷廃寺が存在する。発掘調査により仏堂基壇の調査が行われ、白鳳期の大量の瓦が出土し、平安時代前半まで存続する。

『播磨国風土記』の餝磨御宅は三宅遺跡に比定されており、重弧文軒平瓦などが採集されている。

南通り遺跡の周辺の条里地割は圃場整備や宅地化などの開発で失われた地区も多いが、阿成付近に北から東に約23°振る餝磨郡条里の地割が残る。

集落遺跡は南通り遺跡のほかに仮称姫路駅周辺第３地点（市之郷遺跡）・仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）・北条遺跡・豆腐町遺跡などの調査が行われている。

仮称姫路駅周辺第３地点（市之郷遺跡）では市之郷廃寺に伴う遺物と居住域を検出している。仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）では奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物・井戸・墓・土坑・畠、平安時代中期の夥しい柱穴群を検出している。北条遺跡では、７世紀末から８世紀初頭の掘立柱建物の柱穴列・溝・大型土坑・素掘り井戸などを検出している。豆腐町遺跡では奈良時代から平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑・旧河道を検出しており、「郡」・「郷」の墨書土器や漆工房関連遺物などが注目される。

古代における須恵器生産をはじめとする窯業遺跡は餝磨郡西部から揖保郡東部にかけて群集している。青山窯跡群・桜峠窯跡群・打越窯跡群・大池窯跡群・赤坂窯跡群・峰相口窯跡群などがある。

『日本三代実録』には、播磨国司の報告として、「播磨国言、今月八日地大震動、諸郡官舎、諸定額寺堂塔、皆盡頽倒」という記述がある。貞観10年（868）７月８日に発生した播磨地震により、都の官舎や、定額寺の堂塔が皆倒れたという国司からの報告である。

５．中世

中世の姫路については、不明な点が多い。奈良時代から平安時代にかけて、整備拡充されていったと考えられる国府は律令制の衰退とともに、次第にその機能を失い、院政期には事実上、播磨国府は院の御分国と化してしまう。鎌倉時代に入ると、守護所が加古川に置かれたことから、国衙の機能はいっそう衰退したと考えられる。国衙機構が完全に衰退するのは、小河氏が守護赤松氏の被官化し、守護所となった書写坂本城の守護代館に移り住むようになる明徳年間以後と考えられる。以後、姫路が播磨の中心として再び歴史上に登場するのは、黒田氏による姫路城の築城期、さらには羽柴秀吉による初期城下町の形成期である。

中世の集落は南通り遺跡のほかに阿保遺跡・仮称姫路駅周辺第３地点（市之郷遺跡）・仮称姫路駅周

辺第２地点・仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）・仮称姫路駅周辺第4地点・豆腐町遺跡・仮称船場川東区整遺跡第６地点・加茂遺跡などで調査が行われている。

阿保遺跡では鎌倉時代から室町時代の溝・井戸を調査している。仮称姫路駅周辺第３地点（市之郷遺跡）では、平安時代後期の掘立柱建物群からなる４単位の屋敷地を調査している。仮称姫路駅周辺第２地点では平安時代後期の掘立柱建物・溝を検出している。仮称姫路駅周辺第１地点（北条遺跡）では、平安時代後期の井戸・土坑・溝・柱穴を検出している。仮称姫路駅周辺第４地点の調査では、平安時代後期の井戸を検出している。豆腐町遺跡では鎌倉時代の井戸・柱穴群を調査している。仮称船場川東区整遺跡第６地点では平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物・土坑・井戸・土壙墓を検出している。

加茂遺跡は鎌倉時代と室町時代から安土桃山時代にかけての遺構を調査している。鎌倉時代は掘立柱建物・土坑・溝の遺構を調査している。室町時代から安土桃山時代にかけては堀・土塁・掘立柱建物・井戸・池などの遺構を調査しており、城館と推定されている。

城館遺跡は加茂遺跡のほかに、市川左岸の甲山の山頂に国府山城跡がある。

信仰遺跡は御旅山経塚・甲山経塚などがある。

南通り遺跡周辺は天正時代（1573～1592）には中島村と呼ばれていた。

６．近世

南通り遺跡周辺は江戸時代初期の元禄時代以降には下中島村と呼ばれており、姫路藩領で、幕末に至った。村の北側には飾磨津と高砂を東西に結ぶ高砂道が走っている。

姫路藩の政策として、南部の遠浅の海浜部を埋め立てた新田開発が行われた。高浜松林の市川寄りに宮前新田、野田川寄りに向新田（真鶴新田）、宝暦8年（1758）から庄助新田、袋帳新田、川尻新田、辰巳新田、文政８年（1825）からは相生新田、天保10年（1839）からは大森新田が開発され文久３年（1863）に完成した。この新田開発によって正保郷帳では586石であったものが、天保郷帳では1130石とほぼ倍増している。

７．近代

明治４年（1871）の廃藩置県により、姫路県となり、その後、飾磨県と改称し、兵庫県となった。明治22年（1889）の市制町村制施行により飾東郡高浜村に属し、明治27年（1894）には独立して下中島村となり、明治29年（1896）には飾磨郡に所属した。大正８年（1919）に飾磨町に合併し飾磨町大字中島となり、昭和15年（1940）には市制を施行し、飾磨市中島となった。昭和21年（1946）には姫路市と合併し、姫路市飾磨区中島となった。

姫路市は平成８年に中核都市となり、播磨の中心となっている。

大正12年（1923）には明石～姫路間に神戸姫路電気鉄道（現在の山陽電鉄）が開通した。これと前後する大正初期から海岸地帯に工場が建ち始めた。新田地帯の埋め立てが進められ、工業団地となっていった。昭和４年（1929）の山陽特殊製鋼をはじめとして、日本選鋼・合同製鉄姫路製造所などの巨大な製鉄工場と関西電力姫路第一発電所が建設されていった。

国道250号は昭和31年（1956）に指定され、平成21年（2009）に国道250号飾磨バイパスが完成した。

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機

１．調査の契機

兵庫県中播磨県民局県土整備部姫路土木事務所では国道250号（飾磨バイパス）沿道環境改善事業を進めている。国道250号は神戸市を起点とし、岡山県岡山市に至る延長約167kmの幹線道路である。姫路市内では臨海部の工業地帯を結ぶ産業の大動脈であり、地域の生活道路としても使われている。二車線で道幅が狭く、道路際まで民家が密集していた。このため歩行者の安全確保や渋滞緩和などを目的に兵庫県は平成２年度にバイパス建設事業に着手し、平成21年度の完成を予定した。飾磨バイパスは姫路市白浜町を起点として姫路市飾磨区宮を終点とする全体延長3.0kmのバイパスである。道路の規格は全幅が25m、幅員が13mの四車線で、両側に歩道を設置するものである。

沿道環境改善事業は調査を実施した姫路市飾磨区中島では、南通り遺跡部分から西側は現道を拡幅して四車線化にする整備であり、東側は当該地から分岐して、バイパスを整備するものである。

平成16年（2004）５月には姫路市飾磨区中島から姫路市飾磨区宮の現道拡幅部分の1.1kmの供用に続き、平成21年（2009）９月には市川浜手大橋を含む姫路市白浜町～姫路市飾磨区中島のバイパス部分の1.9kmの共用が始まり、全線が完成した。

２．南通り遺跡の発見

南通り遺跡は、従来知られていなかった遺跡である。

平成４年度に国道250号飾磨バイパス建設事業の計画を受け、兵庫県教育委員会では姫路市飾磨区中島において、該当箇所の埋蔵文化財にかかわる分布調査を実施した。この結果、当該地に遺物の散布が認められ、遺跡が存在する可能性が高いと判断した。

分布調査の結果を受け、確認調査を実施した結果、明確な遺構の存在が明らかになったため、姫路市教育委員会が小字名を付けて、南通り遺跡と命名した。

第２節　確認調査の経過と成果

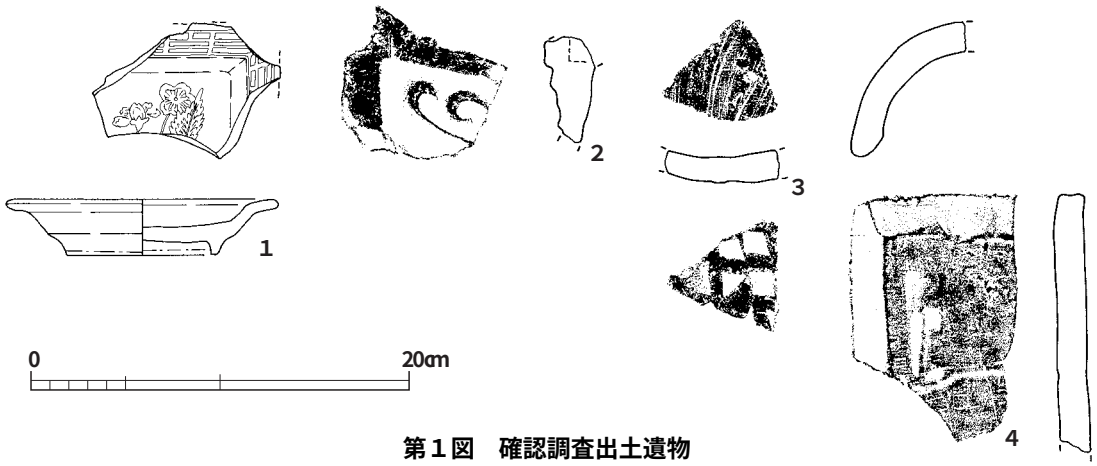
分布調査後、本事業に伴う確認調査を平成13年度に実施した。

１．確認調査の経過（図版５）

確認調査は事業計画およびそれに伴う用地買収を受け実施した。期間は平成13年（2001）８月20日～平成13年８月24日にかけての５日間で、調査面積は352㎡である。

対象地は姫路市飾磨区中島の延長215mの区間について実施した。区間が長いため、便宜的に西地区・中央地区・東地区の３地区に分けて呼称した。西地区は最も西側に位置し、現道から分岐する地点に当たり、延長50mである。中央地区は西地区の東側に位置し、延長90mである。東地区は中央地区の東側に位置し、延長75mである。

確認調査は２ｍ×４ｍの調査区を設定し、盛土や耕作土を機械で除去した後、人力により断面の精査および遺構検出を実施した。西地区は№０～№３と間隔を空けて調査を行っていたが、№１・№２周辺に遺物の出土が多く、遺構の存在する可能性が高まったため、この付近を中心に新たに№15～№22の８箇所の調査区を設定し、調査を行った。従って、西地区では合計12箇所の調査区を設定し調査を行ったこ



第１図　確認調査出土遺物

とになる。中央地区は20m～45m間隔に、№４～№７・№12～№14の７箇所の調査区を設定し調査を行った。東地区は30m～50m間隔に、№８～№11の４箇所の調査区を設定し調査を行った。

２．確認調査の成果（第１・12図）

確認調査の結果、西地区では耕土下の黄灰色シルト層と黄灰褐色シルト層から奈良時代から中世にかけての遺物が出土した。№１・№２・№21・№22調査区ではピット群を検出した。№３調査区では土坑を検出した。また、№18調査区では上記の下層の礫層上面から弥生土器が出土した。

確認調査で出土した主な遺物は№１調査区では三田青磁１が出土した。長方形の皿で見込みに桜花葉文を施文する。№２調査区では軒平瓦２が出土した。瓦当の一部が残り唐草文を施文している。中世末に位置付けられる。№３調査区では平瓦３と丸瓦４が出土した。平瓦は格子タタキであり、平瓦・丸瓦ともに凹面に布目の痕跡を残している。丸瓦は玉縁を持つが先端を欠いている。古代後半に位置付けられる。

中央地区では奈良時代から平安時代にかけての須恵器や土師器が僅かに出土したが、遺構は検出できなかった。東地区では海浜性の砂の厚い堆積が見られ、自然の流路の存在は確認したが、遺構は検出できなかった。僅かに近世から近代にかけての磁器が出土した。

以上のように、西地区においては奈良時代から中世にかけてのピット群や土坑などの遺構とさらに下層の礫層上面から弥生土器が出土していることから、複数面の遺構の存在が想定できた。

これらの結果を総合的に判断して、西地区の12箇所の内、№１・№２・№15・№17・№18・№19・№20・№21・№22の９箇所が含まれる範囲について兵庫県教育委員会は本発掘調査が必要であると認定した。

確認調査の組織（遺跡調査番号2001109）

平成13年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　大村敬通

企画調整班　主任調査専門員　井守徳男　主査　高瀬一嘉

総務課　課長　森　俊雄

調査第２班　調査専門員　小川良太

調査担当　調査第２班　主査　森内秀造　主査　久保弘幸

第３節　本発掘調査の経過（図版６）

確認調査の結果を踏まえ、本発掘調査を平成14年度に実施した。

本発掘調査は確認調査において、遺構の存在が明らかになった西地区の742㎡を対象に実施した。調査は、平成14年（2002）５月17日～平成14年７月17日にかけて実施した。

調査は確認調査の成果に基づき、盛土および、耕作土などの無遺物層は機械により掘削を行い、それ以下の遺物包含層や遺構検出、遺構掘削は人力により行った。

記録は、遺構検出時および、掘削時・完掘時において、随時写真撮影や遺物出土状況図・断面図・遺構図を作成した。また第１面完掘時には、小型ヘリコプターによる空中写真撮影と遺構図の図化を行った。

第１面の柱穴等の遺構の断ち割り時に下層から、地震による液状化様の痕跡を確認したため、確認した地点は現状のまま残し、独立行政法人産業技術総合研究所寒川旭氏に現地でご指導いただいた。これにより地震の痕跡であることが明らかになったため、詳細な調査を行った。平面の写真や図面などで記録をとった後、地震痕跡を断ち割り、断面の写真や図面などで記録をとった。

地震痕跡の調査後、第２面の調査を行った。写真・図面の記録後、下層から弥生土器が出土することが確認調査時点から判明していたので、第３面の調査を行った。第３面は、遺物の出土は認められるが、遺構の検出はできなかった。写真・図面の記録をとって調査を終了した。

調査中現地にて、今里幾次氏や姫路市教育委員会の埋蔵文化財担当職員にご教示を得たほか、地震の痕跡について独立行政法人産業技術総合研究所寒川旭氏にご指導いただいた。

調査期間中の平成14年（2002）６月13日に報道機関に調査成果を公表し、平成14年６月15日に現地説明会を開催した。その後、姫路市立飾磨小学校６年生を対象として平成14年６月25日に見学会を実施した。

本発掘調査の組織（遺跡調査番号2002062）

平成14年度

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長　藤本修三

主幹　輔老拓治

総務課　課長　森　俊雄

企画調整班　主任調査専門員　井守徳男

主査　高瀬一嘉

調査第３班　調査専門員　小川良太

調査担当　調査第３班　主査　篠宮　正

主任　仁尾一人

調査補助員　清水洋子・小谷義男・松井利可子

第４節　出土品整理の経過

出土品整理は、平成20年度と平成21年度に兵庫県立考古博物館で実施した。

平成20年度は出土遺物の水洗・注記を兵庫県立考古博物館魚住分館で実施し、接合以降は兵庫県立考古博物館で実施した。出土遺物の接合・補強を行った後、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、土器・瓦・石器・金属器・木製品の実測を行った。また瓦の拓本を行った。土器の復原を行い、瓦・石器・金属器・木製品と併せて遺物の写真撮影を行い、写真を整理した。保存処理は金属器の保存処理を行い、出土品の分析は土器の胎土分析と木製品の樹種同定を委託して行った。

平成21年度は遺構図をトレースが行えるように補正し、実測した遺物図と遺構図と共に、レイアウト・トレースを行った。また、木製品の保存処理を行った。

原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。

出土品整理の組織

平成20年度

調査主体　兵庫県教育委員会

整理事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

副館長兼総務部長　藤原　悟

総務課　課長　若狭健利

課長補佐　山下裕惠

埋蔵文化財調査部　部長　若生晃彦

主幹　岡崎正雄

整理保存班　調査専門員　森内秀造

主査　菱田淳子

整理担当　整理保存班　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員　宮田麻子・矢木加奈子・加藤裕美・西口由紀・蔵　幾子・宮野正子・早川有紀・又江立子・大前篤子

平成21年度

調査主体　兵庫県教育委員会

整理事務　兵庫県立考古博物館

館長　石野博信

副館長兼総務部長　藤原　悟

総務課　課長　前川浩子

主査　大西晃彦

埋蔵文化財調査部　部長　若生晃彦

整理保存班　調査専門員　森内秀造

主査　菱田淳子

整理担当　整理保存班　主査　篠宮　正

非常勤嘱託員　宮田麻子・矢木加奈子・今村直子

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の概要

１．調査の方法（図版 6・7）

平成 13年度確認調査結果を受け、本発掘調査を平成 14年度に実施した。本発掘調査対象地は、国道 250号の現道拡幅部とバイパス新設部の分岐点に当たる。

調査地はバイパス建設に伴う区画整理がすでに実施され埋め立てられており、バイパスの路線敷および歩道も設置されている状況であった。したがって、調査区は歩道を除いた車道部分のみの調査である。調査区は東西に長い台形で、西側が狭く東側が広い。調査区の中は図面の基準と遺物の取り上げの地区割として、便宜上、国土座標を基準に東西南北方向に５m単位で区切り、東西方向は西端を Aとして東端を Jとした。南北方向は北から１・２・・８とした。北西の端を A1、南東の端を J8と呼称した。全長は 50m、幅は西側が 10m、東側が隅切り部分を除いて 20mを測り、調査面積は 742㎡である。

２．遺跡の層序（図版 7～ 13）

調査地の土層堆積は約 60cmの盛土が存在し、これは最近実施された区画整理時の埋め土である。埋め土の際に耕作土を除去しているため、僅かしか耕作土は残っていない。

調査は第１面・第２面・第３面の三面について行った。第１面は耕作土直下にある遺構検出面で、細粒砂を面としている。標高 0.8m～ 0.95mを測り、主として中世から近世にかけての遺構を検出した。遺構には溝・掘立柱建物・柱穴・井戸・土坑がある。第２面は第１面下の約 15cmの細粒砂を挟んだ、標高 0.65m～ 0.8mで検出した細粒砂を面としている。奈良時代の遺構を検出した。遺構には土器群・土坑がある。第３面は第２面下の約 15cmの細粒砂を挟んだ、標高 0.5m～ 0.7mの砂礫層で検出したが、明確な遺構は存在していない。弥生後期の土器がまとまって出土している。なお、第１面の調査後、第２面までの間で、地震による液状化の痕跡を検出した。

第２節　第１面の調査

１．概要（図版 7～ 9）

第１面は、耕作土直下の遺構検出面である。このため遺物包含層は存在しておらず、遺構のみ検出できた。耕作により遺構面は削平されている。第１面の遺構は調査区全体に存在している。遺構には溝・掘立柱建物・柱穴・井戸・土坑がある。特に中央部分は掘立柱建物・柱穴・井戸・土坑など密度が濃く、調査区外の北側と南側に広がっている。また東西方向のほぼ中央に溝 SD001が存在している。西側と東側の調査区外には溝が延びているが柱穴などの遺構は希薄になっている。

２．遺構（図版 7～ 9・14～ 27　写真図版 9～ 29）

SD 002（図版 8・14　写真図版 16）

調査区の北西端の A1・A2に位置する南北溝で、溝 SD001を切っており、北西側の調査区外に延びている。幅 105cm以上、深さ８cmを測る。断面形は浅いU字形である。遺物は中世の土器が僅かに出土した。

SD 004（図版 8・14　写真図版 16）

調査区の西端の A2・A3に位置する南北溝で、溝 SD001と SD003を切っており、調査区外に延びている。幅 26cm、深さ 10cmを測る。断面形はU字形である。遺物は土師器鍋が出土した。

SD 006（図版 8・14　写真図版 14・16）

溝 SD002・SD004の東側の B2・B3・B4・C2・C3・C4に位置する南北溝で、SD001を切っており、調査区外に延びている。幅 2.8m、深さ 10cmを測る。断面形は浅い逆台形である。遺物は土師器鍋と瓦質土器羽釜が出土した。

SD 023（図版 8・14　写真図版 16）

溝 SD006の東側の C3・C4・D2・D3・D4に位置する南北溝で、SD168と SD001を切っており、北側は調査区外に延びている。最大幅 1.7m、深さ 15cmを測る。断面形は浅い U字形である。遺物は土師器皿と弥生土器高坏が出土した。弥生土器は下層からの混入であると考えられる。

SD 010（図版 8・14　写真図版 17）

D2・D3に位置する南北溝で、溝 SD023の東側に重複して、切っている。幅 50cm、深さ 8 cmを測る。断面形は浅い U字形である。遺物は土師器鍋と土錘が出土した。

SD 020（図版 8・14　写真図版 17）

D3・D4・D5・E2・E3・E4に位置する南北溝で、溝 SD023の東側に位置する。SD001・井戸 SE040を切っている。南側と北側は調査区外に延びる。幅 0.7m～ 2.8m、深さ 15cmを測る。断面形は浅い U字形である。遺物は中世の土師器と白磁碗が出土した。

SD 013（図版 8・14　写真図版 17）

E3・F3に位置する南北溝で、溝 SD020の東側に位置する。北側は調査区外に延び、南側は土坑に切られている。幅 1.0m～ 1.5m、深さ 7 cmを測る。断面形は浅い U字形である。遺物は中世の土師器と白磁皿・土錘と鉄釘が出土した。

SD 152（図版 8）

E3・E4・F3に位置する南北溝で、溝 SD013に東側を切られている。北側は調査区外に延び、南側は SD001と土坑に切られている。幅 50cm以上、深さ 5 cmを測る。遺物は中世の土器が僅かに出土した。

SD 057（図版 9・14）

H4・I4に位置する南北溝で、土坑 SK056に取り付く。北側は調査区外に延びる。中央部分で幅 83cm、深さ 12cmを測る。断面形は浅い U字形である。遺物は中世の土器が僅かに出土した。

SD 001（図版 8・9・15　写真図版 4・12～ 14）

調査区の中央の A2・B2・C3・D3・D4・E3・E4・F4・F5・G4・G5・H5・H6・I5・I6・J5・J6に位置する直線的な東西溝で、I5・I6で屈曲している。屈曲部より西は北から西に 64° 振っており、東は北から西に 71° 振っている。西側と東側は調査区外に延びている。溝 SD002・SD006・SD023・SD010・SD020、土坑 SK005・SK009に切られている。幅 1.1m～ 2.4m、深さ 40cm前後を測る。断面形は浅い U字形である。溝底の標高は西端で 0.73m、東端で 0.62mと西から東に向かって僅かに傾斜している。溝の埋土は東端の屈曲部分の西側約 15mと東側約 7 m部分の上層には多量の礫が出土し、多くの遺物が含まれていた。

遺物は第１面で一番多く出土した。中世の土師器鍋・小皿、瓦質土器羽釜、無釉陶器壺・擂鉢・小皿・甕、白磁碗・皿、青磁碗・皿、青花碗、土錘、砥石、石臼、鉄釘がある。また下層からの混入と考えられる須恵器甕、平瓦、石錘なども出土した。

SD 039（図版 9・15　写真図版 18）

調査区北東端の H4・I4・I5・J5に位置し、溝 SD001の北側に並行する直線的な東西溝である。北から西

に 71° 振っている。東側は調査区外に延びている。幅 1.0m～1.4m、深さ 10cmを測り、西から東に傾斜している。断面形は浅いU字形である。遺物は中世の土器が僅かに出土した。

SD003（図版 8・15　写真図版 18）

調査区の西端の A3・B3に位置する東西溝で溝 SD001に並行しており、SD004に切られている。西端は調査区外に伸びている。幅は最大 90cm、深さは最大 17cmを測り、底はほぼ水平である。断面形はU字形である。遺物は中世の土器と弥生土器壺が出土した。弥生土器は下層からの混入であると考えられる。

SD168（図版 8・15　写真図版 18）

調査区の北端の C2・D2・D3・E2・E3に位置する東西溝で溝 SD001に並行しており、SD023・SD020に切られている。西側は調査区外に延びている。幅 68cm以上、深さ 18cmを測る。断面形は浅いU字形である。遺物は中世の土器が僅かに出土した。

SK148（図版 8・16　写真図版 19）

調査区の西端 A2に位置する土坑で、溝 SD001と SD004に切られている。東西 68cm、南北 110cm以上の楕円形を呈し、深さ 22cmを測る。遺物は中世の土器が僅かに出土した。

SK005（図版 8・16　写真図版 19）

B2・C2調査区に位置する土坑で、溝 SD001を切り、土坑 SK008に切られている。東西 3.0m、中央部の南北 0.7mの不定形を呈し、深さ 10cmを測る。遺物は中世の土器と施釉陶器皿が出土した。

SK008（図版 8・16　写真図版 19）

B2・C2に位置する土坑で、土坑 SK005の一部を切っている。東西 126cm、南北 143cmの楕円形を呈し、深さ 34cmを測る。遺物は中世の土器が少量と土錘が出土した。

SK007（図版 8・17　写真図版 20）

B3の溝 SD001と SD003の間に位置する土坑である。直径 90cmの円形を呈し、深さ 30cmを測る。遺物は中世の土器が少量と土錘が出土した。

SK030（図版 8・17　写真図版 20）

C3・C4の溝 SD023の西側に位置する土坑である。東西 78cm、南北 105cmの楕円形を呈し、深さ 13cmを測る。遺物は中世の土器と土錘が出土した。

SK063（図版 8・17　写真図版 20）

D3の溝 SD001の北側、SD020の西側に位置する土坑である。東西 128cm、南北 66cmの西側に突出した不整楕円形を呈し、深さ 18cmを測る。遺物は中世の土器が少量出土した。

SK027（図版 8・17　写真図版 21）

D4の溝 SD020の西側に位置する土坑である。直径 77cmの円形を呈し、深さ 50cmを測る。遺物は中世の土器が出土した。

SK094（図版 8・17　写真図版 21）

調査区の南端 D5・E5の壁際に位置する土坑で、南側は調査区外である。東西 52cm、南北 45cmの楕円形を呈し、深さ 4 cmを測る。遺物は中世の土器が少量出土した。

SK009（図版 8・18　写真図版 21）

E4に位置する土坑で溝 SD001を切っている。東西 2.3m、南北 1.7mで楕円形を呈し、深さ 10cmを測る。北側に直径 1.4mで円形の深さ 40cmの深い部分が存在する。遺物は中世の土器が少量出土した。

SK048（図版8・18　写真図版22）

E3・E4・F3・F4に位置する土坑で、南側は溝SD001に切られ、北側はSD013とSD152を切っている。東西1.8m、南北1.4m以上の円形を呈し、深さ40cmを測る。遺物は土師器鍋が出土した。

SK029（図版8・17　写真図版22）

E4に位置する土坑で、北側は溝SD001を切っている。東西70cm、南北67cmの不整円形を呈し、深さ8cmを測る。遺物は中世の土師器が少量出土した。

SK047（図版9・19　写真図版22）

E5に位置する土坑である。東西163cm、南北80cmの隅丸長方形を呈し、深さ10cmを測る。遺物は中世の土師器が少量出土した。

SK032（図版9・18　写真図版23）

G4に位置する土坑である。直径65cmの円形を呈し、深さ９cmを測る。遺物は中世の土師器が出土したほか、壁際から羽口が出土した。

SK055（図版9・20　写真図版23）

G3・G4の土坑SK032の東側に位置する土坑である。東西約２m、南北2.4mの不整円形を呈し、深さ10cmを測る。遺物は中世の土器が少量出土した。

SK062（図版9・19　写真図版24）

G5に位置する土坑で、溝SD001の南側に位置する。東西45cm、南北75cmの楕円形を呈し、深さ８cmを測る。遺物は中世の土器が少量出土した。

SK044（図版9・19　写真図版24）

G6に位置する土坑である。東西95cm、南北135cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。遺物は中世の土器が少量出土した。

SK045（図版9・19　写真図版24）

G6の土坑SK044の南側に位置する土坑である。東西163cm、南北125cmの楕円形を呈し、深さ35cmを測る。遺物は中世の土師器鍋、無釉陶器擂鉢が出土した。

SK056（図版9・20　写真図版25）

H4・H5に位置する土坑で、北側は溝SD057に取り付く。東西２m、南北2.5mの不整円形を呈し、深さ23cmを測る。遺物は中世の土器が少量出土した。

SK049（図版9・19　写真図版25）

H6に位置する土坑である。東西77cm、南北104cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。遺物は出土していない。

SK058（図版9・22　写真図版4・26）

I4に位置する土坑である。東西97cm、南北102cmの隅丸方形を呈し、深さ37cmを測る。土坑内は礫が充満しており、石の間に土砂が埋まっている状況である。遺物は中世の土師器鍋、瓦質土器燭台、須恵器小皿、無釉陶器皿・擂鉢、青花碗、石臼が出土した。

SK072（図版9・20　写真図版25）

H5・I5の溝SD001の屈曲部とSD039の間に位置する土坑である。東西約2.0m、南北約3.3mの不整円形を呈し、深さ18cmを測る。遺物は中世の土師器羽釜、瓦器椀が出土した。

SK 059（図版 9・21　写真図版 27）

I6に位置する土坑で、溝 SD001の屈曲部の南側に位置する。東西 170cm、南北 183cmの方形を呈し、深さ 55cmを測る。遺物は中世の土器が少量出土した。

SK 053（図版 7・21　写真図版 27）

調査区の南端 H7・I7の壁際に位置する土坑で、土坑 SK054に切られている。東西 128cm、南北 95cmの楕円形を呈し、深さ８cmを測る。遺物は中世の土師器鍋、無釉陶器甕・擂鉢が出土した。

SK 054（図版 7・21　写真図版 27）

調査区の南端 I8に位置する土坑で、土坑 SK053を切っている。南側は調査区外である。東西 260cm、南北 78cm以上の隅丸方形を呈し、深さ 18cmを測る。遺物は中世の土器が少量出土したほか、土錘が出土した。

SE 040（図版 8・23・24　写真図版 28）

D4に位置する井戸である。上面を溝 SD020に切られている。掘形は直径 1.5m前後の円形を呈し、深さ 80cm、石積高 50cm、石積内径は上端で 75cm、下端で 50cmを測る。石積部より下部に曲物を利用した溜水施設を作っている。溜水施設は直径 33cm、高さ 20cmである。溜水施設の最下部は標高 -0.005mを測る。上層・中層・溜水内ともに崩壊したと考えられる石が出土した。

遺物は中世の土師器皿・鍋・土錘が出土した。

SB 101（図版 7・25　写真図版 11）

B3・B4・C3・C4・C5・D3・D4に位置し、溝 SD001の南側に位置する掘立柱建物である。南北軸は北から東に 22° 振っている。南北３間（6.5m）以上×東西３間（6.1m）の規模を有するが、南側は調査区外に延びているため、正確な規模は不明である。この掘立柱建物を構成する柱穴は P091・P137・P139・P011・P110・P086・P130・P087である。柱穴は直径 32cm～ 18cmを測り、深さは 22cm～ 10cmである。

遺物は中世の土師器の小片が出土した。

SB 102（図版 7・26　写真図版 11・29）

B3・C3・C4に位置する掘立柱建物で、掘立柱建物 SB101の西側に接して位置する。南北軸は北から東に 24° 振っている。南北２間（3.6m）以上×東西１間（3.6m）の規模を有する。この掘立柱建物を構成する柱穴は P133・P132・P135・P147・P141・P140である。柱穴は直径 36cm～ 25cmを測り、深さは 35cm～ 25cmを測り、殆どの柱穴から大礫が出土した。

遺物は北西角の P140から根固石に使用している自然石に混じって石臼の破片が出土した。

SB 103（図版 7・27　写真図版 3）

E4・E5・E6・F5・F6に位置し、溝 SD001の南側に位置する掘立柱建物である。北側と東側に SB105とした柱列が存在する。南北軸は北から東に 25° 振っている。南北２間（5.8m）以上×東西２間（5.3m）の規模を有するが、南側は調査区外のため正確な規模は不明である。この掘立柱建物は総柱建物で、構成する柱穴は P127・P128・P126・P119・P120・P129である。柱穴は直径 36cm～ 24cmを測り、深さは 30cm～ 18cmである。

遺物は中世の土器の小片が出土した。

SB 104（図版 7・25　写真図版 3）

F3・G3に位置し、溝 SD001の北側に位置する掘立柱建物か柱列であると推定され、北側の調査区外に延

びている。東西軸は北から西に 82° 振っている。東西３間（4.4m）の規模を有するが、南北方向は不明である。この遺構を構成する柱穴は P144・P024・P143・P142である。柱穴は直径 30cm～24cmを測り、深さは 32cm～13cmである。

遺物は中世の土器の小片が出土した。

SB105（図版 7・27　写真図版 3・29）

E4・F5・F6に位置し、掘立柱建物 SB103の北側と東側に位置する柱列である。柱通りが揃っていることから掘立柱建物 SB103の庇の可能性が高い。南北軸は北から東に 26° 振っている。南北方向は２間（4.3m）以上×東西方向２間（5.5m）以上の規模を有するが、正確な規模は不明である。この遺構を構成する柱穴は P123・P122・P121・P125・P115である。柱穴は直径 24cm前後を測り、深さは 25cm～18cmである。柱穴から大礫が入っているものも存在する。

遺物は P123から鉄の鋤先が出土した他、中世の土器の小片が出土した。

３．遺物

SD001（図版 31～34・40・43　写真図版 6・36～42・45・52・54～58）（5～72・165～179・S1～S6・M1・M2）

溝 SD001からは土師器鍋・小皿、瓦質土器羽釜、無釉陶器壺・擂鉢・小皿・甕、白磁碗・皿、青磁碗・皿、青花磁器碗、平瓦、須恵器甕、土錘、砥石、石臼、石錘、鉄釘が出土した。

土師器鍋５～34は、外傾する５と内傾して平行タタキを施す７～21と、内傾して格子タタキを施す 22～34とに分けられる。

５は体部から口縁部にかけて直線的に大きく外傾し、口縁部はやや内弯する。体部は右上がりのタタキ成形の後、内面は丁寧なナデを行う。口縁部はヨコナデを行い、口縁端部は丸く作る。外面にはススが付着する。６は体部から口縁部にかけて内傾する。口縁部直下に短い鍔が付く。

７～13は体部から口縁部にかけて内傾し、口縁部直下に鍔が退化した稜が残る。体部外面は平行タタキで成形し、ナデ調整で仕上げる。内面は工具による丁寧なナデを行う。口縁部はヨコナデを行う。外面にはススが付着する。14～21は体部から口縁部にかけて直立気味に内傾し、口縁部直下に鍔が退化した稜が僅かに残る。体部外面は平行タタキで成形し、ナデ調整で仕上げる。内面は工具による丁寧なナデを行う。口縁部はヨコナデを行う。外面にはススが付着する。18は口縁部が大きく歪む。

22～28は体部から口縁部にかけて直立気味に内傾し、体部外面は小さめの格子タタキで成形した後、ナデ調整で仕上げる。内面は工具による丁寧なナデを行う。口縁部はヨコナデを行う。外面にはススが付着する。29～31は体部から口縁部にかけて直立気味に内傾し、体部外面は大きめの格子タタキで成形し、ナデ調整で仕上げる。内面は工具による丁寧なナデを行う。口縁部はヨコナデを行う。外面にはススが付着する。29は外面の被熱による剥離が著しい。30はスス酸化部が底部中央部分に円形を呈し存在する。32～34は体部から口縁部にかけて内傾し、体部外面は小さめの格子タタキで成形し、ナデ調整で仕上げる。内面は工具による丁寧なナデを行う。口縁部はヨコナデを行う。外面にはススが付着する。

土師器小皿 35～38は、すべて非轆轤系である。35は非常に浅い作りで粗雑である。36・37は内面のみナデを行う。38は口縁部が大きく外反する。灰白色を呈し、薄い作りである。

瓦質土器羽釜 39は直立した短い口縁部直下に水平に突出する鍔が付く。内面は横方向のハケ調整で仕上げる。

無釉陶器壺 40～ 47は備前焼で、 40～ 44は壺上半部、 45～ 47は底部である。 40は肩部にヘラ描波状文を施文する。 41は肩部にヘラによる記号？が存在する。 42の口頸部は短く直立し、口縁端部は拡張して丸く作る。肩部には櫛描波状文を施文する。 43は肩部に 0.7cmあたり４本の櫛描直線文を３帯施文する。 44は肩部から体部にかけて縦方向に 1.5cmあたり６本の櫛目を施文する。 45～ 47は平底の底部で未調整である。体部は底部付近に横方向のケズリを行う。無釉陶器小壺 48は、備前焼で底部は平底を呈し未調整である。体部は内弯しながら立ち上がる。

無釉陶器擂鉢 49～ 55は備前焼で、 49～ 54は口縁部、 55は底部である。口縁部は形態により４種類に分けられる。 49は断面三角形の端部が内傾する。口縁下端部は僅かに突出し、直下に重ね焼の痕跡が残る。擂目は 1.9cmあたり 11本である。 50は擂目が 1.8cmあたり 6本である。 51・ 52は口縁部が直立し、口縁端部は内傾する。 51は口縁外面のロクロナデを切るような縦方向の藁の痕跡が著しい。擂目は 2.1cmあたり９本である。 52は灰色を呈し、擂目は 1.8cm以上あたり６本以上である。 52・ 53は口縁部を強く折り返して立ち上がり、口縁端部は内傾し段を作る。 53は擂目が 2.5cmあたり８本である。 54は擂目が 2.3cmあたり８本である。 55は底部を薄く作っており、擂目は 2.6cmあたり９本である。底部付近は使用による摩耗が著しい。

無釉陶器小皿 56は備前焼で、口縁部が外反し、底部は右回転の糸切り痕跡を残す。無釉陶器甕 57～ 59は、備前焼である。 57は小型の甕、 58・ 59は大型の甕である。 57は平底の底部で未調整である。体部は直線的に外傾する。 58は口縁部で外傾する口頸部を持ち、口縁端部は上下に拡張する。 59は平底の底部でナデを行い、体部外面は縦方向のナデを行う。

白磁碗 60は口縁部を幅広の玉縁状に成形する。白磁碗 61は内傾する高台を持ち、高台裏まで施釉する。白磁皿 62は小振りの皿で、ケズリ出しの高台に四箇所の抉りを入れる。見込みには目跡が残る。

青磁皿 63は同安窯系の青磁で高台を持たず、底部外面には施釉しない。内面に櫛描状の施文がある。青磁皿 64は龍泉窯系の無文の青磁で口縁部は外反する。 65～ 67は青磁碗である。 65は底部内面に草花文を型押しする。高台内面は無釉である。 66は口縁が内弯気味に立ち上がり、体部に沈線が巡る。 67は龍泉窯系の連弁文碗である。底部内面は釉を掛き取る。

青花磁器碗 68は内弯気味の比較的高い高台を持つ。底部内面に界線２条を巡らせ、草花文を描く。青花磁器皿 69は口縁部外面に草花文を施文する。

70は平瓦で凹面は布目が残り、凸面は変形の格子タタキの痕跡が残る。縁は面取りを行う。

須恵器甕 71・ 72は、 71が肩部から頸部にかけての破片で短頸甕である。 72は底部の破片で丸底である。外面は格子風タタキで成形し、内面は同心円当て具の痕跡が残り、一部弱くナデを行う。いずれも、中層からの混入と考えられる。

土錘 165～ 179は有溝穿孔土錘・管状土錘である。 165～ 169は大型の有溝穿孔土錘であり、断面は扁平を呈し、長軸中央部の表裏に紐溝と二対４個の紐孔がある。 170～ 179は管状土錘であり、作りは雑である。

S1～ S4は砥石である。 S1は泥岩で、幅 7.0cmに整えられている。節理に沿って剥離しているため、側面の砥面が僅かに残る程度である。 S2は仕上げ用砥石で、２面の砥面を残すが欠損している。 S3は凝灰岩質砂岩で、表面の１面のみ僅かに使用している。 S4は凝灰岩で、５面を砥面として使用しており、このうち２面は大きく砥ぎ減りしており、深い砥ぎ傷が存在する。

石臼 S5は上臼で、直径 21.0cm、高さ 11.4cmを測る。臼の目は八分画で各分画に 10溝を持つ。部分的に

溝の中間に短く浅い溝を追加している。窪みの深さは2.4m、もの入れの直径は約３cmを測る。

石錘S6は扁平な自然石で、対する二箇所を打ち欠いて紐掛けとしている。

鉄釘M1は頭部を叩いて折り曲げている。断面は長方形である。

鉄片M2は残りが悪いため、器種は不明である。

SD004（図版34　写真図版43）（73）

溝SD004からは土師器鍋が出土した。土師器鍋73は体部から口縁部にかけて直立気味に内傾し、口縁部直下には鍔が退化した稜が僅かに残る。口縁部はヨコナデを行い、口縁端部内面に内傾する面を作る。体部外面は平行タタキで成形し、ナデ調整で仕上げる。内面は工具による丁寧なナデを行う。

SD006（図版34　写真図版43）（74・75）

溝SD006からは土師器鍋と瓦質土器羽釜が出土した。土師器鍋74は体部から口縁部にかけて内傾する。口縁部直下には鍔が退化した稜が残る。

瓦質土器羽釜75は体部から底部の一部で、水平に鍔が付く。体部から底部は屈曲しており、内外ともにハケ調整が部分的に残る。底部と鍔下面にはススが付着する。

SD010（図版34・41　写真図版43・52）（76・180・181）

溝SD010からは土師器鍋と土錘が出土した。土師器鍋76は体部から口縁部にかけて直線的に大きく外傾し、口縁端部は丸く作る。体部は右上がりのタタキ成形の後、内面は丁寧なナデを行う。口縁部はヨコナデを行う。外面にはススが付着する。

土錘180・181は管状土錘で、180は太く短い。181は細い。

SD023（図版34　写真図版43）（77・78）

溝SD023からは土師器皿と弥生土器高坏が出土した。土師器皿77は口縁部が内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。

弥生土器高坏78は脚部で柱状部が裾に向かって僅かに開き、裾部は大きく開く。円孔を穿つ。

SD003（図版34　写真図版43）（79）

溝SD003からは弥生土器壺が出土した。弥生土器壺79は丸底気味の平底を呈し、体部外面は縦ミガキ、内面はケズリを行う。底部から体部にかけて接地黒斑が存在する。

SD020（図版34　写真図版43）（80）

溝SD020からは白磁碗が出土した。白磁碗80は細い高台を持ち、内面に櫛描状の施文がある。

SD013（図版34・41・43　写真図版43・52・58）（81・182・183・M3）

溝SD013からは白磁皿と土錘と鉄釘が出土した。

白磁皿81は小振りの皿で、ケズリ出しの高台に四箇所抉りを入れる。見込みには目跡が残る。

土錘182・183は細い管状土錘である。作りは雑である。

鉄釘M3は両端を欠いており、断面が長方形である。

SK005（図版35　写真図版44）（82）

土坑SK005からは施釉陶器皿が出土した。施釉陶器皿82は唐津焼で低い高台をケズリ出している。灰釉を掛ける。

SK007（図版41　写真図版52）（184）

土坑SK007からは土錘が出土した。土錘184は管状土錘で、中央部が膨らむ。

SK008（図版41　写真図版52）（185）

土坑SK008からは土錘が出土した。土錘185は管状土錘で、中央部が膨らむ。

SK094（図版35　写真図版44）（83）

土坑SK094からは白磁碗が出土した。白磁碗83は底部で、高台をケズリ出している。

SK073（図版35　写真図版45）（84）

土坑SK073からは灰釉陶器合子蓋が出土した。灰釉陶器合子蓋84は瀬戸製で天井部の中央部分が窪んだ茸形で、底部には糸切りの痕跡が残る。外面に灰釉を掛ける。

SK048（図版35　写真図版43）（85）

土坑SK048からは土師器鍋が出土した。土師器鍋85は体部から口縁部にかけて直線的に大きく外傾し、口縁端部は丸く作る。体部は右上がりの平行タタキ成形の後、内面は丁寧なナデを行う。口縁部はヨコナデを行う。外面にはススが付着する。

SK045（図版35・43　写真図版43・58）（86～88・M4）

土坑SK045からは土師器鍋、無釉陶器擂鉢、鉄釘が出土した。土師器鍋86・87は、86が体部から口縁部にかけて内傾し、口縁部直下に鍔が退化した稜が残る。体部外面は平行タタキで成形し、ナデ調整で仕上げる。口縁部はヨコナデを行う。外面にはススが付着する。87は体部から口縁部にかけて直線的に大きく外傾し、口縁端部は丸く作る。口縁部はヨコナデを行う。外面にはススが付着する。

無釉陶器擂鉢88は備前焼で、断面三角形の端部を欠く。体部上部に重ね焼の痕跡が残る。擂目は1.7cmあたり７本である。

鉄釘M4は頭部を叩いて形作っている。

SK032（図版35・41　写真図版44・52）（89・186）

土坑SK032からは羽口と土錘が出土した。羽口89は先端部分が残る。直径約６cmで孔径約２cmを測る。先端にはガラス質の付着物が多量に存在する。孔先端の内面は被熱により赤変している。

土錘186は管状土錘で両端を欠く。

SK058（図版35・43　写真図版44・55）（90～96・S7）

土坑SK058からは土師器鍋、瓦質土器燭台、須恵器小皿、無釉陶器皿・擂鉢、青花磁器碗、石臼が出土した。

土師器鍋90は体部から口縁部にかけて内傾する。口縁部直下に鍔が退化した稜が残り、その下に３条の凹線が巡る。

瓦質土器燭台91は上下共に欠損するが、中心に灯心のための孔を穿つ。

須恵器小皿92は口縁端部を厚く丸く仕上げている。

無釉陶器皿93は糸切り底で、体部は外反している。無釉陶器擂鉢95・96は、備前焼で口縁部の95と底部の96である。95は断面三角形の端部が内傾する。口縁下端は僅かに突出し、直下に重ね焼の痕跡が残る。擂目は残っていないが、使用による摩滅が著しい。96の底部は薄く、擂目は幅３cmあたり10本である。内面は使用による摩滅が著しい。

青花磁器碗94は高台が逆台形で、底部内面に２条の界線を引き、唐草文を充填する。外面も唐草文を描く。

石臼S7は下臼で、直径26.3cm、高さ9.5cmを測る。臼の目は八分画で各分画に５～６溝を持つ。中心に

軸孔を持つ。

SK 072（図版 35　写真図版 44）（97・98）

土坑 SK072からは土師器羽釜、瓦器椀が出土した。土師器羽釜 97は口縁直下に短く横に延びる鍔を貼り付ける。鍔の側面から上面にかけてススが付着する。

瓦器椀 98は底部のみで、断面三角形の低い高台を貼り付ける。

SK 053（図版 35　写真図版 43）（99～101）

土坑 SK053からは土師器鍋、無釉陶器甕・擂鉢が出土した。

土師器鍋 99は体部から口縁部にかけて内傾する。口縁部は強くナデを行い、口縁直下に稜を突出させる。

無釉陶器壺 100は備前焼の底部である。底部は未調整で二枚貝の圧痕が残る。側面は回転ケズリを行う。無釉陶器擂鉢 101は備前焼で、擂目は 1.2cmあたり６本である。内面は使用による摩滅が著しい。

SK 030（図版 41　写真図版 52）（187）

土坑 SK030からは土錘が出土した。土錘 187は管状土錘で、両端が欠けている。

SK 054（図版 41　写真図版 52）（188）

土坑 SK045からは土錘が出土した。土錘 188は管状土錘で、両端が欠けている。

SE 040（図版 35・41・44　写真図版 44・53・59・60・69）（102・103・189・190・W1～W3）

井戸 SE040からは土師器皿・鍋、土錘、曲物が出土した。

土師器皿 102は非轆轤系で、口縁部は強いナデを行う。土師器鍋 103は体部から口縁部にかけて内傾する。体部外面は平行タタキで成形し、ナデ調整で仕上げる。外面には厚くススが付着する。

土錘 189・190は管状土錘で、細身である。

曲物はW1～W3の３個体が存在する。W1とW2は底板部分に木釘痕跡が残る。井戸の水溜として使用するため、曲物容器の底を抜いていることがわかる。W1・W3は柾目でヒノキ製、W2は板目でスギ製である。

SB 102P 140（図版 43　写真図版 56）（S8）

掘立柱建物 SB102の柱穴 P140からは石臼が出土した。石臼 S8は下臼の皿部である。直径 18.0cm、高さ 4.8cm以上、皿の深さは 1.6cmを測る。

SB 103P 123（図版 43　写真図版 58）（M7）

掘立柱建物 SB103の柱穴 P123からは鉄器が出土した。鉄器M7は鋤先の一部である。全体に厚さ３mm程度であるが、縁は 10mm程度と厚くなっている。

P 014（図版 35　写真図版 44）（104）

柱穴 P014からは土師器小皿が出土した。土師器小皿 104は非轆轤系で、内面のみナデを行う。

P 098（図版 35　写真図版 44）（105）

柱穴 P098からは土師器小皿が出土した。土師器小皿 105は非轆轤系で、浅い。

P 108（図版 35　写真図版 44）（106）

柱穴 P108からは土師器小皿が出土した。土師器小皿 106は非轆轤系で、底部に接地黒斑が存在する。

P 065（図版 35　写真図版 44）（107）

柱穴 P065からは瓦器椀が出土した。瓦器椀 107は口縁端部に強いナデを行い外反させる。

P 052（図版 41　写真図版 53）（191）

柱穴 P052からは土錘が出土した。土錘 191は管状土錘で、中央部が膨らみ、片側の先端を欠く。

P160（図版 41　写真図版 53）（192）

柱穴 P160からは土錘が出土した。土錘 192は管状土錘で、雑な作りである。

P105（図版 41　写真図版 53）（193）

柱穴 P105からは土錘が出土した。土錘 193は管状土錘で、直線的である。

P046（図版 41　写真図版 53）（194）

柱穴 P046からは土錘が出土した。土錘 194は管状土錘で、短く中央部が膨らむ。

P076（図版 41　写真図版 53）（195）

柱穴 P076からは土錘が出土した。土錘 195は管状土錘で、片側の先端を欠く。

P077（図版 41　写真図版 53）（196）

柱穴 P077からは土錘が出土した。土錘 196は管状土錘で、直線的である。

P111（図版 41　写真図版 53）（197）

柱穴 P111からは土錘が出土した。土錘 197は管状土錘で、細身で中央部が膨らむ。

P036（図版 41　写真図版 53）（198）

柱穴 P036からは土錘が出土した。土錘 198は管状土錘で、細身で中央部が膨らむ。

P064（図版 41　写真図版 53）（199）

柱穴 P064からは土錘が出土した。土錘 199は管状土錘で、細身で中央部が膨らむ。

P082（図版 41　写真図版 53）（200）

柱穴 P082からは土錘が出土した。土錘 200は棒状土錘で、中央部が膨らむ。

P028（図版 43　写真図版 58）（M5）

柱穴 P028からは鉄釘が出土した。鉄釘M5は頭部、先端部共に欠く。中央部で捩じっている。

P022（図版 43　写真図版 58）（M6）

柱穴 P022からは鉄釘が出土した。鉄釘M6は幅広の釘で、頭部欠損している。

上層包含層（図版 41　写真図版 53）（201～206）

上層の包含層から出土した遺物の内、土錘を図化した。土錘 201～206は管状土錘で、206は中央部が膨らみ、形は整っているが、201～205は雑な作りである。

第３節　第２面の調査

１．概要（図版 11）

第２面は、第１面を形成している細粒砂を除いた下層の砂礫層が遺構面となるが、第１面に比べて遺物量は少ない。標高は 0.65m～0.8mである。主な遺構は土器が集中して出土する土器群と被熱痕跡がある土坑がある。特に土器群 175と土器群 151からは土師器と須恵器がまとまって出土したことから土器群と言う名称を与えた。全体に、遺構はまばらである。

２．遺構（図版 11・28・29　写真図版 30～32）

土器群 175（図版 11・28　写真図版 31）

C3・C4に位置する土器群である。東西 1.2m、南北 1.5mの範囲に土器や石が集中して出土した。遺物は須恵器坏 B蓋・坏 B・皿・壺、土師器坏・甕、土錘が出土した。

土器群 151（図版 11・28　写真図版 31）

E5に位置する土器群である。東西 0.8m、南北 1.7mの範囲に土器や石が集中して出土した。遺物は須恵器坏 B蓋・坏 B・横瓶、土師器甕・鍋・製塩土器、土錘、砥石が出土した。

SK 186（図版 28）

F5に位置する土坑である。東西 71cm、南北 57cmの楕円形を呈し、深さ７cmを測る。遺物は奈良時代の土器が少量出土した。

SK 177（図版 29　写真図版 30）

E4に位置する土坑である。南側を第１面の溝 SD001に切られている。東西 53cm、南北 24cm以上の楕円形を呈し、深さ 10cmを測る。壁面の一部は被熱により赤変している。埋土に焼土や炭が含まれている。遺物は出土していない。

SK 158（図版 29　写真図版 30）

F3に位置する土坑である。第１面の柱穴 P028に切られている。南北 90cm、東西 67cmの隅丸長方形を呈し、深さ 18cmを測る。壁面の一部は被熱により赤変している。埋土に焼土や炭が含まれている。遺物は奈良時代の土器が少量出土した。

SK 179（図版 29　写真図版 32）

D4に位置する土坑である。東側を土坑 SK181に切られている。東西 75cm程度、南北 70cmの隅丸方形を呈し、深さ 10cmを測る。底面には炭が面をなして存在していた。埋土に炭が多量に含まれている。遺物は奈良時代の土器が少量出土した。

P041（図版 29　写真図版 32）

E3に位置する柱穴である。掘形は直径 28cm、深さは５cmである。遺物は中央部に内面を上に向けた須恵器坏 B蓋が出土した。

P170（図版 11）

B4に位置する柱穴である。掘形は直径 22cm、深さは 13cmである。遺物は奈良時代の須恵器坏が出土した。

３．遺物

土器群 151（図版 36・41・43　写真図版 46・47・53・58）（108～119・212・S9）

土器群 151からは須恵器坏 B蓋・坏 B・横瓶、土師器甕・鍋・製塩土器、土錘、砥石が出土した。

須恵器坏 B蓋 108は天井部に丸みを持っており、口縁端部は下方に強く屈曲する。天井部にはつまみが外れた痕跡が残る。須恵器坏 B109は底部で、厚い底に外傾する高台を貼り付ける。底部の一部は空気膨れしている。須恵器横瓶 110は口頸部から体部の一部にかけて残る。口頸部は直線的に外傾し、口縁端部は面を作る。体部はタタキ後、カキ目を行う。

土師器甕 111～113・119は 111・112が小型甕で、113・119が大型甕である。111は球形の体部に外反する口縁が付く。体部は外面が縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整を行う。111・112共に口縁部はヨコナデを行うが内面に横方向のハケ調整が残る。112は被熱による剥離が存在する。113・119は長胴の甕で、119は口縁端部を上方に拡張し、面を作る。体部は外面が縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整を行う。口縁部はヨコナデを行うが内面に横方向のハケ調整が残る。土師器鍋 114・115は体部が大きく開き、屈曲して口縁部は外傾する。口縁部は強くヨコナデを行い、口縁端部には面を作る。体部

外面は縦方向のハケ調整を行い、115は体部の一部にカキ目を施す。

製塩土器116～118は被熱しており、残りが悪い。117・118は内面に指オサエの痕跡が顕著に残る。118は明褐色、116・117はにぶい黄橙色を呈する。

土錘212は管状土錘で、中央部が膨らむ。

砥石S9は剥離しており、１面が残り、残った自然面を砥面としている。

土器群175（図版36・41　写真図版45～47・53）（120～126・129・207～211）

土器群175からは須恵器坏B蓋・坏B・皿・壺、土師器坏・甕、土錘が出土した。

須恵器坏B蓋120は天井部に丸みを持っており、天井部中央を欠く。口縁端部は下方に強く屈曲する。須恵器坏B121・122は、口径の大きい121と口径の小さな122とがある。底部はいずれもヘラ切り後ナデを行っている。底部には台形の高台を貼り付ける。121は軟質な焼成である。須恵器皿123は底部から体部中央部まで回転ケズリを行い、後にナデを行う。須恵器壺129は広口壺の口縁部で、口頸部は大きく外反し、口縁端部は直立する。内面には段を作る。

土師器坏124・125は丸底で、全体に褐色の化粧土を塗る。底部は後からケズリを行うため化粧土はない。口縁部内面は沈線を巡らし、段を作る。土師器甕126は大きく外反する口頸部で、口縁端部は面を作る。

土錘207～210は棒状土錘で、211は管状土錘である。

P041（図版36　写真図版45）（127）

柱穴P041からは須恵器坏B蓋が出土した。須恵器坏B蓋127は天井部に丸みを持っており、口縁端部は僅かに下方に屈曲する。天井部には中心から僅かに外れて扁平で小さなつまみが付く。

P170（図版36　写真図版46）（128）

柱穴P170からは須恵器坏が出土した。須恵器坏128は体部がやや外反気味に開き、腰部は丸く作る。底部は内傾する低い高台を貼り付ける。底部は空気膨れしている。

P183（図版41　写真図版53）（213）

柱穴P183からは土錘が出土した。土錘213は管状土錘で、細身で小振りである。

P184（図版41　写真図版53）（214）

柱穴P184からは土錘が出土した。土錘214は管状土錘で、細身で歪んでいる。

中層包含層（図版37・41　写真図版48・53）（130～143・215・216）

須恵器坏B蓋・坏B・坏A・皿・壺、土師器鍋・甕・製塩土器・竈、土錘を図化した。

須恵器坏B蓋130・131はいずれも天井部に丸みを持っており、130は天井部の中央部のみが残り、扁平なつまみを貼り付ける。131は口縁端部が下方に強く屈曲する。須恵器坏B132は底部で厚く作る。回転ケズリを行い、低い高台を貼り付ける。須恵器坏A133～135は、底部がいずれもヘラ切りで、口径の小さい133・134と口径の大きな135とがある。前者は133が口縁部を欠くが、体部は内弯気味に立ち上がる。後者は体部が内弯ぎみに立ち上がり、口縁端部は外反する。須恵器皿136・137は、136が底部から体部中央部まで回転ケズリを行い、137は底部のみ回転ケズリを行う。須恵器壺138は壺の底部で、外傾し、端部の尖った高い高台を貼り付ける。

土師器鍋139は体部外面に縦方向のハケ調整を行う。口縁部内面に黒斑が存在し、その外側に緋色部分が広がる。土師器甕140は肩の張った甕で、体部外面は縦方向のハケ調整を行う。口縁部はヨコナデを行うが内面に横方向のハケ調整が残る。

製塩土器 141・142は直線的に外傾する体部で、内面はナデにより仕上げている。

土師器竈 143は竈焚口の左側の一部分で庇から脚部が伸びる。体部はハケ調整を行い、端部は強くナデを行う。脚部先端には接地黒斑が存在する。

土錘 215は棒状土錘で、一端を欠く。頭部に紐の痕跡が残る。土錘 216は有溝土錘で、木葉形である。

第４節　第３面の調査

１．概要（図版 12）

第３面は、第２面を形成している細粒砂を除いた下層の砂礫層が遺構面となるが、明確な遺構は存在しない。全体的に凹凸がありながら北西から南東に向かって僅かに傾斜している。標高は 0.5m～ 0.9mである。全面から僅かであるが弥生土器の細片が出土しているが、特に土器群 181と土器群 180と土器群 189は完形の弥生土器がまとまって出土したことから土器群と言う名称を与えた。

２．遺構（図版 12・30　写真図版 33・34）

土器群 180（図版 30　写真図版 34）

I4・I5に位置する土器群である。位置関係から土器群 189と同一の土器群である可能性が高い。標高 0.6mの砂礫層上面の直径 1.4mの範囲から土器がまとまって出土した。遺構検出に努めたが遺構は存在しなかった。遺物は弥生土器壺・甕が横倒しで潰れた状態、高坏が坏部を伏せた状態で出土した。

土器群 189（図版 30　写真図版 34）

H5・I5に位置する土器群で、土器群 180の南側にあたる。位置関係から土器群 180と同一の土器群である可能性が高い。標高 0.6mの砂礫層上面の直径 2.0mの範囲から土器がまとまって出土した。遺構検出に努めたが遺構は存在しなかった。遺物は弥生土器壺の口縁部が上を向いて潰れた状態、甕が横倒しで潰れた状態で出土した。

土器群 181（図版 12）

調査区の西端の B2・B3に位置する土器群である。標高 0.7mの砂礫層上面の直径 1.0mの範囲から土器がまとまって出土した。遺構検出に努めたが遺構は存在しなかった。遺物は弥生土器壺・蓋・高坏が出土した。

３．遺物（図版 38・39　写真図版 49～ 51）

土器群 180（図版 38　写真図版 49～ 51）　（ 144～ 146）

土器群 180からは弥生土器壺・甕・高坏が出土した。

弥生土器壺 144は倒卵形の体部に直立して大きく外反する口頸部を持つ。底部は平底で、口縁端部は面を作る。体部外面は右上がりのタタキ後、下半は縦方向のミガキ調整を行い、上半はタタキの後ハケ調整を行う。内面は中位に横方向のハケ調整が残る。体部上半は粘土紐接合痕跡が明瞭に残る。体部下半に接地黒斑が、対する内面には熾溜黒斑が、体部上半には覆い接触黒斑が残る。弥生土器甕 145は外反口縁甕で、摩滅のため調整の残りはよくないが、体部下半は縦方向のハケ調整、体部上半は右上がりのタタキが残る。弥生土器高坏 146は椀形の坏部に直線的な脚部が付く。脚端部は欠けている。坏部外面は横方向のミガキを行い、口縁部外面には二条の凹線を巡らす。脚部は縦方向のミガキを行う。

土器群 189（図版 38　写真図版 49・50）（147～149）

土器群 189からは弥生土器壺・甕が出土した。

弥生土器壺 147は球形の体部に直立する口頸部が付く。体部の内外面共に横方向のハケ調整が残る。内面全体に火回り不良黒斑が残る。弥生土器甕 148・149は 148がハケ甕、149がタタキ甕である。148は体部が球形に近く、底部は平底である。外面は縦方向のハケ調整が残り、ススが付着している。体部上半部分に覆接触黒斑が、対する底部から体部下半にかけての内面に熾溜黒斑がある。149は倒卵形の体部で、底部は平底である。体部外面は下半に右上がりのタタキを行う。体部下半に被熱剥離がある。胎土は生駒西麓産である。

土器群 181（図版 38　写真図版 50）（150～152）

弥生土器壺・高坏・蓋がある。

弥生土器壺 150は球形の体部に直立する頸部と水平に屈曲する口縁部を持つ。頸体境と口縁端部には細い竹管による刺突を巡らしている。全体に摩滅が著しいが、内面底部にはケズリの痕跡が残る。体部上半に覆接触黒斑が存在している。弥生土器高坏 152は脚端部で、短く外反しており、端部は面を作る。外面は縦方向のミガキを行っており、孔数は不明であるが、円孔を穿っている。弥生土器蓋 151は頂部に面を持つ傘形である。

下層包含層（図版 39　写真図版 49・51）（153～164）

弥生土器長頸壺・直口壺・甕がある。

弥生土器長頸壺 153・154は直立して外反する口頸部で、口縁端部には面を作る。頸部は縦方向の横ハケ、口縁部はヨコナデで仕上げる。弥生土器直口壺 155は縦長の体部に僅かに外傾する口頸部が付く。外面は摩滅のため不明、内面は横方向のハケ調整を行う。体部上部に覆接触黒斑がある。弥生土器壺 156は底部で小さな平底から丸みを帯びた体部が付く。摩滅のため調整は不明である。

弥生土器甕 157は倒卵形の体部で、底部は平底のく字口縁甕である。口縁端部には凹線が一条巡る。外面は縦方向のハケ調整、内面はナデを行う。底部から体部下半にかけての内面に熾溜黒斑がある。弥生土器甕 158は体部上半から口縁部にかけての外反口縁甕である。口縁端部は上方に拡張し、面を作り２条の凹線が巡る。体部外面は縦方向のハケ調整、外面は縦方向のケズリを行う。弥生土器甕 159はやや上げ底の底部で、体部外面は縦方向のハケ調整を行う。弥生土器甕 160はドーナツ底の底部で、接地部分は未調整である。底部外面に接地黒斑、対する内面に熾溜黒斑が存在する。弥生土器甕 161は底部で、内面にハケ調整を行う。弥生土器甕 162は倒卵形の体部を持ち、底部は平底のく字口縁甕である。口縁端部は面を作る。体部外面は右上がりのタタキを行い、一部縦方向のハケ調整を行う。内面は下半が縦方向のハケ調整、上半が横方向のハケ調整である。弥生土器甕 163は外反口縁甕で、外面は右上がりのタタキ、内面は横方向のハケ調整を行う。弥生土器甕 164は平底の底部である。外面は右上がりのタタキ、内面は縦方向のケズリを行う。内面底部側面には熾溜黒斑が存在する。

第４章　自然科学的調査の成果

第１節　南通り遺跡で検出された液状化現象の痕跡

寒川　旭（産業技術総合研究所招聘研究員）

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が2002年度に発掘調査を行った、姫路市飾磨区中島の南通り遺跡において、顕著な液状化現象の痕跡が検出されたので概要を報告したい。

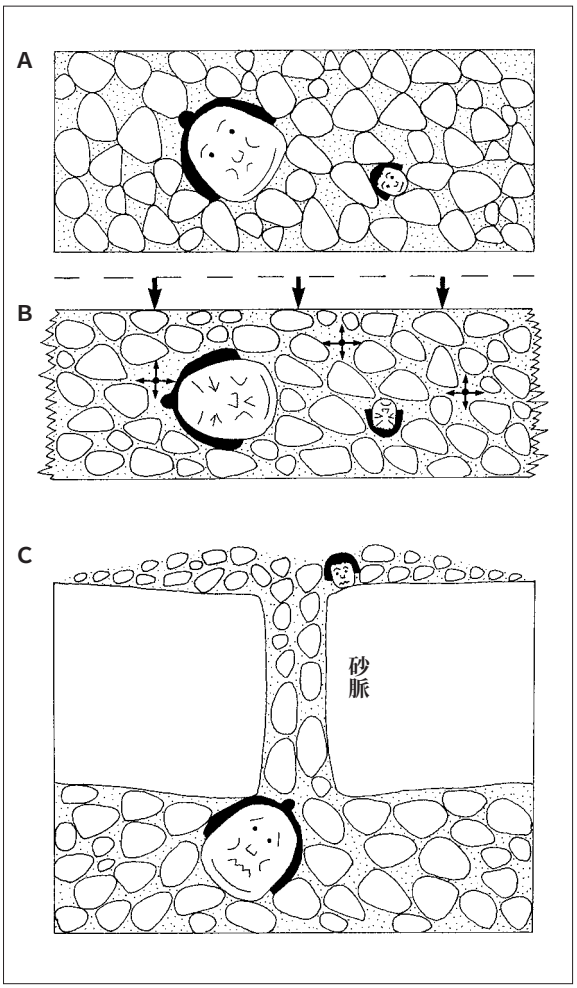
１．液状化現象とは

沖積低地の柔らかい地盤に激しい地震動が加わると、地下に堆積した砂（礫）層で液状化現象が発生して、大きな被害が生じる。そして、この時に、大量の砂を含んだ地下水が地面に流れ出すことが多い。柔らかい砂層が地下水で満たされた状態で、粘土・シルトなどのように水を通し難い地層に覆われていると、特に、液状化現象が発生しやすい。

第２図Ａは地面から１～２ｍを上限とする深さに堆積した柔らかい砂の層である。川や海に運ばれて堆積してから、さほど年代を経ていない砂の層は、柔らかくて砂粒間の隙間が大きい。図では、この隙間が地下水によって満たされている。

第２図Ｂのように、人が立っておれないほどの強い地震動に見舞われると、砂粒が動き出す。その際に、隙間を小さくして安定するように動くので、砂層が縮む。この場合、隙間を満たしていた地下水は、急に圧迫されるので水圧を高め、砂粒を押し返すようになる。この状態が「液状化」で、砂粒が地下水の動きに従い、地層全体が液体のように振る舞う。

第２図Ｃでは、水圧が高まった地下水が、上を覆う地層を引き裂いて、大量の砂（噴砂）を含んだまま、地面に流れ出している。この時に、小さな砂の粒子の方がスムーズに運ばれ、大きな粒子は下に取り残されやすい。地層を引き裂いて噴砂が流れ出した時に、噴砂の通り道となった割れ目を「砂脈」と呼ぶ。考古学の遺跡調査で、砂の詰まった帯状の砂脈が発見されることが多い。



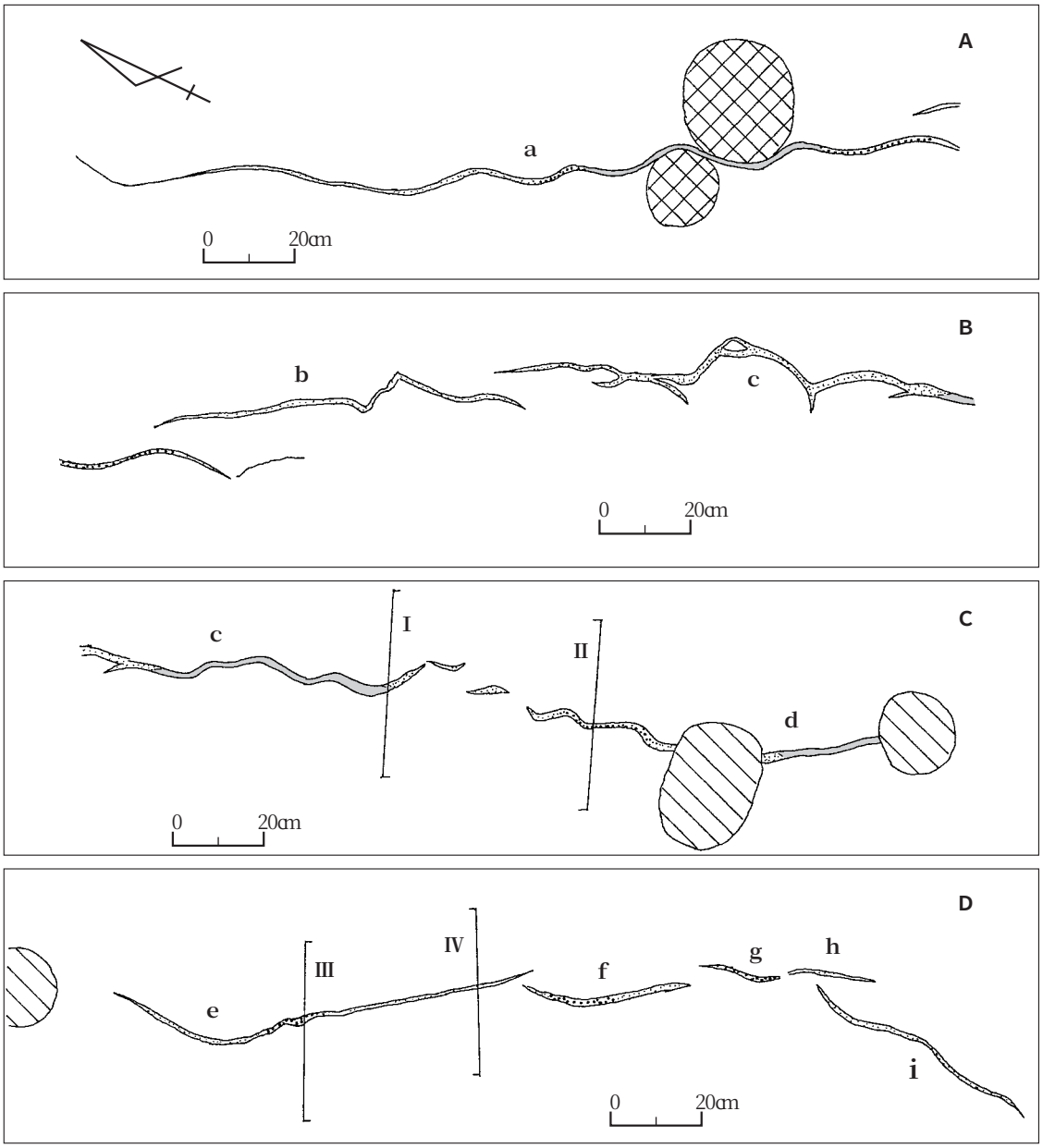
第２図　液状化現象と噴砂（寒川、1992より）

Ａ　地震発生前の状態
Ｂ　激しい地震動によって地層が収縮する
Ｃ　液状化現象の発生によって、砂・礫を含んだ地下水が地面に流れ出す

２. 砂脈の平面形態

南通り遺跡において多くの砂脈が検出された。第４図に示した砂脈は、検出された面から約 20㎝掘り下げた段階での平面形を示しているが、最大幅約２㎝で、北北西―南南東方向に約８ｍの長さで、真っ直ぐにのびている。細かく見ると、大小９本の砂脈で形成されており、説明の便宜上、それぞれの砂脈を北から順にａ～ｉと名付けた。

砂脈ａは幅約２㎝で、長さは約 2.2ｍである。砂脈を構成するのは極細粒砂とシルトだが、砂脈の中央と南部では、長さ約 10～ 20㎝の範囲で最大径２㎜の礫を含む粗粒砂が流れ出している。奈良時代に丸く掘り込まれた遺構の外側の輪郭に沿って分布しているので、この遺構が掘られた後に砂脈が生じたことがわかる。



第３図　砂脈の平面図

北から順にＡ～Ｄと４つの図に分けた。ドットの大きさは砂礫の粒子の大きさに対応している。
アミで示したのは粘土～シルトである。また、格子模様は奈良時代の遺構、斜線は 16世紀の遺構である。
ローマ数字で示したのは断面（第５・６図）の位置である。

ちなみに、砂の粒子の大きさについては、０.5㎜～２㎜が粗粒砂、０.25～０.5㎜が中粒砂、０.125～０.25㎜が細粒砂、０.073～０.125㎜が極細粒砂と分類されている。そして、２㎜以上の粒子が礫、極細粒砂と粘土の中間の大きさの非常に細かい粒子がシルトである。

砂脈ｂは最大幅約１㎝・長さ約８.5㎜で、砂脈の内部は極細粒砂～細粒砂で構成されている。砂脈ｃは、最大幅約２㎝で長さは約１.7ｍで、砂脈の内部は細粒砂～粘土・シルトで構成されているが、北端付近ではわずかに中粒砂が含まれている。

砂脈ｄは、最大幅約２㎝で、長さは約１ｍである。砂脈の北半分は中粒砂～粗粒砂、南半分は粘土～細粒砂で構成されている。この砂脈の上から16世紀の遺構が掘られているので、16世紀より前の砂脈とわかる。

砂脈ｅは最大幅約１.5ｍで長さは約１ｍである。砂脈の中央で長さ約10㎝の範囲で最大径１㎝の礫を含む粗粒砂が流れ出しているが、それ以外はシルト～極細粒砂で構成されている。

砂脈ｆは最大幅約１.3ｍで長さ約40㎝、北部が粗粒砂、それ以外は細粒砂で構成されている。砂脈ｇは最大幅約１.2ｍで長さは約20㎝、粗粒砂で構成されている。砂脈ｈは最大幅８㎜で長さは約20㎝、中粒砂で構成されている。砂脈ｉは最大幅約１㎝で長さは約50㎝、中央部は細粒砂～中粒砂、それ以外は極細粒砂で構成されている。

３．液状化跡の断面形態

第３図に示したように、砂脈ｃとｄの間、砂脈ｅの南部にトレンチを掘削して、それぞれの北側と南側の壁面で液状化跡の断面形態を観察し、断面の番号を、北から順番にⅠ～Ⅳとした。

第５図の断面Ⅰは砂脈ｃに関する北向きの断面図である。最大径17㎝の礫を含む砂礫層で液状化現象が発生して、最大幅約４㎝の砂脈の内部を砂が上昇している（第４図）。砂脈の下部は中粒砂、中部は細粒砂、そして上部は極細粒砂～シルトと、上に向かって粒子が小さくなっている。このように、構成する粒子が徐々に小さくなることを「級化」と言う。砂脈の内部を砂粒が上昇する過程で、大きな粒子は取り残されて、細かい粒子ほど上に上昇しやすいので級化が見られることが多い。級化の存在は、砂脈内の粒子が、上から流れ込んだのではなくて、下から上昇したことを示す証拠になる。

第４図　液状化現象の痕跡の断面形
砂礫層で液状化現象が発生しているが、砂脈内を砂だけが上昇している（断面Ⅰ）。

断面Ⅰでは、大きな粒子は液状化現象が発生した地層の中に取り残されており、

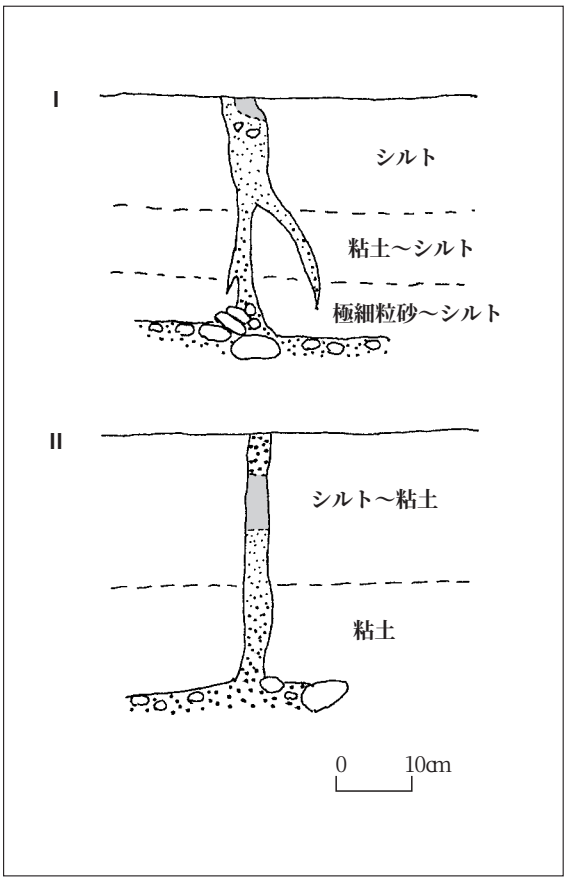
砂脈内を上昇していない。そして、このことは、以下の断面にも共通している。

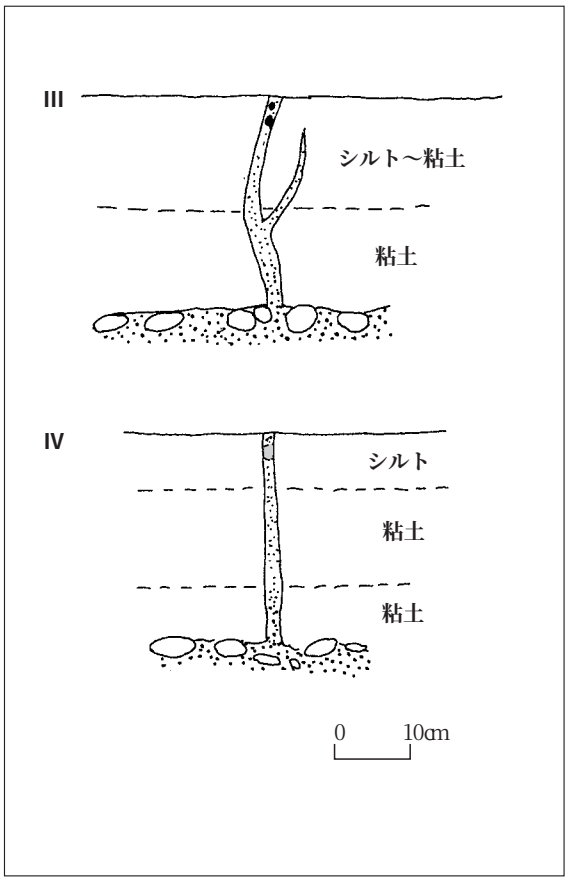
第５図の断面Ⅱは砂脈ｄに関する南向きの断面図で、最大径５㎝の礫を含む粗粒砂層で液状化現象が発生している。幅２～３㎝の砂脈内部を上昇する粒子には級化が顕著で、下から中粒砂～粗粒砂、細粒砂～中粒砂、細粒砂～極細粒砂と変化し、さらにシルト～粘土となる。ところが、砂脈の最上部では最大径３㎜の礫を含む粗粒砂となって、急に粒子が大きくなる。

このように、上に向かう級化が生じ、最上部で再び大きな粒子が現れることについては、以下のように解釈できる。

私たちが観察できるのは、液状化現象によって噴砂が流出し終わった直後の様子だが、噴砂流出の最終段階で流出し終わった直後の様子だが、噴砂流出の最終段階では水の動きが間欠的になりがちで、砂脈内の粒子に不連続が生じる。それまで砂脈の最上部に見られるような礫や粗粒砂が流れ出していたが、一瞬流れが途切れ、その後、砂脈の中程まで噴砂が上昇している。この時に、噴砂が地面に流れ出せなかったので、砂脈の最上部まで礫と粗粒砂を押し上げて力尽きた状態となった。

第６図の断面Ⅲは砂脈ｅの北向きの断面で、最大径８㎝の礫を含む粗粒砂で液状化現象が発生している。砂脈の幅は下部が約２㎝だが、途中で枝分かれして、幅１㎝以内の二つの砂脈になっている。砂脈の内部では級化が顕著で、最下部は細粒砂～中粒砂、さらに上に向かって順に、細粒砂、極細粒砂となる。枝分かれした片方の砂脈は途中で途切れており、先端がシルトとなる。この図でも、砂脈の最上部





第５図　液状化跡の断面図（その１）
ドットの大きさは砂礫の粒子の大きさに対応しており、砂脈内部の粘土～シルトはアミで示した。液状化した砂礫層の直上の粘土層には極細粒砂が含まれている。断面の位置（ローマ数字）は第３図に示した。

第６図　液状化跡の断面図（その２）
ドットの大きさは砂礫の粒子の大きさに対応しており、液状化した砂礫層の直上の粘土層には極細粒砂が含まれている。断面の位置は第３図に示した。

が最大径1.5cmの礫を含む粗粒砂となり、大きな粒子が押し上げられている。この径1.5cmの礫の長軸が垂直方向に向いており、地下水の動きによって上方向に移動する過程で流れの方向に長軸を向けるようになったと考えられる。一般に、砂脈内の礫は流れの向きに従うことによって、長軸の方向が垂直になることが多い。

第６図の断面Ⅳは砂脈ｅの南向きの断面で最大径７cmの礫を含む粗粒砂で液状化現象が発生している。幅１～２cmで真っ直ぐにのびており、砂脈の内部には級化が見られ、下部が細粒砂～中粒砂、上部が細粒砂、そして、ごくわずかに、シルト～粘土となる。この砂脈も、最上部で粒子が大きく（細粒砂～中粒砂）なる。

４．対応する地震の年代

この遺跡で検出された砂脈は、８世紀前半の遺構を検出した面より、さらに約20cmの高さまで上昇して、16世紀の遺構を検出した面ではすでに消滅していた。このため、液状化現象の原因となった地震は、８世紀前半より後で、16世紀よりは前ということになる。また、砂脈ａが奈良時代の遺構の輪郭に沿って分布し、砂脈ｄの上から16世紀の遺構が掘り込まれることからも、地震の年代は奈良時代より後で、16世紀より前と言うことになる。

一方、この遺跡においては、液状化現象が発生しにくいと考えられている礫を含んだ地層が液状化しているので、かなり強い地震動を被ったと考えられる。

このように限定された年代に、この地域において大きな地震動を与えるような地震として考えられるのは、868年８月３日（貞観10年７月８日）に発生した播磨地震である。この地震について、『日本三代実録』には、播磨国司の報告として、「播磨国言、今月八日地大震動、諸郡官舎、諸定額寺堂塔、皆盡頽倒」という記述がある。この月（７月）の８日に大きな地震があって、都の官舎や、定額寺の堂塔が皆倒れたという国司からの報告である。

当時の播磨国に相当する地域には山崎断層帯が分布している。この断層帯は、岡山県勝田郡大原町から兵庫県三木市にかけて北西―南東方向にまっすぐにのびて、断層を横切る丘陵や河谷が同じ方向に鋭く折れ曲がっている。このことから、断層の両側の地質が左横ずれ方向に食い違う（変位する）ことを繰り返した断層帯と考えられている。

1979年に、山崎断層帯を構成する安富断層でトレンチ調査（活断層の発掘調査）が行われたが、この結果、山崎断層帯の活動によって868年の播磨地震が発生したことがわかった。その後、兵庫県地域活断層調査委員会が多くのトレンチ調査を行い、山崎断層帯が播磨地震を引き起こしたことを裏付けるとともに、もう一つ前の活動として、３千～３千数百年前にも活動して大地震を引き起こしたことを明らかにした。

また、兵庫県教育委員会が調査した揖保郡太子町の亀田遺跡でも、古墳時代から平安時代までの期間に限定される液状化現象の痕跡が見つかっており、これも同じく播磨地震の産物である可能性が高い。

５．まとめ

南通り遺跡の発掘調査によって、激しい地震動にともなう液状化現象の痕跡が認められた。具体的には、最大幅約２cmの砂脈が、北北西―南南東方向に約８mの長さで、真っ直ぐにのびており、当時の地

面から数 10～１m程度の深さに堆積していた砂礫層が液状化したことがわかった。

断面観察の結果、液状化現象が発生した地層中の大きな粒子は地下に取り残され、細かい粒子だけが地面を引き裂いて上昇したことがわかった。また、上昇の過程で、上ほど細かい粒子の比率が大きくなる「級化」が顕著に認められた。

砂脈は８世紀前半の遺構に沿うように分布していたが、上部は 16世紀の遺構に削除されていたので、液状化現象の原因となった地震は、８世紀前半より後で、16世紀よりは前ということになる。

この年代で、この地域に激しい地震動を与えた内陸地震として唯一考えられるのが 868年８月３日（貞観 10年７月８日）に発生した播磨地震である。この地震は、山崎断層帯の活動によって発生したと考えられており、当遺跡の液状化跡も、この断層帯の活動によって生じた可能性が高い。

今後、周辺の遺跡でも、地震痕跡が検出される可能性が高いが、当遺跡の地震痕跡も含めて、将来の地震における地盤災害を軽減するための重要な基礎資料になると考えられる。

謝辞

現地調査および本稿作成にあたり、兵庫県立考古博物館の篠宮正氏に有益なご教示を頂きました。心よりお礼申し上げます。

参考文献

安藤雅孝・佃　為成・岡田篤正（1986）1979年山崎断層系安富断層（安志地区）トレンチ調査.活断層研究,3 ,13-18.

兵庫県教育委員会（2000）『亀田遺跡（第１分冊）－亀田遺跡Ⅱ地点の調査－』.兵庫県文化財調査報告第 210冊.

活断層研究会編（1991）『新編日本の活断層』.東京大学出版会,437p.

文部省震災予防評議会（1941）『増訂大日本地震史料第一巻』.鳴鳳社,945p.

岡田篤正・東郷正美（2000）『近畿の活断層』.東京大学出版会,395p.

寒川　旭（1992）『地震考古学』.中公新書,251p.

寒川　旭（2007）『地震の日本史』.中公新書,268p.

宇佐美龍夫（2003）最新版日本被害地震総覧（416-2001）. 東京大学出版会,605p.

第２節　南通り遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１ 試料

試料は、南通り遺跡から出土した弥生土器片４点である。いずれも弥生時代後期のものとされ、器種は壺２点と甕２点である。試料には資料No.1～４が付されている。各試料の資料No.、出土地区、遺構、器種などは一覧表にして第１表に示す。

２ 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

第１表　胎土分析試料一覧

資料No.	報告No.	実測№	地区	遺構	時期	種別	器種	胎土分類										
								鉱物・岩石				粒径組成					砕屑	
								B	G5	D3	E3	c	m	f	vf	cs	I	II
1	150	122	B3	土器群181	弥生後期	弥生土器	壺		■					■			■	
2	144	161	I5	土器群180	弥生後期	弥生土器	壺				■			■			■	
3	162	156	G5	第3層	弥生後期	弥生土器	甕			■		●		■			■	
4	149	163	I5	土器群189	弥生後期	弥生土器	甕	■						■				■

B:角閃石の鉱物片が石英よりも多いことが特徴であり、黒雲母も比較的多く伴う。岩石片では、堆積岩類や凝灰岩などを含まず花崗岩類のみから構成される。
G5:鉱物片ではカリ長石が比較的多く含まれ、岩石片は花崗岩類を主体とし、凝灰岩や火山ガラスなどを伴う。
D3:チャート主体の堆積岩類が多く、凝灰岩および流紋岩・デイサイトもそれに次いで多く含まれるが、花崗岩類は含まれない。
E3:凝灰岩の多い岩石片組成であるが、堆積岩類もそれに次いで多い。花崗岩類は含まれないか極めて微量である。
砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径: c:粗粒砂　m:中粒砂　f:細粒砂　vf:極細粒砂　cs:粗粒シルト　● :第二のピーク
砕屑物の割合　Ⅰ:20%前後　Ⅱ:30%前後

３ 結果

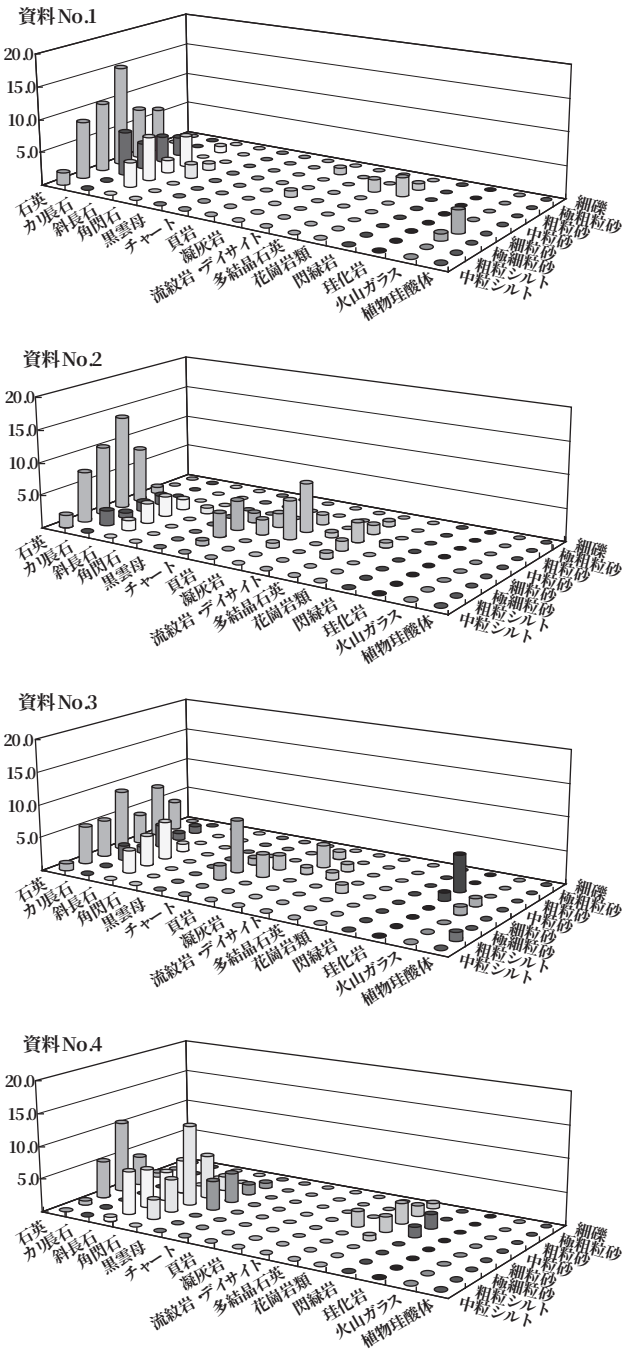
観察結果を第２表、第７図～第９図に示す。以下に各試料の胎土の特徴を述べる。

資料No.1 :石英の鉱物片が多く、少量のカリ長石および斜長石の鉱物片を伴い、微量の角閃石も含まれる。岩石片は全体的に微量であるが、花崗岩類を主体とし、凝灰岩や火山ガラスも含まれる。これまでに兵庫県内各地における弥生土器～土師器の胎土分析で認められている鉱物・岩石組成分類と比較すると、花崗岩類を主体とするC類に相当し、供伴する岩石片からC3類に分類される。粒径組成は細粒砂をモードとする単独峰のヒストグラムを呈し、砕屑物の割合は20%程度である。

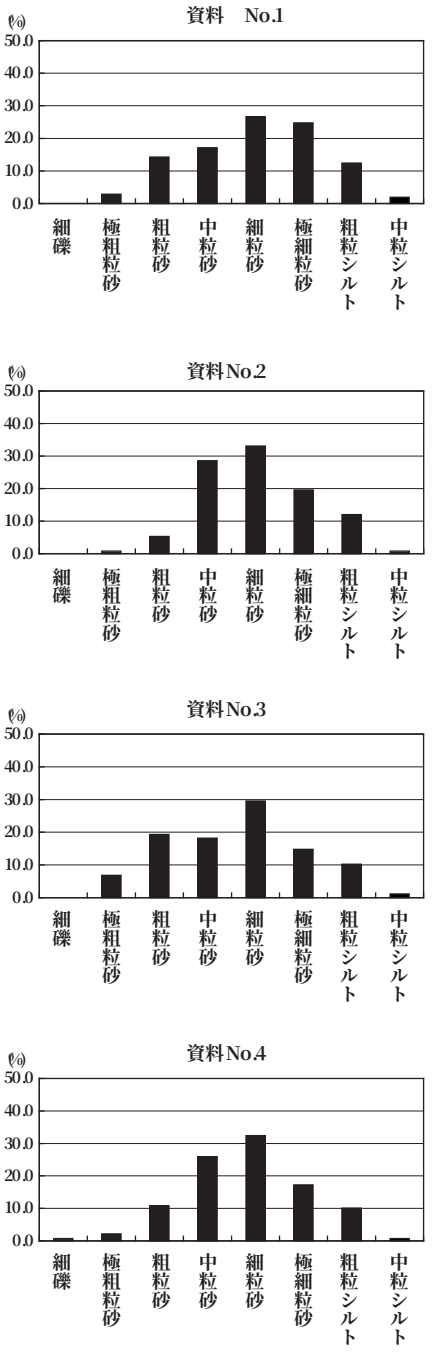
資料No.2 :石英の鉱物片が多く、次いで凝灰岩の岩石片が多い。これに少量のチャートや頁岩からなる堆積岩類の岩石片を伴い、カリ長石や斜長石の鉱物片も少量含まれる。また、極めて微量の花崗岩類

第２表　薄片観察結果

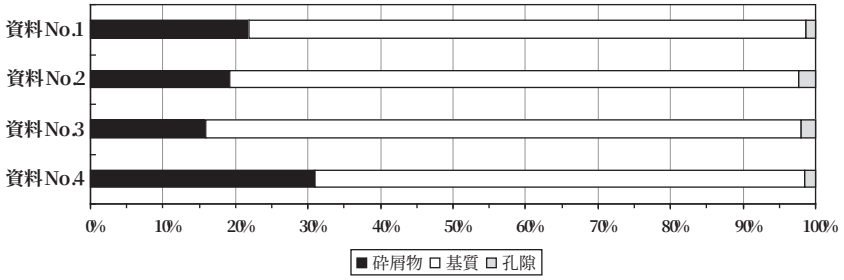
資料№	砂粒区分		砂粒の種類構成																			合計
			鉱物片						岩石片											その他		
			石英	カリ長石	斜長石	角閃石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	閃緑岩	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物珪酸体	
1	砂	細　礫																				0
		極粗粒砂			1							1			1							3
		粗粒砂	7	3										2	3							15
		中粒砂	8	4	5	1																18
		細粒砂	16	4	2	2						1								3		28
		極細粒砂	11	7	7															1		26
		粗粒シルト	9		4																	13
		中粒シルト	2																			2
	基　質																					369
	孔　隙																					6
2	砂	細　礫																				0
		極粗粒砂												1								1
		粗粒砂	1									2		2		1		1				7
		中粒砂	11	2	2	1			2	3	1	10	1	4	1							38
		細粒砂	19	2	4				6	3		8		2								44
		極細粒砂	14	1	4				5			1		1								26
		粗粒シルト	10	3	2				1													16
		中粒シルト	1																			1
	基　質																					542
	孔　隙																					16
3	砂	細　礫																				0
		極粗粒砂	4	1								1										6
		粗粒砂	7	1								3	1						5			17
		中粒砂	4	3	1				1	2	1	1	1						1	1		16
		細粒砂	8	1	5				7	3				1						1		26
		極細粒砂	5	2	4				2												1	13
		粗粒シルト	5		3																	9
		中粒シルト	1																			1
	基　質																					456
	孔　隙																					11
4	砂	細　礫													1							1
		極粗粒砂					1								2							3
		粗粒砂	1		2	3	2								4		3					15
		中粒砂	6		7	9	6							3	3		2					36
		細粒砂	15		6	17	6								1							45
		極細粒砂	8		8	7		1														24
		粗粒シルト	1		9	4																14
		中粒シルト			1																	1
	基　質																					304
	孔　隙																					7



第７図　各粒度階における鉱物・岩石出現頻度



第８図　胎土中の砂の粒径組成



第９図　砕屑物・基質・孔隙の割合

の岩石片も含まれる。これまでの分類基準に従えば、凝灰岩を主体とするE類に相当するが、堆積岩類が比較的多く含まれることも特徴である。これまでにE類は、凝灰岩のみが突出するF1類と花崗岩類を含まずに緑色岩や変質岩・珪化岩を少量伴うF2類が設定されているが、今回の組成は、いずれにも当てはまらないことからF3類とする。粒径組成は細粒砂をモードとする単独峰のヒストグラムを呈し、砕屑物の割合は20%程度である。

資料No.3：石英の鉱物片が多く、次いで斜長石やカリ長石の鉱物片が多い。岩石片ではチャートが多く、次いで頁岩、凝灰岩および珪化岩が少量含まれる。微量の流紋岩・デイサイトも含まれるが、花崗岩類は含まれない。これまでの分類では、岩石片において堆積岩類が多い組成をD1類とし、頁岩が多い組成をD1類、チャートの多い組成をD2類としてきたが、今回の組成は、凝灰岩や珪化岩も伴うことから、新たにD3類とする。粒径組成は細粒砂をモードとするが、粗粒砂に不明瞭ではあるが第二のピークが認められる。砕屑物の割合は15%程度である。

資料No.4：胎土中の砂粒の中で、角閃石の鉱物片が最も多いことが特徴である。次いで石英が多く、少量の斜長石や黒雲母を伴う。岩石片は少量であるが、花崗岩類を主体とし、閃緑岩の岩石片も含まれる。これまでの分類では、E類とした組成に相当する。粒径組成は細粒砂をモードとする単独峰のヒストグラムを呈するが、砕屑物の割合は他の３点よりも多い約30%である。

４．考察

南通り遺跡は、播磨平野中部を流れる市川の河口付近右岸に位置する。市川流域の地質については、尾崎ほか（1995）や山元ほか（2000）により確認することができる。中流域の両岸に分布する山地は、中生代白亜紀の主に凝灰岩からなる広峰層により構成され、その上流側の山地にはチャートや頁岩・砂岩などの堆積岩類からなる古生代ペルム紀の超丹波帯や中生代ジュラ紀の丹波帯が分布する。さらに上流の山地は、白亜紀の凝灰岩や溶岩からなる相生層群（有馬層群）が広く分布している。このような市川流域の地質学的背景は、今回の分析で認められたD3類やF3類と良く一致する。南通り遺跡周辺の沖積低地の堆積物は、これらの地質に由来する砕屑物が混在していると考えられるから、D3類およびF3類の胎土は、市川下流域に由来する可能性がある。すなわち、資料No.2および資料No.3は、南通り遺跡周辺に堆積する砂や粘土が使用された可能性があると考えられる。

一方、C5類については、これまでの分析例の中で、同じ姫路市内の勝原区に位置する丁・柳ヶ瀬遺跡から出土した弥生土器に多く認められている。丁・柳ヶ瀬遺跡は、市川より西側を流れる大津茂川下流の沖積低地に位置するが、その背後には桜山岩体と呼ばれる後期白亜紀に貫入した斑状花崗閃緑岩からなる山地が分布している（山元ほか,2000）。C5類は、このような地質学的背景に由来すると考え、大津茂川下流域を示す胎土であると考えた。したがって、今回の資料No.1については、直線距離にして８～９㎞ほど離れた大津茂川下流域で作られたものが搬入されたかあるいは、何らかの理由でその地域から採取された砂や粘土が使用されたなどの可能性があると考えられる。

E類とした胎土については、その鉱物片および岩石片の種類構成から、角閃石と黒雲母を斑晶として含む花崗閃緑岩～石英閃緑岩が分布し、それ以外の地質が分布しないような背景を持つ地域に由来すると考えられる。上述した文献による地質記載から、播磨平野を取り囲む山地は、丹波帯や超丹波帯の堆積岩類と相生層群（有馬層群）の凝灰岩や火砕岩類から構成されており、E類の鉱物・岩石組成は、播磨平野の地質学的背景とは異質であると判断される。すなわち、E類とした資料No.4は、播磨平野内で作ら

れたものではなく、他の地域からの搬入品である可能性が高い。このことは、資料No.4の砕屑物の割合が他の試料よりも有意に多いことからも示唆される。これまでの兵庫県内における胎土分析例では、I類の胎土は、伊丹市に所在する小阪田遺跡出土の弥生土器に認められているが、その試料は、発掘調査所見により生駒西麓産である可能性が指摘されている。生駒山地には、白亜紀に形成された領家帯の花崗岩類が分布するが、その中には角閃石黒雲母石英閃緑岩や角閃石黒雲母花崗閃緑岩などの分布が記載されている（生駒山地領家帯研究グループ，1986）。現時点では、資料No.4について、生駒西麓からの搬入品の可能性もあると考えるが、その産地の特定は今後の分析例の蓄積が必要と考えられる。

（矢作健二・石岡智武）

引用文献

生駒山地領家帯研究グループ，1986，生駒山はんれい岩体について．地球科学，40，102-114.

松田　順一郎・三輪　若葉・別所　秀高，1999，瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－．日本文化財科学会第16回大会発表要旨集，120-121.

尾崎　正紀・栗本　史雄・原山　智，1995，北条地域の地質．地域地質研究報告（5万分の１図幅），地質調査所，100p.

山元　孝広・栗本　史雄・吉岡　敏和，2000，龍野地域の地質．地域地質研究報告（5万分の１図幅），地質調査所，66p.

第３節　南通り遺跡出土木器の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

１ 試料

試料は、D4区 SE040から出土した曲物１点（報告No. W2）である。

２ 分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やRichter他（2006）を参考にする。

３ 結果

木材は、針葉樹のスギに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２-4個。放射組織は単列、１-15細胞高。

４ 考察

井戸 SE040の水溜として利用された曲物は、針葉樹のスギに同定された。スギは、木理が通直で割裂性が高く加工が容易であり、とくに板状の加工に適している。曲物としては、ヒノキ等と共によく利用される樹種の一つである。

井戸の水溜に利用される曲物の樹種については、主に摂津を中心とした地域で樹種同定が行われている。川除・藤ノ木遺跡、内場山城跡、宅原遺跡、松野遺跡第４－１次、二葉町遺跡、御蔵遺跡第14－18次の鎌倉時代とされる資料では、ヒノキあるいはヒノキ属が利用されており、上沢遺跡第33次の中世とされる資料でもヒノキが確認されている（島地・林,1992,1993;神戸市教育委員会,1999,2002;松葉,2001a,2001b;パリノ・サーヴェイ株式会社,2001）。一方、森南遺跡第２次の室町時代？とされる資料ではスギが確認されており、今回の結果とも調和的である（三村,2005）。時期によって利用樹種が異なる傾向があるが、この点については室町時代の資料を増やして検討する必要がある。

（高橋　敦）

引用文献

神戸市教育委員会，1999，宅原遺跡　西豊浦地区・宮之元地区．「平成８年度神戸市埋蔵文化財年報」，362-364．

神戸市教育委員会，2002，上沢遺跡　第33次調査．「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」，291-299．

松葉　礼子 ,2001a,松野遺跡出土木製品（古墳時代後期初頭～鎌倉時代）の樹種同定 .「松野遺跡発掘調査報告書　第３～７次調査」 ,神戸市教育委員会 ,175-186.

松葉　礼子 ,2001b,二葉町遺跡出土木製品の樹種同定 .「二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・７・８・９・ 12次調査」 ,神戸市教育委員会 ,141-166.

三村　昌史 ,2005,森南遺跡第２次発掘調査出土木製品の樹種 .「森南町遺跡発掘調査報告書　－第１・２次調査－」 ,神戸市教育委員会 ,113-118.

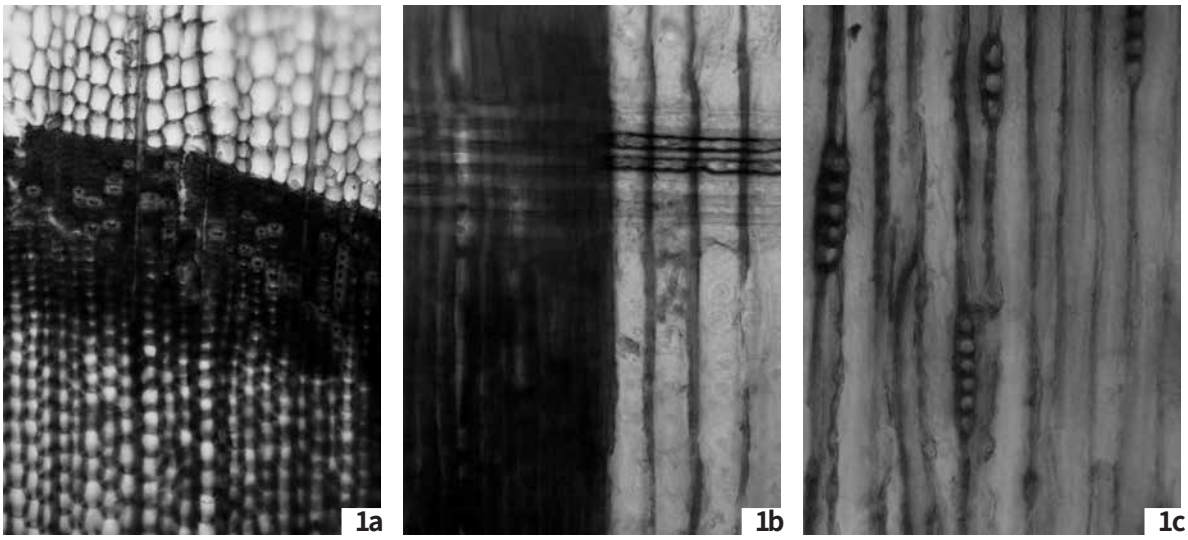
パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2001,御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種 .「御蔵遺跡　第４・６・ 14・32次発掘調査報告書」 ,神戸市教育委員会 ,114-122.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編） ,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト .伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修） ,海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］ .

島地　謙・林　昭三 ,1992,川除・藤ノ木遺跡出土木製品の樹種 .「川除・藤ノ木遺跡　武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 ,兵庫県文化財調査報告第 104冊 ,兵庫県教育委員会 ,771-786.

島地　謙・林　昭三 ,1993,内場山城遺跡出土木製品の樹種 .「多紀郡西紀町　内場山城遺跡　近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 XXI」 ,兵庫県文化財調査報告第 126冊 ,兵庫県教育委員会 ,92-97.

島地　謙・伊東　隆夫 ,1982,図説木材組織 .地球社 ,176p.



1.スギ (曲物　D4区 SE040,報告 No.W2)
a: 木口，b: 柾目，c: 板目

200μm：a
100μm：b,c

第 10図　南通り遺跡の木材

第５章　まとめ

第１節　要約

第１面は、耕作土直下の遺構検出面である。このため遺物包含層は存在しておらず、遺構のみ検出できた。耕作により遺構面は削平されていた。第１面の遺構は調査区全体に存在している。遺構には溝・掘立柱建物・柱穴・井戸・土坑がある。特に中央部分は掘立柱建物・柱穴・井戸・土坑など密度が濃く、調査区外の北側と南側に広がっている。また東西方向のほぼ中央に溝 SD001が存在している。西側と東側の調査区外には溝が延びているが柱穴などの遺構は希薄になっている。

遺物は土師器・備前焼・中国製磁器などが出土している。土師器は鍋が中心であり、小皿が僅かに出土している。備前焼は壺・甕・擂鉢・皿があり、擂鉢はよく使用された痕跡が残る。中国製磁器は碗・皿が出土しているが、大物は存在しない。他に土錘と石臼・茶臼が出土している。

第２面は、第１面を形成している細粒砂を除いた下層の砂礫層が遺構面となるが、第１面に比べて遺物量は少ない。標高は 0.65m～ 0.8mである。主な遺構は土器が集中して出土する土器群と被熱痕跡のある土坑がある。特に土器群 175と土器群 151からは土師器と須恵器のほかに多量の製塩土器と土錘が出土した。全体的に遺構はまばらである。

第３面は、第２面を形成している細粒砂を除いた下層の砂礫層が遺構面となるが、明確な遺構は存在しない。全体的に凹凸がありながらも北西から南東に向かって僅かに傾斜している。標高は 0.5m～ 0.9mである。全面から僅かであるが弥生土器の細片が出土しているが、特に土器群 181と土器群 180と土器群 189からは完形の弥生土器がまとまって出土した。

第２節　南通り遺跡の立地（第 11図）

南通り遺跡は姫路市の南端の市川の河口右岸から野田川河口左岸の播磨灘沿岸に位置する。市川左岸には甲山・俗称御旅山塊は場所によって構成される基盤岩の種類が異なる。１ .流紋岩溶岩、２ .珪長岩・流紋岩・石英斑岩及び花崗斑岩、４ .流紋岩火山礫凝灰岩及び凝灰角礫岩、５ .流紋岩強溶結ガラス質凝灰岩と異なっている。麓屑面には３ .角礫岩・凝灰質角礫岩及び礫岩が認められる。

南通り遺跡の南側約 200mには標高 5.2m、長さ約 1,700m、幅約 150mを測る東西方向に長い高浜松林のある砂州が海岸に平行して存在する。遺跡が存在していた当時、この砂州のすぐ南側は遠浅の海浜が広がっていたと考えられる。さらに南通り遺跡の北側約 200mには標高 2.0m、長さ約 500m、幅約 200mを測る東西方向に長い下中島集落がのる砂州が海岸に平行して存在する。

南通り遺跡は標高 1.4mであり、この２帯の砂州の中間の三角州あるいは海岸低地に立地していることになる。西側には市川下流域を網状に流れる高浜川が、東側には阿成川が流れている。

このように、表層の地形分類では、集落が形成しにくい三角州あるいは海岸低地に立地している。実際の発掘調査では弥生時代・奈良時代・中世と、中断を挟みながら長期間にわたって生活の場であったことが判明した。これは集落を形成する条件が良好であったからである。弥生時代以下の堆積物は礫層であり、三角州あるいは海岸低地の中にあって河口に近く堆積作用が大きい。このことから、南通り遺跡は埋没した微高地に立地していたと言える。今後、低地の遺跡を考えていく上で重要である。

第 11図　南通り遺跡周辺の地質図

第３節　南通り遺跡の性格

１．弥生時代

第３面からは弥生時代後期の土器が出土した。遺物は砂礫層の上面で出土しており、完形の土器は土器群 181・土器群 180・土器群 189の３箇所からまとまって出土した。このほかに全体に遺物が散布していた。いずれも遺構に伴っていないが、時期的にはまとまりがある。これらの土器は大きく、３時期に分けることが可能である。弥生時代前期後半と弥生時代後期前半と弥生時代後期後半である。

弥生時代前期後半は甕蓋 151が該当する。器壁が厚く、大きめの砂粒を含む。前期後半Ⅰ－３期に位置付けられる。該当する時期の遺物は少ない。

弥生時代後期前半は高坏 152と甕 158が該当する。高坏 152は、脚部は太く裾が大きく広がらない。甕 158はハケ調整甕で内面は頸部直下まで縦方向のケズリを行う。以上のような特徴は後期前半でも後期初頭Ⅴ－１期に位置付けられる。該当する時期の遺物は少ない。

弥生時代後期後半は土器群 181と土器群 180と土器群 189の広口壺 150とそのほかの長頸壺 153・154、直口壺 155、壺底部 156、甕 157・158～164が該当する。壺は広口壺 144と直口壺 147が体部内面を粘土紐積み上げの後、横方向のハケ調整を行う。広口壺 150は口縁端部と頸体境に細い竹管による刺突を施文する。このほかに長頸壺などがある。甕はハケ調整甕とタタキ甕がある。ハケ調整甕は 145・148・157・159～161であり底部が小さく、体部の最大径はやや下がっている。タタキ甕は 149・162～164であり、 143は生駒西麓の胎土である。 162・163は体部内面上半部に横方向のハケ調整を行う。また 162の口縁端部は僅かに上方へ摘み上げる。 164の底部内面はケズリを行う。高坏 146は椀形高坏で、坏部は浅く口縁部直下に２条の凹線を巡らす。以上のような特徴は後期後半でも、終わりの後期Ⅴ－５期に位置付けられる。

ほとんどの遺物は後期Ⅴ－５期に位置付けられ、完形品が多い。このように遺構に伴わず遺物のみが出土する例は姫路市内では天満辺作遺跡があり、同様に海浜部に近い。今後、同様の出土例を待って検討する必要があるが、遺跡の認識を旧地形の復原と共に注意すべきである。

２．古代前半

第２面の遺構面からは土器群と被熱痕跡のある土坑を検出した。

遺物は須恵器坏B・坏B蓋・坏A・皿・横瓶・壺類、土師器坏・甕・鍋・竈・製塩土器、土錘が出土した。特に小破片のため図化が難しいが、製塩土器が多量に出土している。土錘の出土も多い。

遺構には被熱のある土坑があり、製塩土器の出土とともに、海浜部であるという立地を考えると、製塩にかかわる遺構であると考えられる。また、土錘の出土から考えると、漁村の一部であることが推測できる。

古代前半の遺物の詳細な検討をしなければいけないが、第１面と第２面の間で地震の液状化の痕跡が見つかっており、地震の規模と遺構の層位から、貞観 10年（ 868）に山崎断層帯の活動によって発生した大規模な地震であることを寒川旭氏は指摘した（第４章第１節）。南通り遺跡の古代の集落はこの貞観 10年に山崎断層帯の大規模な地震により廃絶した可能性が考えられる。

３．古代後半～中世前半

古代後半から中世前半の間の遺物・遺構は存在していない。これは地震によって失われた生活基盤が回復しなかった可能性が高い。

４．中世前半

第１面で調査した遺構のうち、確実に中世前半の遺物が出土しているのは土坑 SK072と柱穴 P065など僅

かである。遺物は構 SD001の中からは白磁碗や同安窯系青磁皿や白磁碗など 13世紀の中国製磁器が僅かに出土している。

このように、 13世紀代から南通り遺跡で中世の集落が形成され始めた。ただし、遺物量から検討すると、調査地点では疎らな集落であったことが考えられる。

５．中世後半

第１面で調査した大部分の遺構が中世後半以降に位置付けられる。掘立柱建物 SB101・ SB102・ SB103・ SB105や井戸 SE040、 SK058など主要な土坑、 SD001など東西方向の溝などがある。ただし SD001を直交して切る SD006・ SD010・ SD020・ SD023などは近世に位置付けられる。

遺物のほとんどは溝 SD001から出土している。遺物の時期は下層からの混入による古代の遺物や中世前半の遺物も一部存在するが、ほとんどが中世後半の遺物である。土師器には鍋・小皿がある。鍋は鉄鍋形の鍋５と羽釜形の鍋６が 16世紀前半に、羽釜形の平行タタキの鍋 7～ 21は 16世紀中頃に、羽釜形の格子タタキの鍋 22～ 34は 16世紀後半に位置付けられる。備前焼には壺・擂鉢・皿・甕がある。備前焼の擂鉢 49・ 50は備前焼Ⅳ期で 15世紀代、 51・ 52は備前焼Ⅴ期前半で 16世紀前半、 53・ 54は備前焼Ⅴ期後半で 16世紀後半に位置付けられる。中国製磁器は 62の白磁皿が 15世紀代に、 69の青花碗が 16世紀代に、 68の青花碗が 16世紀後半に位置付けられる。以上のように、土師器鍋・備前焼擂鉢・中国製磁器は 15世紀後半から 16世紀後半にかけての時期に位置付けられる。多くの遺構はこの溝 SD001の主体となす時期に存続していたものと考えられる。

遺物構成は土師器が圧倒的に多く、他に備前焼と中国製磁器がある。土師器の中でも煮炊具である鍋の割合が圧倒的に多く、皿は極僅かである。また中国製磁器は碗・皿類の小物のみであり、大物や特殊物は存在しない。このような内容から、都市集落の遺物構成とは異なる様相を示す。遺物は他に土錘と石臼がある。土錘は魚網用の土錘と考えられ、多数出土している。中でも有溝穿孔土錘は中世後半に限定的に出土するものであり、遺跡の時期とも一致する。この有溝穿孔土錘は最近まで備讃瀬戸のタイ大網やタイ縛網に使われていたり、大阪府泉佐野市では地曳網に使われていたようである。したがって遠浅の砂浜が発達した市川右岸河口部では大規模な地曳網漁が行われていたことが想定できる。つまり、土器組成と多量の土錘が出土したことから、南通り遺跡は市川右岸河口部の漁村として位置付けられる。

このような漁村にあっても、茶臼（ S5・ S8）が出土している。このことより飲茶の習慣が都市集落だけではなく、漁村にまで浸透していたことが推測できる。

南通り遺跡の集落は 17世紀初頭には廃絶している。原因は何であろうか。今後の検討としたい。

本書全体の参考文献

浅田芳郎・今里幾次『播磨橋詰遺跡発掘調査略報』 1960

今里幾次「姫路の縄文土器」『姫路の文化財講座　第 1集』姫路市文化財保護協会　1981

瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内地方出土土錘調査報告書（Ⅰ）』 1992

瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内地方出土土錘調査報告書（Ⅱ）』 1993

長谷川眞「播磨における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究』 21　日本中世土器研究会　2007

姫路市『姫路市史　第七巻上』 1998

姫路市教育委員会『兼田』 1982

姫路市教育委員会『御旅山 13号墳』 1995

姫路市教育委員会『TUBOHORI　平成６年度（1994）』1999
姫路市教育委員会『TUBOHORI　平成７年度（1995）』1997
姫路市教育委員会『TUBOHORI　平成８年度（1996）』1995
姫路市教育委員会『TUBOHORI　平成12年度（2000）』2002
姫路市文化財保護協会『御旅山３号墳発掘調査報告』1971
姫路市文化財保護協会『加茂遺跡』1975
兵庫県教育委員会『兼田遺跡調査報告書』1973
兵庫県教育委員会『播磨・長越遺跡』1978
兵庫県教育委員会『市之郷遺跡』2005
兵庫県教育委員会『豆腐町遺跡』2007
兵庫県教育委員会『北条遺跡』2008
真鍋篤行「有溝穿孔土錘の発掘例と民俗資料について」『瀬戸内海歴史民俗資料館だより』第36号　瀬戸内海歴史民俗資料館　1993
真鍋篤行「瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書(Ⅱ)』瀬戸内海歴史民俗資料館　1993

第３表　南通り遺跡土器一覧（１）

報告№	図版	写真図版	種別	器種	産地など	部位	調査番号	地区	面	時期	遺構	法量（cm）			実測№
												口径	器高	底径	
1	第１図	第12図	三田青磁	方形皿	三田	口縁部～底部	2001109	№１		近世		(13.9)	2.9	(7.9)	1
2	第１図	第12図	瓦	軒平瓦		瓦当	2001109	№２		中世～近世		長 (5.6)	幅 (2.7)		2
3	第１図	第12図	瓦	平瓦		一部	2001109	№３		古代		長 (6.3)	幅 (6.3)	厚 0.9	4
4	第１図	第12図	瓦	丸瓦		左前面	2001109	№３		古代		長 (13.5)		厚 1.5	3
5	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	G5	1	中世	SD001	(26.2)	7.7+		53
6	31	36	土師器	鍋		口縁部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001		4.9+		43
7	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5	1	中世	SD001	(25.8)	7.0+		38
8	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5	1	中世	SD001	(25.8)	5.3+		37
9	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5	1	中世	SD001	(20.0)	6.4+		39
10	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5・I5、I6	1	中世	SD001	(20.7)	7.3+		45
11	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(20.9)	6.2+		46
12	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	F4・G5	1	中世	SD001	(24.0)	7.5+		51
13	31	37	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	H5	1	中世	SD001	(25.0)	7.9+		47
14	31	36	土師器	鍋		口縁部～底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(26.0)	10.9+		52
15	31	36	土師器	鍋		口縁部～底部	2002062	G5・H5	1	中世	SD001	(22.3)	9.3+		49
16	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5	1	中世	SD001	(20.1)	6.0+		44
17	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	G5	1	中世	SD001	22.1	7.7+		32
18	31	36	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	H5	1	中世	SD001	(26.0)	9.1+		36
19	31	37	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	11.8	8.3+		31
20	31	37	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	F4	1	中世	SD001	(24.2)	5.9+		50
21	31	37	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	H5	1	中世	SD001	(31.4)	8.6+		48
22	32	37	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(25.0)	10.4+		41
23	32	37	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(24.8)	10.5+		42
24	32	37	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	H5	1	中世	SD001	(24.8)	7.9+		35
25	32	37	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	F4	1	中世	SD001	(25.3)	8.9+		33
26	32	38	土師器	鍋		口縁部～底部	2002062	G5・H5	1	中世	SD001	(24.4)	9.5+	(23.4)	29
27	32	37	土師器	鍋		口縁部～底部	2002062	G5・H5	1	中世	SD001	26.0	9.9+		27
28	32	38	土師器	鍋		口縁部～底部	2002062	G5・H5	1	中世	SD001	26.7	9.7+		28
29	32	38	土師器	鍋		口縁部～底部	2002062	G5	1	中世	SD001	25.8	10.8+		34
30	32	38	土師器	鍋		口縁部～底部	2002062	F4・G5	1	中世	SD001	24.5	12.5		60
31	32	38	土師器	鍋		口縁部～底部	2002062	G5	1	中世	SD001	26.0	10.0+	(28.6)	30
32	32	38	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I5	1	中世	SD001	(22.7)	6.4+		40
33	32	38	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	G5・H5	1	中世	SD001	(26.2)	6.9+		26
34	32	38	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	G5・H5	1	中世	SD001	11.2	7.3+		25
35	32	41	土師器	小皿		口縁部～底部	2002062	G5	1	中世	SD001	(7.2)	1.0+		59
36	32	41	土師器	小皿		口縁部～底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(3.8)	1.7+		55
37	32	41	土師器	小皿		口縁部～底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(8.3)	1.7+		56
38	32	45	土師器	小皿		口縁部～底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	9.4	1.6+	(5.0)	57
39	32	41	瓦質土器	羽釜		口縁部	2002062	G5	1	中世	SD001	(26.2)	2.9+		58
40	33	39	無釉陶器	壺	備前	肩部	2002062	H5	1	中世	SD001		6.9+		20
41	33	39	無釉陶器	壺	備前	肩部	2002062	H5	1	中世	SD001		7.4+		21
42	33	39	無釉陶器	壺	備前	口縁部～肩部	2002062	I5	1	中世	SD001	(15.8)	4.3+		19
43	33	39	無釉陶器	壺	備前	肩部	2002062	I5	1	中世	SD001		12.6+		23
44	33	39	無釉陶器	壺	備前	肩部	2002062	H5	1	中世	SD001		8.6+		22
45	33	39	無釉陶器	壺	備前	底部	2002062	I5	1	中世	SD001		6.7+	(12.0)	14
46	33	39	無釉陶器	壺	備前	底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001		5.7+	(11.8)	15
47	33	39	無釉陶器	壺	備前	底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001		6.7+	(12.8)	18
48	33	39	無釉陶器	小壺	備前	底部	2002062	H5・I5	1	中世	SD001		5.7+	(9.7)	17
49	33	40	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(28.4)	4.7+		7
50	33	40	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(26.8)	5.4+		8
51	33	40	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2002062	I5	1	中世	SD001	(25.6)	6.2+		6
52	33	40	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2002062	I5	1	中世	SD001	(19.5)	4.6+		5
53	33	40	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2002062	G5	1	中世	SD001	(31.0)	8.0+		10
54	33	40	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2002062	I5	1	中世	SD001	(30.6)	8.1+		11
55	33	40	無釉陶器	擂鉢	備前	底部	2002062	H5	1	中世	SD001		8.9+	(12.6)	9
56	33	41	無釉陶器	小皿	備前	口縁部～底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(9.1)	2.2+	(3.4)	12
57	33	39	無釉陶器	甕	備前	底部	2002062	I5	1	中世	SD001		5.2+	(12.4)	16
58	33	41	無釉陶器	甕	備前	口縁部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001		4.9+		13
59	33	41	無釉陶器	甕	備前	底部	2002062	F4・H5・I5	1	中世	SD001		17.3+	(33.2)	24
60	34	42	白磁	碗		口縁部	2002062	G4	1	中世	SD001	(16.6)	2.4+		62
61	34	42	白磁	碗		底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001		2.1+	(6.0)	66
62	34	42	白磁	皿		口縁部～底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(8.7)	2.0+	(3.8)	65
63	34	42	青磁	皿		口縁部～底部	2002062	F4	1	中世	SD001		1.9+	(6.2)	70
64	34	42	青磁	皿		口縁部	2002062	G5	1	中世	SD001	(13.4)	1.8+		68
65	34	42	青磁	碗		底部	2002062	F4	1	中世	SD001		3.2+	(6.0)	69
66	34	42	青磁	碗		口縁部～体部	2002062	I5	1	中世	SD001	(13.1)	3.4+		63
67	34	42	青磁	碗		底部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001		3.8+	(5.8)	67
68	34	42	青花磁器	碗		底部	2002062	E4	1	中世	SD001		3.4+		71
69	34	42	青花磁器	碗		口縁部	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	(11.6)	1.4+		64
70	34	41	瓦	平瓦		左側面	2002062	I5・I6	1	中世	SD001	長 (6.5)	幅 (5.6)	厚 2.3	54
71	34	41	須恵器	甕		頸部～肩部	2002062	G5	1	中世	SD001		7.2+		160
72	34	45	須恵器	甕		底部	2002062	G5	1	中世	SD001		17.2+		61
73	34	43	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	A3	1	中世	SD004	(20.9)	8.5+		75
74	34	43	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	B3	1	中世	SD006	(25.0)	6.0+		72
75	34	43	瓦質土器	羽釜		体部～底部	2002062	B3	1	中世	SD006		6.5+		76
76	34	43	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	D3	1	中世	SD010	(32.8)	4.9+		74
77	34	43	土師器	皿		口縁部	2002062	C4	1	中世	SD023	(12.5)	3.0+		77
78	34	43	弥生土器	高坏		脚部	2002062	C4	1	弥生Ⅴ	SD023		12.2+		78
79	34	43	弥生土器	壺		底部	2002062	A3	1	弥生Ⅴ	SD003		4.6+	(6.2)	73
80	34	43	白磁	碗		底部	2002062	D4	1	中世古	SD020		2.2+	(6.1)	79
81	34	43	白磁	皿		底部	2002062	F3	1	中世	SD013		1.2+	(4.1)	80
82	35	44	施釉陶器	皿	唐津	底部	2002062	B2	1	中世～近世	SK005		2.4+	(5.6)	96

第３表　南通り遺跡土器一覧（２）

報告№	図版	写真図版	種別	器種	産地など	部位	調査番号	地区	面	時期	遺構	法量（cm）			実測№
												口径	器高	底径	
83	35	44	白磁	碗		底部	2002062	D5	1	中世	SK094		2.3+	6.7	95
84	35	45	灰釉陶器	合子蓋	瀬戸	口縁部～天井部	2002062	E5	1	中世	SK073	4.6	1.2	1.8	99
85	35	43	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	E4	1	中世	SK048	(25.4)	6.1+		88
86	35	43	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	G6	1	中世	SK045	(26.3)	5.2+		87
87	35	43	土師器	鍋		口縁部	2002062	G6	1	中世	SK045		3.7+		85
88	35	43	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2002062	G6	1	中世	SK045		5.7+		86
89	35	44	土製品	羽口		先端部	2002062	G4	1	中世	SK032	外径 (6.5)	5.0+		100
90	35	44	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	I4	1	中世	SK058		6.3+		83
91	35	44	瓦質土器	蜀台		脚部	2002062	I4	1	中世	SK058		4.0+		97
92	35	44	須恵器	小皿		口縁部	2002062	I4	1	中世	SK058	(7.6)	1.6+		90
93	35	44	無釉陶器	皿		口縁部～底部	2002062	I4	1	中世	SK058	(10.5)	2.7+	(5.8)	89
94	35	44	青花磁器	碗		底部	2002062	I4	1	中世	SK058		2.5+	5.4	94
95	35	44	無釉陶器	擂鉢	備前	口縁部	2002062	I4	1	中世	SK058		4.8+		84
96	35	44	無釉陶器	擂鉢	備前	底部	2002062	I4	1	中世	SK058		2.7+	(13.0)	93
97	35	44	土師器	羽釜		口縁部	2002062	I5	1	中世古	SK072	(20.1)	4.1+		92
98	35	44	瓦器	椀		底部	2002062	I5	1	中世古	SK072		1.2+	(6.7)	91
99	35	43	土師器	鍋		口縁部	2002062	I7	1	中世	SK053	(21.2)	3.2+		81
100	35	43	無釉陶器	壺	備前	底部	2002062	I7	1	中世	SK053		7.1+	(13.2)	98
101	35	43	無釉陶器	擂鉢	備前	体部～底部	2002062	I7	1	中世	SK053		5.8+	(12.4)	82
102	35	44	土師器	皿		口縁部	2002062	D4	1	中世	SE040	(14.0)	2.1+		107
103	35	44	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	D4	1	中世	SE040		4.8+		108
104	35	44	土師器	小皿		口縁部	2002062	B3	1	中世	P014	(7.0)	1.6		101
105	35	44	土師器	小皿		口縁部～底部	2002062	B3	1	中世	P098	(7.4)	1.2	(4.8)	102
106	35	44	土師器	小皿		口縁部～底部	2002062	B3	1	中世	P108	(7.9)	1.9+		103
107	35	44	瓦器	椀		口縁部	2002062	B3	1	中世古	P065		3.4+		104
108	36	47	須恵器	坏Ｈ蓋		天井部～口縁部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	(16.2)	2.6+		133
109	36	46	須恵器	坏Ｂ		底部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151		1.6+	(12.1)	134
110	36	47	須恵器	横瓶		口頸部～体部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	11.0	14.4+		137
111	36	46	土師器	甕		口縁部～体部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	(15.8)	6.3+		141
112	36	46	土師器	甕		口頸部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	(17.0)	3.7+		142
113	36	46	土師器	甕		口縁部～体部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	(27.3)	6.2+		135
114	36	46	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	(37.7)	6.4+		143
115	36	46	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	(45.4)	9.1+		139
116	36	47	土師器	製塩土器		口縁部～体部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	10.2	8.1+		136
117	36	47	土師器	製塩土器		口縁部～体部	2002062	E5・F5	2	奈良	土器群 151	(13.6)	8.1+		140
118	36	47	土師器	製塩土器		口縁部～体部	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	(12.6)	8.0+		138
119	36	47	土師器	甕		口縁部～体部	2002062	F5	2	奈良	土器群 151	26.3	16.0+		162
120	36	46	須恵器	坏Ｈ蓋		天井部～口縁部	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	(15.2)	2.0+		124
121	36		須恵器	坏Ｂ		口縁部～底部	2002062	C4・C3	2	奈良	土器群 175	(13.7)	4.0	10.7	125
122	36	45	須恵器	坏Ｂ		口縁部～底部	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	10.2	4.3	7.5	109
123	36	46	須恵器	皿		口縁部～底部	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	(21.8)	2.6	(19.1)	110
124	36	47	土師器	坏		口縁部～底部	2002062	C4・C3	2	奈良	土器群 175	18.2	5.0+		128
125	36	47	土師器	坏		口縁部～底部	2002062	C4・C3	2	奈良	土器群 175	17.4	4.9+		164
126	36	46	土師器	甕		口頸部	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	(26.6)	5.0+		123
127	36	45	須恵器	杯Ｈ蓋		天井部～口縁部	2002062	E3	2	奈良	P041	15.3	3.1		106
128	36	46	須恵器	坏		体部～底部	2002062	B4	2	奈良	P170		4.1+		115
129	36	46	須恵器	壺		口頸部	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	(15.9)	4.8+		105
130	37	48	須恵器	坏Ｈ蓋		天井部	2002062	F3	2	奈良	包含層		2.0+		112
131	37	48	須恵器	坏Ｈ蓋		天井部～口縁部	2002062	F3・4	2	奈良	包含層	15.2	2.4+		114
132	37	48	須恵器	坏Ｂ		底部	2002062	D5	2	奈良	包含層		1.2+	(13.1)	118
133	37	48	須恵器	坏Ａ		体部～底部	2002062	G4	2	奈良	包含層		2.5	8.2	130
134	37	45	須恵器	坏Ａ		口縁部～底部	2002062	D4・F5・E5	2	奈良	包含層	12.0	3.6+	7.4	129
135	37	48	須恵器	坏Ａ		体部～底部	2002062	C3・4	2	奈良	包含層		3.6+	9.3	111
136	37	48	須恵器	皿		口縁部～底部	2002062	D4	2	奈良	包含層	(18.1)	2.2+	(14.5)	113
137	37	48	須恵器	皿		口縁部～底部	2002062	C3	2	奈良	包含層	(19.0)	2.2+		126
138	37	48	須恵器	壺		底部	2002062	G3	2	奈良	包含層		4.2+	(10.8)	154
139	37	48	土師器	鍋		口縁部～体部	2002062		2	奈良	包含層	(23.6)	5.0+		120
140	37	48	土師器	甕		口縁部～体部	2002062	B3	2	奈良	包含層	(25.1)	6.3+		146
141	37	48	土師器	製塩土器		口縁部～体部	2002062		2	奈良	包含層	12.3	5.8+		121
142	37	48	土師器	製塩土器		口縁部～体部	2002062	D5	2	奈良	包含層	(12.2)	6.6+		119
143	37	48	土師器	竈		焚口付近	2002062	F4	2	奈良	包含層	幅 (10.1)	高 12.5+		150
144	38	49	弥生土器	壺		口縁部～底部	2002062	I5	3	弥生Ⅴ	土器群 180	15.9	32.3	6.1	161
145	38	51	弥生土器	甕		口縁部～底部	2002062	I4	3	弥生Ⅴ	土器群 180	15.0	19.1+	4.1	117
146	38	50	弥生土器	高坏		口縁部～脚部	2002062	I5	3	弥生Ⅴ	土器群 180	17.5	10.0+		157
147	38	50	弥生土器	壺		口縁部～体部	2002062	I5	3	弥生Ⅴ	土器群 189	(12.2)	17.1+		159
148	38	50	弥生土器	甕		口縁部～底部	2002062	I5	3	弥生Ⅴ	土器群 189		18.3+	4.2	158
149	38	49	弥生土器	甕		口縁部～底部	2002062	I5	3	弥生Ⅴ	土器群 189		29.5+	3.3	163
150	38	50	弥生土器	壺		口縁部～底部	2002062	B3	3	弥生Ⅴ	土器群 181	16.8	28.2		122
151	38	50	弥生土器	蓋		天井部	2002062	B3	3	弥生Ⅰ	土器群 181		5.8+	5.4	144
152	38	50	弥生土器	高坏		底部	2002062	B3	3	弥生Ⅴ	土器群 181	(13.6)	4.0+		145
153	39	49	弥生土器	長頸壺		口頸部	2002062	G4	3	弥生Ⅴ	包含層	(14.8)	4.3+		148
154	39	49	弥生土器	長頸壺		口頸部	2002062	D4	3	弥生Ⅴ	包含層	(17.9)	7.6+		132
155	39	51	弥生土器	直口壺		口縁部～体部	2002062	I5	3	弥生Ⅴ	包含層	11.3	9.5+		151
156	39	51	弥生土器	壺		体部～底部	2002062	C4	3	弥生Ⅴ	包含層		4.2+	2.6	127
157	39	51	弥生土器	甕		口縁部～底部	2002062	H6	3	弥生Ⅴ	包含層	(14.5)	(25.0)	4.6	155
158	39	49	弥生土器	甕		口縁部～体部	2002062	D4	3	弥生Ⅴ	包含層	(16.8)	5.6+		147
159	39	51	弥生土器	甕		体部～底部	2002062	I5	3	弥生Ⅴ	包含層		2.5+	4.2	152
160	39	51	弥生土器	甕		底部	2002062	D3	3	弥生Ⅴ	包含層		2.5	5.4	131
161	39	51	弥生土器	甕		底部	2002062	F5	3	弥生Ⅴ	包含層		2.9	5.0	116
162	39	51	弥生土器	甕		口縁部～底部	2002062	G5	3	弥生Ⅴ	包含層	14.2	25.0	4.0	156
163	39	49	弥生土器	甕		口縁部～体部	2002062	G4	3	弥生Ⅴ	包含層	(14.0)	11.1+		149
164	39	51	弥生土器	甕		底部	2002062	H6	3	弥生Ⅴ	包含層		4.8+	3.3	153

第４表　南通り遺跡土錘一覧

報告№	図版	写真図版	種別	器種	調査番号	地区	面	時期	遺構	法量					実測№
										長さ (㎜)	最大直径(㎜)	孔径 (㎜)	厚み (㎜)	重量 (g)	
165	40	52	土製品	有溝穿孔土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	108.0	幅　60.0		43.0	212.4	土 1
166	40	52	土製品	有溝穿孔土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	95.5+	幅　55.0		35.0	145.5+	土 2
167	40	52	土製品	有溝穿孔土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	105.0	幅　59.5		37.0	159.5	土 3
168	40	52	土製品	有溝穿孔土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	101.0	幅　60.0		42.0	169.9+	土 4
169	40	52	土製品	有溝穿孔土錘	2002062	J5・6	1	中世	SD001	90.0	幅　57.0		50.5	247.3	土 5
170	40	52	土製品	管状土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	24.0	10.0	3.5	10.0	1.4+	土 20
171	40	52	土製品	管状土錘	2002062	F4	1	中世	SD001	22.0+	10.0	4.0	10.0	1.8+	土 13
172	40	52	土製品	管状土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	25.5+	9.5	3.0	8.5	1.3+	土 21
173	40	52	土製品	管状土錘	2002062	F5	1	中世	SD001	27.5+	10.0	3.5	10.0	1.8+	土 14
174	40	52	土製品	管状土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	32.0	9.0	3.5	8.5	1.9	土 19
175	40	52	土製品	管状土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	32.5	10.0	3.5	9.5	2.6+	土 18
176	40	52	土製品	管状土錘	2002062	I5	1	中世	SD001	36.0	9.5	3.0	9.5	2.6	土 22
177	40	52	土製品	管状土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	34.5	10.0	4.0	9.0	2.6+	土 16
178	40	52	土製品	管状土錘	2002062	G5	1	中世	SD001	37.0	10.0	4.0	9.5	3.0	土 17
179	40	52	土製品	管状土錘	2002062	G4	1	中世	SD001	38.5+	13.0	3.0	13.0	5.1+	土 15
180	41	52	土製品	管状土錘	2002062	D3	1	中世	SD010	18.0	15.0	8.5	9.5+	1.2+	土 26
181	41	52	土製品	管状土錘	2002062	D3	1	中世	SD010	23.5	6.0	2.5	6.0	0.9	土 25
182	41	52	土製品	管状土錘	2002062	F3	1	中世	SD013	29.0	8.5	3.0	7.0+	1.5+	土 28
183	41	52	土製品	管状土錘	2002062	F3	1	中世	SD013	31.5	9.0	2.5	8.5	2.0	土 27
184	41	52	土製品	管状土錘	2002062	B3	1	中世	SK007	30.5	8.5	3.0	8.5	1.9	土 23
185	41	52	土製品	管状土錘	2002062	B2	1	中世	SK008	33.5	8.5	3.5	8.5	1.9	土 24
186	41	52	土製品	管状土錘	2002062	G4	1	中世	SK032	31.0+	9.5	3.5	9.0	2.3+	土 30
187	41	52	土製品	管状土錘	2002062	C3	1	中世	SK030	22.5+	9.0	3.0	8.0	1.3+	土 29
188	41	52	土製品	管状土錘	2002062	G4	1	中世	SK054	24.5+	9.0	2.5	9.0	1.7+	土 36
189	41	53	土製品	管状土錘	2002062	D4	1	中世	SE040	24.5+	6.5	2.0	6.5	0.9+	土 32
190	41	53	土製品	管状土錘	2002062	D4	1	中世	SE040	32.5	6.5	2.5	6.5	1.3+	土 33
191	41	53	土製品	管状土錘	2002062	F5	1	中世	P052	21.0+	9.5	3.0	9.5	1.3+	土 35
192	41	53	土製品	管状土錘	2002062	G5	1	中世	P160	22.0	7.5	3.5	7.0	0.8	土 42
193	41	53	土製品	管状土錘	2002062	F3	1	中世	P105	22.0	8.5	2.5	8.0	1.4	土 40
194	41	53	土製品	管状土錘	2002062	F6	1	中世	P046	23.0	8.5	2.5	8.0	1.3	土 34
195	41	53	土製品	管状土錘	2002062	E6	1	中世	P076	23.5+	9.5	4.0	8.5	1.6+	土 38
196	41	53	土製品	管状土錘	2002062	E5	1	中世	P077	25.0	8.5	3.5	8.5+	1.7+	土 39
197	41	53	土製品	管状土錘	2002062	C3	1	中世	P111	29.5	8.0	3.0	8.0	1.5+	土 41
198	41	53	土製品	管状土錘	2002062	G4	1	中世	P036	34.5	9.5	2.5	9.5	2.6+	土 31
199	41	53	土製品	管状土錘	2002062	B3	1	中世	P064	34.0	10.5	4.0	10.5	3.1	土 37
200	41	53	土製品	棒状土錘	2002062	E4	1	中世	P082	35.0+	14.5	4.5	11.5	5.7+	土 43
201	41	53	土製品	管状土錘	2002062		1	中世	包含層	18.5+	8.5	3.0	8.0	1.0+	土 11
202	41	53	土製品	管状土錘	2002062		1	中世	包含層	13.5+	12.0	3.0	6.5+	1.1+	土 7
203	41	53	土製品	管状土錘	2002062		1	中世	包含層	30.5+	9.0	3.0	8.0	2.0	土 8
204	41	53	土製品	管状土錘	2002062		1	中世	包含層	31.0+	10.0	3.5	9.0	2.2+	土 12
205	41	53	土製品	管状土錘	2002062		1	中世	包含層	34.5+	12.0	3.0	11.5	3.3+	土 10
206	41	53	土製品	管状土錘	2002062		1	中世	包含層	48.5	14.0	4.5	12.5	7.1	土 9
207	41	53	土製品	棒状土錘	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	51.0+	13.5	3.5	11.0	9.6+	土 50
208	41	53	土製品	棒状土錘	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	30.0+	13.5	4.0	11.0	5.2+	土 52
209	41	53	土製品	棒状土錘	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	35.0+	13.0	4.5	11.5	6.4+	土 48
210	41	53	土製品	棒状土錘	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	35.0+	14.0		10.5	5.5+	土 51
211	41	53	土製品	管状土錘	2002062	C3	2	奈良	土器群 175	40.0+	13.5	4.5	13.0	6.2+	土 47
212	41	53	土製品	管状土錘	2002062	E5	2	奈良	土器群 151	29.0	9.0	2.5	9.0	1.9+	土 49
213	41	53	土製品	管状土錘	2002062	H4	2	奈良	P183	32.0	8.0	3.0	7.5	1.5	土 45
214	41	53	土製品	管状土錘	2002062	F4	2	奈良	P184	41.5	11.0	3.0	10.0	3.8+	土 44
215	41	53	土製品	棒状土錘	2002062	F5	2	奈良	包含層	41.5+	13.0	4.0	12.0	8.2+	土 46
216	41	53	土製品	有溝土錘	2002062	E5	2	奈良	包含層	68.0+	幅　41.0		41.0	37.7+	土 6

第５表　南通り遺跡石器一覧

報告№	図版	写真図版	種別	器種	石材	調査番号	地区	面	時期	遺構	法量				実測№
											長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)	
S1	42	54	磨製石器	砥石	泥岩	2002062	G5	1	中世	SD001	93.5+	71.0	16.0+	169.3	S1
S2	42	55	磨製石器	砥石		2002062	I5・I6	1	中世	SD001	74.0+	39.0+	22.0+	73.7	S5
S3	42	57	磨製石器	砥石	砂岩	2002062	I5	1	中世	SD001	103.0	117.5	52.0	730.1	S4
S4	42	57	磨製石器	砥石	凝灰岩	2002062	H5	1	中世	SD001	147.5	102.5	80.0	1580.0	S3
S5	42	56	磨製石器	石臼		2002062	I5	1	中世	SD001	127.0+	120.5+	114.5	1880.0	S7
S6	42	54	磨製石器	石錘		2002062	G5	1		SD001	95.0	73.0	20.0	192.0	S2
S7	43	55	磨製石器	石臼		2002062	I4	1	中世	SK058	266.0	171.0+	102.0	5010.0	S8
S8	43	56	磨製石器	石臼		2002062	B3	1	中世	SB102 P140	(154.0)	(82.5)	48.0	665.5	S9
S9	43	58	磨製石器	砥石		2002062	E5	2	奈良	土器群 151	113.5+	86.5+	19.5+	247.3	S6

第６表　南通り遺跡鉄器一覧

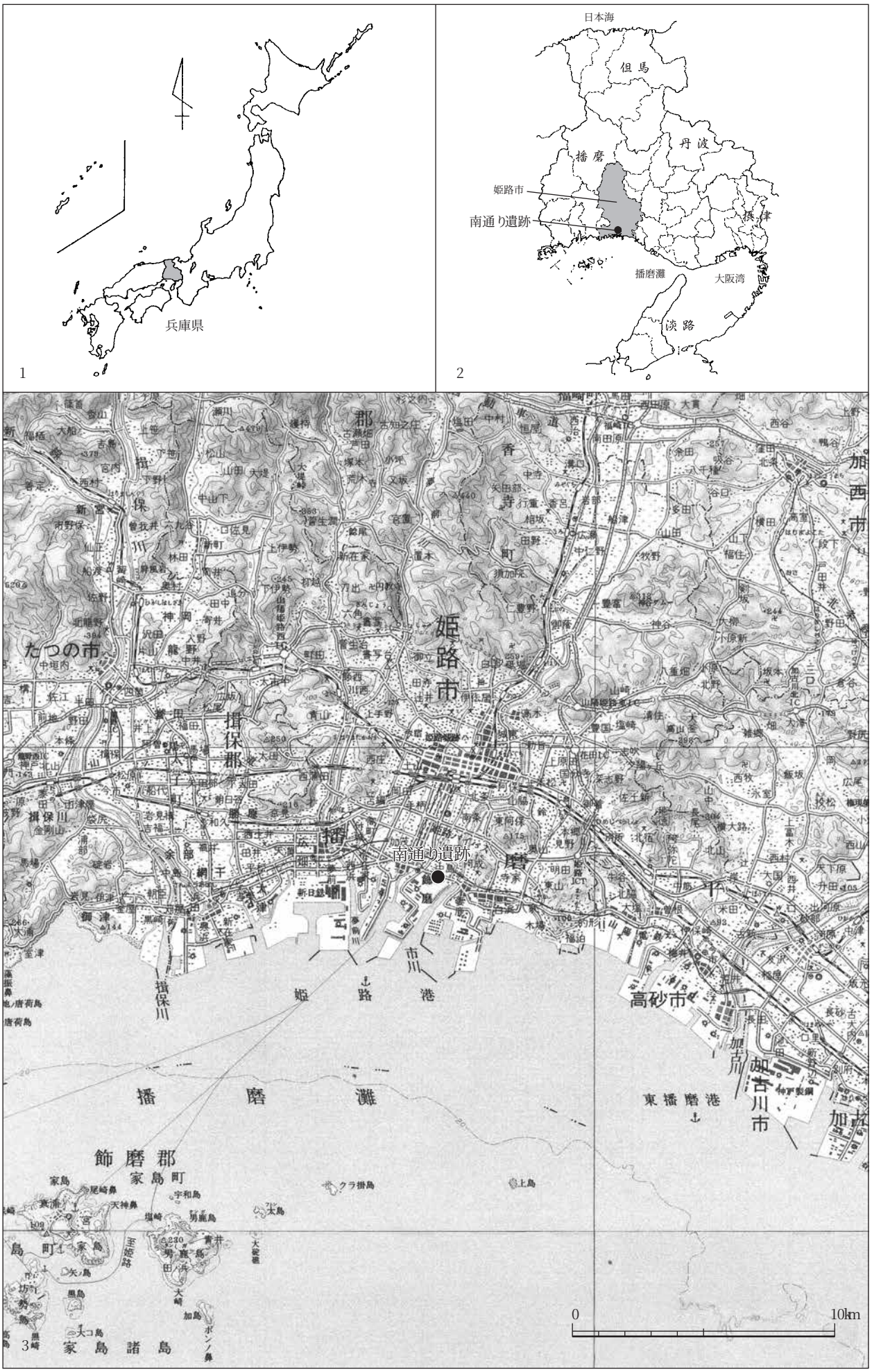
報告№	図版	写真図版	種別	器種	調査番号	出土地区	面	時期	遺構	法量(mm)			実測№
										長さ	幅	厚み	
M1	43	58	鉄器	釘	2002062	F4	1	中世	SD001	(4.4)	1.6	0.4	鉄３
M2	43		鉄器	不明	2002062	G5	1	中世	SD001	(2.2)	1.3	0.4	鉄５
M3	43	58	鉄器	釘	2002062	F3	1	中世	SD013	(2.7)	0.6	0.5	鉄２
M4	43	58	鉄器	釘	2002062	G6	1	中世	SK045	(4.9)	1.6	0.4	鉄６
M5	43	58	鉄器	釘	2002062	F4	1	中世	P028	(3.1)	0.5	0.4	鉄４
M6	43	58	鉄器	釘	2002062	E3	1	中世	P022	(5.7)	1.1	0.4	鉄１
M7	43	58	鉄器	鋤先	2002062	E4	1	中世	SB103 P123	(8.3)	(8.5)	高 1.2	鉄７

第７表　南通り遺跡木器一覧

報告№	図版	写真図版	種別	器種	樹種	木取り	調査番号	地区	面	時期	遺構	法量(cm)		実測№
												直径	器高	
W1	44	59・60	木器	曲物	ヒノキ	柾目	2002062	D4	1	中世	SE040	36.9	10.8	W1
W2	44	60	木器	曲物	スギ	板目	2002062	D4	1	中世	SE040	(36.0)	11.6	W2
W3	44	60	木器	曲物	ヒノキ	柾目	2002062	D4	1	中世	SE040	36.2	7.6	W3

図版

図版1　遺跡



1.兵庫県の位置　2.姫路市の位置　3.南通り遺跡の位置（1/200,000）

図版2　遺跡

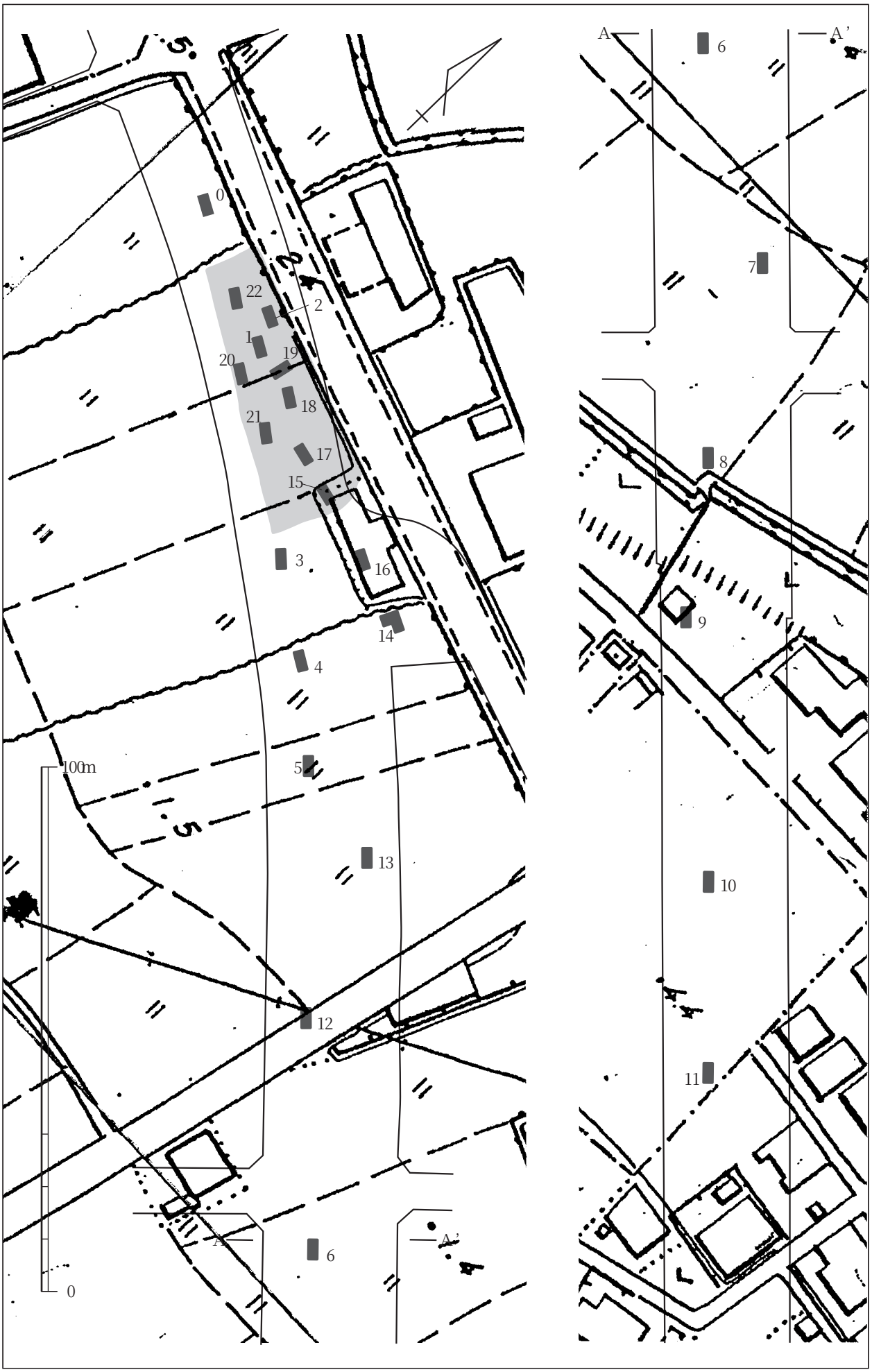
図版3	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時　代	種　類
001	020451	町田遺跡	姫路市岡田	古墳	散布地
002	020446	八反長遺跡	姫路市岡田	弥生	集落
003	020445	堂田遺跡	姫路市岡田	縄文	散布地
004	020449	村前遺跡	姫路市井ノ口	弥生	散布地
005	020448	法輪寺山遺跡	姫路市井ノ口	弥生	散布地
006	020578	英賀保駅周辺遺跡第4地点	姫路市苫編、町坪、飾磨区高町	平安・中世	集落
007	020576	英賀保駅周辺遺跡第3地点	姫路市町坪	平安・中世	集落
008	020447	丁田遺跡	姫路市町坪～中地	弥生・古墳	集落
009	020419	中ノ町遺跡	姫路市玉手	弥生	散布地
010	020420	仮称　大井川区整地内遺跡　第1地点	姫路市玉手	弥生～中世	集落
011	020421	仮称　大井川区整地内遺跡　第2地点	姫路市玉手	中世	集落
012	020422	仮称　大井川区整地内遺跡　第3地点	姫路市玉手	弥生～中世	集落
013	020423	仮称　大井川区整地内遺跡　第4地点	姫路市玉手	中世	集落
014	020424	仮称　大井川区整地内遺跡　第5地点	姫路市玉手	中世	集落
015	020425	仮称　大井川区整地内遺跡　第6地点	姫路市玉手	弥生	集落
016	020453	千代田遺跡	姫路市千代田町	縄文・弥生	散布地
017	020444	仮称　西延末散布地	姫路市西延末	弥生	集落
018	020873～020883・020442	手柄山北丘群集墳	姫路市西延末	古墳	古墳
019	020872	手柄山北丘遺跡	姫路市西延末	旧石器～古墳	散布地・集落
020	020443	手柄山北丘頂上古墳	姫路市西延末	古墳	古墳
021	020884	手柄山南丘遺跡	姫路市西延末	弥生	集落
022	020885～020888	手柄山南丘群集墳	姫路市西延末	古墳	古墳
023	020438	生矢神社裏遺跡	姫路市手柄	弥生	散布地
024	020414	長越遺跡	姫路市飯田	弥生・古墳	集落
025		飯田湯田遺跡	姫路市飯田	弥生・古墳	集落
026	020415	郭東遺跡	姫路市中地	弥生	集落
027	020416	西久保遺跡	姫路市中地南町	弥生	散布地
028	020413	東久保遺跡	姫路市中地南町	弥生	散布地
029	020417	中地天神遺跡	姫路市中地南町	弥生～中世	集落
030	020418	権現遺跡	姫路市中地南町	縄文・弥生	集落
031	020412	大町遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	弥生	散布地
032	020411	大塚遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	弥生	散布地
033	020410	真福寺遺跡	姫路市飾磨区構5丁目	弥生・古墳	散布地
034	020409	構遺跡	姫路市飾磨区構3丁目	縄文・弥生	散布地
035	020408	南雲遺跡	姫路市飾磨区構3丁目	弥生・古墳	散布地
036	020426	石田遺跡	姫路市飾磨区構4丁目	縄文・弥生	集落
037	020406	タテノ遺跡	姫路市飾磨区構1丁目	弥生・古墳	散布地
038	020407	坂川遺跡	姫路市飾磨区構1丁目	古墳	散布地
039	020405	平塚遺跡	姫路市飾磨区今在家7丁目	古墳	散布地
040	020403	石ヤ田遺跡	姫路市飾磨区加茂北	古墳～中世	集落
041	020402	加茂遺跡	姫路市飾磨区加茂	中世	城館
042	020404	仮称　加茂区整遺跡	姫路市飾磨区構	中世	散布地
043	020169	姫路城城下町跡	姫路市西二階町他	近世	集落
044	020459	豆腐町遺跡	姫路市豆腐町	弥生～平安	集落
045	020456	南畝町遺跡	姫路市南畝町	弥生	集落
046	020457	豊沢遺跡	姫路市豊沢町	弥生	散布地
047	020455	君田遺跡	姫路市東延末	弥生	集落
048	020454	村淵遺跡	姫路市延末1丁目	弥生	散布地
049	020440	黒表遺跡	姫路市東延末	弥生・古墳	散布地
050	020441	橋詰遺跡	姫路市延末	縄文～古墳	集落
051	020439	小山遺跡	姫路市延末	弥生・古墳	集落
052	020437	古屋敷遺跡	姫路市手柄1丁目	弥生・古墳	散布地
053	020436	浜田遺跡	姫路市手柄	弥生	散布地
054	020435	竹の前遺跡	姫路市手柄	弥生・古墳	散布地
055	020434	三宅遺跡	姫路市飾磨区三宅1丁目他	奈良	
056	020432	仮称　船場川東区整遺跡　第6地点	姫路市飯田	縄文～中世	集落
057	020427	カスカエ遺跡	姫路市飯田	弥生～平安	
058	020428	仮称　船場川東区整遺跡　第2地点	姫路市飯田	縄文～古墳	集落
059	020431	仮称　船場川東区整遺跡　第3地点	姫路市飯田	弥生・古墳	集落
060	020430	仮称　船場川東区整遺跡　第4地点	姫路市飯田	平安	集落
061	020429	大鳥遺跡	姫路市飯田	縄文	
062	020433	石ヶ坪遺跡	姫路市亀山	縄文・弥生	散布地
063	020926	光明寺跡	姫路市飾磨区御幸	中世	寺院
064	020464	仮称　姫路駅周辺第4地点	姫路市南駅前町	弥生～近世	集落
065	020460	仮称　姫路駅周辺第1地点	姫路市北条	弥生～奈良	集落
066	020461	仮称　姫路駅周辺第2地点	姫路市神屋町3丁目	弥生～平安	集落
067	020462	仮称　姫路駅周辺第3地点	姫路市市之郷	弥生～平安	集落
068	020458	北条遺跡	姫路市北条	弥生・古墳	集落
069	020571	阿保遺跡第1地点	姫路市阿保	平安・中世	集落
070	020519	ヒジ倉遺跡	姫路市飾磨区阿成	古墳～中世	散布地
071	020520	西通り遺跡	姫路市飾磨区中島	古墳～中世	散布地
072	020577	南通り遺跡	姫路市飾磨区中島	弥生・奈良・中世	集落
073	020515	兼田丸山古墳	姫路市兼田	古墳	古墳
074	020516	兼田6号墳	姫路市兼田	古墳	古墳
075	020889	兼田遺跡	姫路市兼田	旧石器・弥生・古墳	集落
076	020890～020894	兼田古墳群	姫路市兼田	古墳	古墳
077	020517	仮称　北原区整第1地点	姫路市北原	弥生・古墳	集落
078	020518	国府山城跡・甲山遺跡	姫路市飾磨区妻鹿	弥生・中世	集落・城館
079	020521	甲山経塚跡	姫路市飾磨区妻鹿	中世	その他
080	020531	御旅山12号墳	姫路市飾磨区妻鹿	古墳	古墳
081	020898	御旅山14号墳	姫路市飾磨区妻鹿	古墳	古墳
082	020530	御旅山9号墳	姫路市飾磨区妻鹿	古墳	古墳
083	020522～020529・020532	御旅山古墳群	姫路市飾磨区妻鹿	古墳	古墳
084	020897	飾磨高等学校周辺遺跡	姫路市飾磨区妻鹿	弥生	散布地
085	020921	御旅山八幡神社御旅所前石棺所在地	姫路市白浜町	古墳	その他
086	020922	荒神社境内石棺所在地	姫路市白浜町	古墳	その他

南通り遺跡周辺の主要遺跡一覧

図版3　遺跡

南通り遺跡周辺の主要遺跡　(1/25,000)

明治40年の南通り遺跡周辺 (1/20,000)



確認調査位置図 (1/1,000)

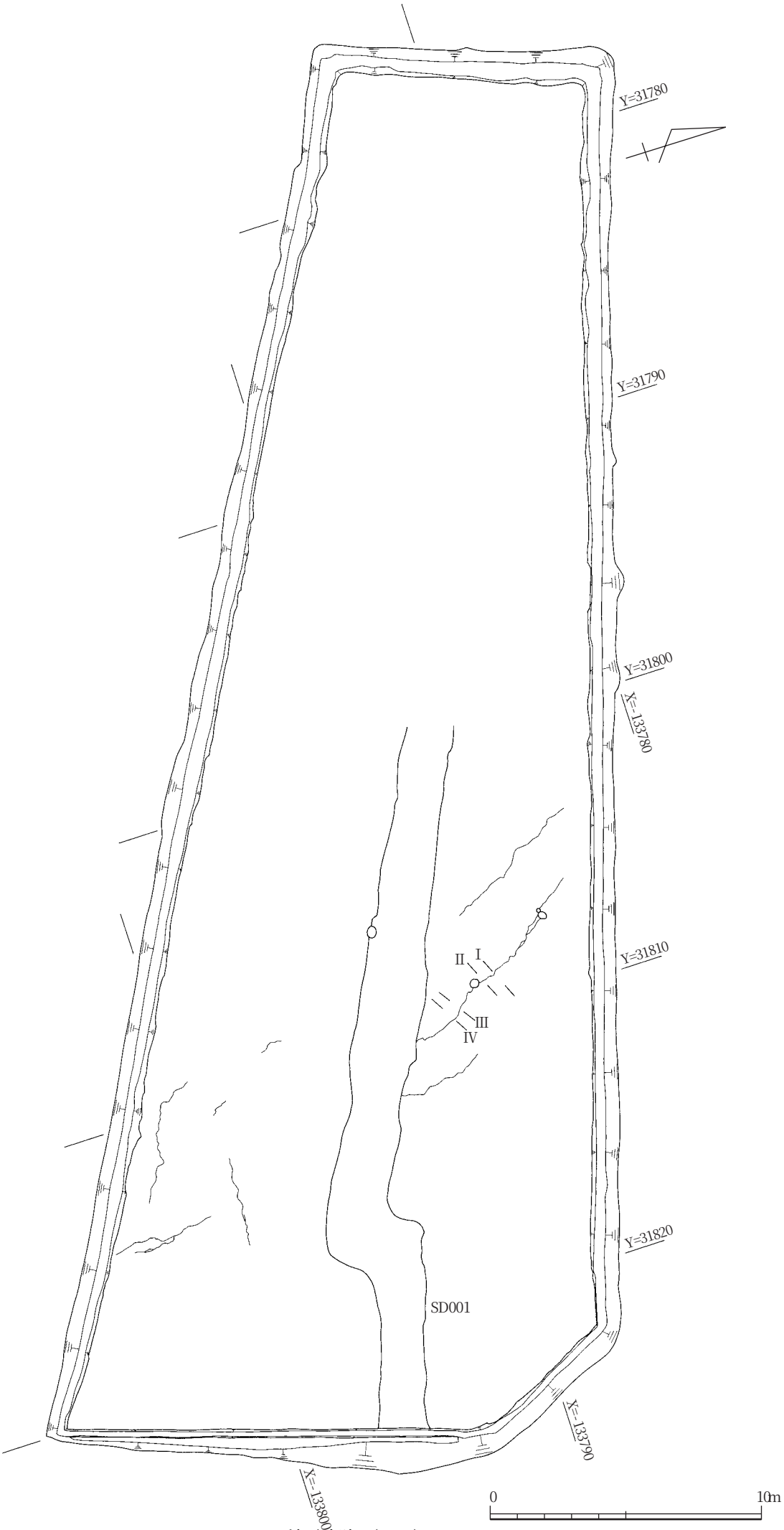
本発掘調査位置図 (1/500)

3
2
1
4
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
8
7
6
5
Y=31780
Y=31790
Y=31800
Y=31810
Y=31820
X=-133780
X=-133790
X=-133800
SB101
SB102
SB103
SB104
SB105
SD001
SK053
SK054
0
10m

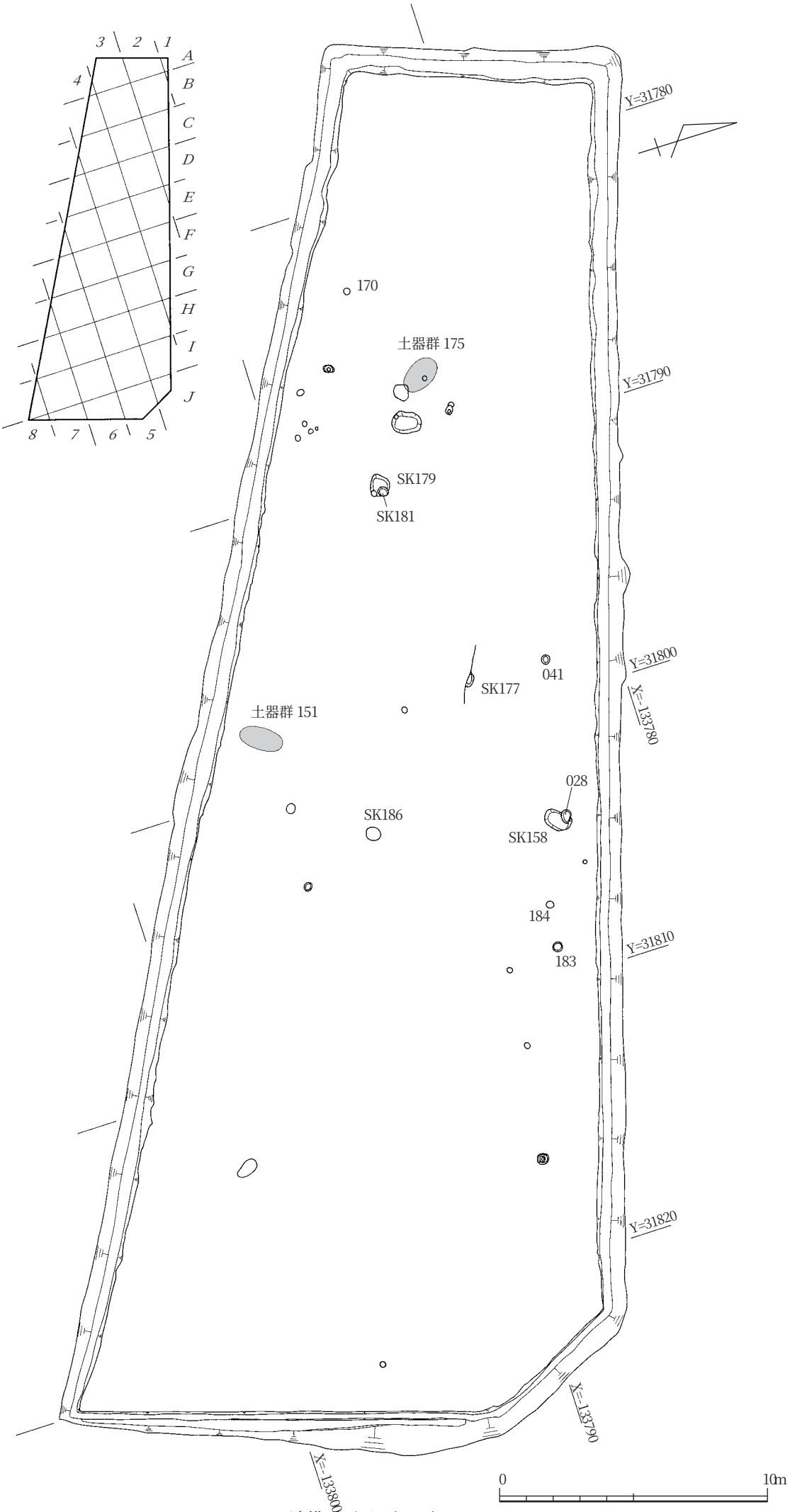
遺構平面図 (1/200)

西半遺構平面図 (1/100)

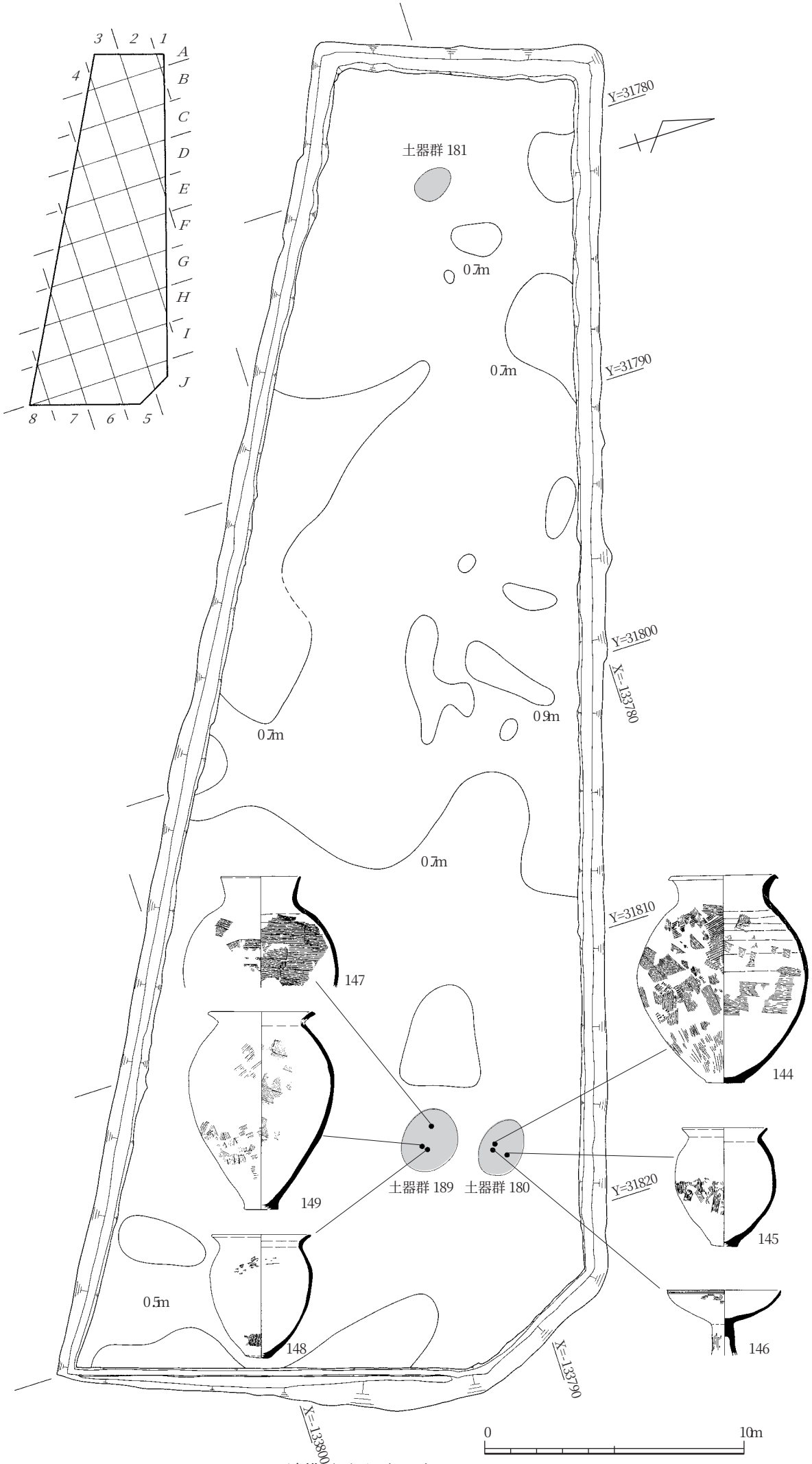
東半遺構平面図 (1/100)


Y=31780
Y=31790
Y=31800
X=-133780
Y=31810
Y=31820
X=-133790
X=-133800
II
I
III
IV
SD001
0
10m

地震痕跡 (1/200)

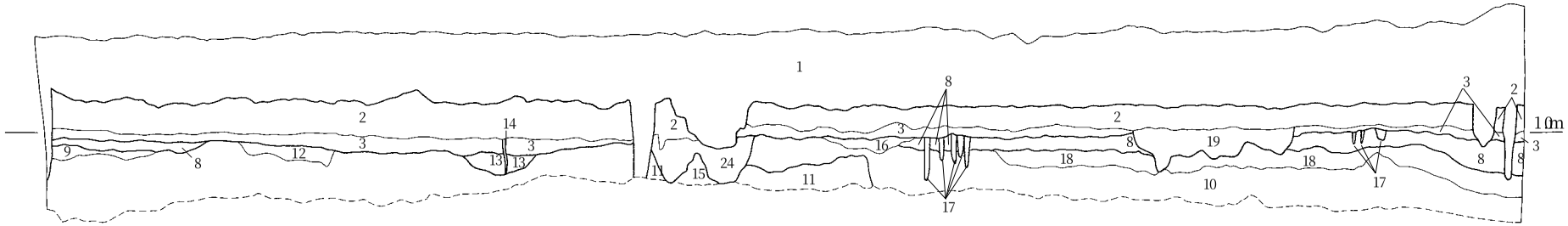

3
2
1
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
4
8
7
6
5
Y=31780
Y=31790
Y=31800
Y=31810
Y=31820
X=-133780
X=-133790
X=-133800
170
土器群 175
SK179
SK181
SK177
041
土器群 151
028
SK186
SK158
184
183
0
10m

遺構平面図 (1/200)

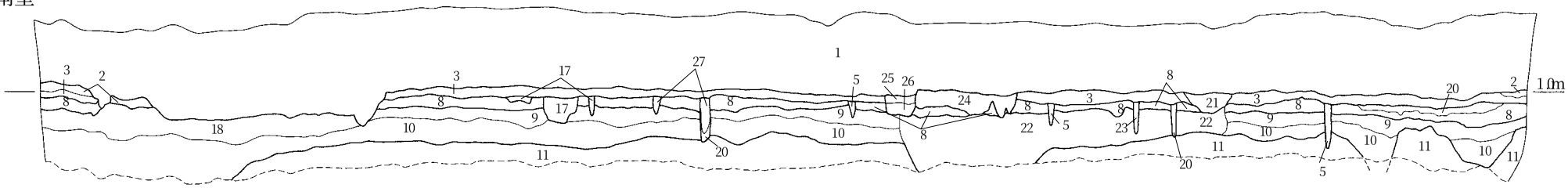

3
2
1
4
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
8
7
6
5
土器群 181
0.7m
0.7m
0.7m
0.9m
0.7m
0.7m
0.5m
Y=31780
Y=31790
Y=31800
Y=31810
Y=31820
X=-133780
X=-133790
X=-133800
147
149
148
144
145
146
土器群 189
土器群 180
0
10m

遺構平面図 (1/200)

北壁

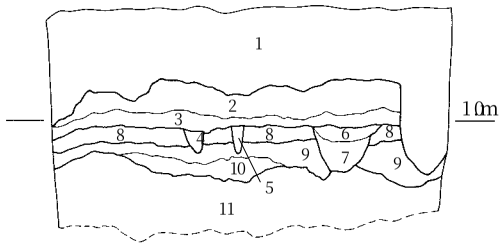


南壁

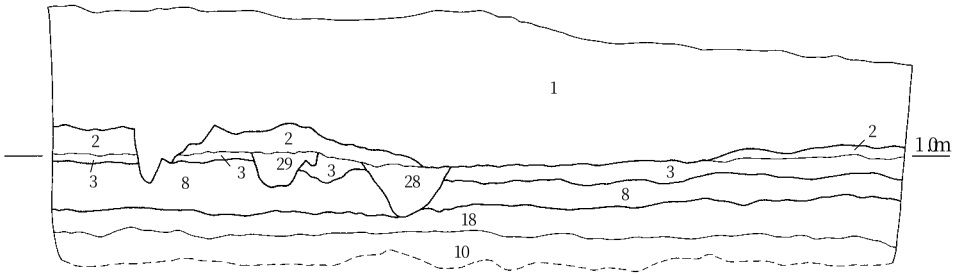


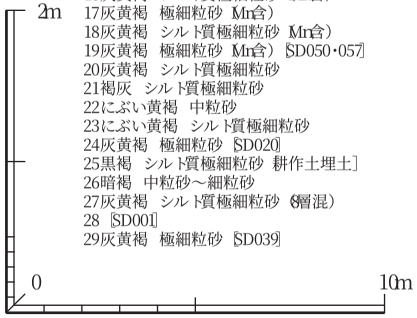
1 <盛土>
2 <旧水田> オリーブ黒　シルト質極細粒砂
3 <旧床土> 灰黄褐　シルト質極細粒砂
4灰黄褐　極細粒砂　[SD004]
5灰黄褐　極細粒砂
6灰黄褐　極細粒砂　[SD001]
7灰黄褐　極細粒砂（Mn含）[SD001]
8褐　シルト質極細粒砂
9にぶい黄褐　細粒砂（Mn含）
10灰黄褐　細粒砂
11小礫～中礫
12にぶい黄褐　細粒砂
13灰黄褐　細粒砂　[SD023]
14褐灰　粗粒砂
15灰黄褐　中粒砂（Mn含）
16灰黄褐　シルト質極細粒砂（Mn含）
17灰黄褐　極細粒砂（Mn含）
18灰黄褐　シルト質極細粒砂（Mn含）
19灰黄褐　極細粒砂（Mn含）[SD050・057]
20灰黄褐　シルト質極細粒砂
21褐灰　シルト質極細粒砂
22にぶい黄褐　中粒砂
23にぶい黄褐　シルト質極細粒砂
24灰黄褐　極細粒砂　[SD020]
25黒褐　シルト質極細粒砂（耕作土埋土）
26暗褐　中粒砂～細粒砂
27灰黄褐　シルト質極細粒砂（3層混）
28 [SD001]
29灰黄褐　極細粒砂　[SD039]

西壁



東壁



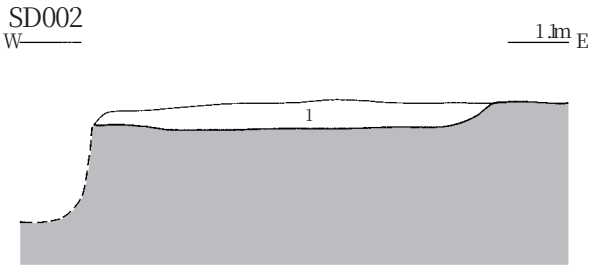


壁面土層断面図　(1/50・1/200)

図版13
遺構

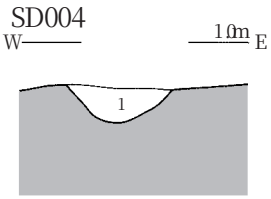
図版14 遺構 第1面

SD002



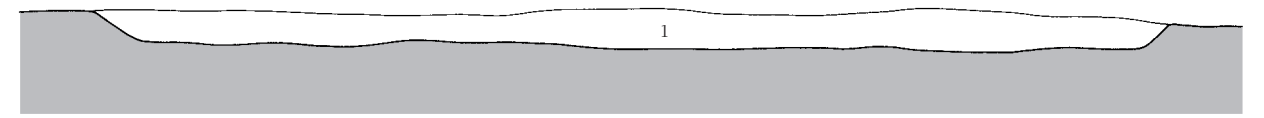
1黄灰 極細粒砂（Mn含）

SD004



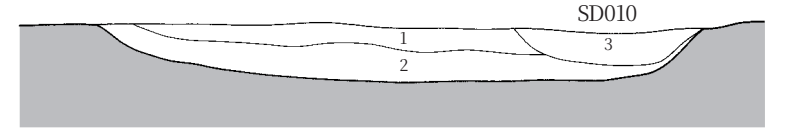
1灰黄褐（Mn含）

SD006



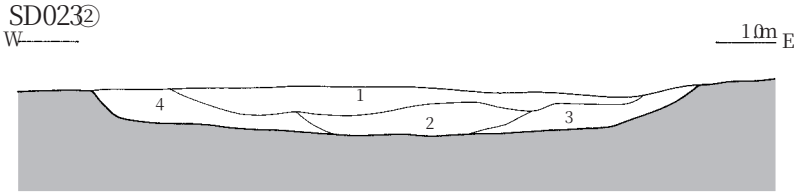
1にぶい黄褐 中粒砂（Mn含）

SD023①



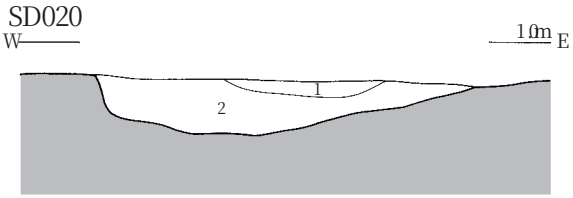
1暗灰黄 細粒砂
2黄灰 極細粒砂～細粒砂（わずかにMn含）
3灰黄褐 極細粒砂（Mn含）

SD023②



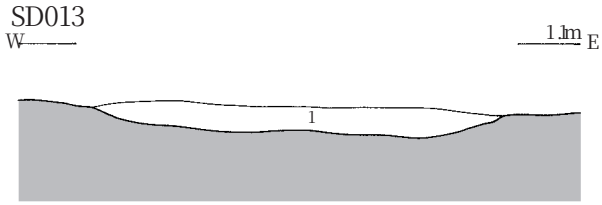
1暗灰黄 細粒砂
2黄褐 細粒砂
3暗灰黄 細粒砂（わずかにMn含）
4オリーブ褐 細粒砂

SD020



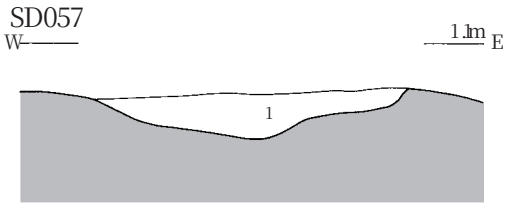
1灰黄褐 極細粒砂（Mn含）
2にぶい黄褐 極細粒砂

SD013



1暗灰黄 極細粒砂（直径2～5cmのにぶい黄褐ブロック多く含）

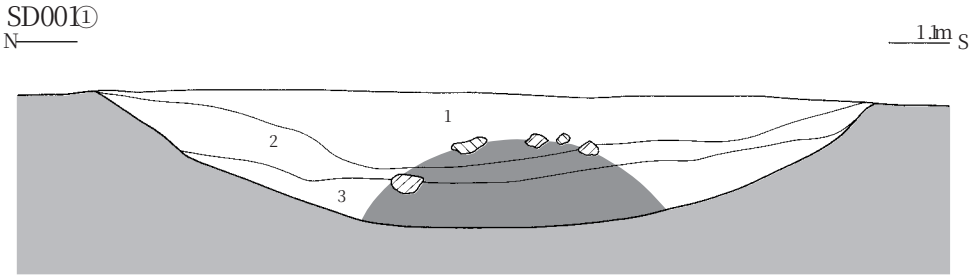
SD057



1暗灰黄 極細粒砂

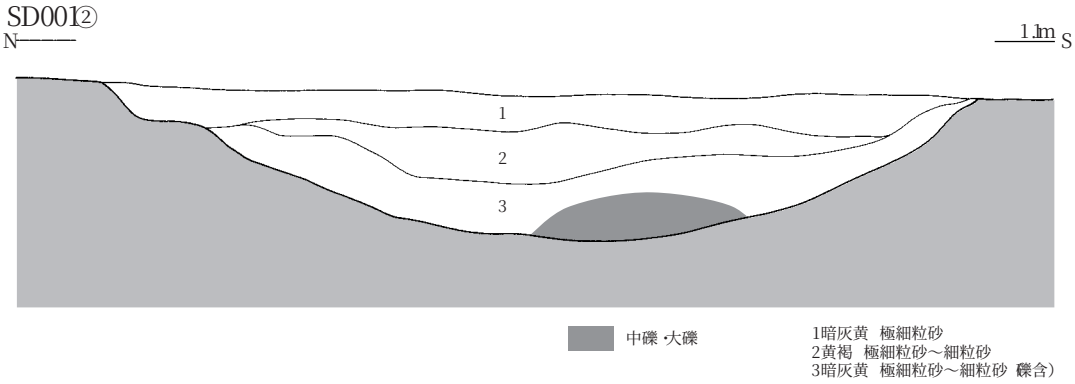
溝SD002（1/20） 溝SD004（1/20） 溝SD006（1/20） 溝SD023北（1/20）
溝SD023南（1/20） 溝SD020（1/20） 溝SD013（1/20） 溝SD057（1/20）

SD001①



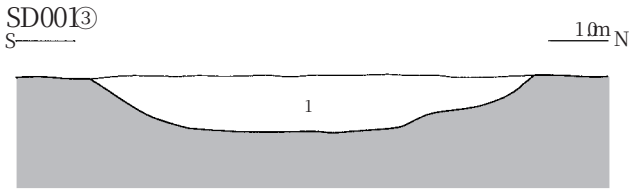
1暗灰黄 極細粒砂
2黄褐 極細粒砂～細粒砂
3暗灰黄 極細粒砂～細粒砂 (礫含)

SD001②



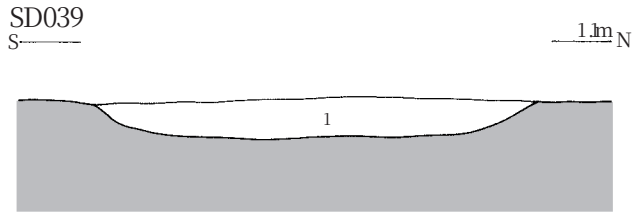
1暗灰黄 極細粒砂
2黄褐 極細粒砂～細粒砂
3暗灰黄 極細粒砂～細粒砂 (礫含)

SD001③



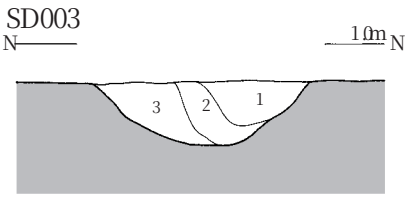
1黄灰 極細粒砂 (Mn含)

SD039



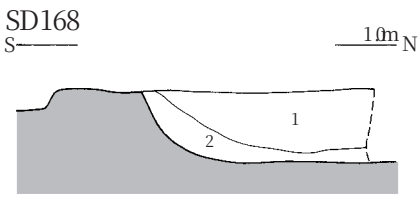
1灰黄褐 極細粒砂

SD003



1暗灰黄 極細粒砂
2褐 (Mn,Fe含)
3灰黄褐 (Mn含)

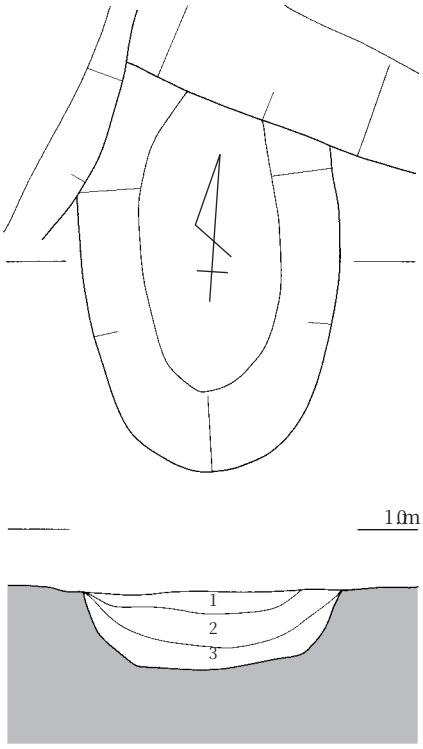
SD168



1灰黄褐 シルト質極細粒砂
2暗褐 中粒砂

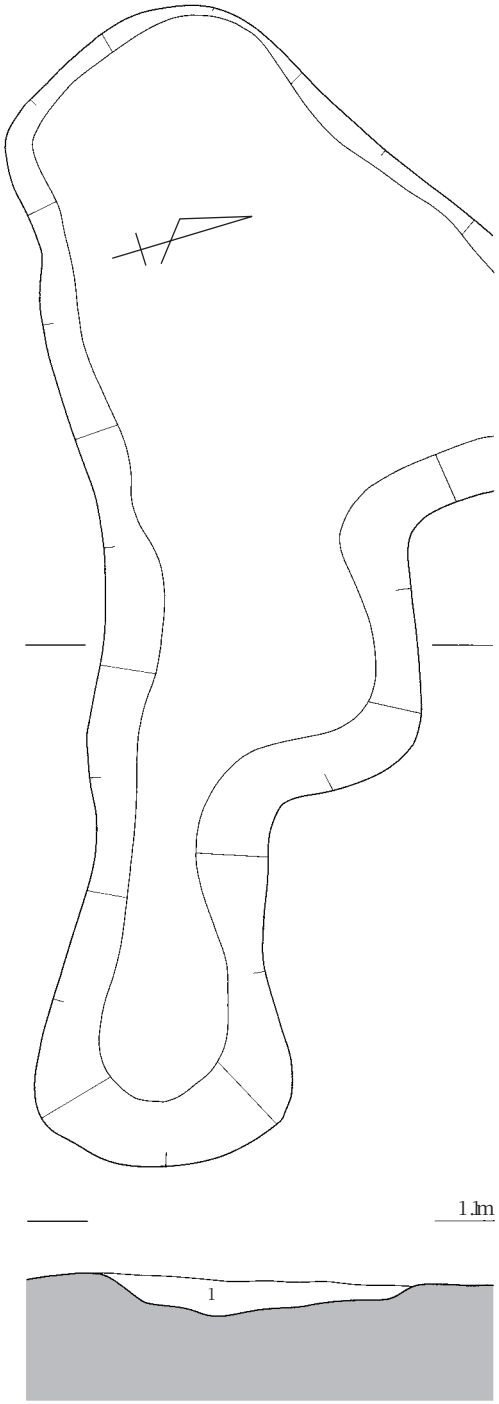
溝SD001① (1/20) 溝SD001② (1/20) 溝SD001③ (1/20)
溝SD039 (1/20) 溝SD003 (1/20) 溝SD168 (1/20)

SK148



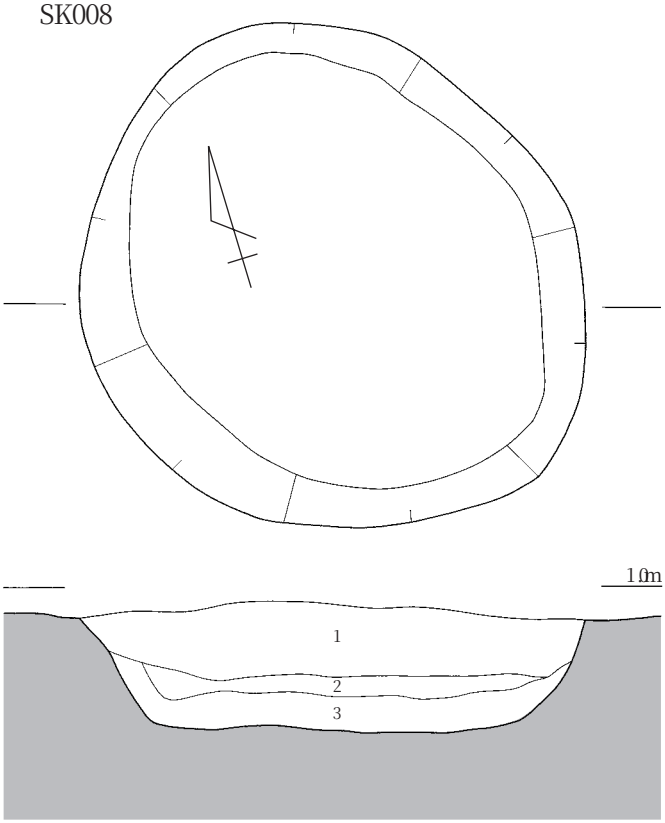
1暗灰黄 細粒砂 黄褐粒を若干含）
2暗灰黄 極細粒砂～細粒砂 Mn及び黄褐色ブロック多く含）
3黄灰 極細粒砂 わずかに黄褐粒含）

SK005



1暗灰黄 極細粒砂 わずかにMn含）

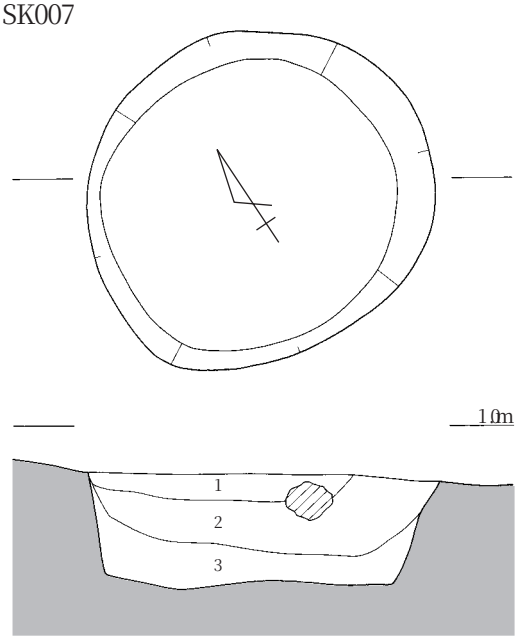
SK008



1灰黄褐 シルト質極細粒砂 Mn含）
2褐灰 中粒砂
3灰黄褐 極細粒砂

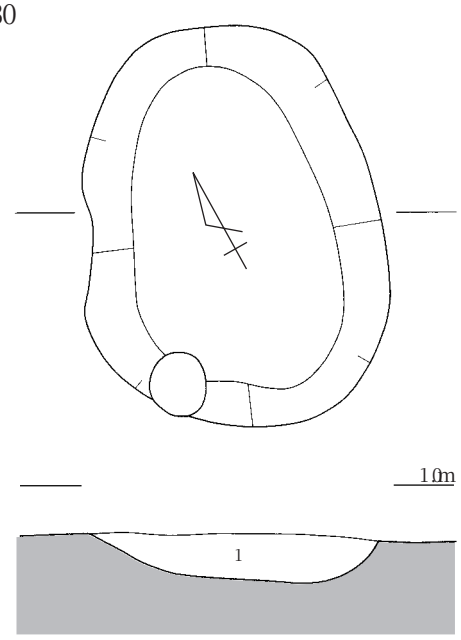
土坑 SK148 (1/20) 土坑 SK008 (1/20) 土坑 SK005 (1/20)

SK007



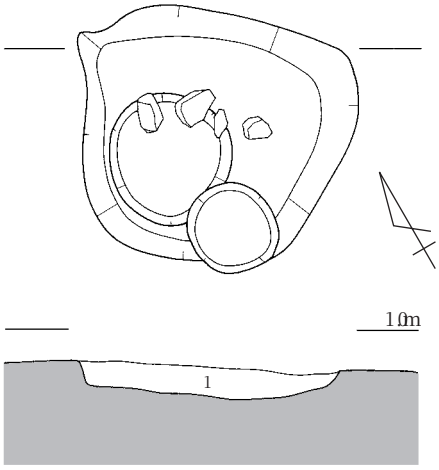
1黄褐 極細粒砂（Fe・Mn含）
2暗褐 極細粒砂（Fe・Mn含）
3黄灰 極細粒砂

SK030



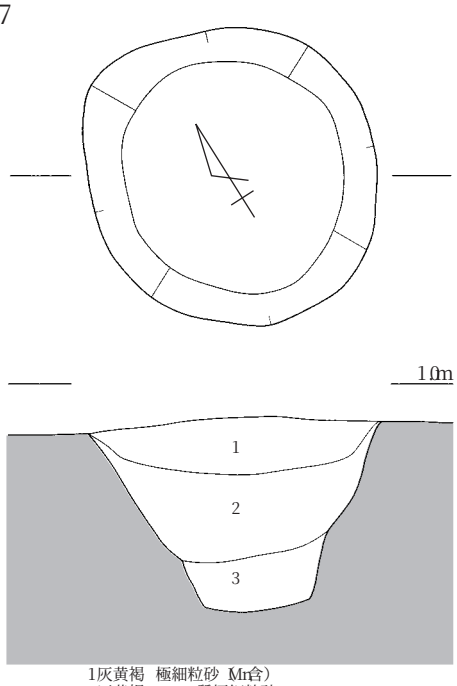
1黄褐色 極細粒砂（Fe含）

SK029



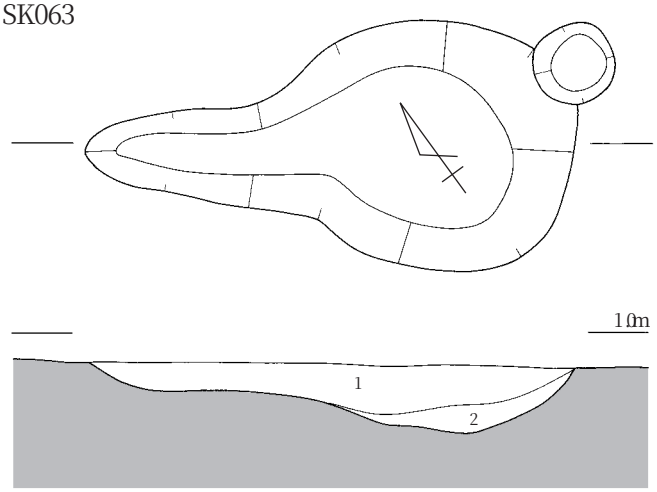
1暗灰黄 極細粒砂（にぶい黄褐粒を若干含）

SK027



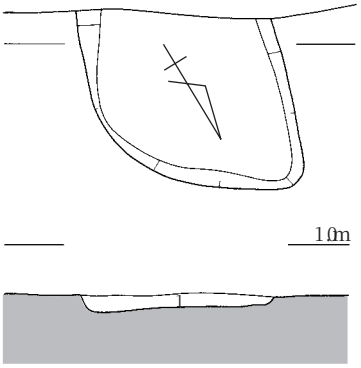
1灰黄褐 極細粒砂（Mn含）
2灰黄褐 シルト質極細粒砂
3にぶい黄褐 シルト質極細粒砂（Mn含）

SK063



1黄褐 極細粒砂
2暗灰黄 極細粒砂～細粒砂

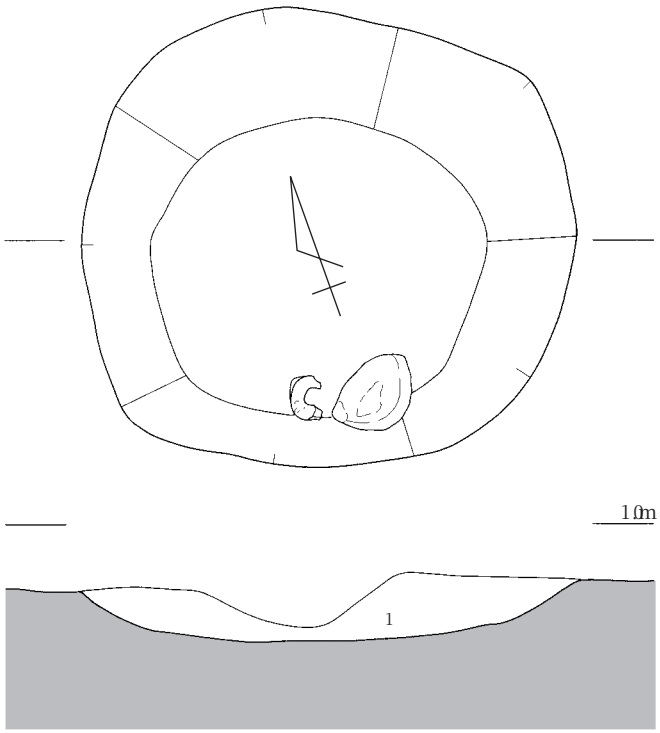
SK094



1暗灰黄 極細粒砂（1～3mの黄褐ブロック若干含）

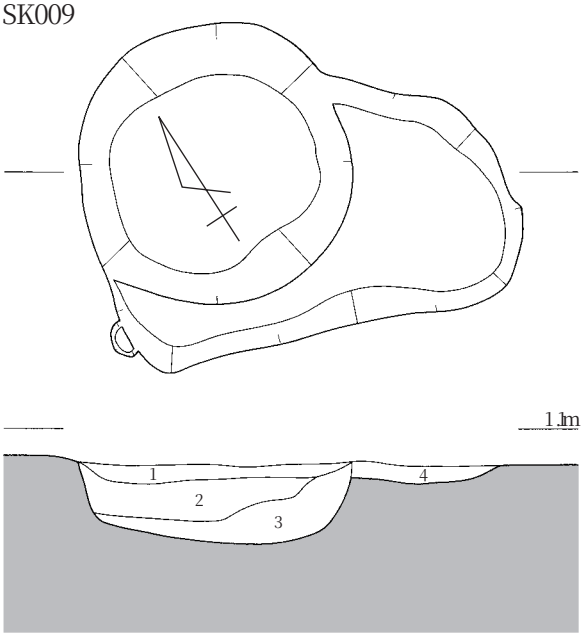
土坑 SK007（1/20） 土坑 SK030（1/20） 土坑 SK029（1/20）
土坑 SK027（1/20） 土坑 SK063（1/20） 土坑 SK094（1/20）

SK032



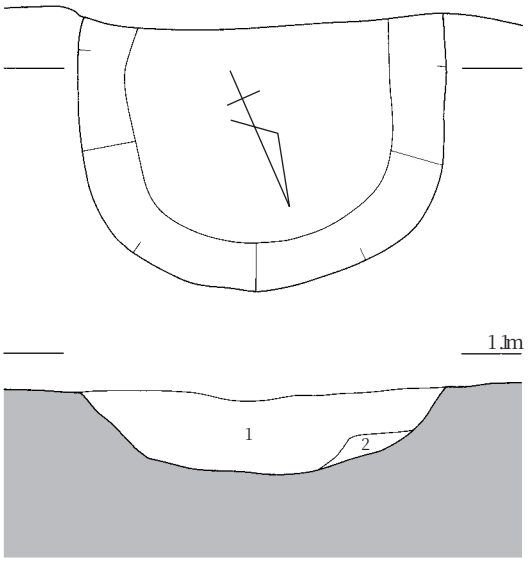
1 灰黄褐 極細粒砂

SK009



1黄灰 極細粒砂
2暗黄灰 中粒砂～粗粒砂
3黒褐 極細粒砂（小礫混じる）
4灰黄褐 シルト質極細粒砂

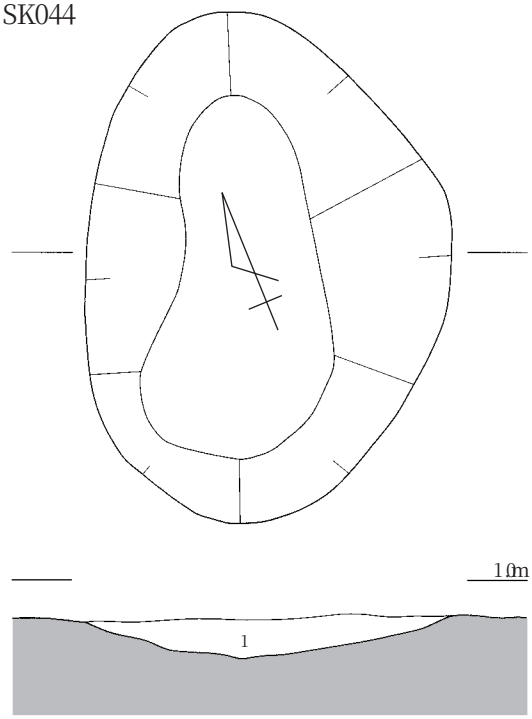
SK048



1暗灰黄 細粒砂（中礫を多く、大礫をわずかに含）
2黄灰 細粒砂～中粒砂（中礫を多く含）

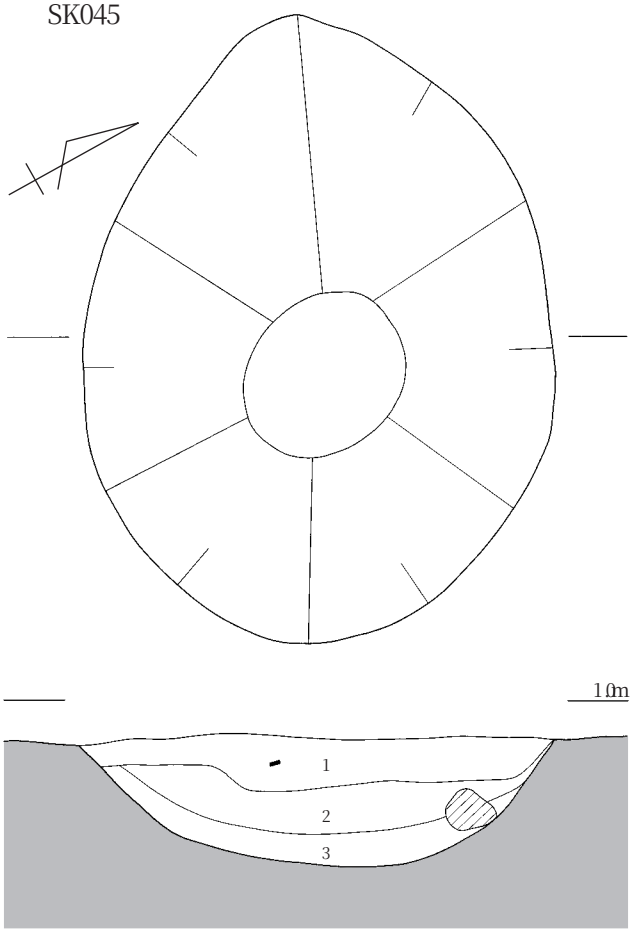
土坑 SK032（1/10） 土坑 SK009（1/40） 土坑 SK048（1/40）

SK044



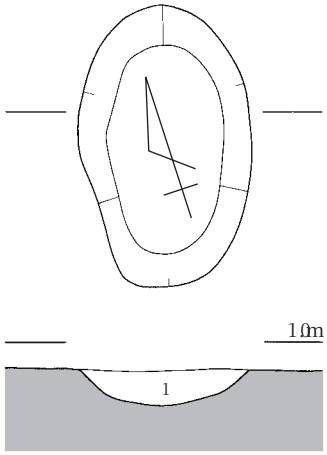
1灰黄褐 極細粒砂

SK045



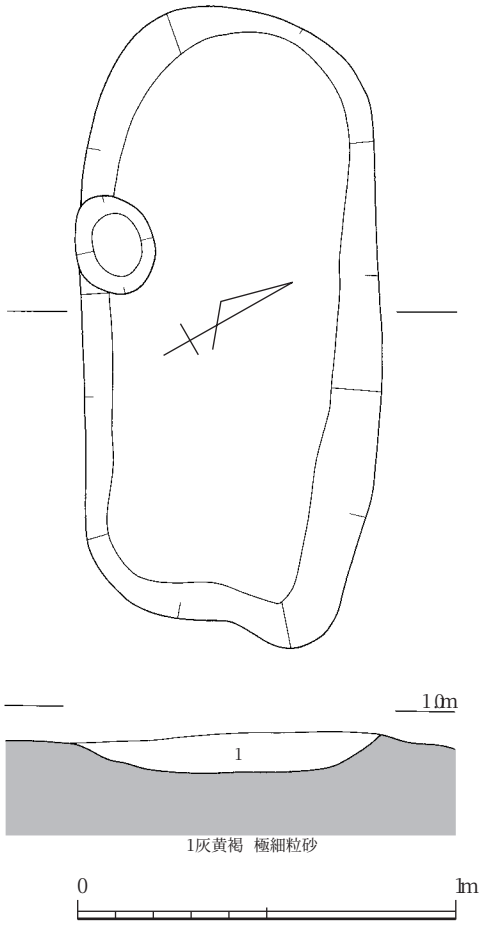
1灰黄 極細粒砂
2灰黄 細粒砂～中粒砂
3にぶい黄褐 極細粒砂（Mn含）

SK062



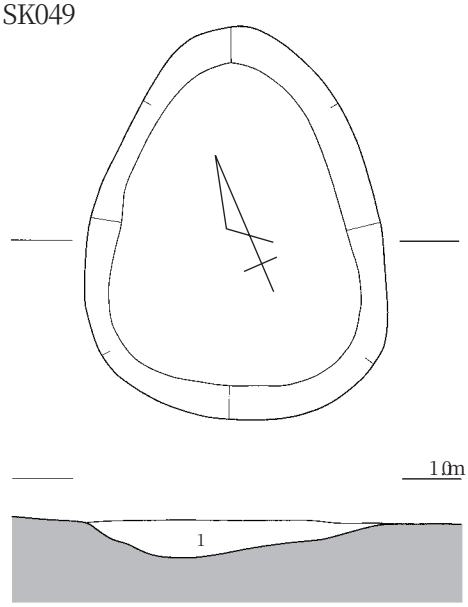
1暗灰黄 極細粒砂～細粒砂

SK047



1灰黄褐 極細粒砂

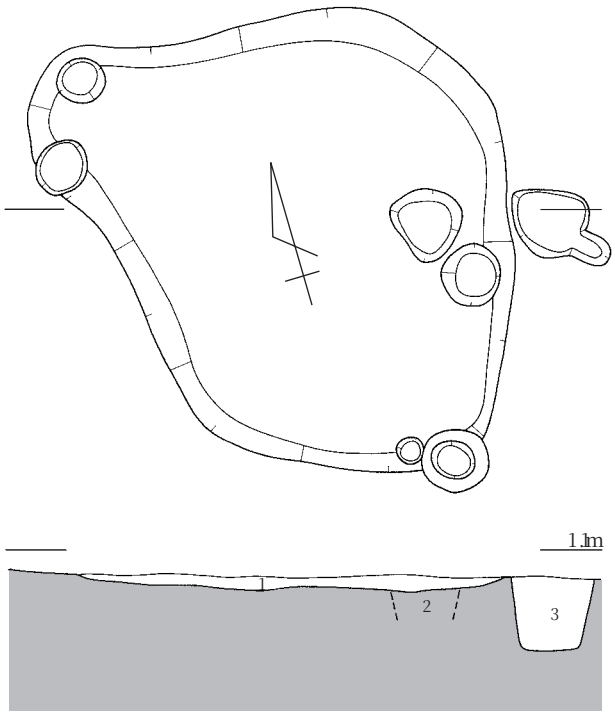
SK049



1黄褐 極細粒砂

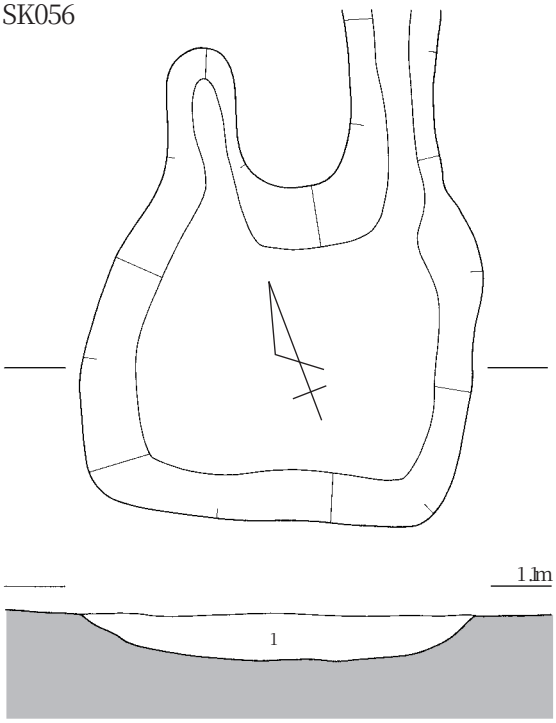
土坑 SK044（1/20） 土坑 SK045（1/20） 土坑 SK062（1/20）
土坑 SK049（1/20） 土坑 SK047（1/20）

SK055



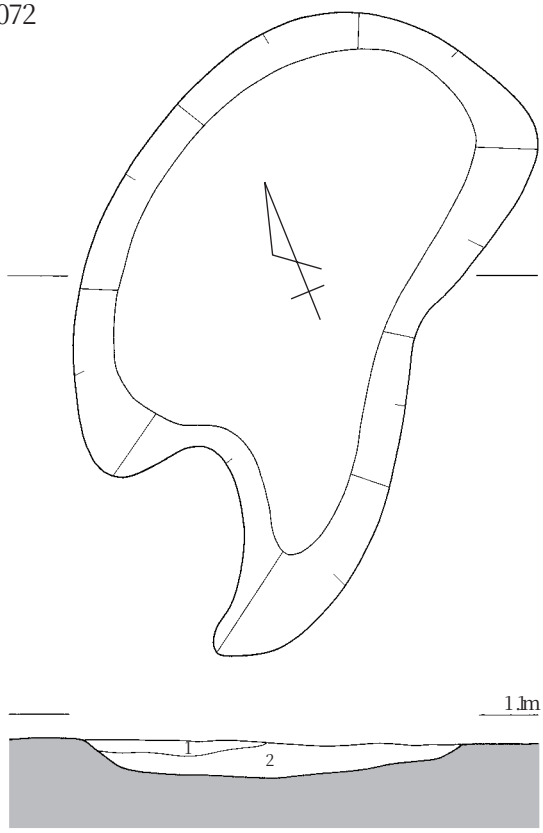
1暗灰黄 極細粒砂（わずかにMn含）［SK55埋土］
2黄褐 極細粒砂［柱穴埋土］
3黄褐 極細粒砂（わずかにMn含）［柱穴埋土］

SK056

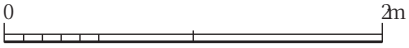


1灰黄褐 極細粒砂

SK072

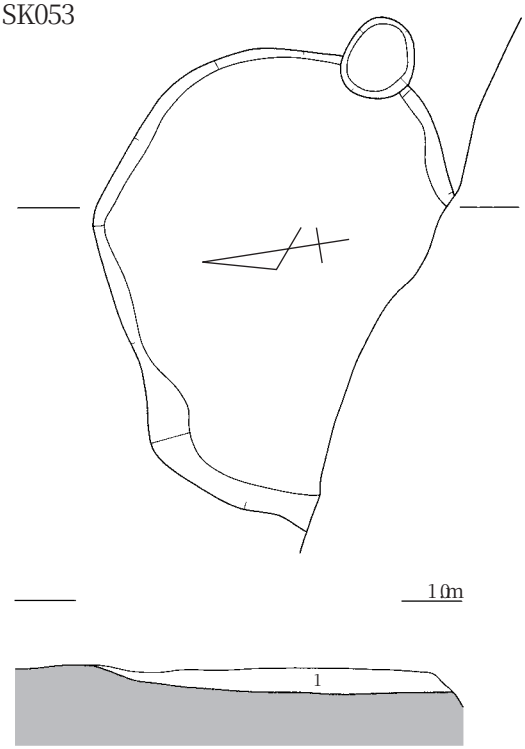


1にぶい黄褐 極細粒砂（Mn含）
2灰黄褐 中粒砂



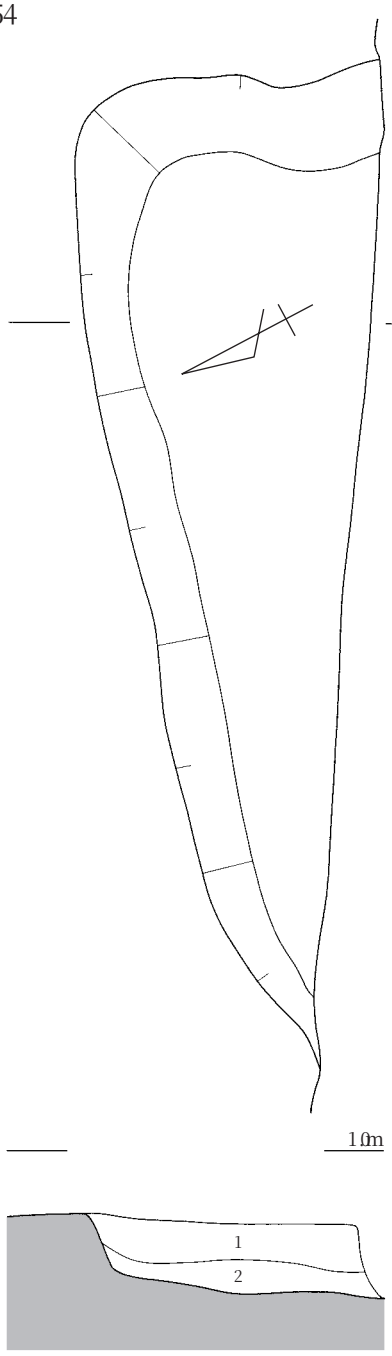
土坑 SK055（1/40） 土坑 SK056（1/40） 土坑 SK072（1/40）

SK053



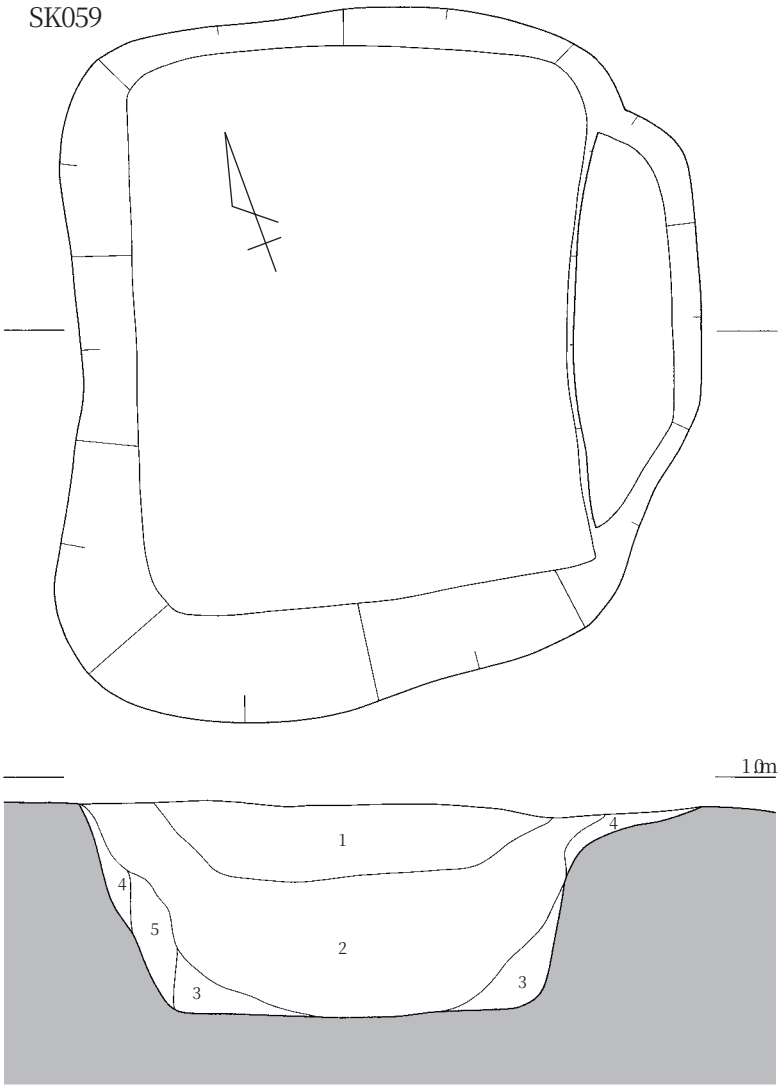
1暗灰黄 極細粒砂

SK054



1暗灰 黄極細粒砂 黄褐粒を多く含）
2黄灰 極細粒砂～細粒砂

SK059

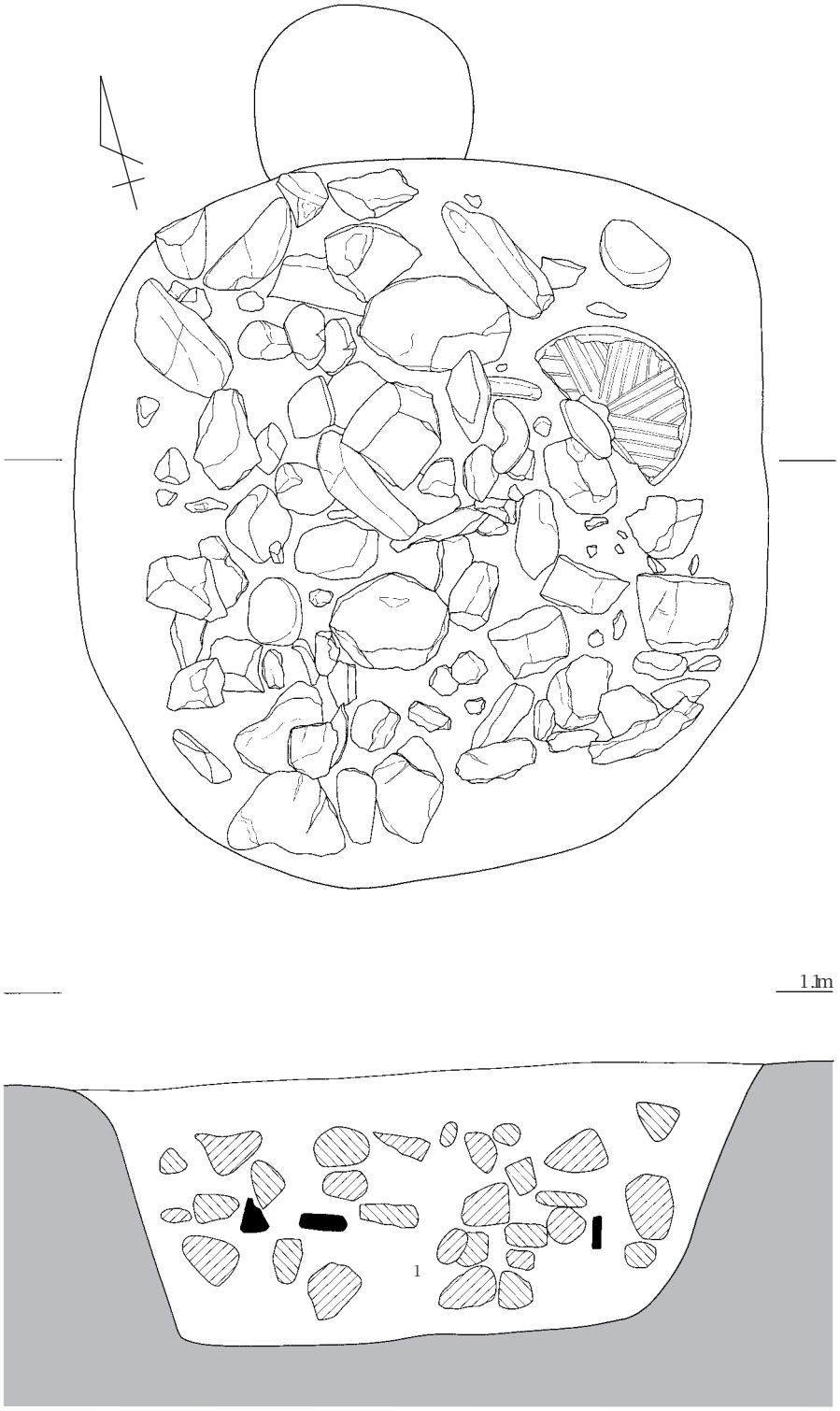


1黄灰 極細粒砂
2黄灰 極細粒砂 直径2～5mの黄褐ブロック若干含）
3黄灰 極細粒砂 直径2～5mの黄褐ブロックわずかに含）
4黄褐 極細粒砂
5黄灰 極細粒砂 中礫を多く含）

0 1m

土坑SK053（1/20） 土坑SK059（1/20） 溝SD054（1/20）

SK058

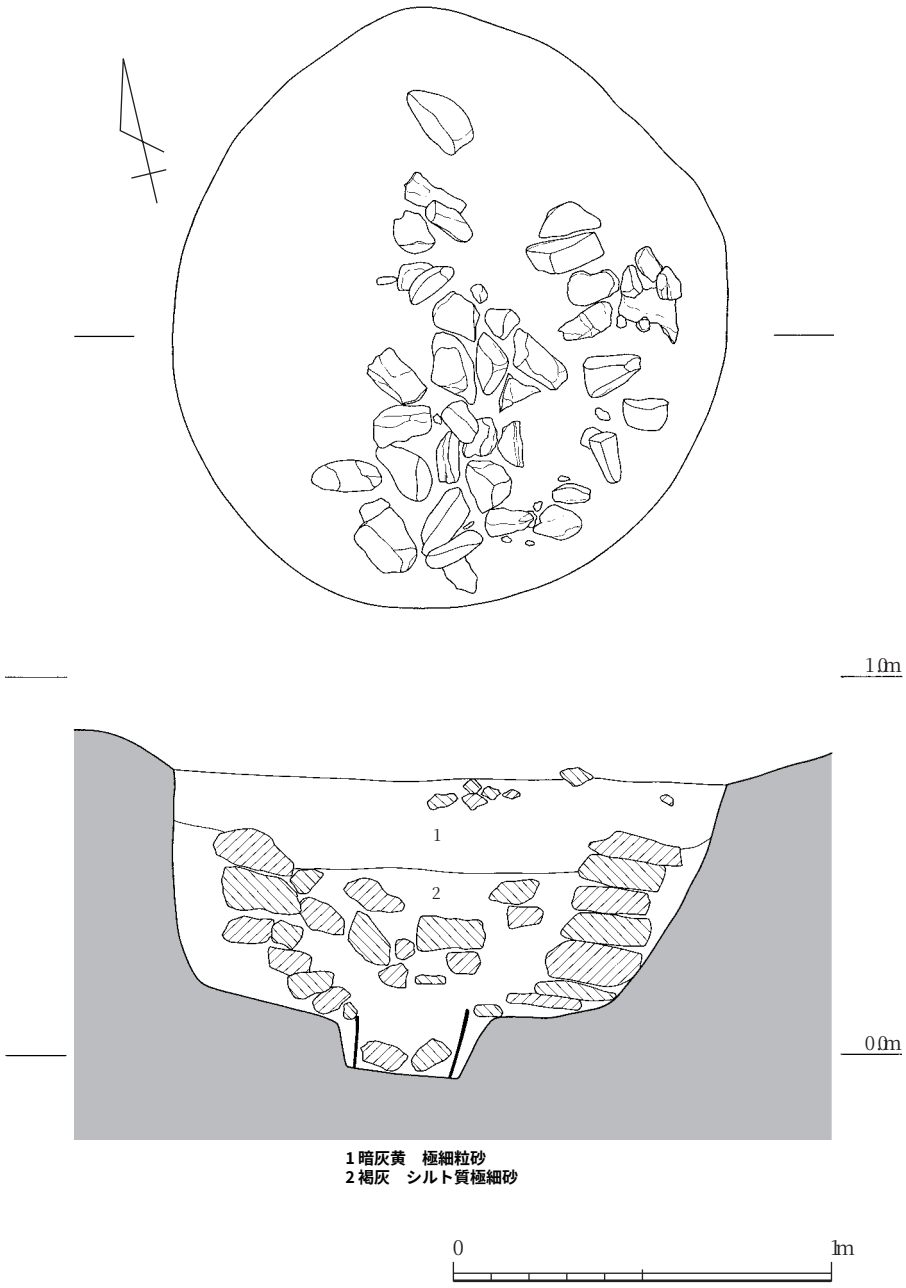


1暗灰黄 極細粒砂

0 50cm

土坑 SK058 (1/10)

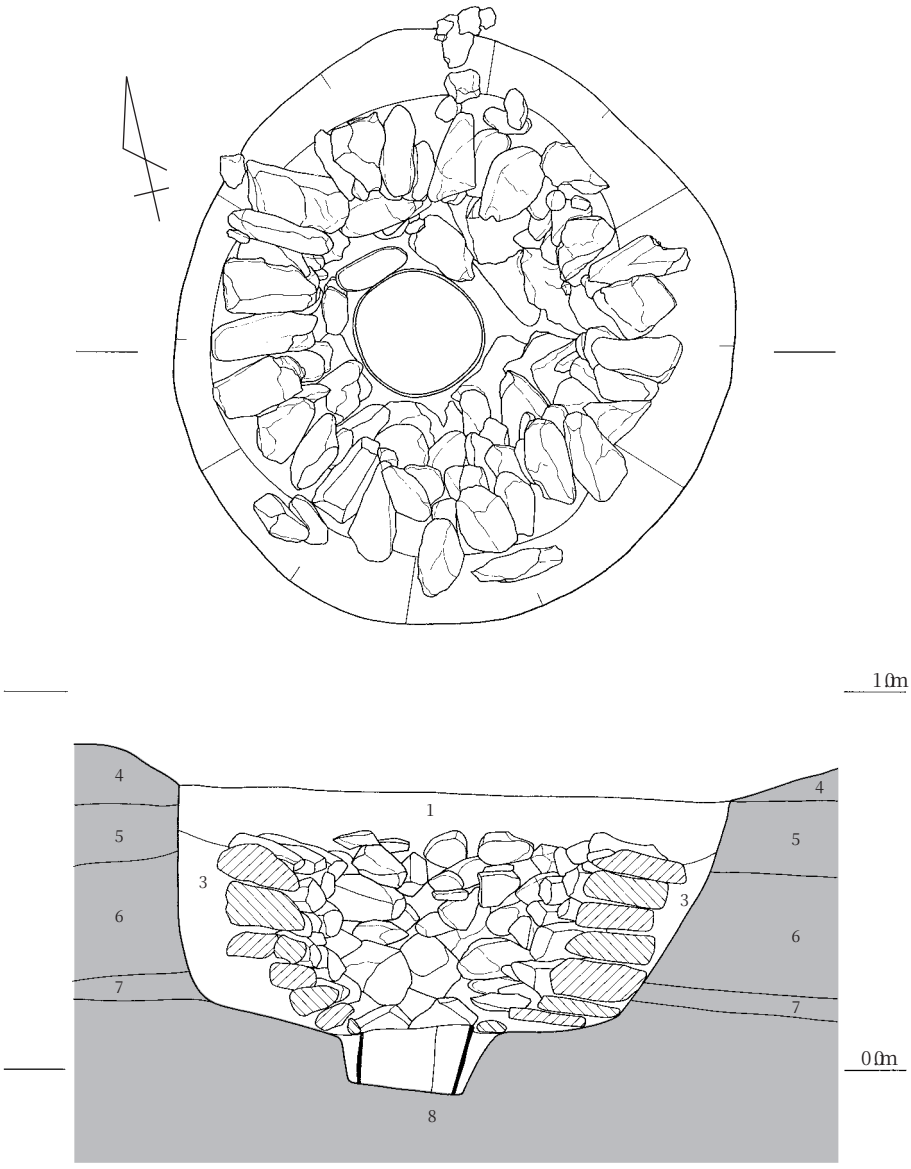
SE040



1 暗灰黄　極細粒砂
2 褐灰　シルト質極細砂

井戸 SE040 (1/20)

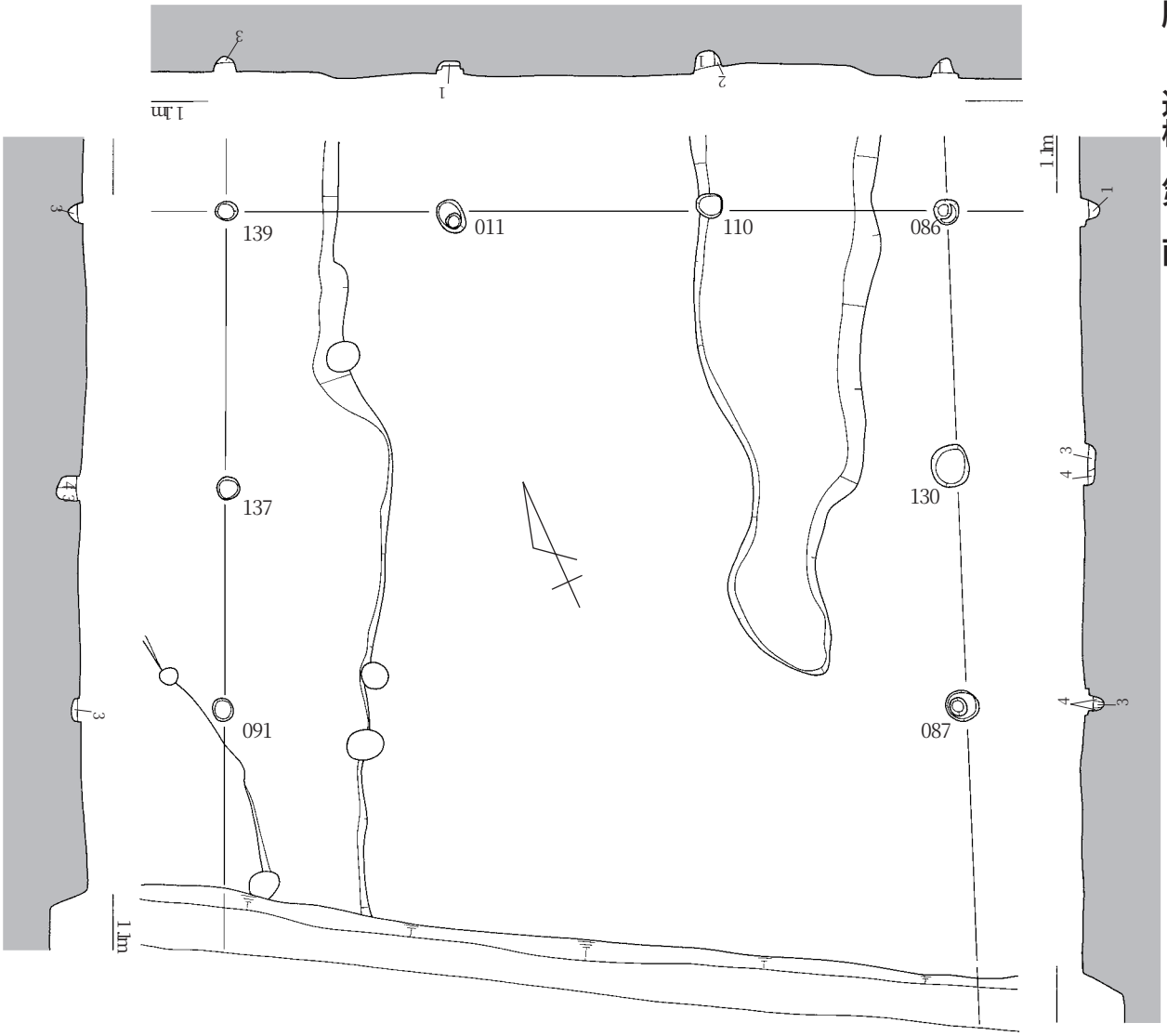
SE040



1暗灰黄　極細粒砂
3褐灰　粗粒砂混じり　にぶい黄褐中粒砂
4にぶい黄褐　細粒砂（Mn含）
5灰黄褐　中粒砂～粗粒砂（Mn含）
6褐灰　粗粒砂～中礫
7にぶい黄褐　細粒砂～中粒砂
8褐灰　粗粒砂～小礫

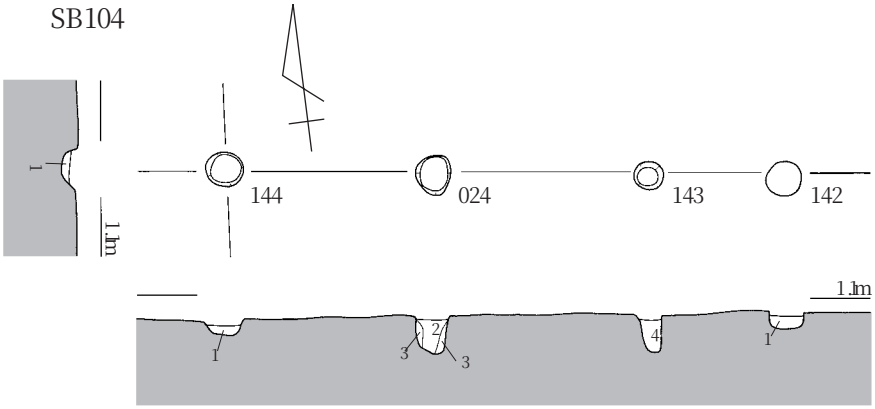
0　1m

SB101



1にぶい黄褐　シルト質極細粒砂
2褐　シルト質極細粒砂
3灰黄褐　シルト質極細粒砂
4にぶい黄褐　極細粒砂

SB104

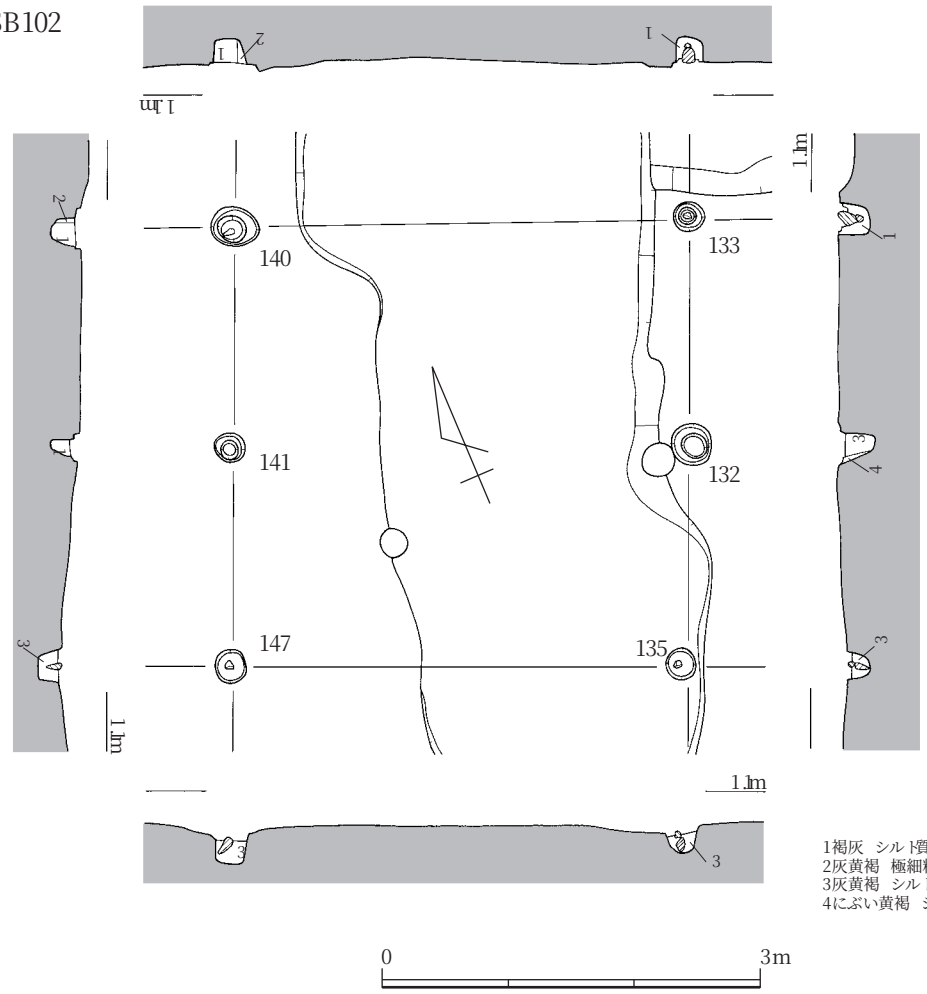


1暗灰黄　細粒砂
2暗灰黄　細粒砂（わずかに黄褐粒含）
3黄褐　細粒砂
4暗灰黄　細粒砂～中粒砂（Mn・黄褐粒を含）

0　3m

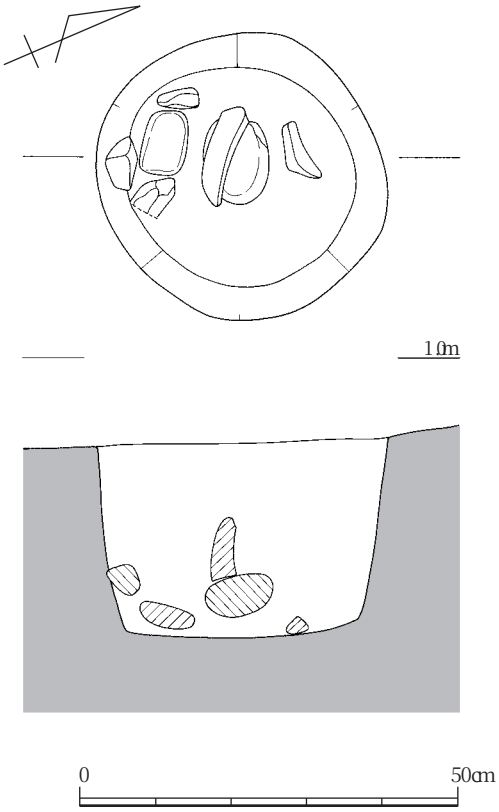
掘立柱建物 SB101（1/60）　掘立柱建物 SB104（1/60）

SB102

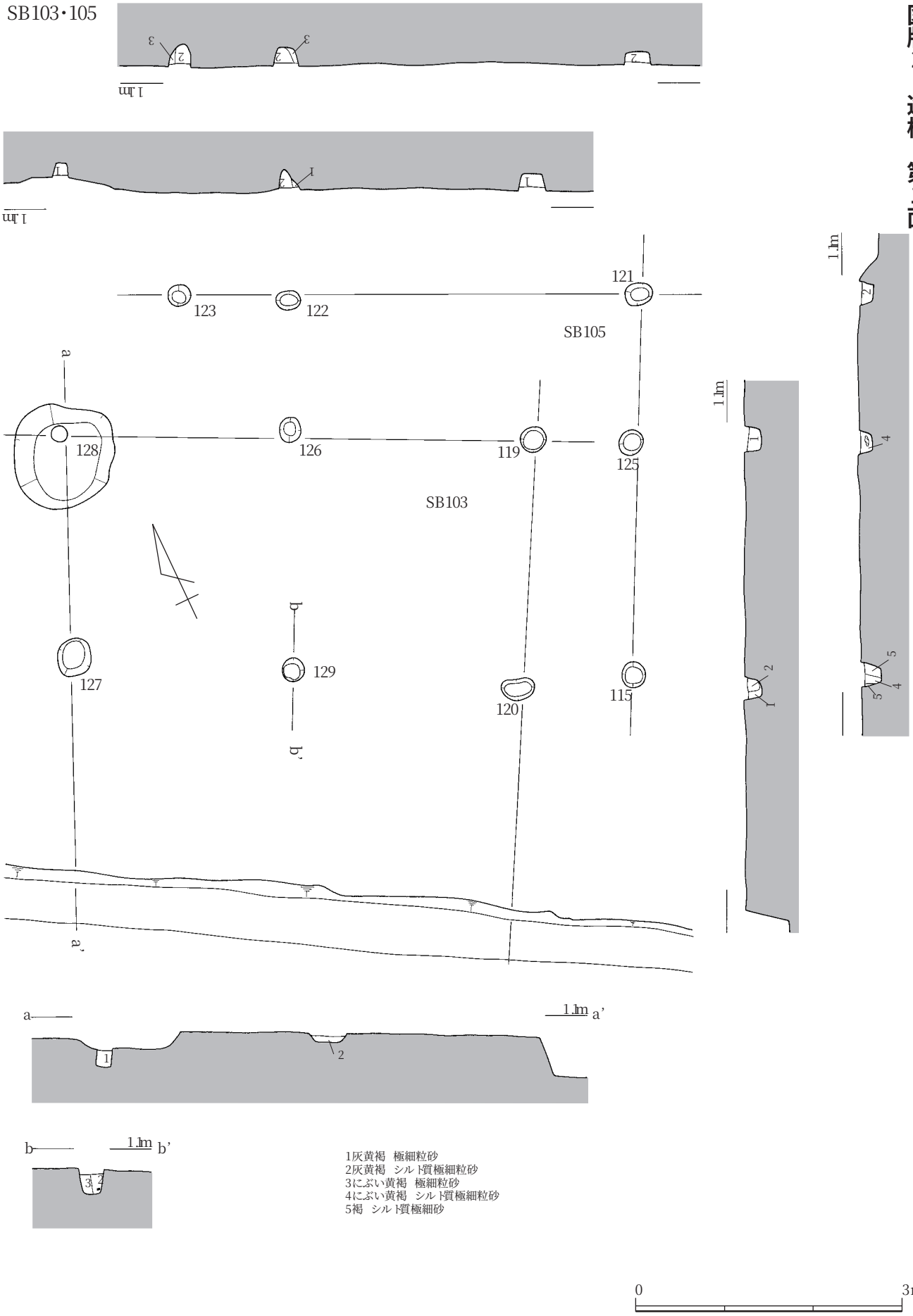


1褐灰　シルト質極細粒砂
2灰黄褐　極細粒砂
3灰黄褐　シルト質極細粒砂
4にぶい黄褐　シルト質極細粒砂

P140

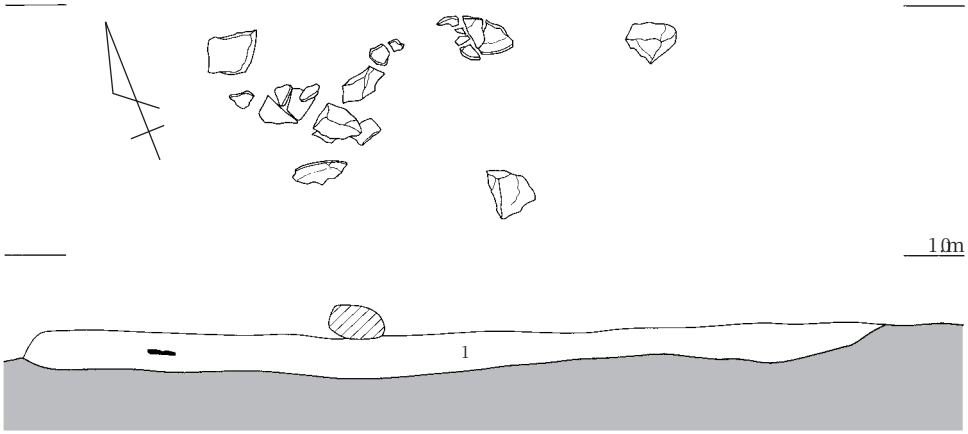


掘立柱建物 SB102 (1/60)　柱穴 P140 (1/10)



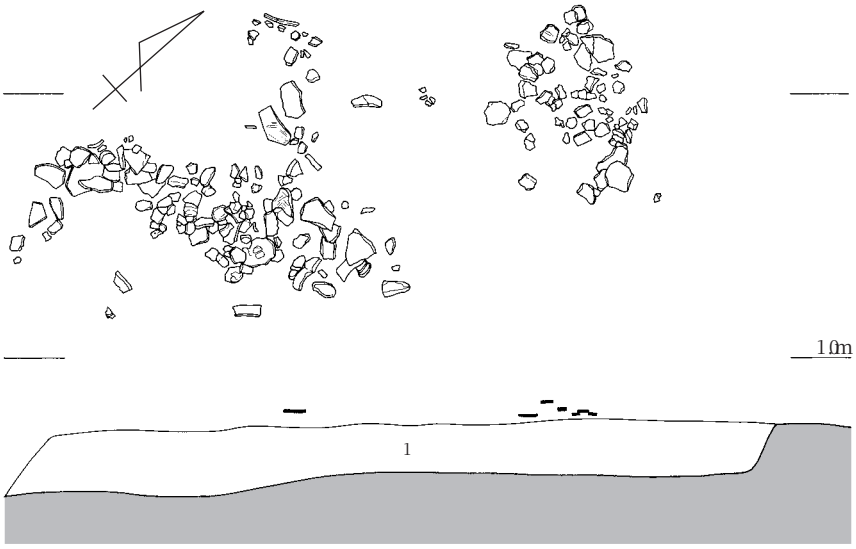
掘立柱建物 SB103・SB105 (1/60)

土器群 175



1灰黄褐 極細粒砂～細粒砂 (Mn含 炭が若干混じる)

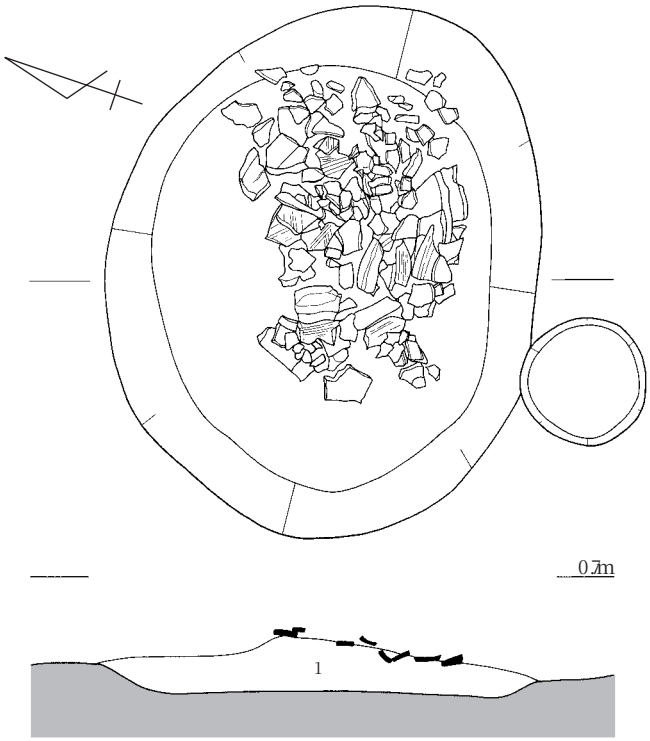
土器群 151



1灰黄褐 細粒砂 (わずかにMn含)

0 1m

SK186

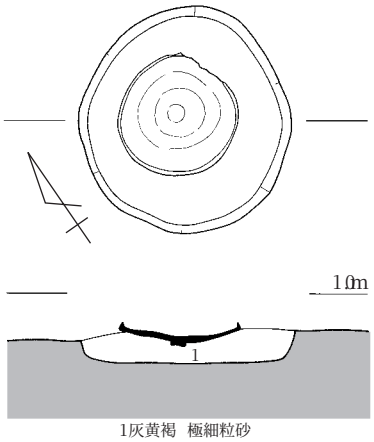


1黄灰褐 細粒砂

0 50cm

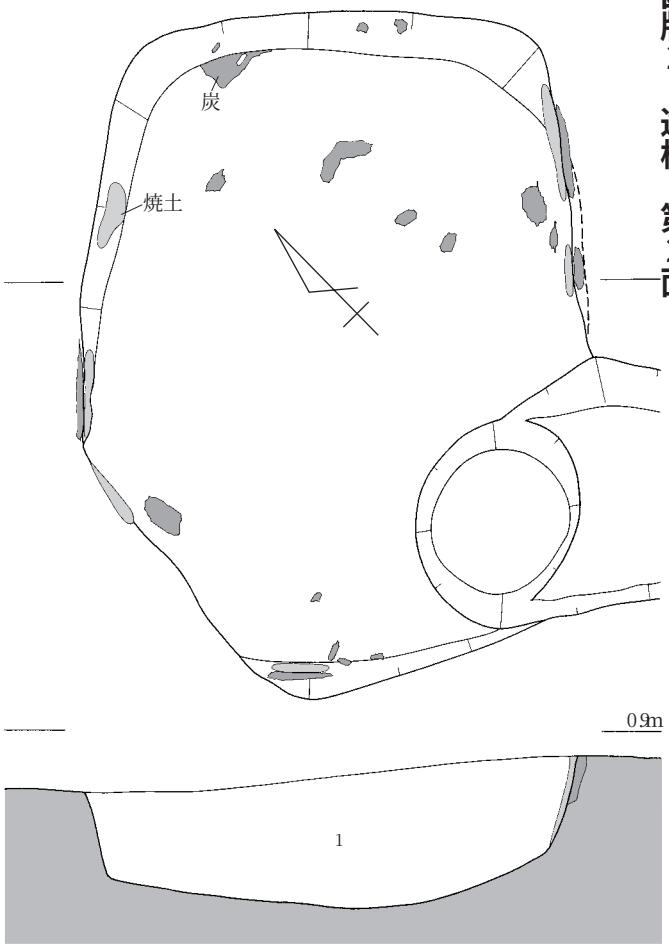
土器群 175 (1/20) 土器群 151 (1/10) 土坑 SK186 (1/10)

P041



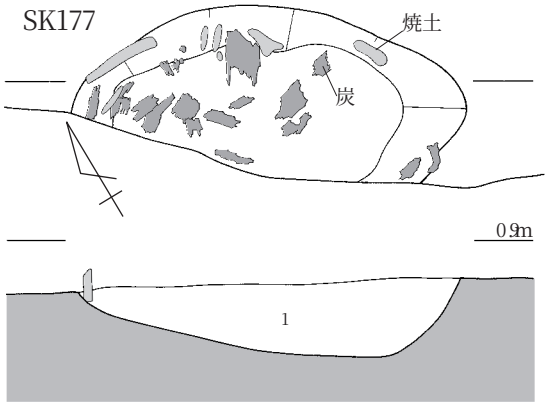
1灰黄褐 極細粒砂

SK158



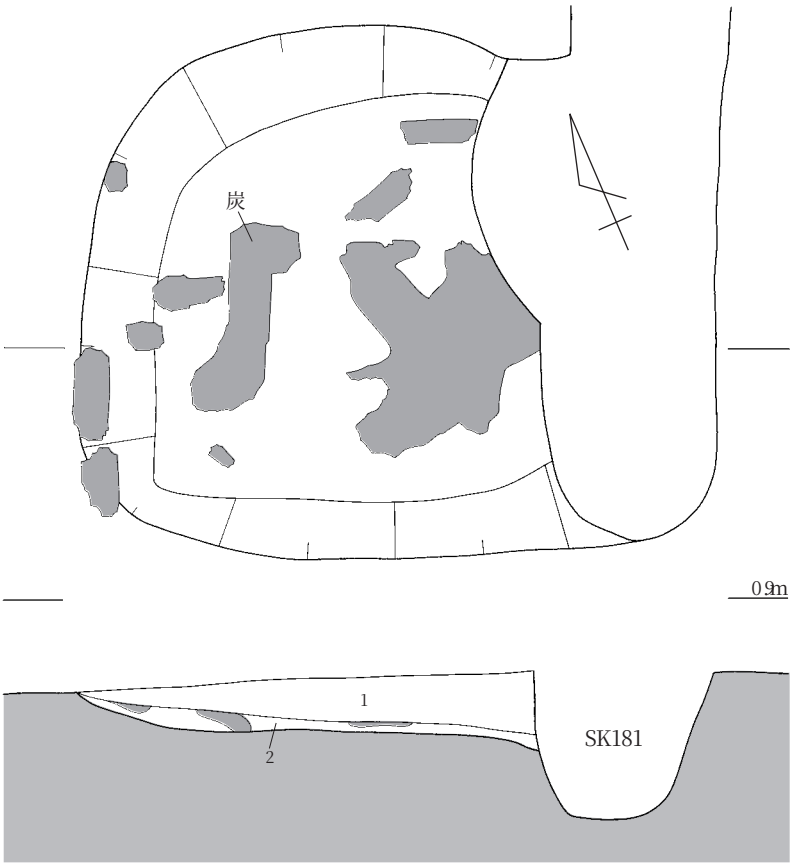
1褐灰 極細粒砂 (Mn・炭含)

SK177



1褐灰 極細粒砂 (Mn・炭含)

SK179

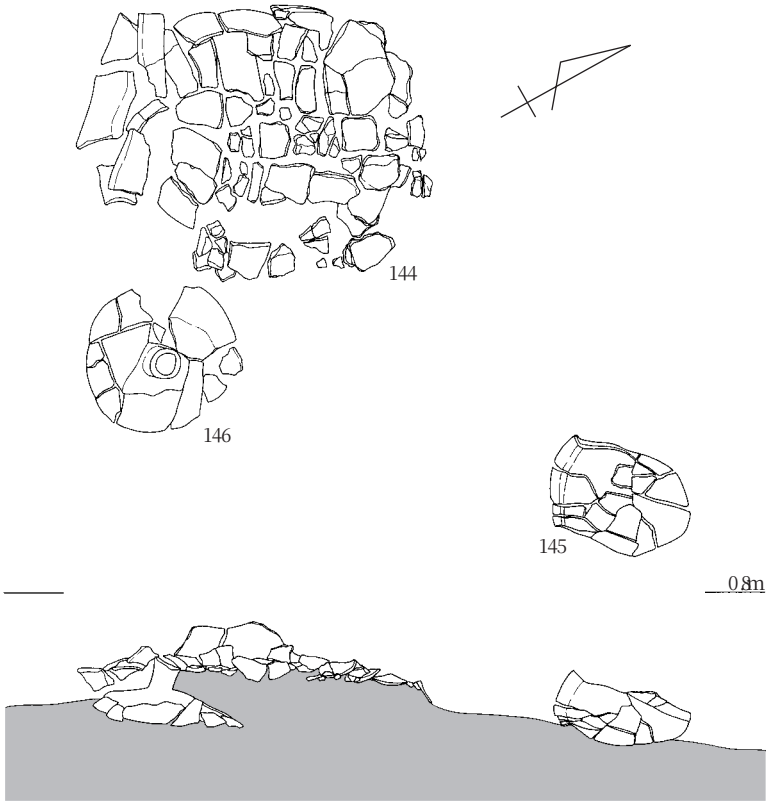


1暗灰黄 細粒砂 (Mn・炭を多く含)
2黄灰 極細粒砂 (炭の塊を多く含)

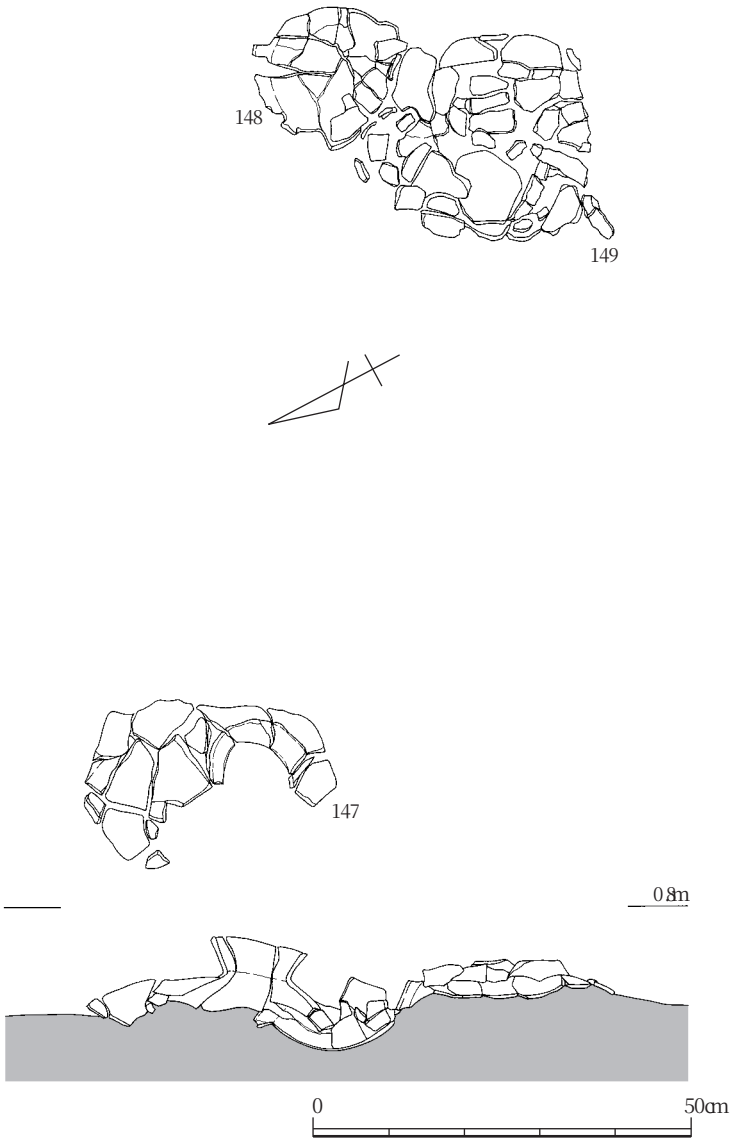
0 50cm

柱穴 P041 (1/10) 土坑 SK177 (1/10) 土坑 SK158 (1/10) 土坑 SK179 (1/10)

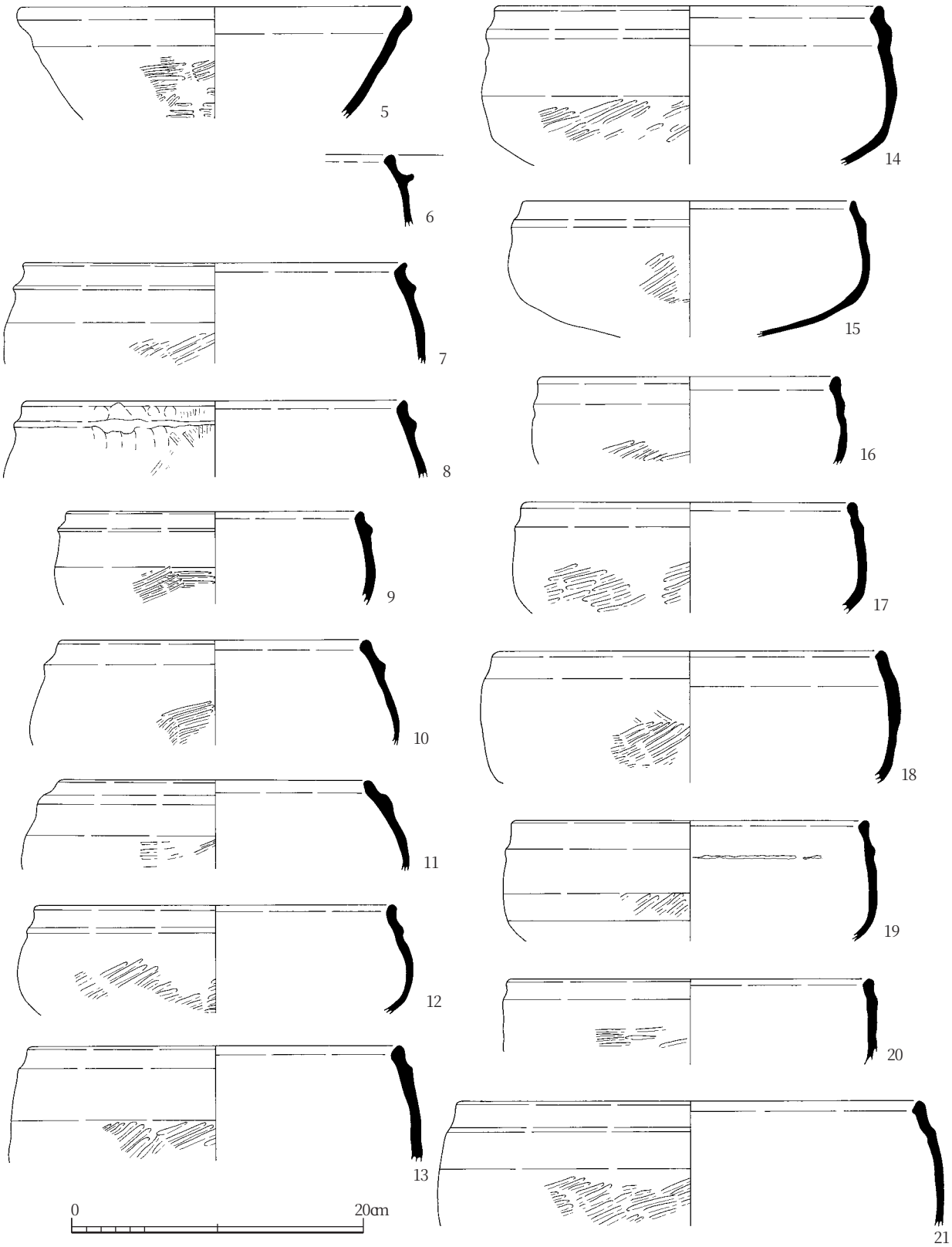
土器群 180



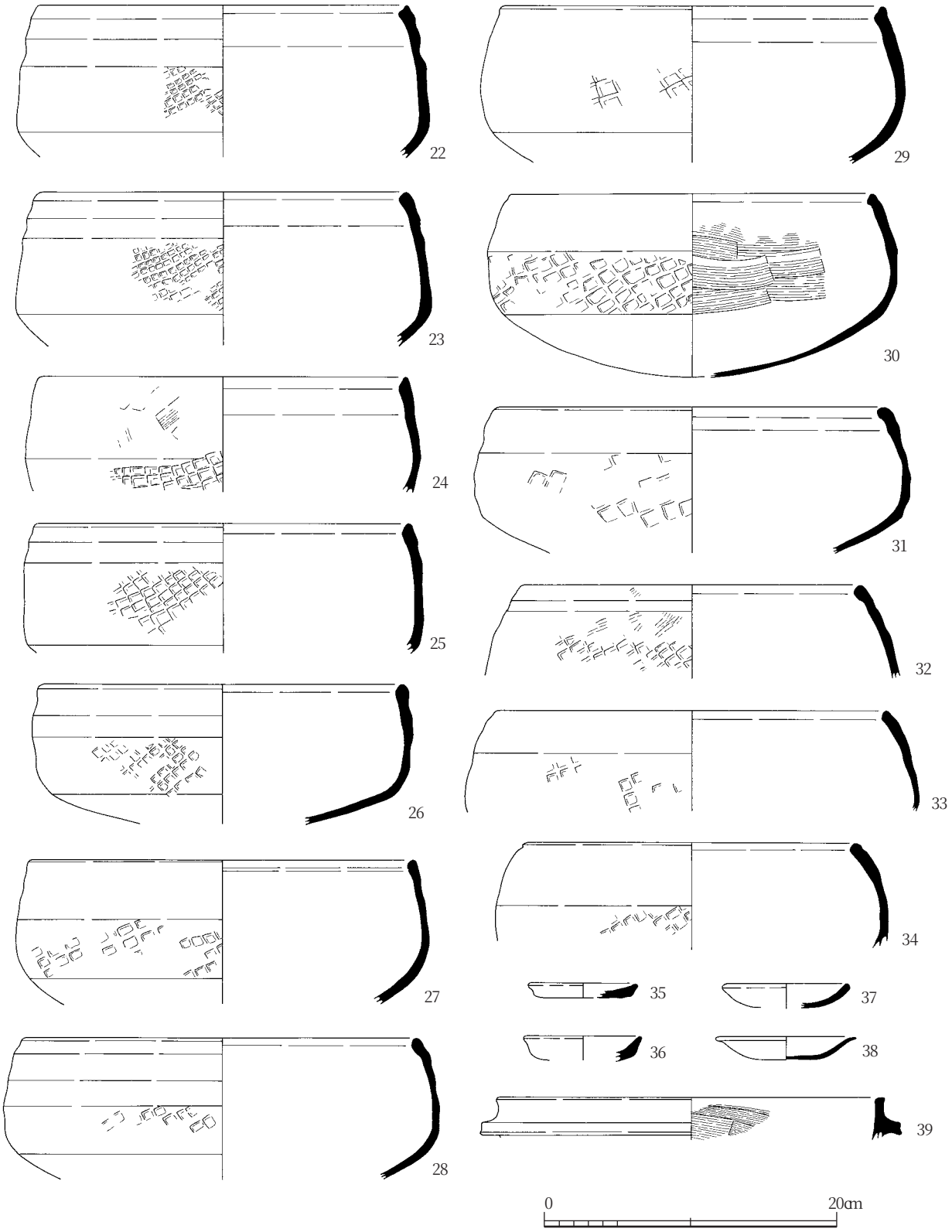
土器群 189



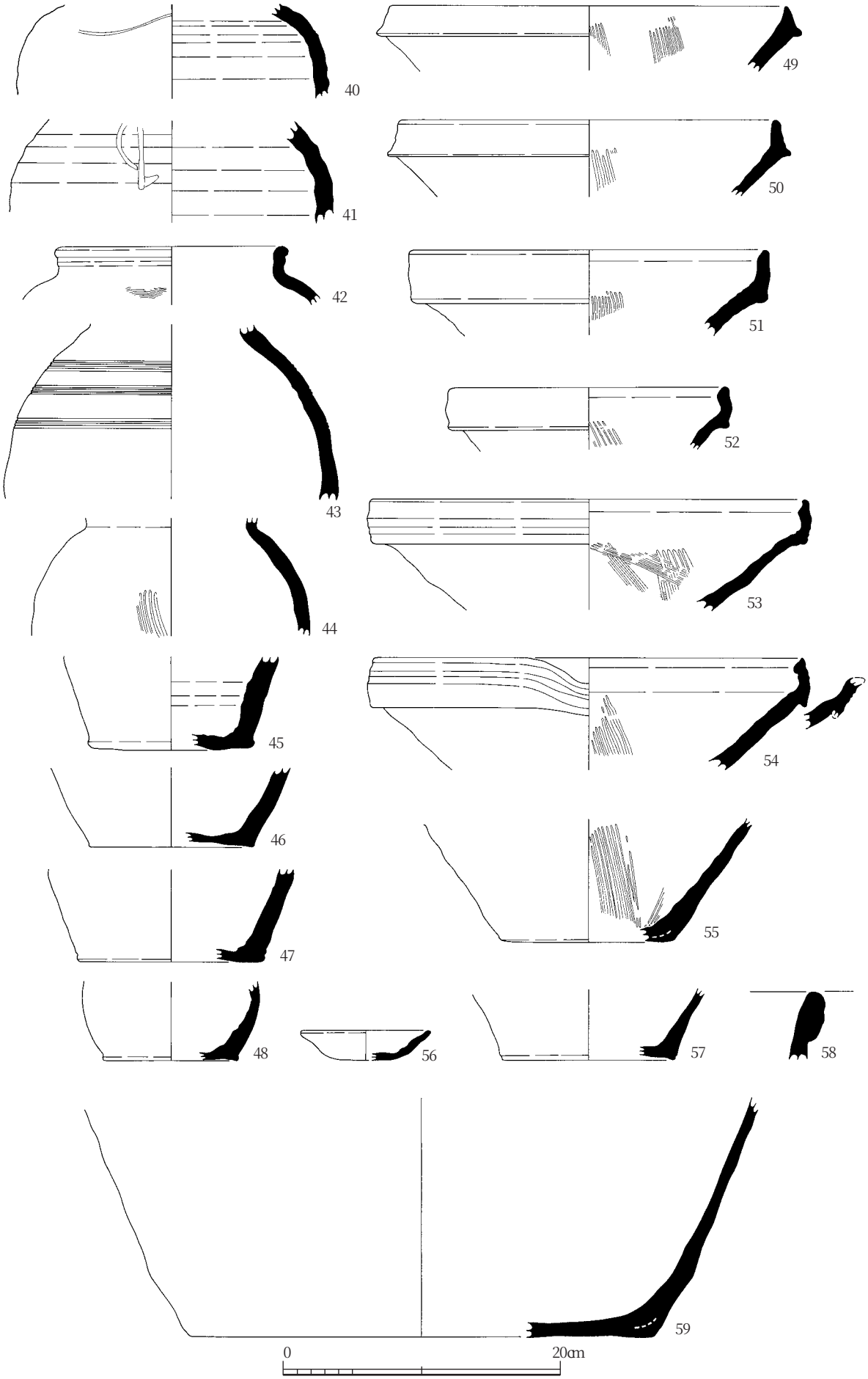
土器群 180 (1/10) 土器群 189 (1/10)



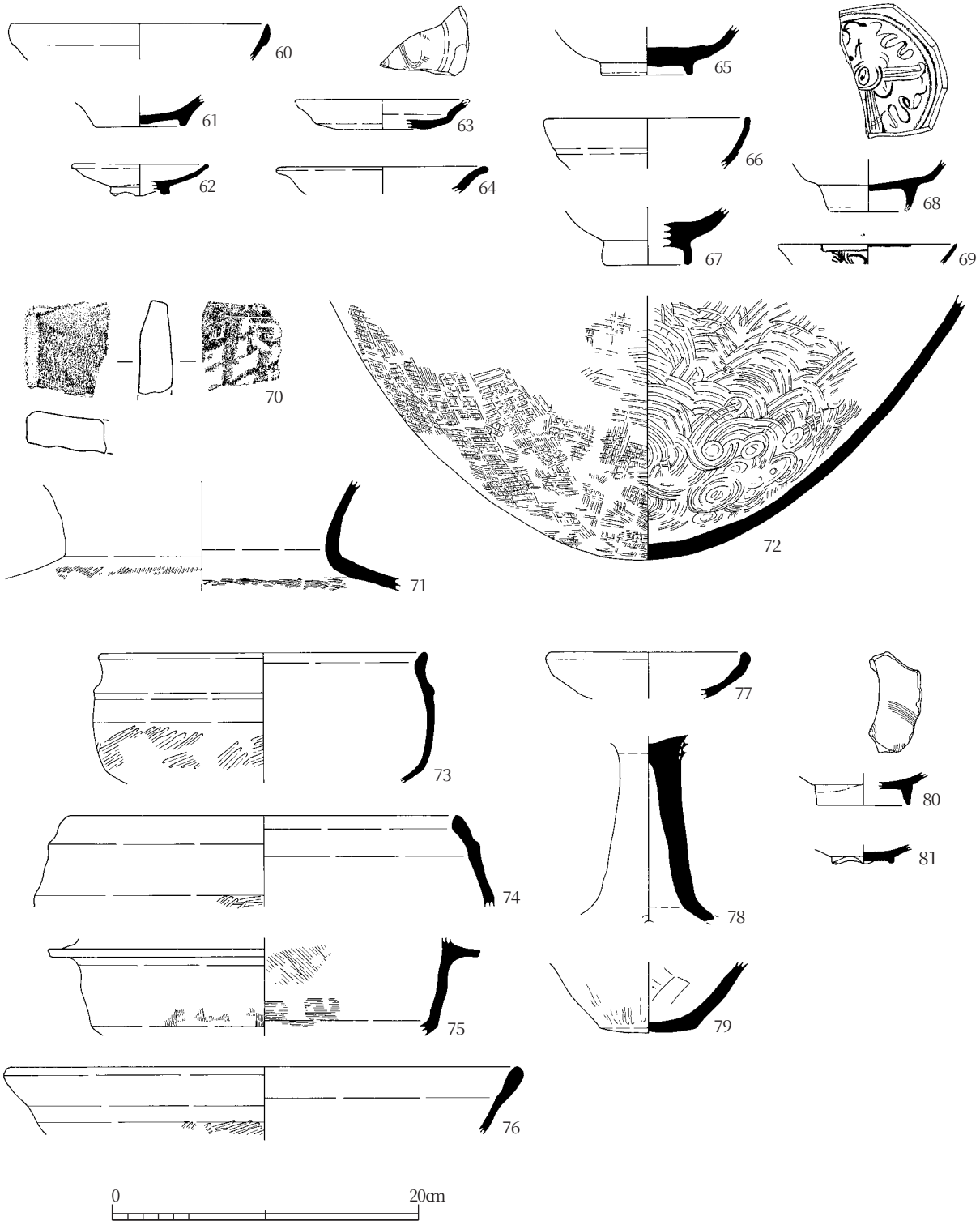
溝 SD001出土鍋



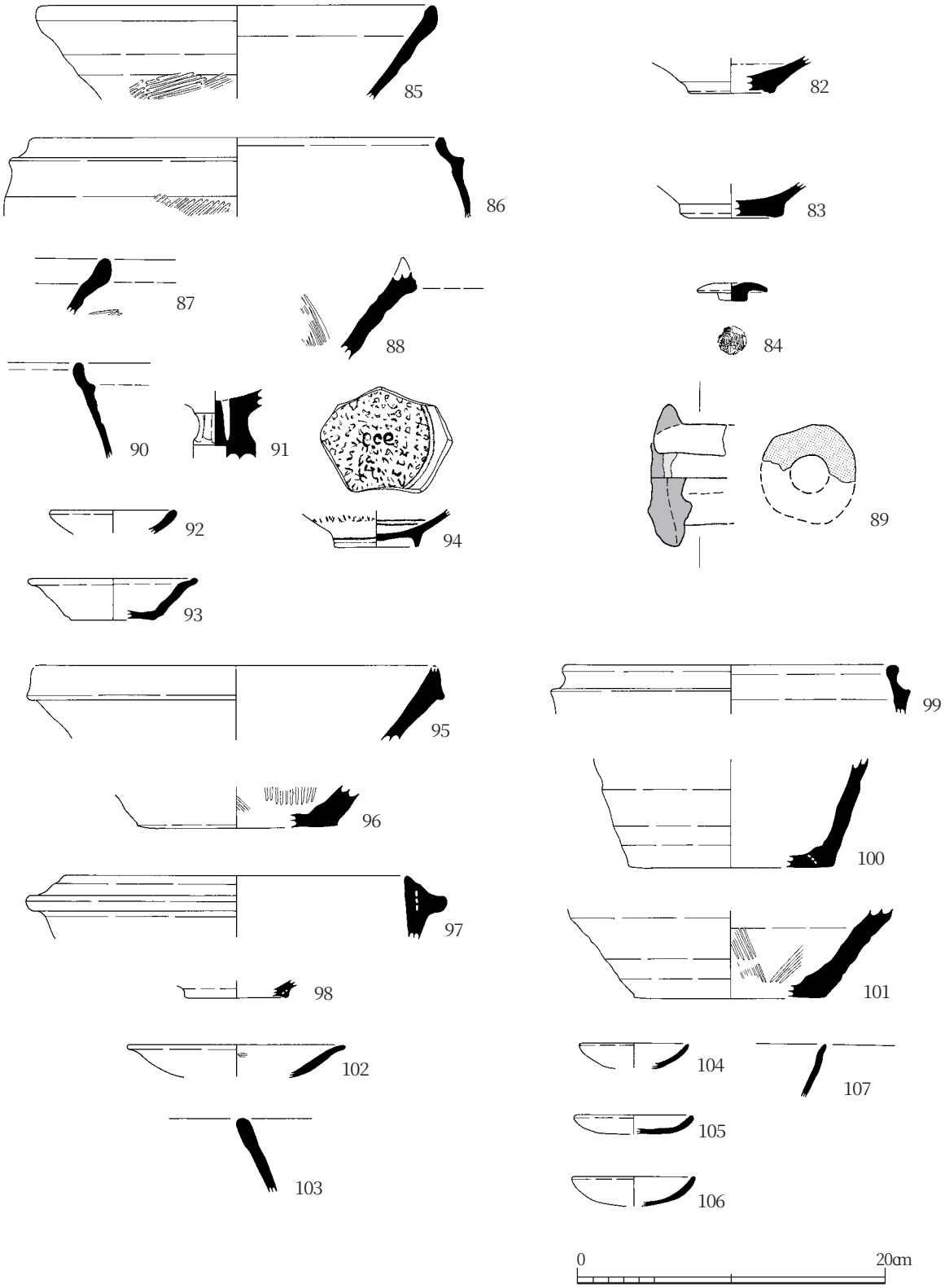
溝 SD001出土土器



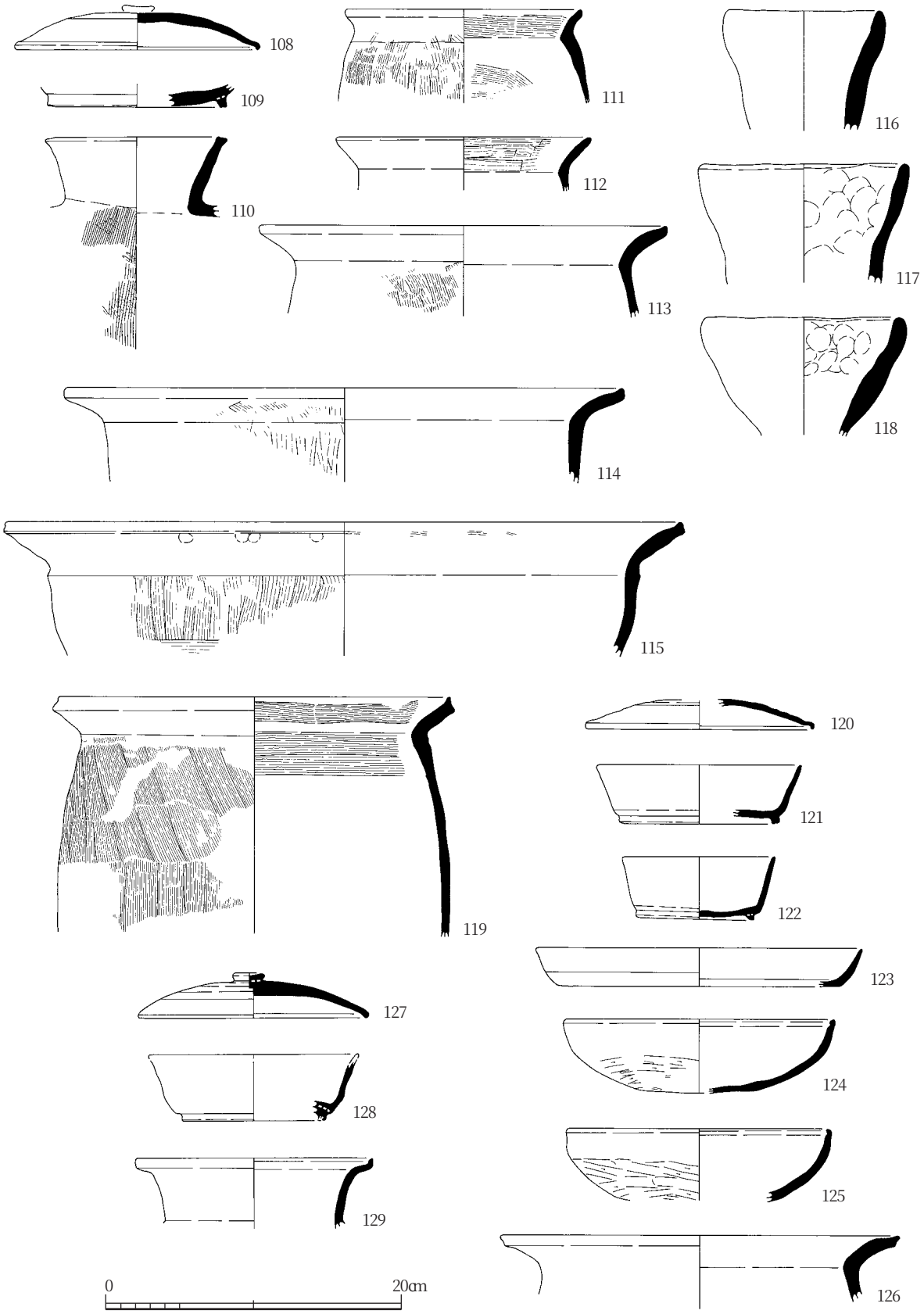
溝 SD001出土備前焼

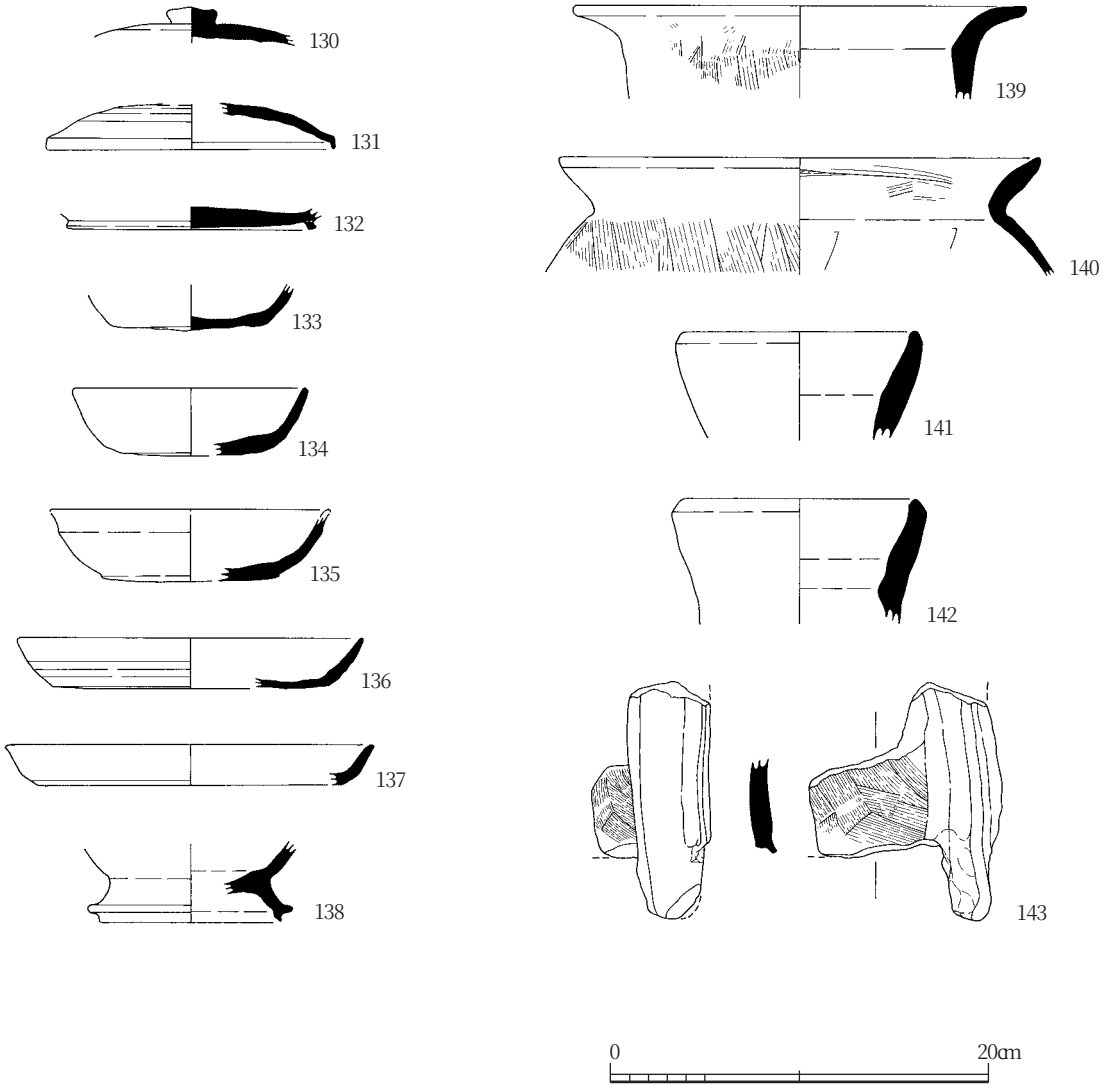


溝 SD001他、中世溝出土土器

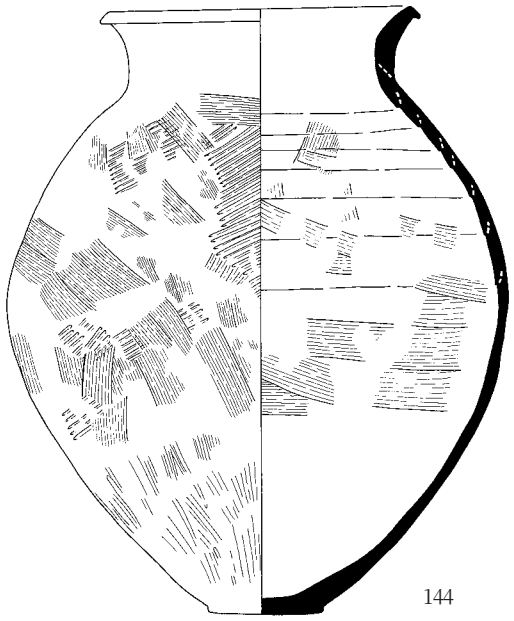


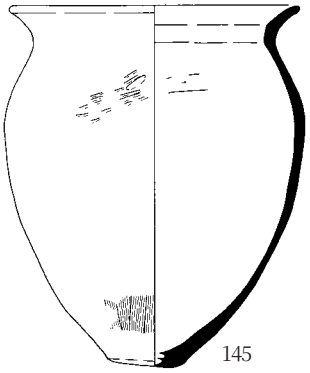
中世土坑・井戸 SE040出土土器

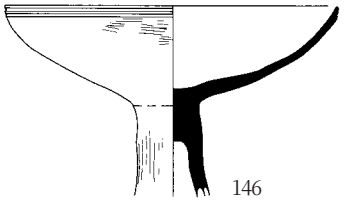

108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
0
20cm

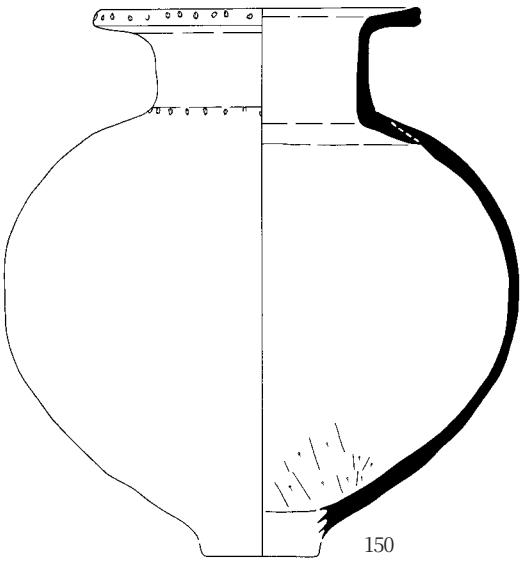


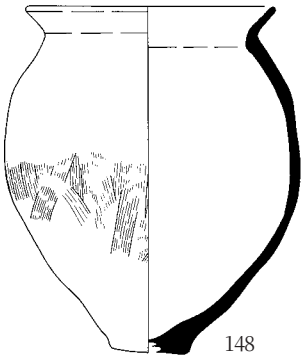
古代包含層出土土器

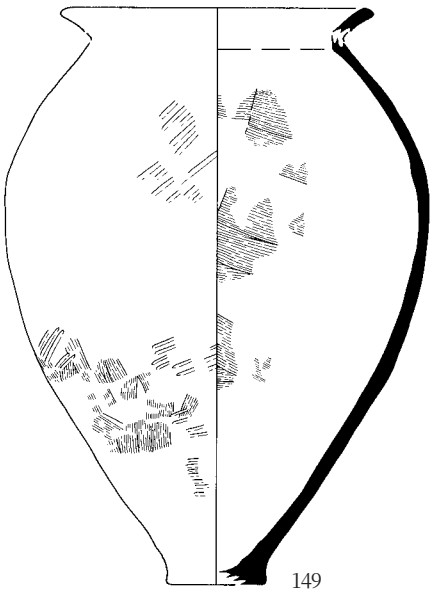


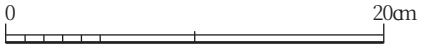


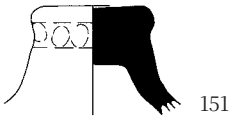


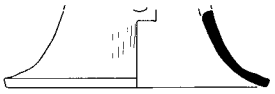




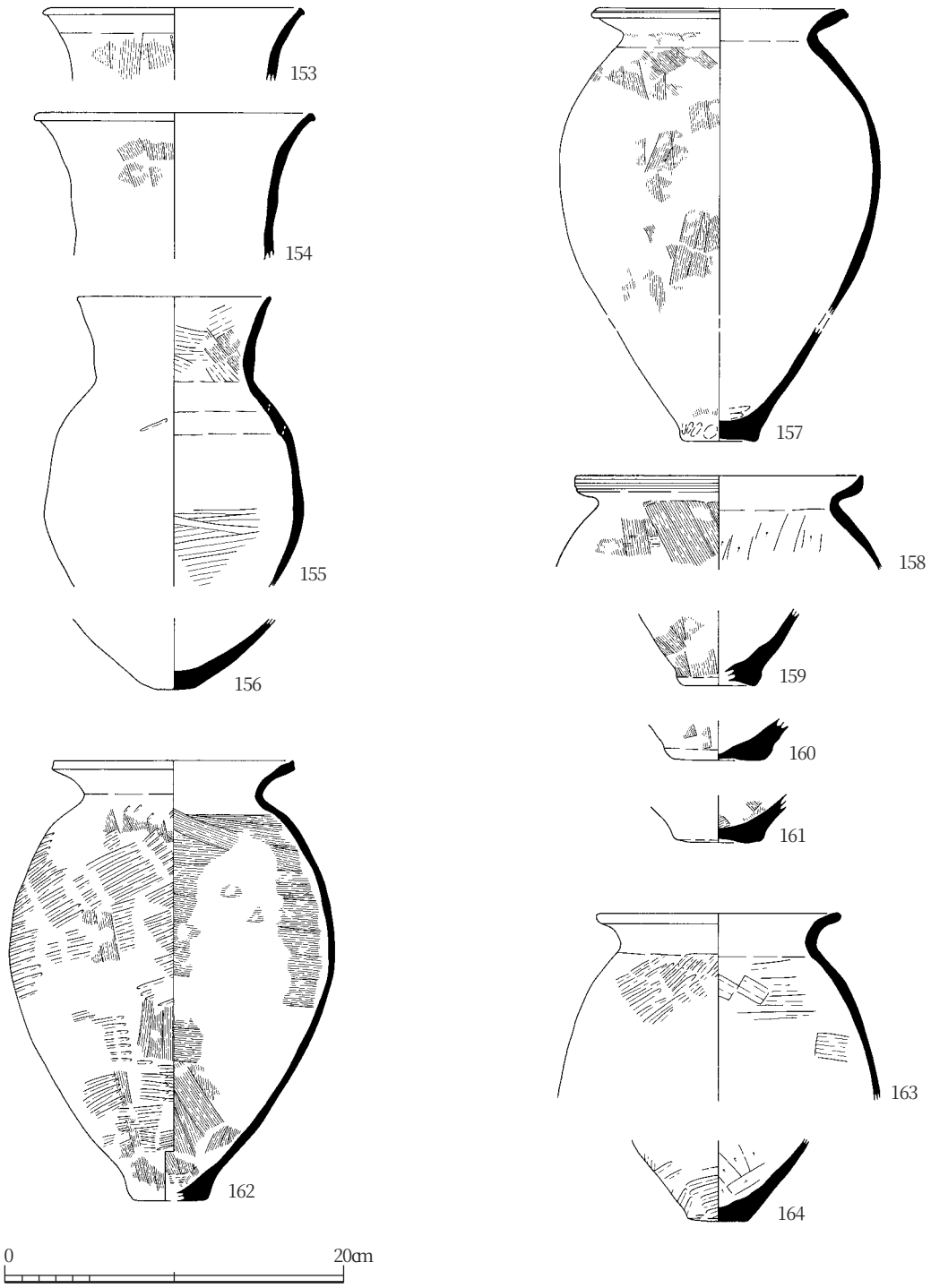




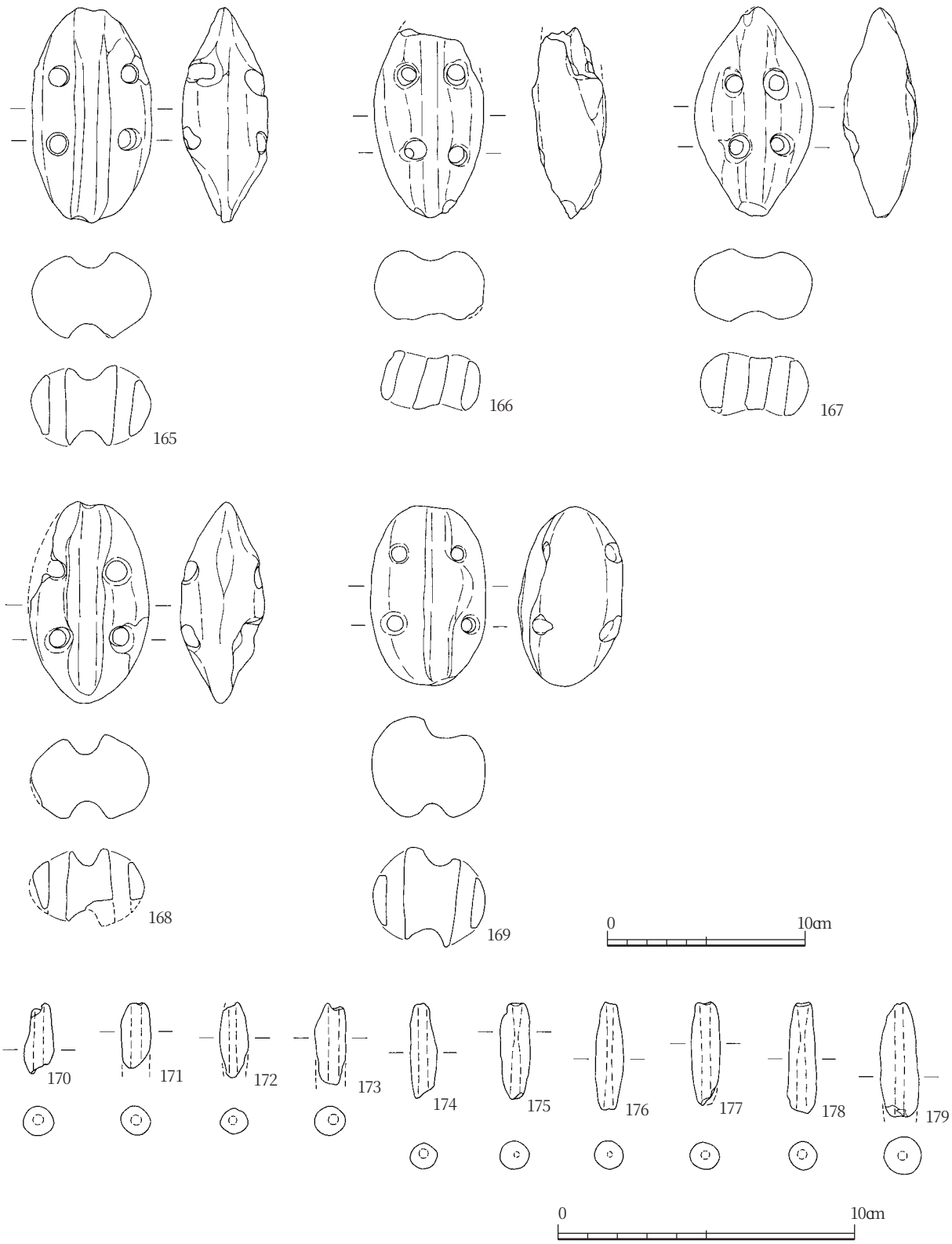




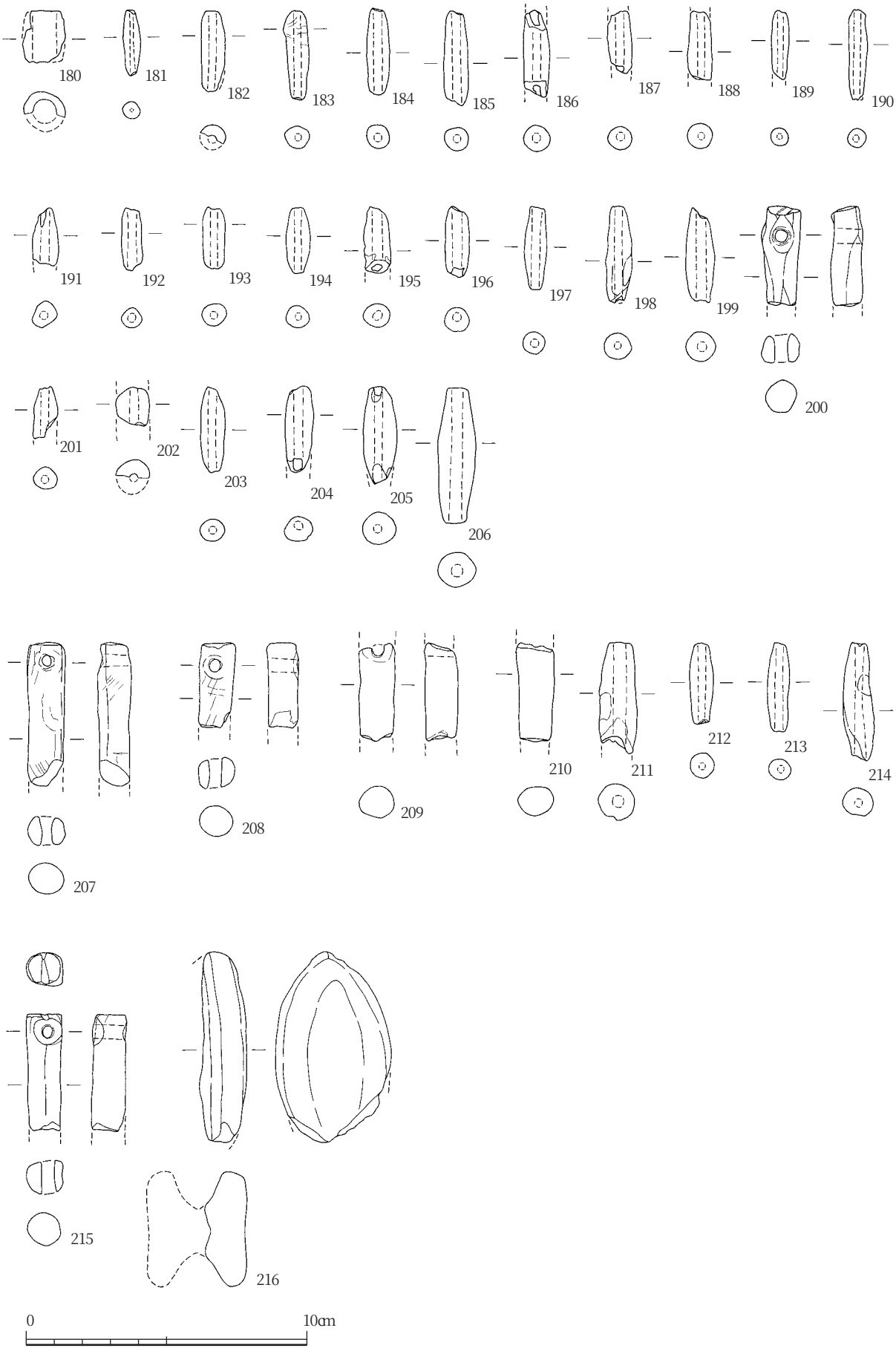
土器群 180・181・189出土土器

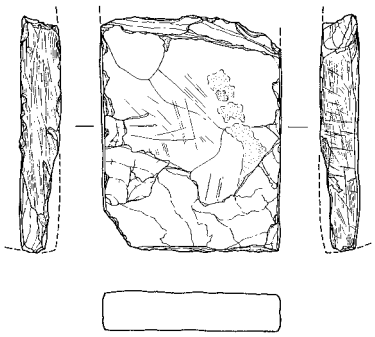


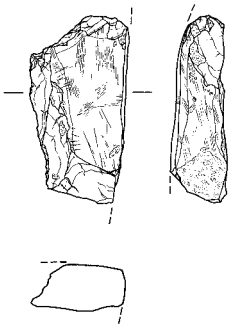
弥生包含層出土土器

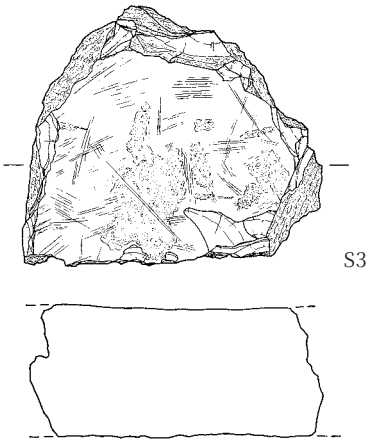

165
166
167
168
169
0
10cm
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
0
10cm

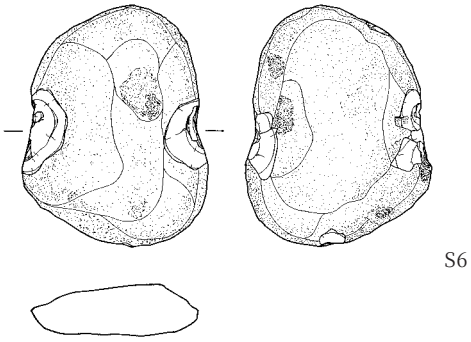
土錘 ⑴


180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
0
10cm

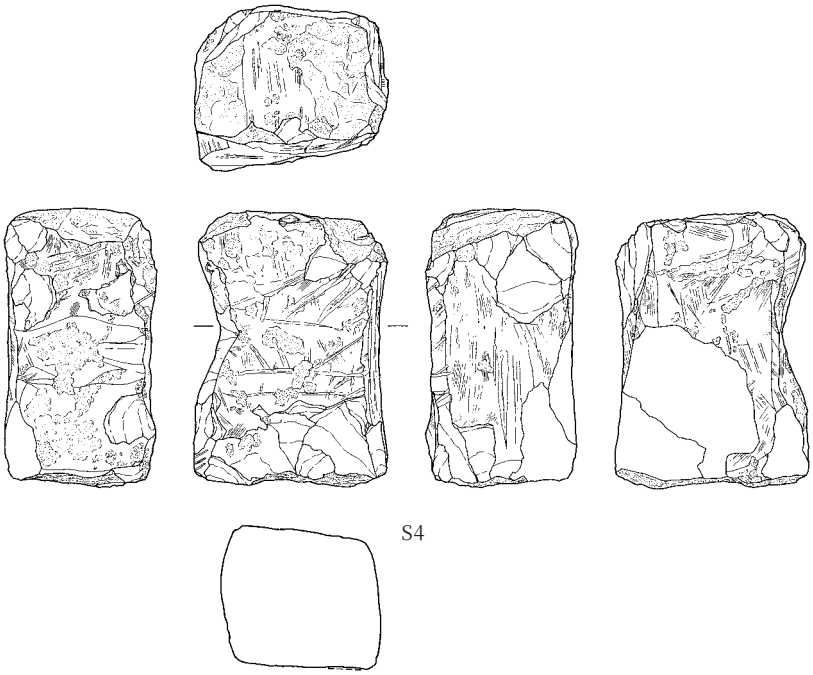


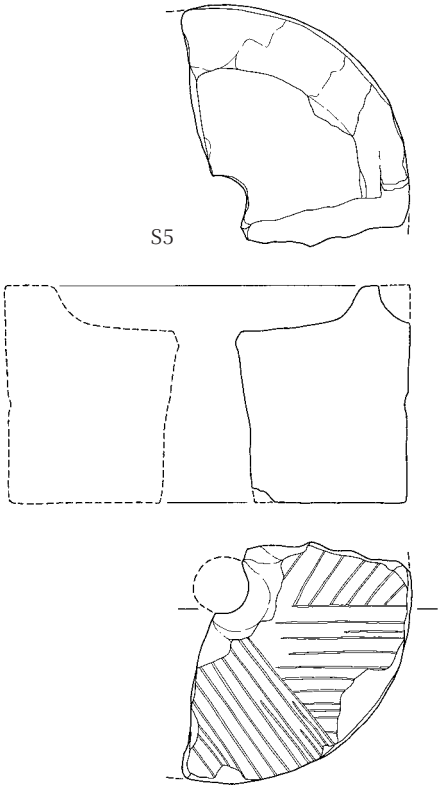




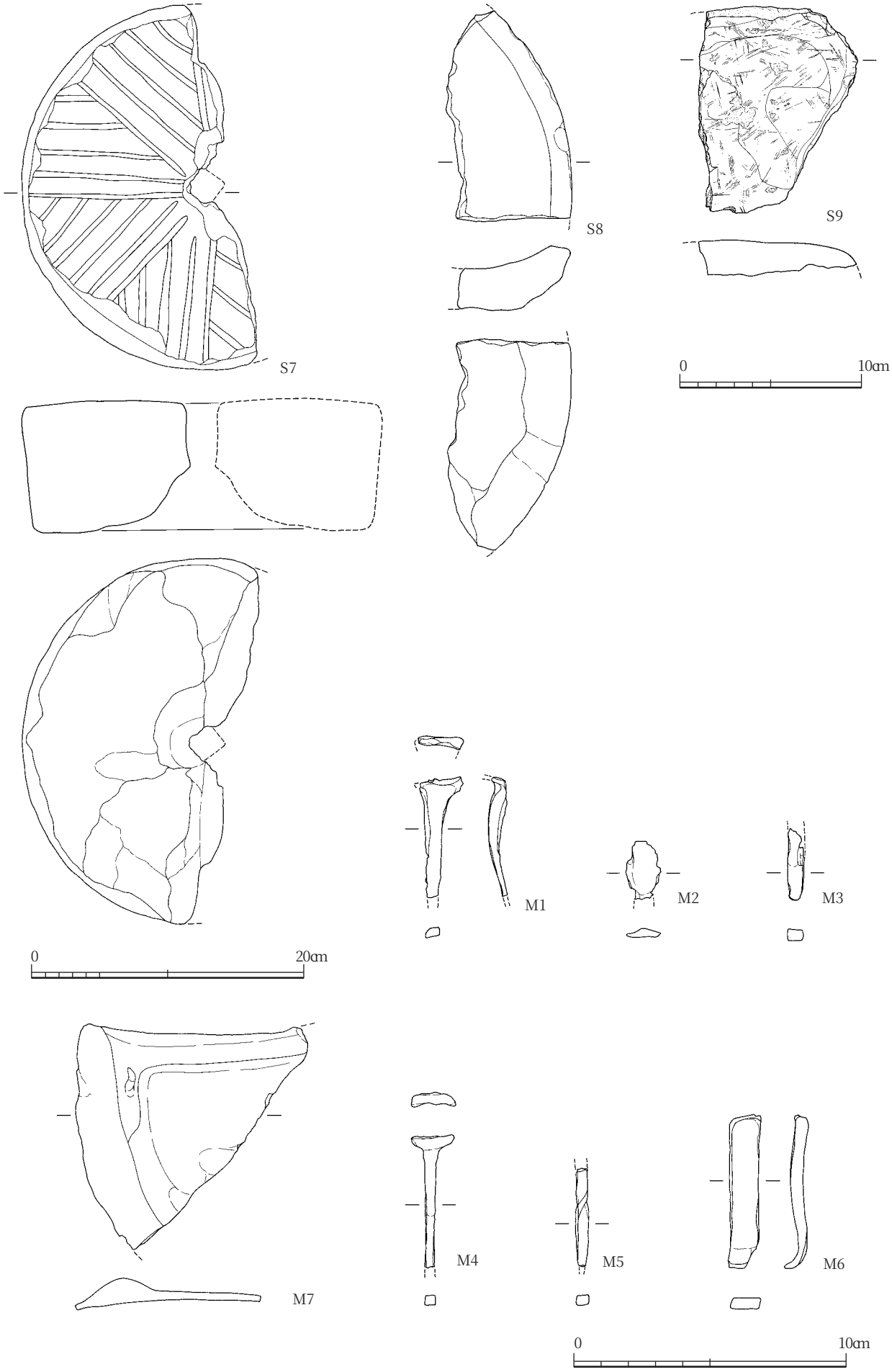


0 10cm

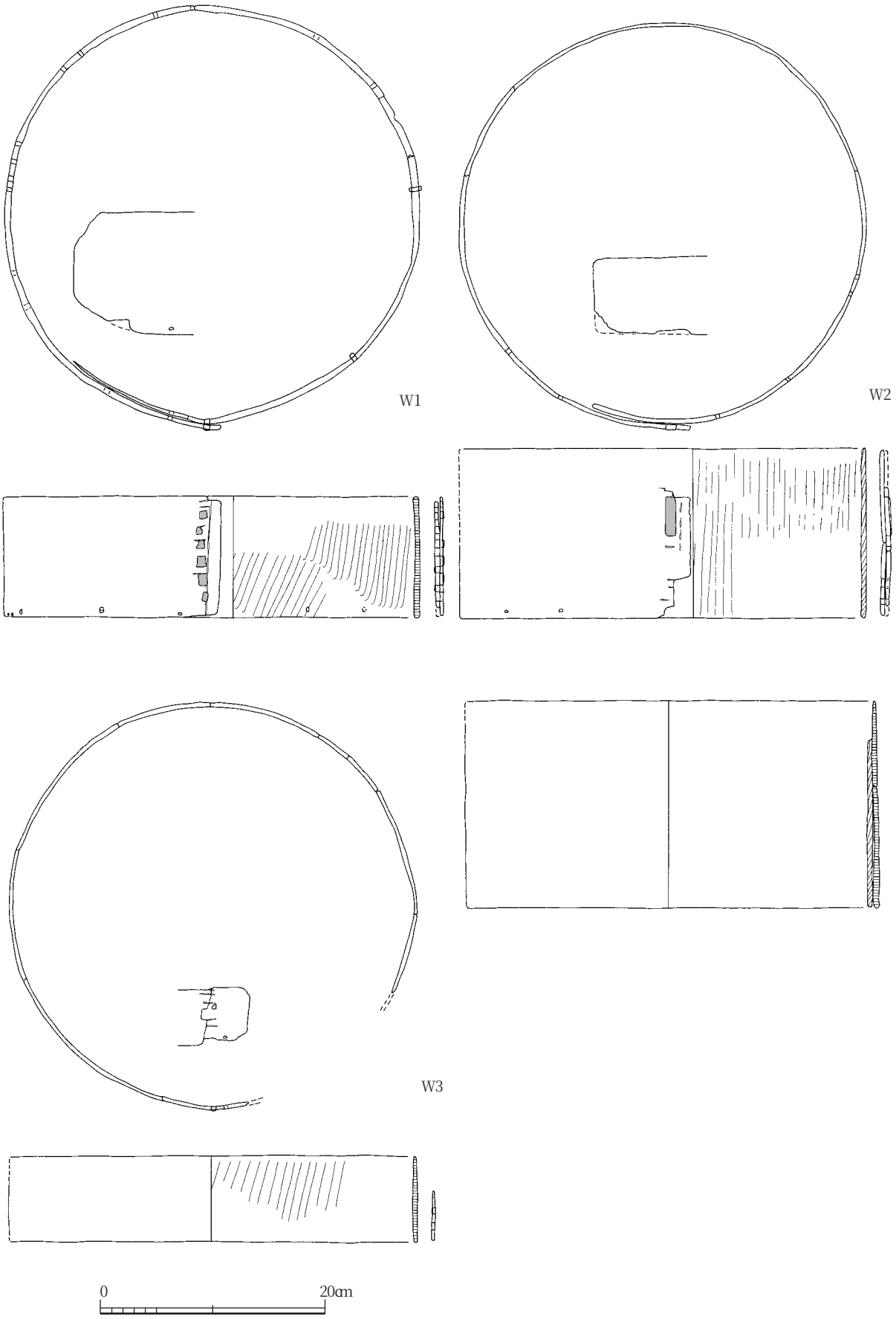




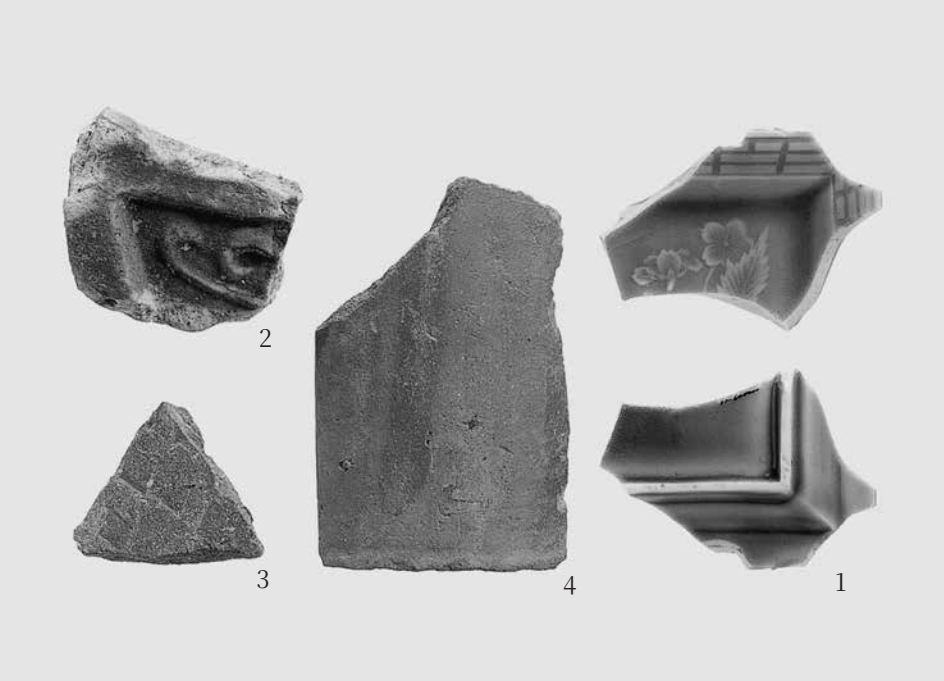
0 20cm



石器 ② 鉄器


W1
W2
W3
0
20cm

写真図版



第 12図　確認調査出土遺物写真

1.南通り遺跡　遠景（北から）

2.南通り遺跡　遠景（西から）

3 調査区全体（真上から、上が西）

4調査区　近景（北から）

5調査区　全景（東から）

6. 溝SD001　礫検出状況（西から）

7. 土坑SK058　遺物検出状況（南から）

8.液状化痕跡検出状況（1）

9.液状化痕跡検出状況（2）

10.液状化痕跡断面III（南東から）

11.液状化痕跡断面IV（北西から）

12.液状化痕跡断面 I（南東から）

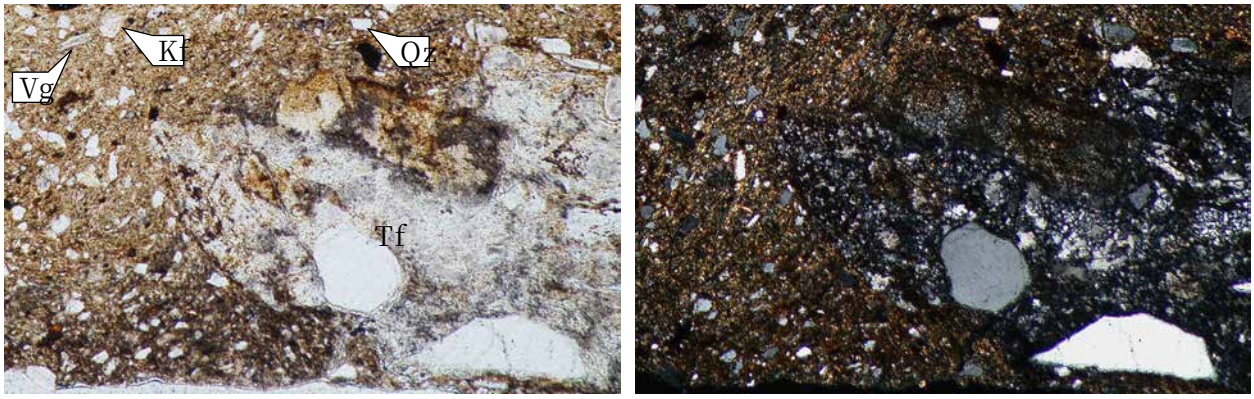
13.液状化痕跡断面 II（北西から）

溝 SD 001出土　大型土錘

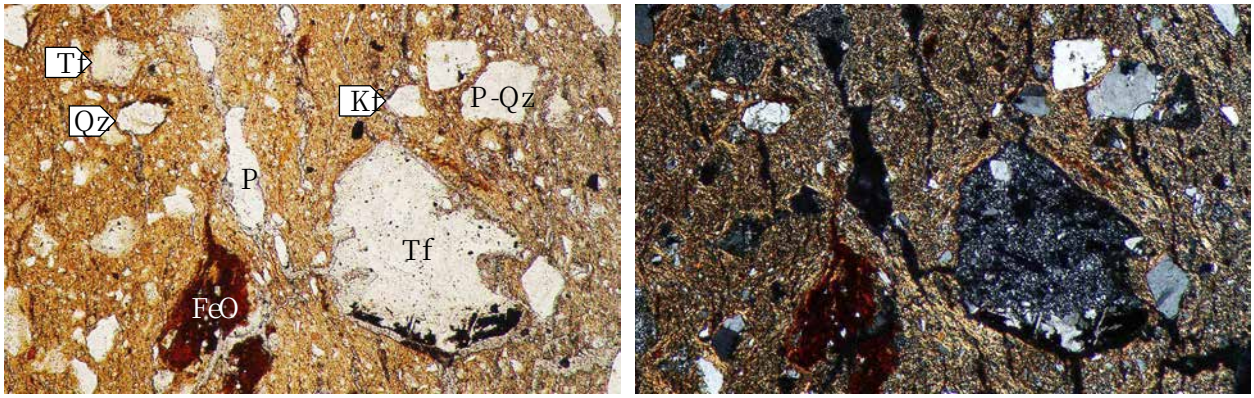
第１面出土　輸入磁器

第３面出土　弥生土器

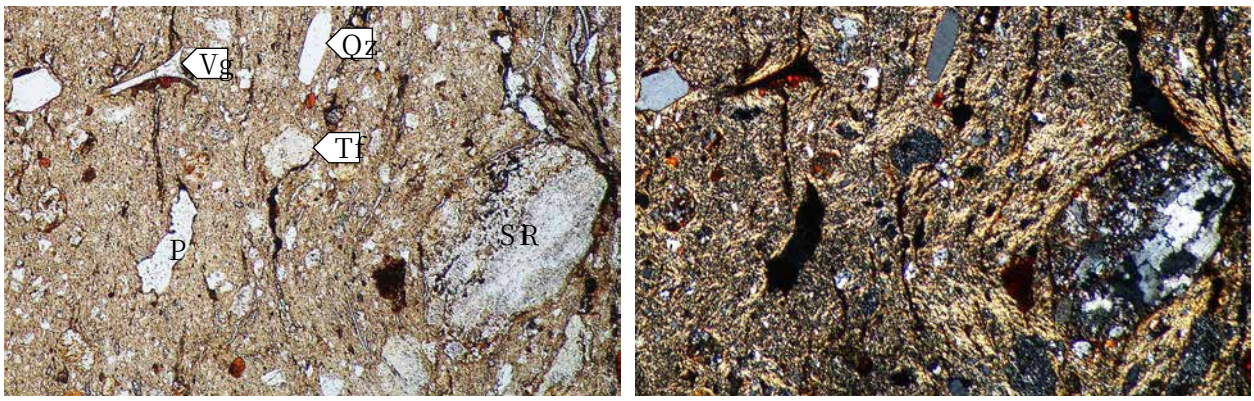
第３面土器群出土　弥生土器



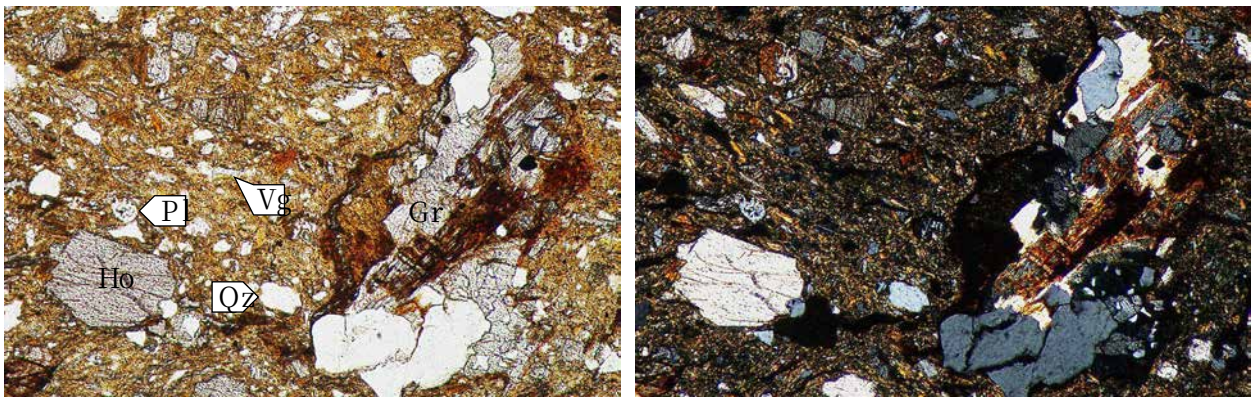
1.資料No.1 (B3区　土器群 181 弥生後期　壺　報告No150)



2.資料No.2 (I 5区　土器群 180 弥生後期　壺　報告No144)



3.資料No.3 (G5区　第3層　弥生後期　甕　報告No162)



4.資料No.4 (I 5区　土器群 189 弥生後期　甕　報告No149)

0.5mm

Qz石英. Kfカリ長石. Pl斜長石. Ho角閃石. Tf凝灰岩. P-Qz多結晶石英.
Gr花崗岩. SiR珪化岩. Vg火山ガラス. FeO酸化鉄. P孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

14.調査区　全景（西から）

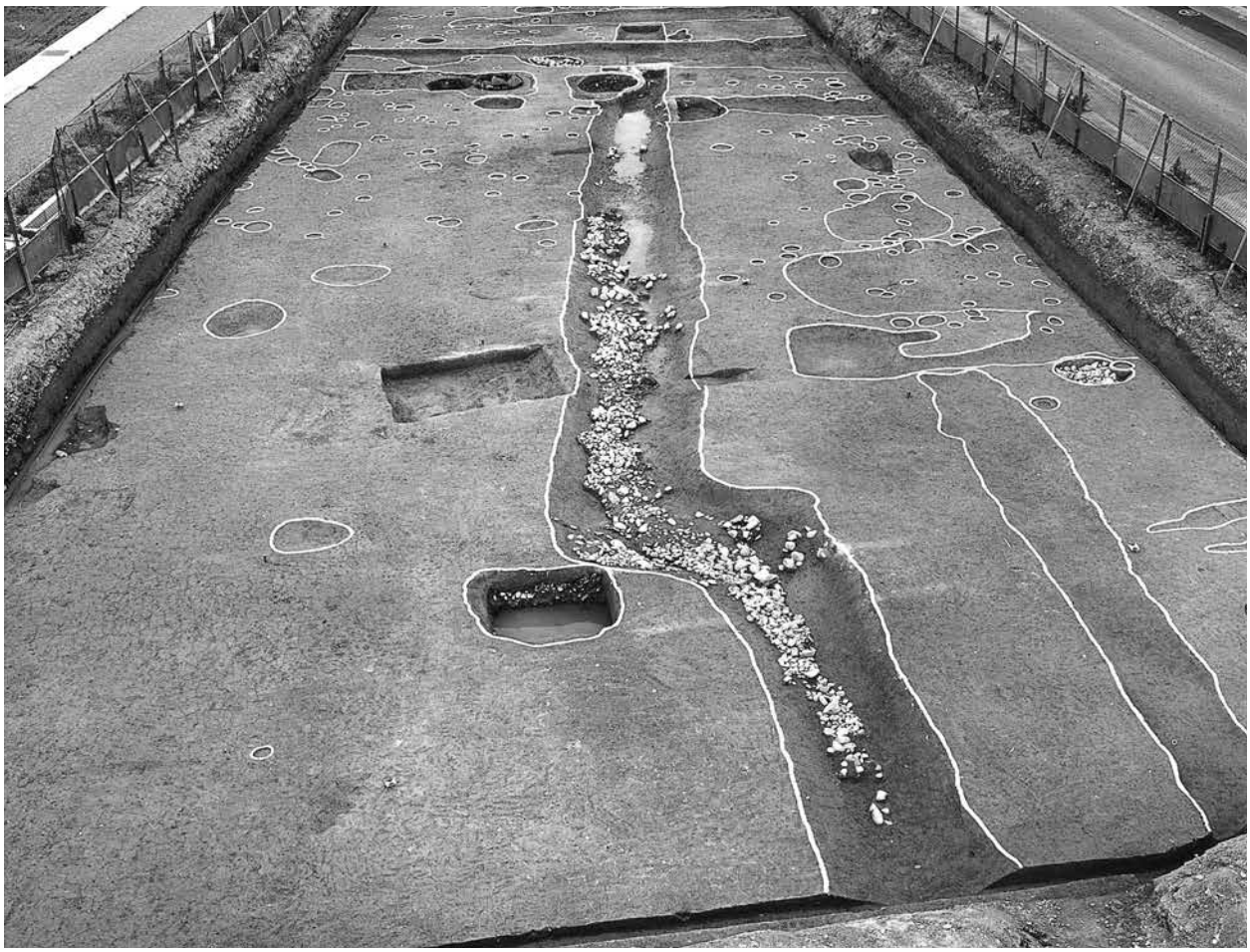
15 調査区　全景（西から）

16 調査区　全景（東から）

17.調査区　西半（東から）

18.調査区　西半（西から）

19.礫群（西から）

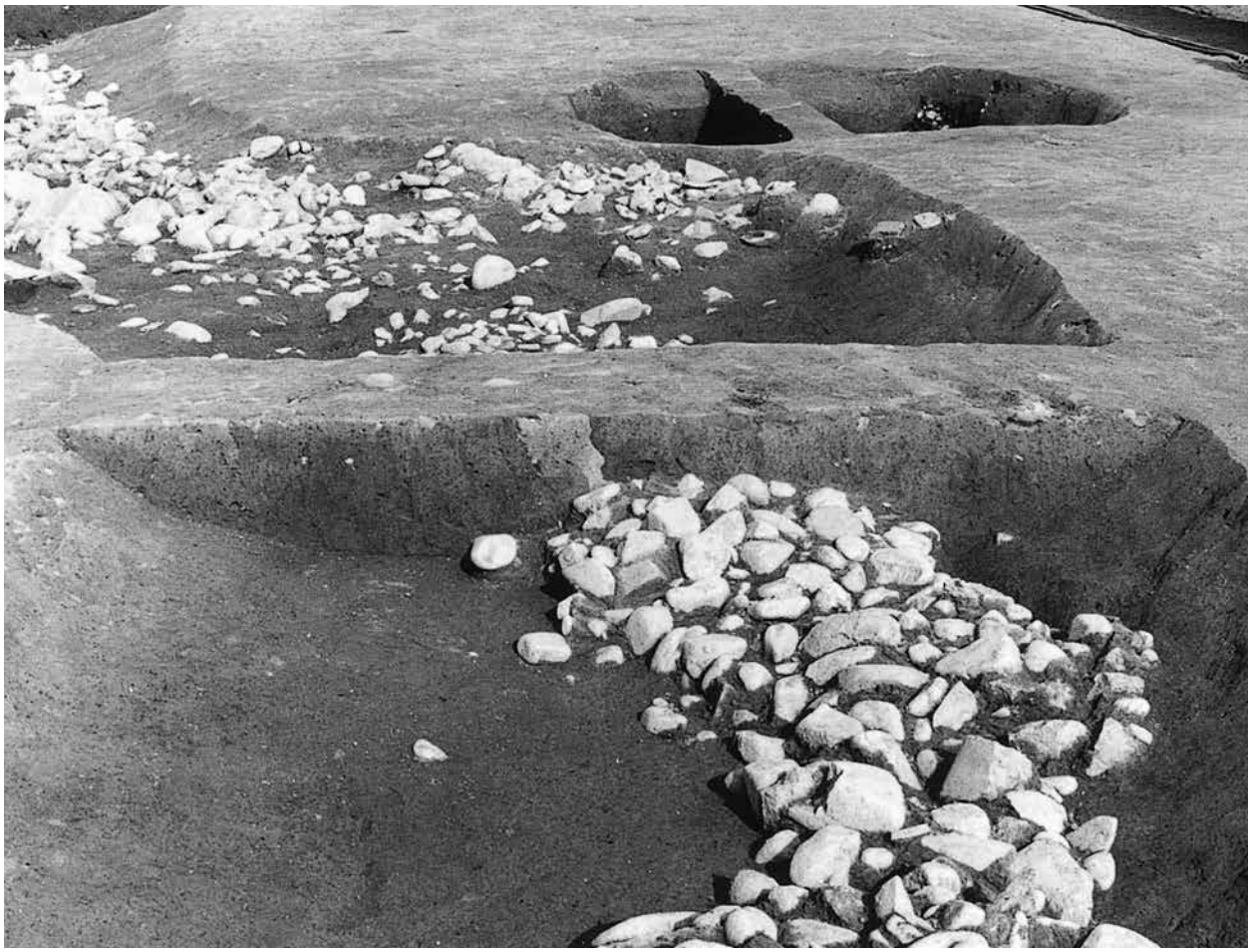


20. 溝 SD 001（東から）

21. 溝 SD 001　礫検出状況（西から）

22. 溝 SD 001　断面（西から）

23. 溝SD 001　礫検出状況（西から）



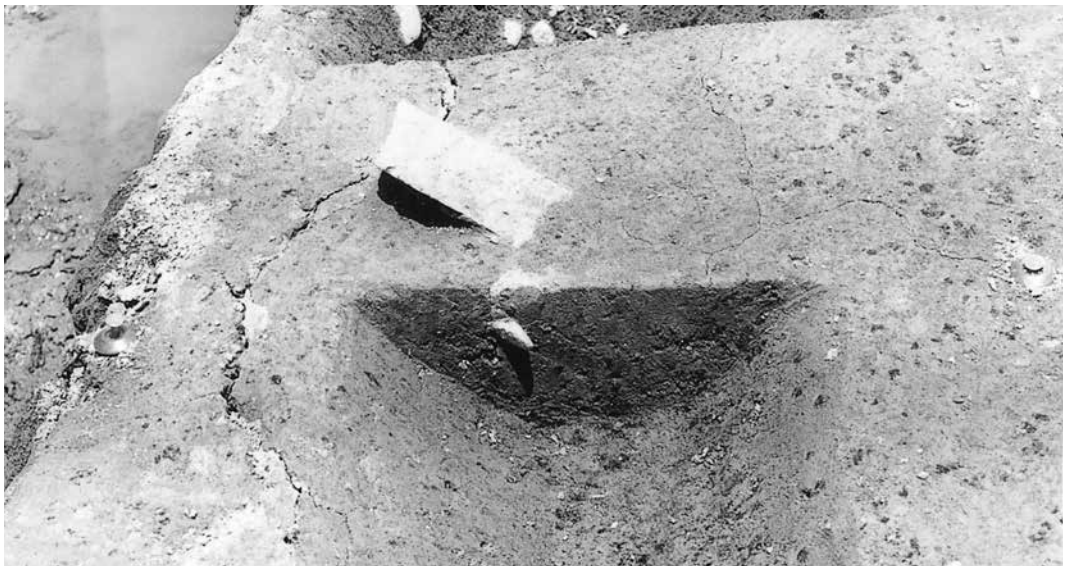
24. 溝SD 006　断面（西から）

25. 溝SD 001
遺物出土状況
（西から）

26. 溝SD 001
遺物出土状況
（南西から）

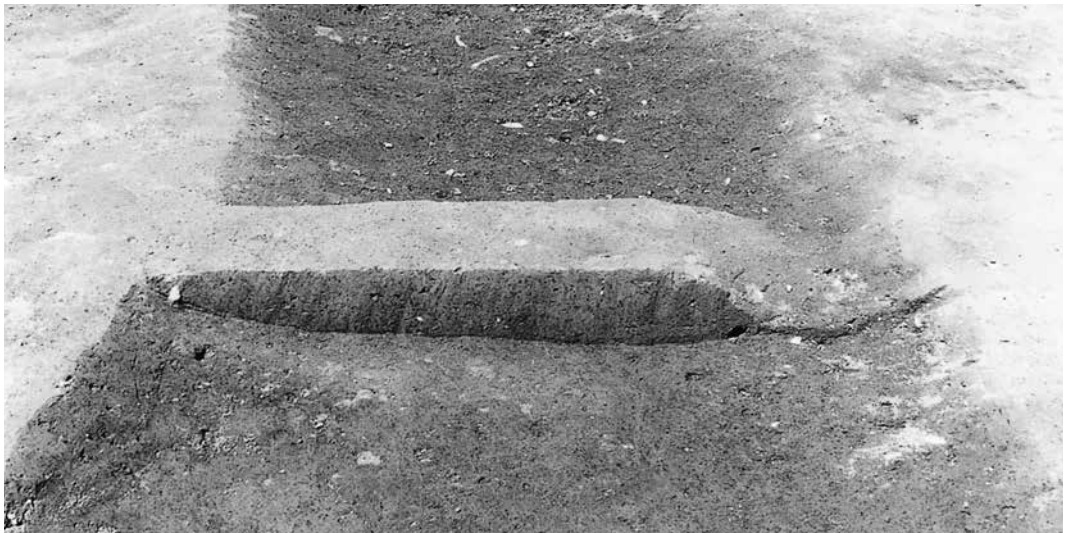
27. 溝SD 001
遺物出土状況
（南西から）

28. 溝SD 002　断面
（東から）



29. 溝SD 004　断面
（南から）

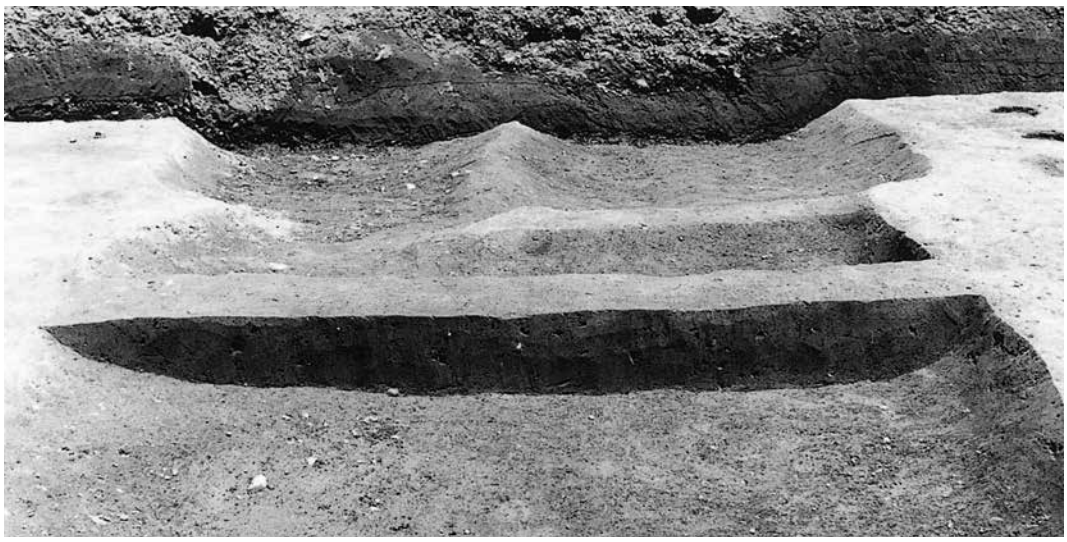
30. 溝SD 006　断面
（南から）



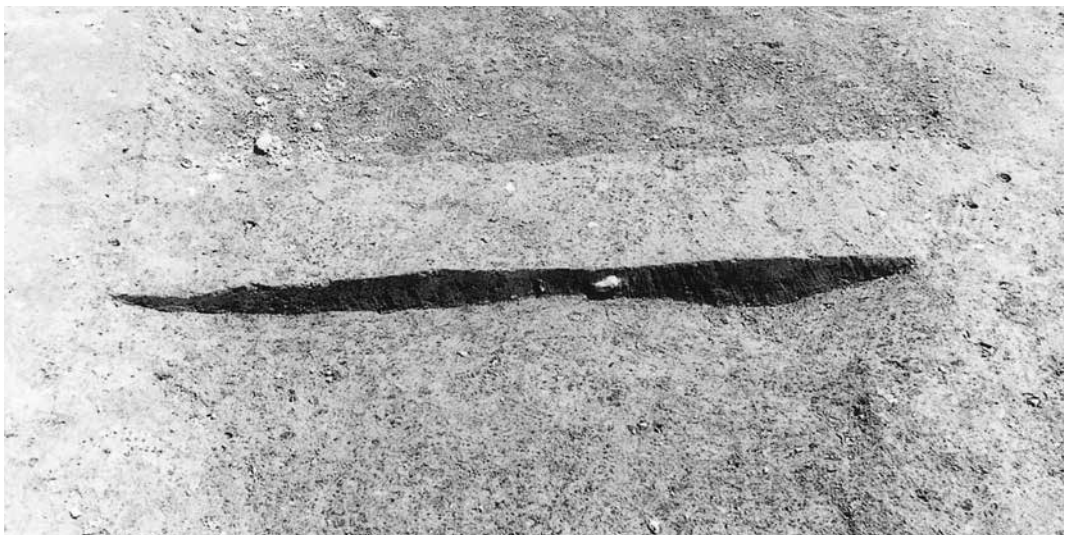
31.溝SD 023　断面
（南から）

32. 溝SD 010　断面
（南から）

33.溝SD 020　断面
（南から）

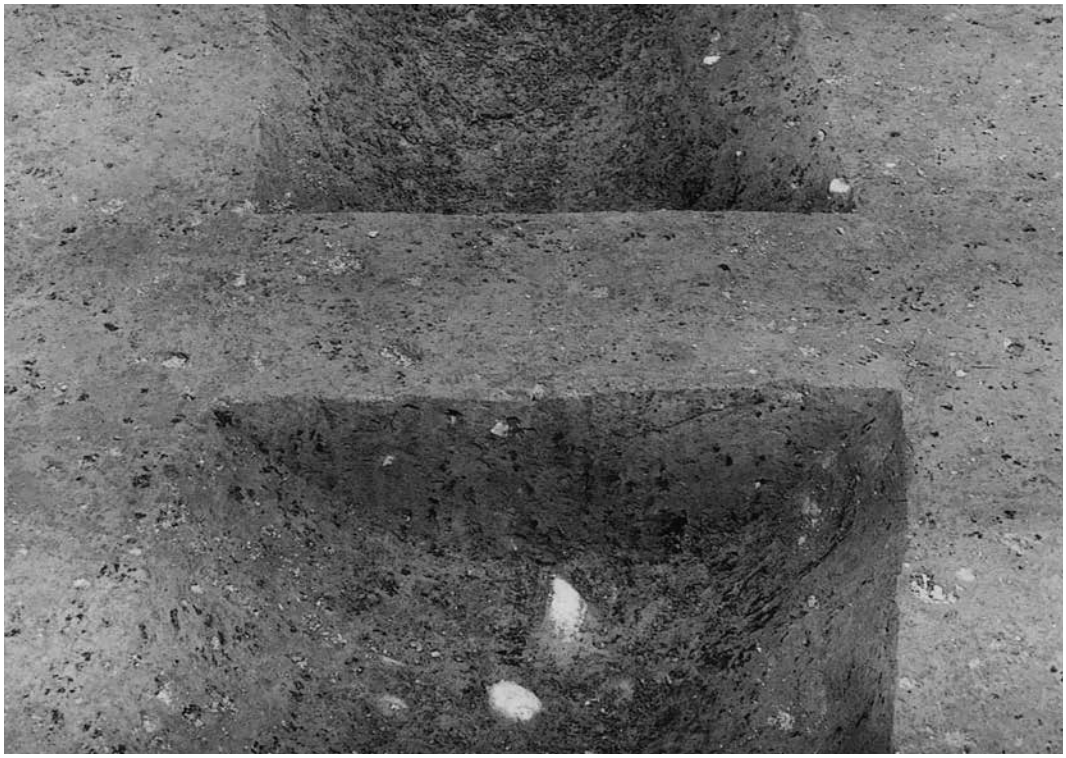


34. 溝SD 013　断面
（南から）



35.溝SD 057　断面
（南から）

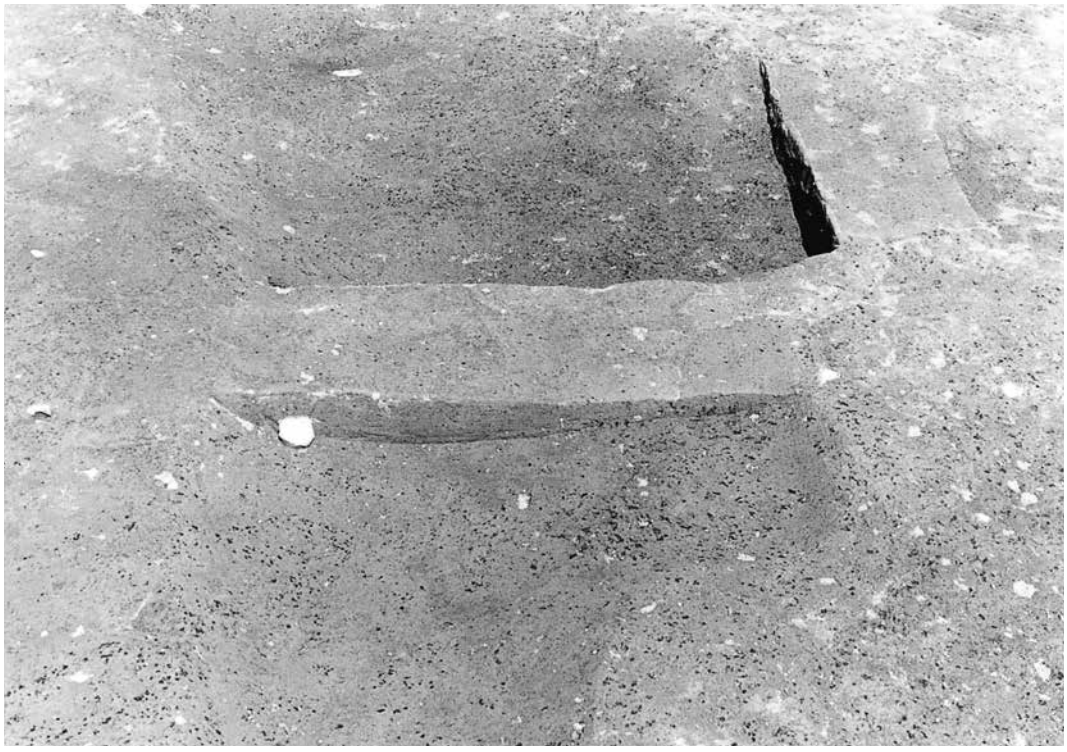
36. 溝SD 039　断面
（東から）



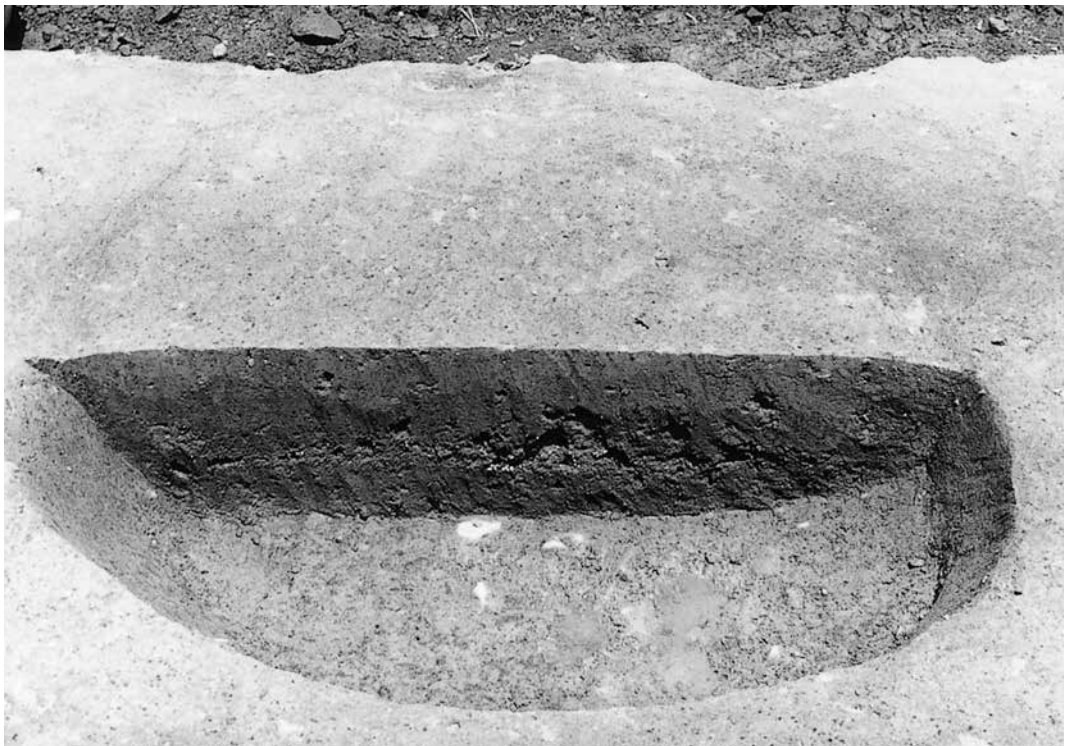
37. 溝SD 003　断面
（東から）

38. 土坑SK 168　断面
（東から）

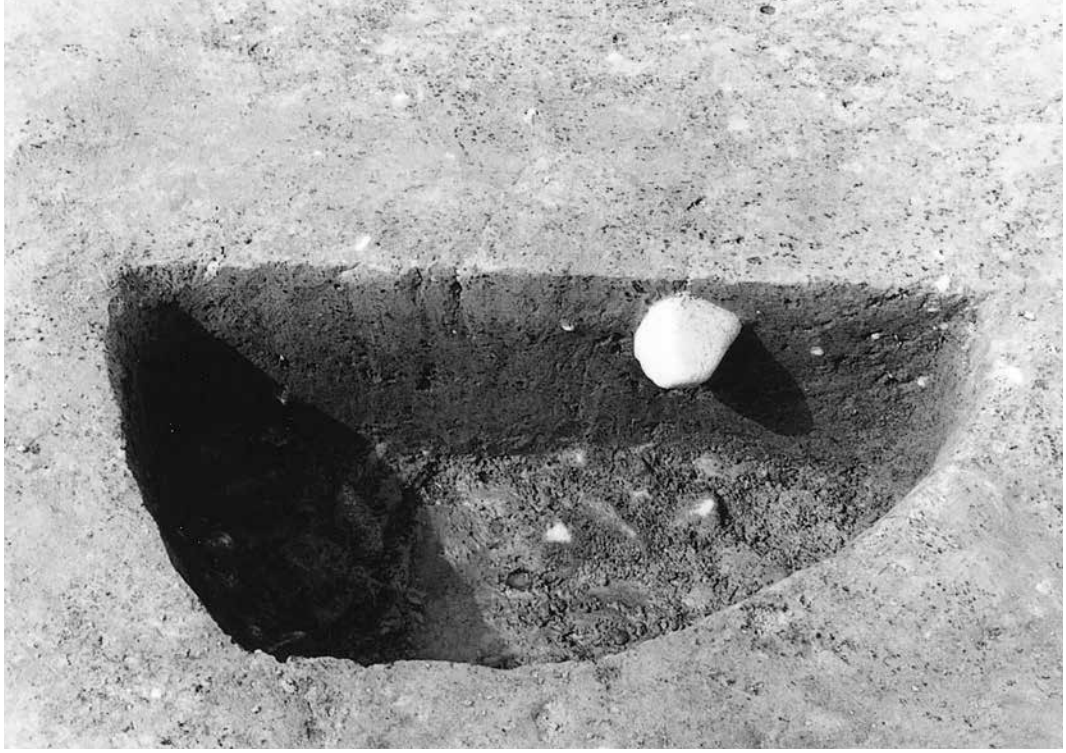
39. 土坑SK 148　断面
（南東から）



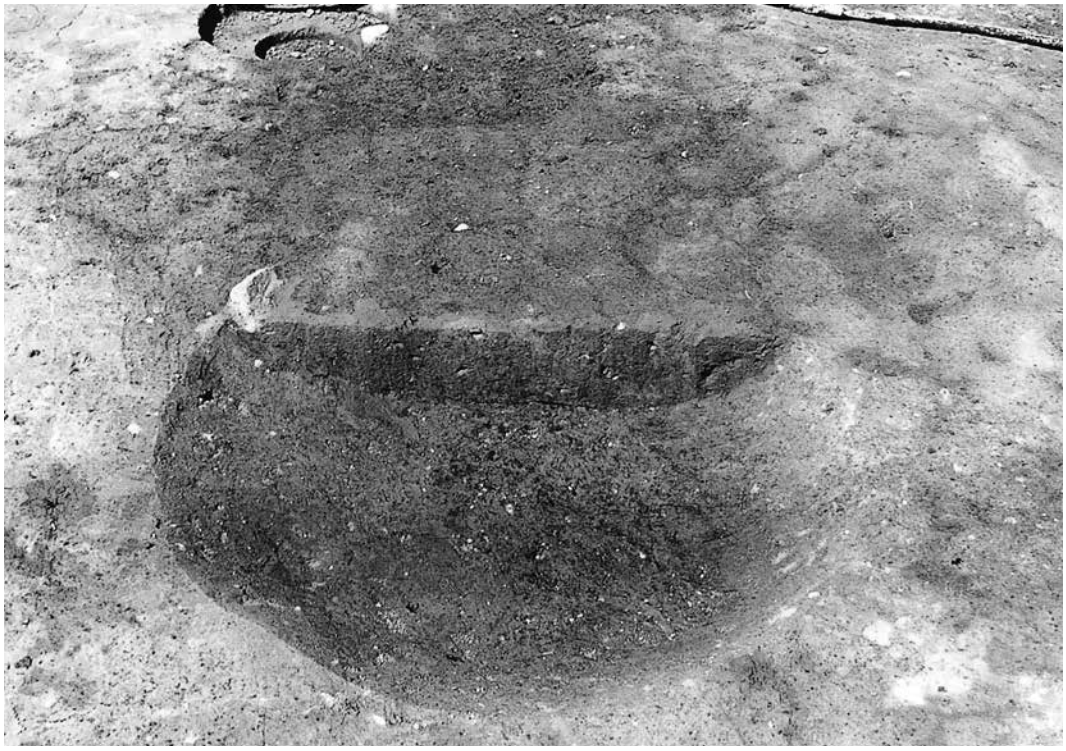
40. 土坑SK 005　断面
（東から）



41. 土坑SK 008　断面
（南から）

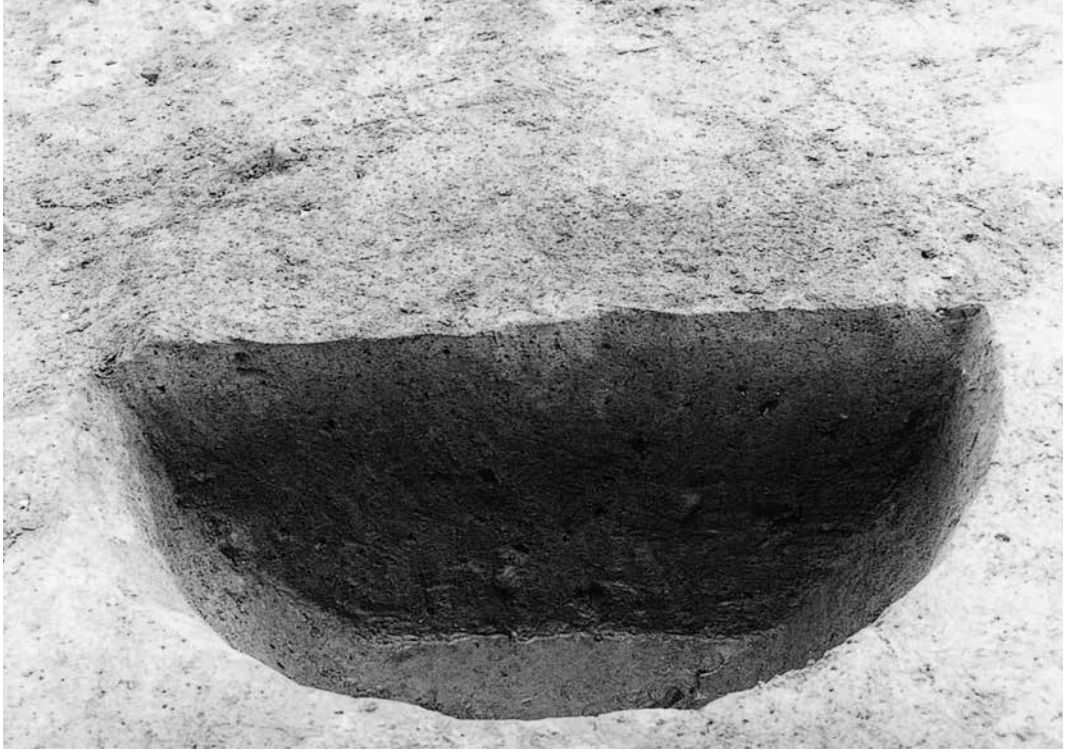


42. 土坑SK 007　断面
（南から）



43. 土坑SK 030　断面
（南から）

44. 土坑SK 063　断面
（南から）

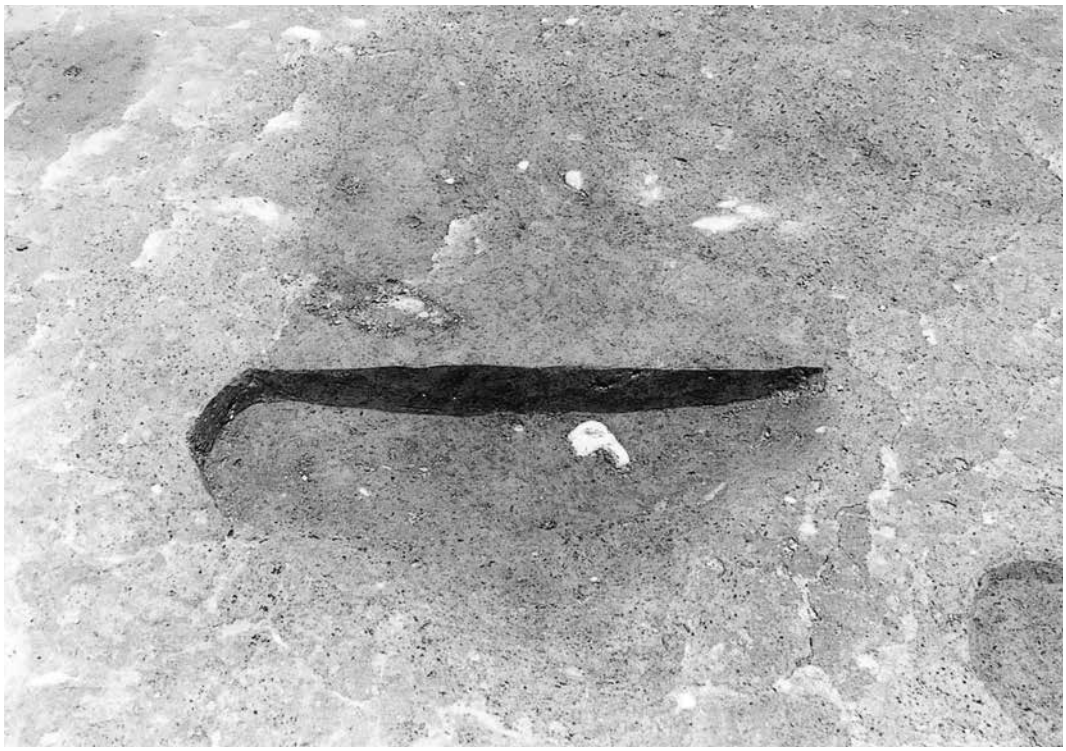


45. 土坑SK 027　断面
（南から）

46. 土坑SK 094　断面
（北から）

47. 土坑SK 009　断面
（南から）

48. 土坑SK 048　断面
（北から）

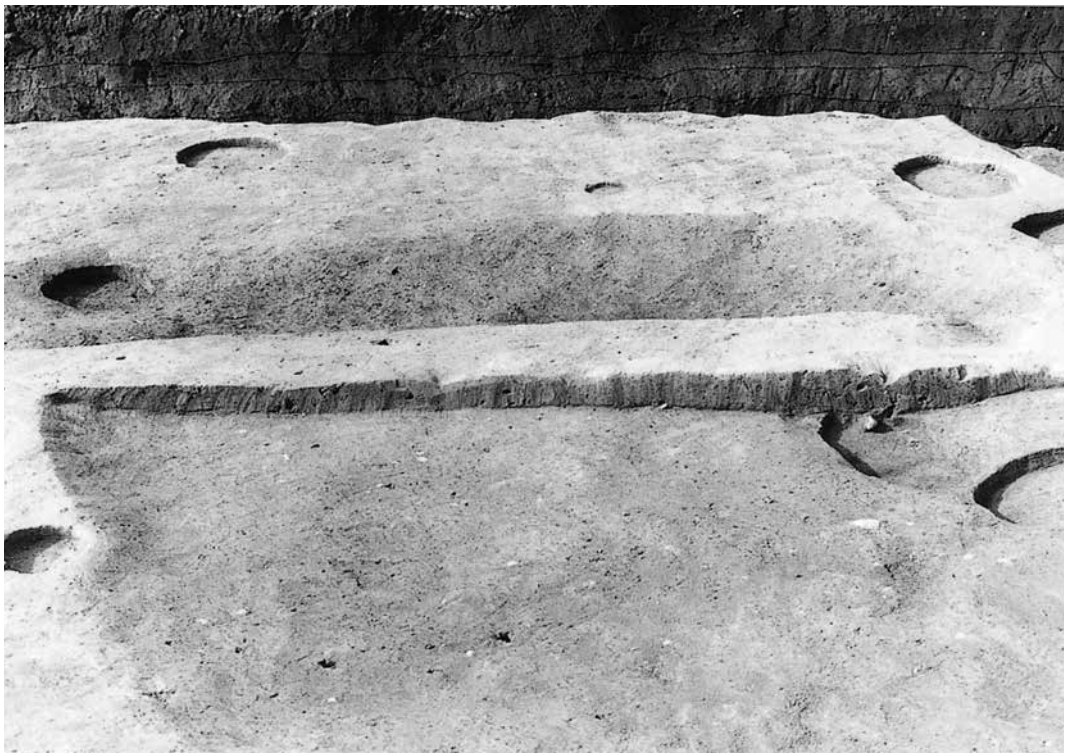


49. 土坑SK 029　断面
（南から）

50. 土坑SK 047　断面
（東から）

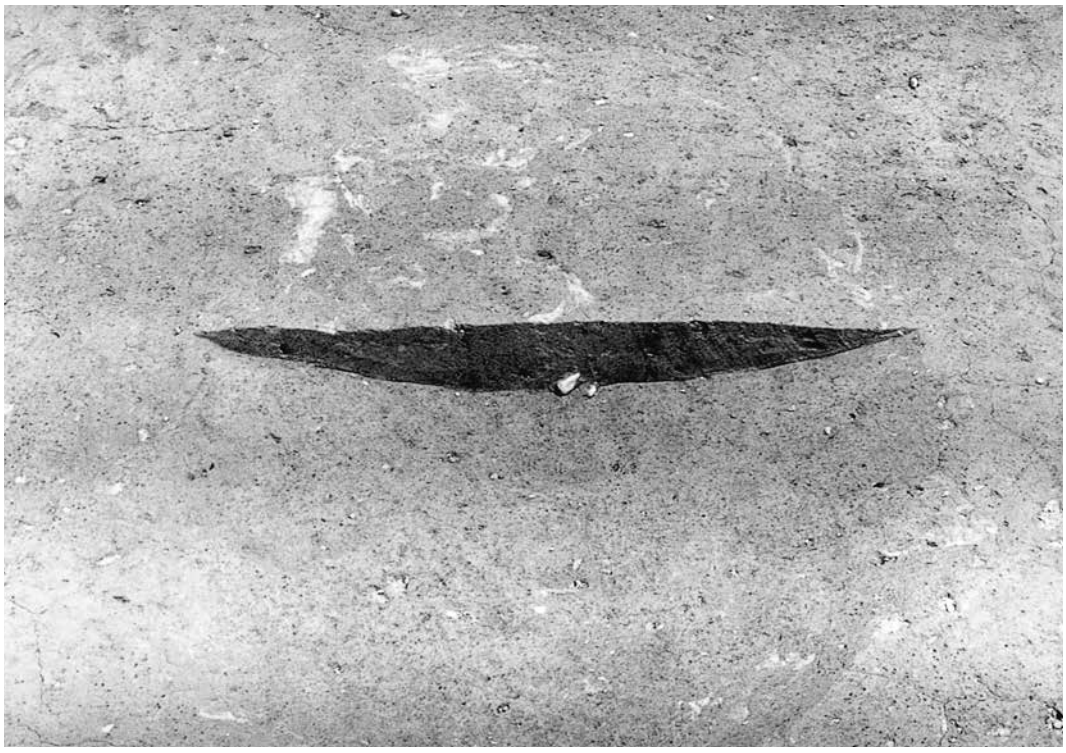
51. 土坑SK 032　断面
（南から）

52. 土坑SK 032
遺物出土状況
（南西から）

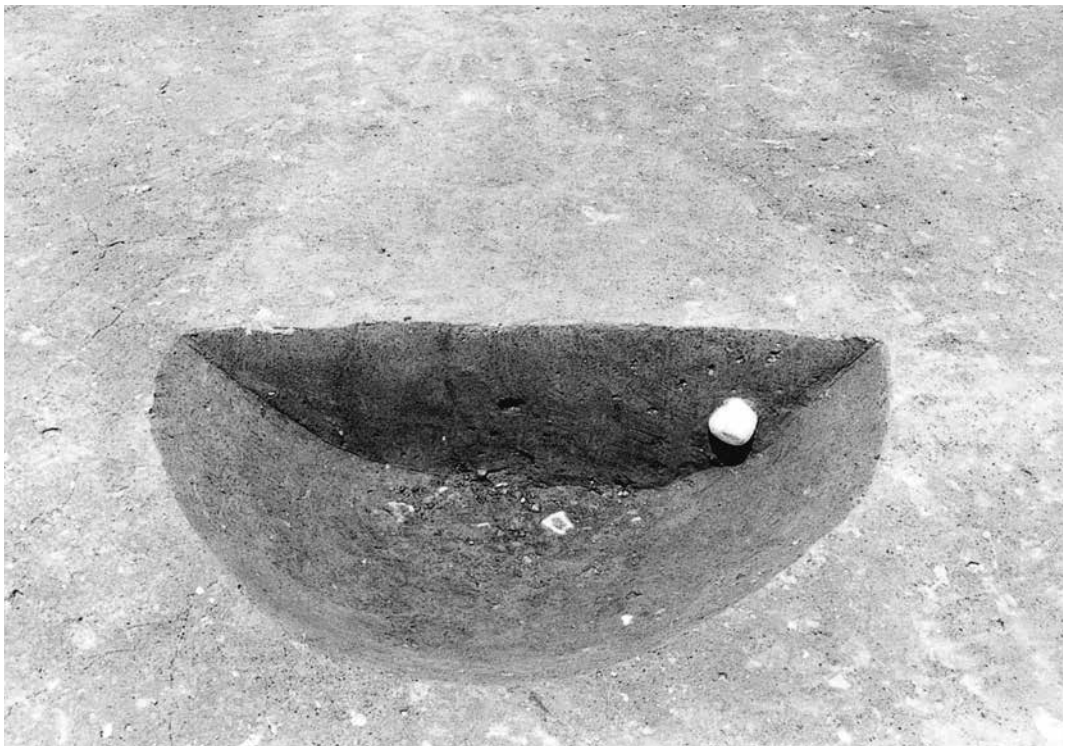


53. 土坑SK 055　断面
（南から）

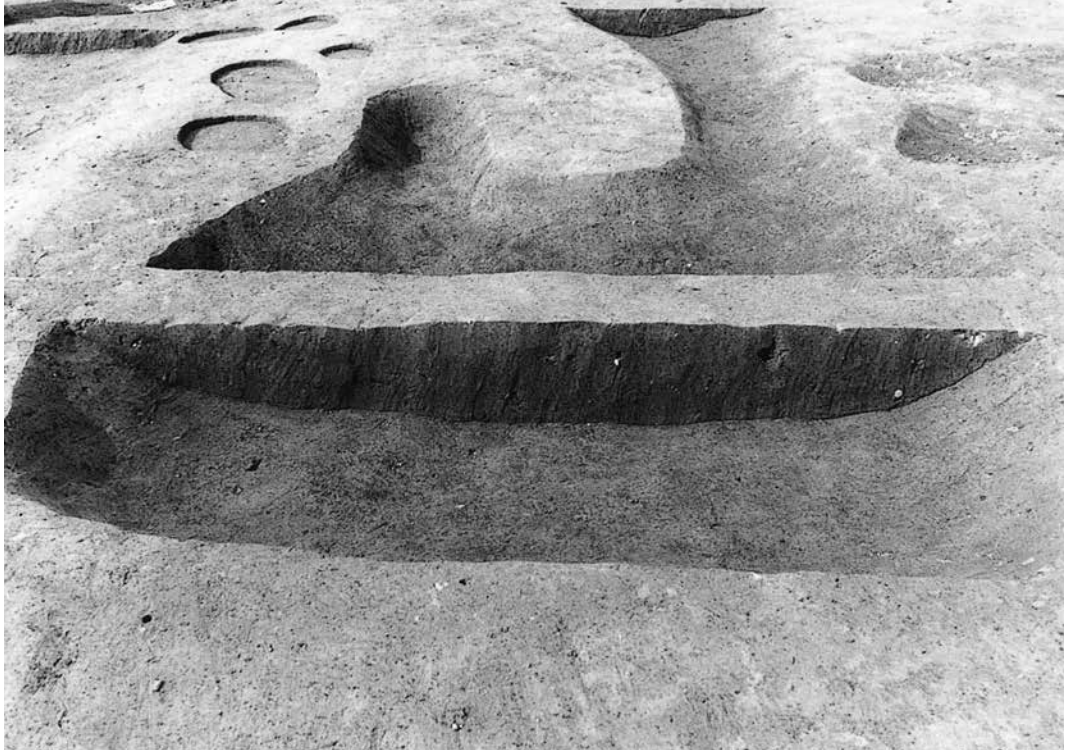
54. 土坑SK 062　断面
（南から）



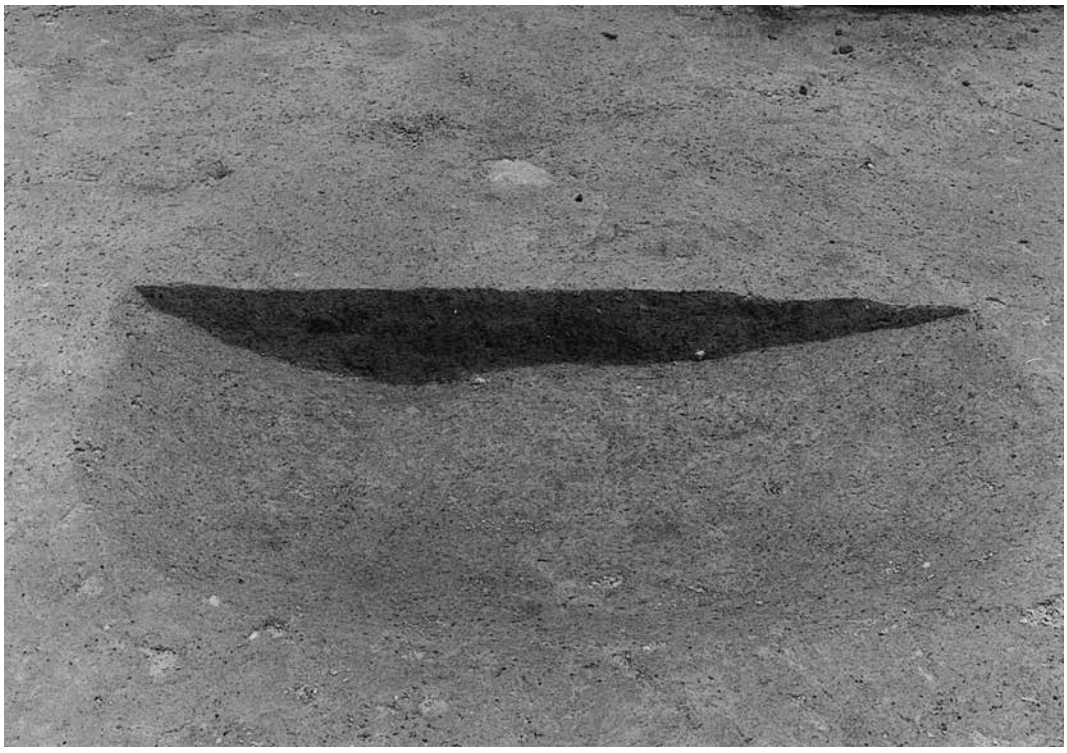
55. 土坑SK 044　断面
（南から）



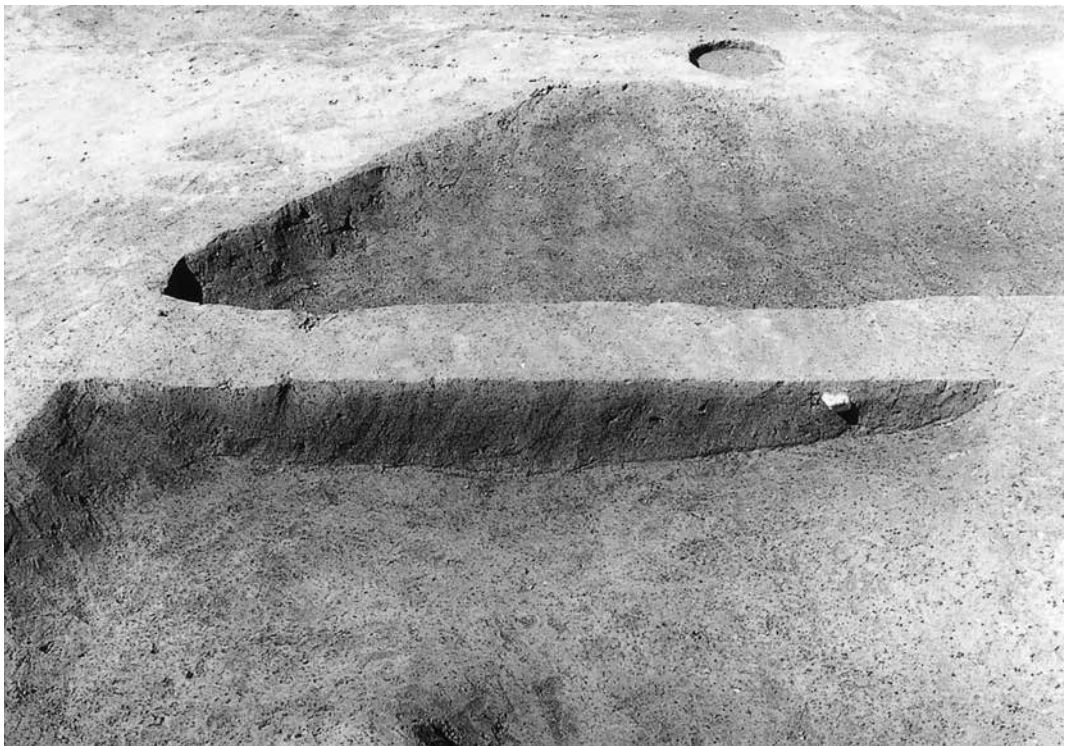
56. 土坑SK 045　断面
（東から）



57. 土坑SK 056　断面
（南から）

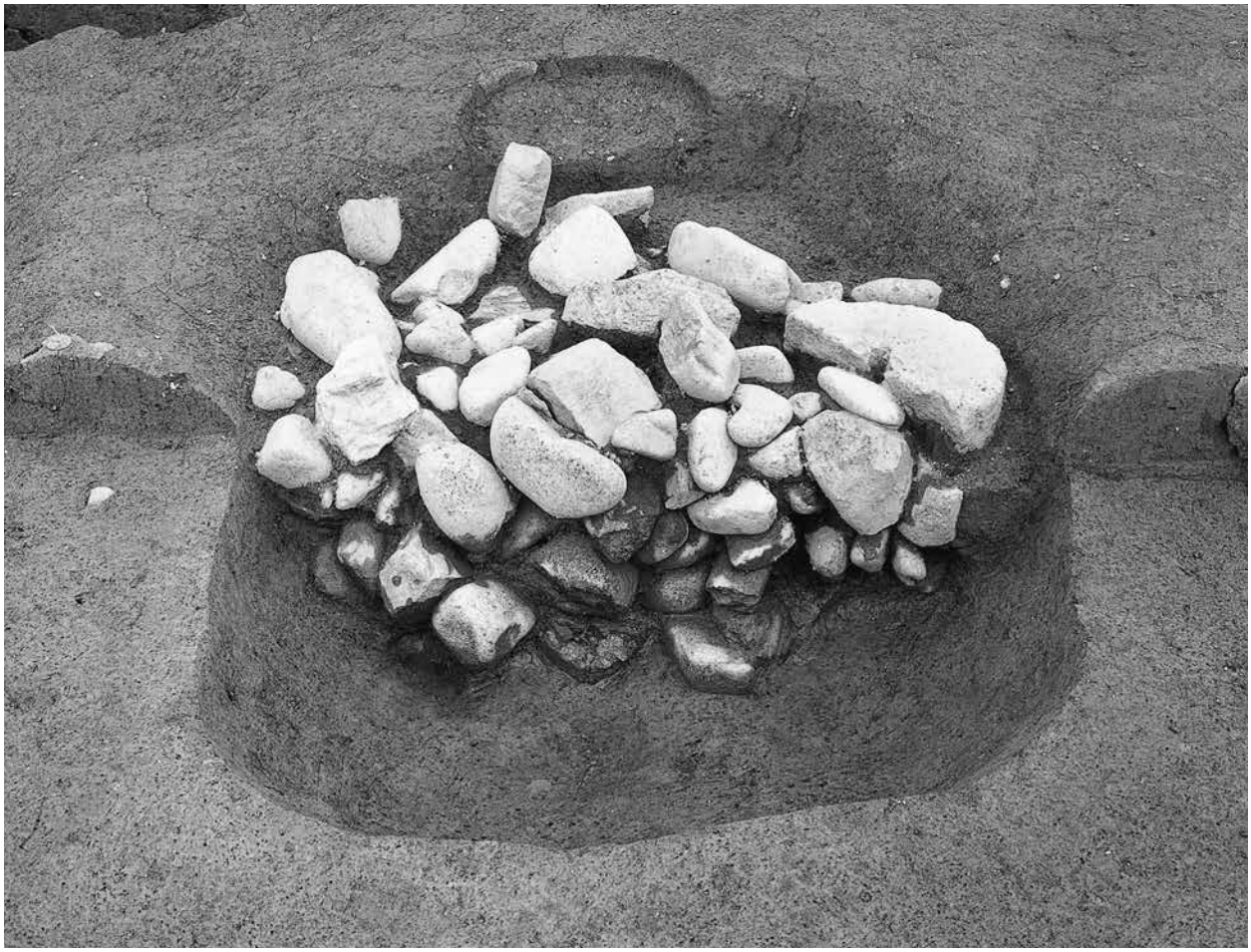


58. 土坑SK 049　断面
（南から）



59. 土坑SK 072　断面
（南から）

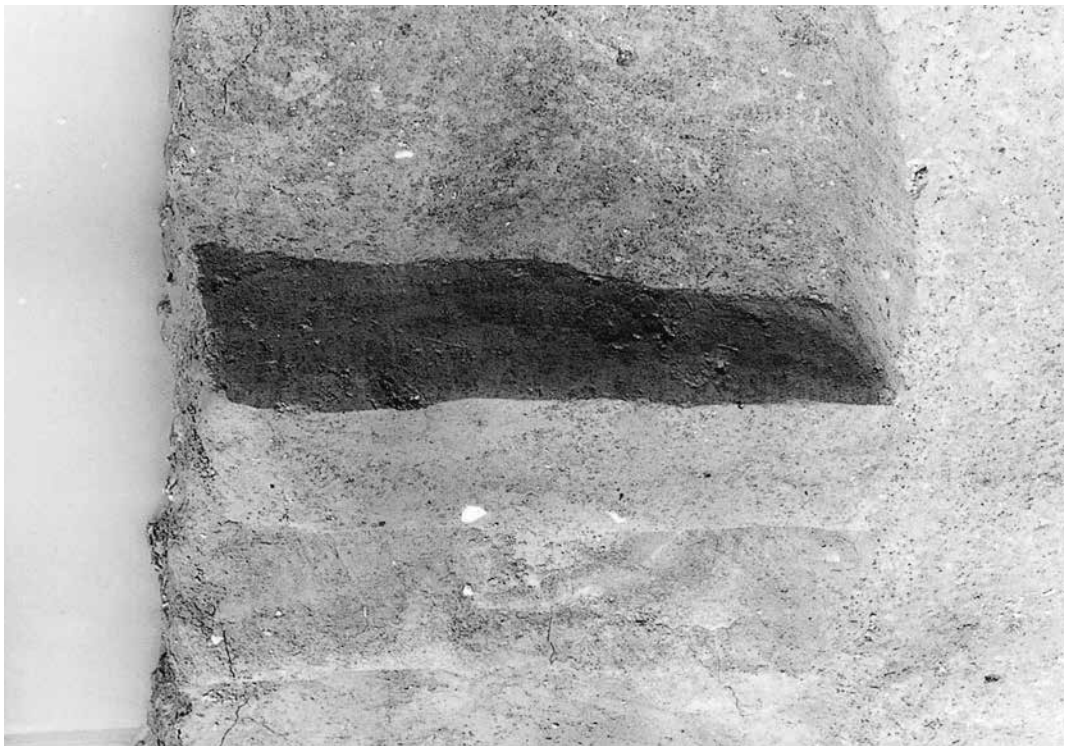
60. 土坑SK 058　礫検出状況（南から）



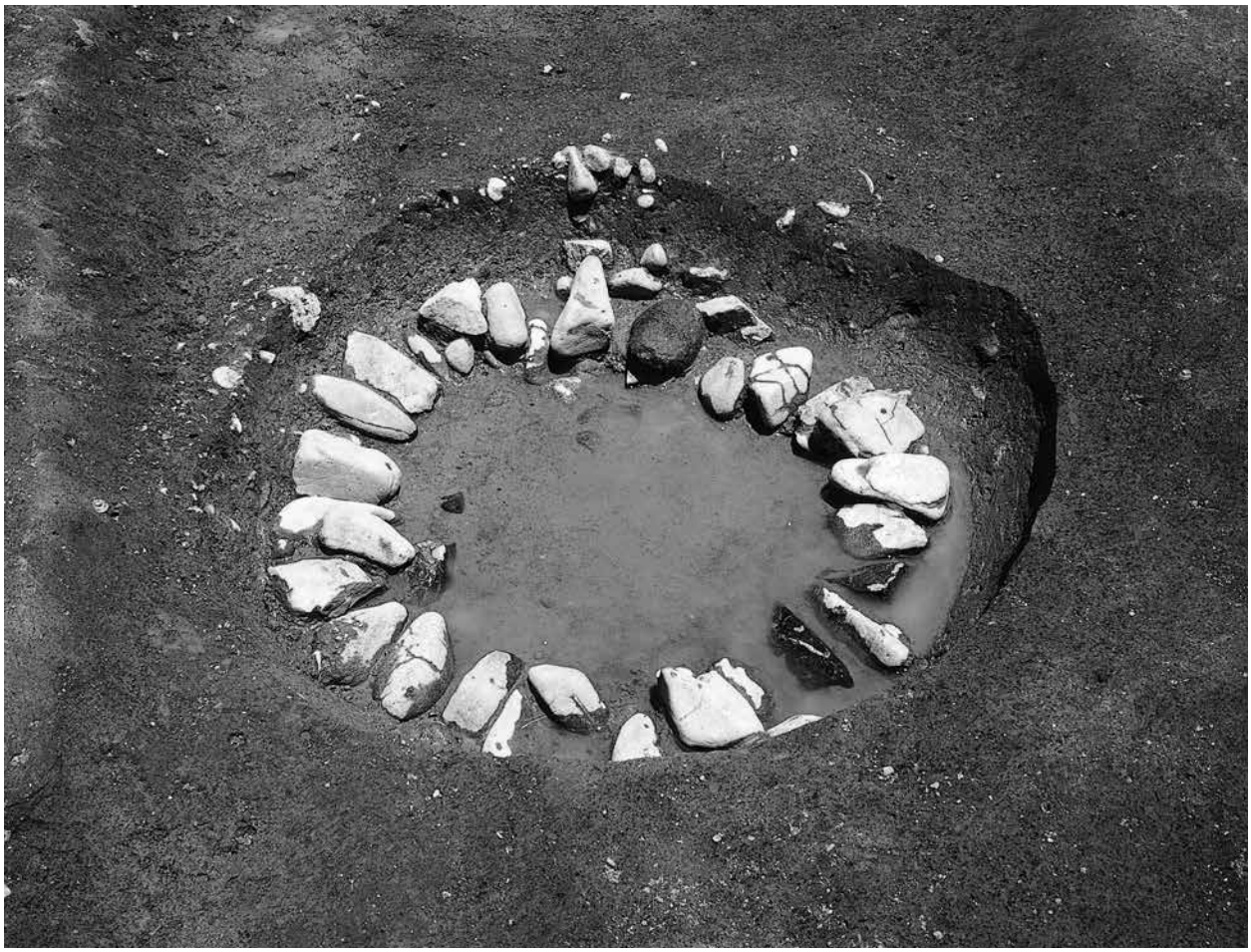
61. 土坑SK 058　断面（南から）

62. 土坑SK 059　断面
（南から）

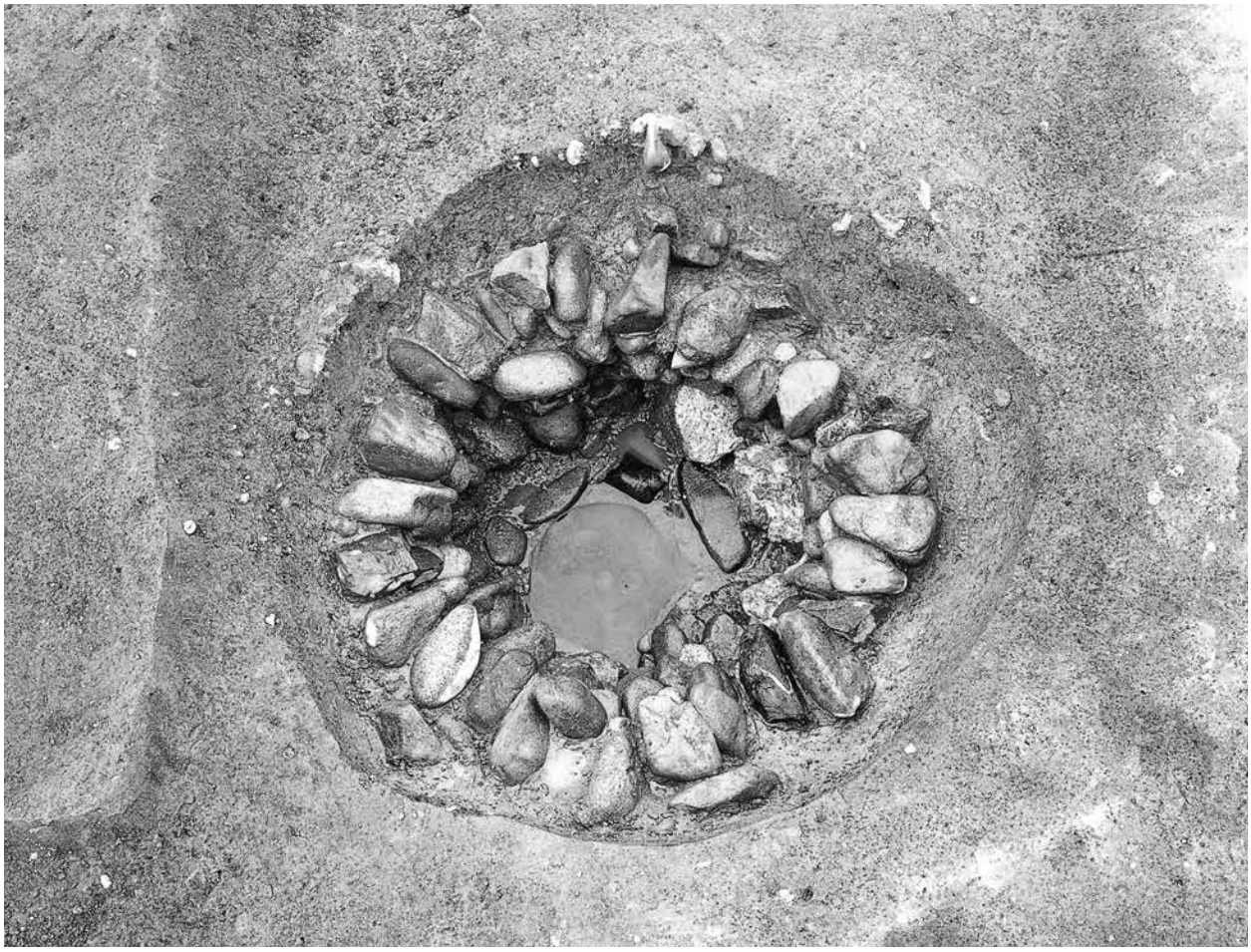
63. 土坑SK 053　断面
（西から）



64. 土坑SK 054　断面
（西から）



65. 井戸SE 040　検出状況（南から）



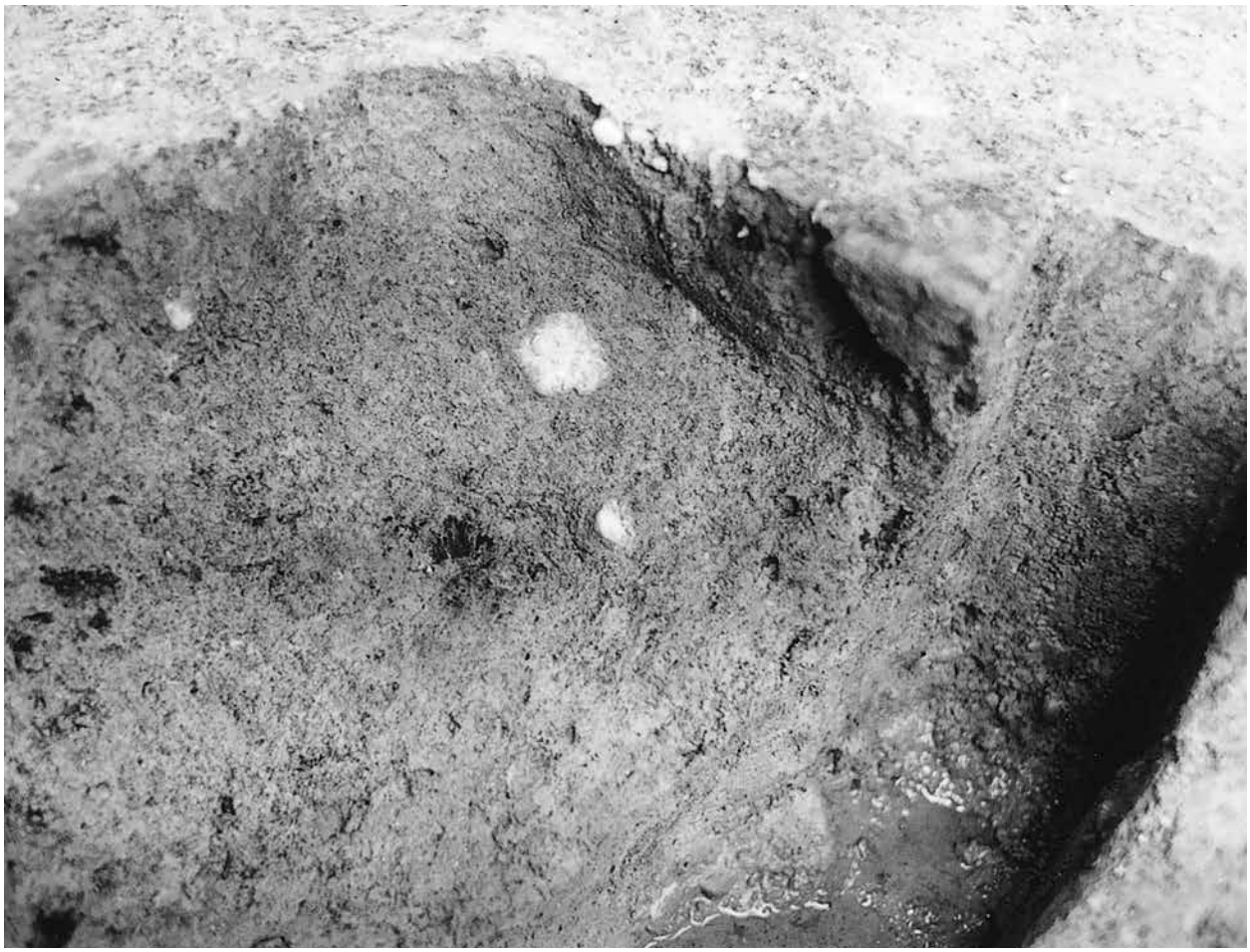
66. 井戸SE 040　完掘状況（南から）

67. 柱穴P 022
鉄器出土状況
（南東から）

68. 柱穴P 140
石臼出土状況
（東から）

69. 柱穴P 125
断ち割り断面
（東から）

70. 土坑SK 158　完掘状況（南から）



71. 土坑SK 158　断ち割り断面（東から）

72. 土器群　175　遺物出土状況（南から）

73. 土器群　151　遺物出土状況（南東から）

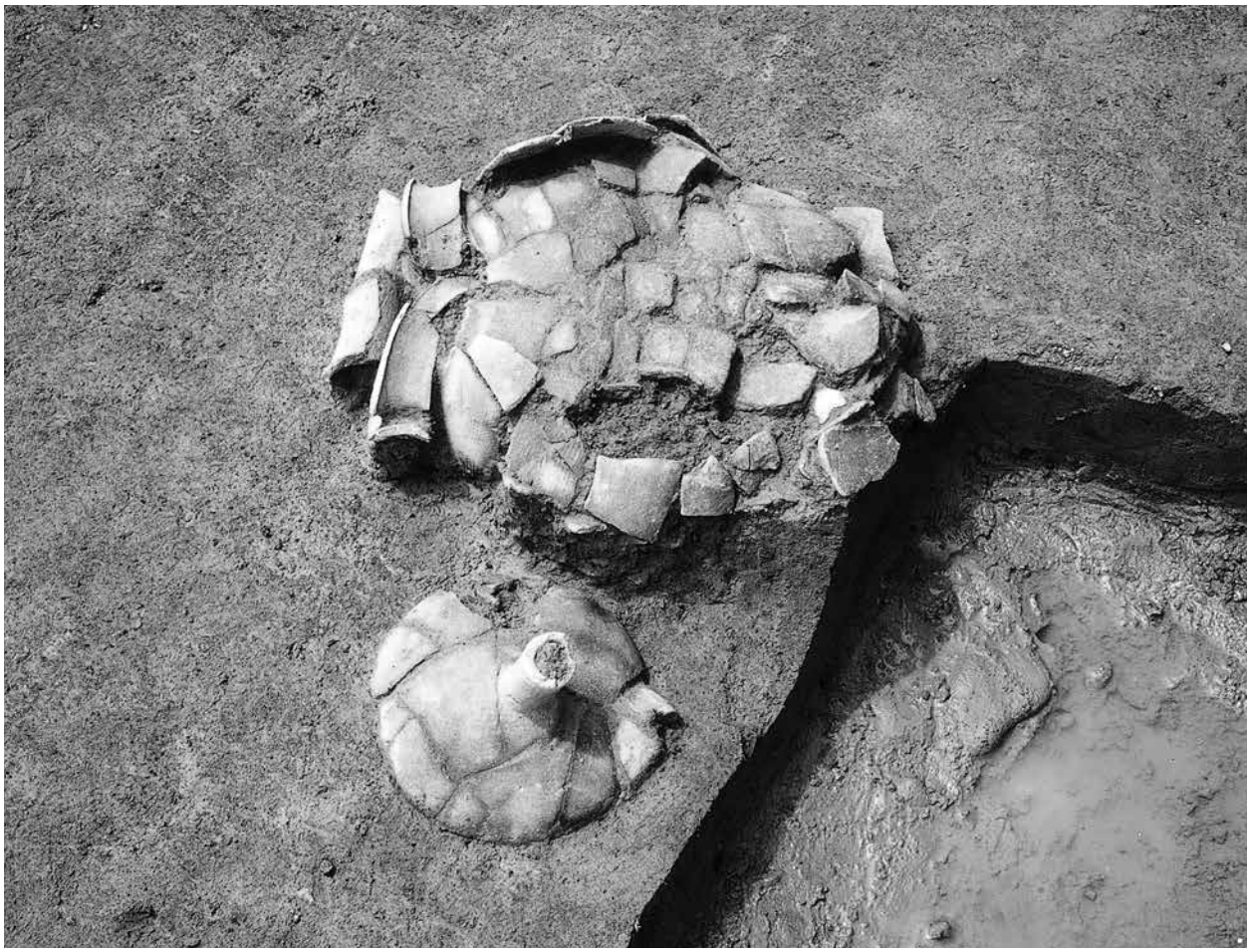
74. 土坑SK 179　完掘状況（北から）

75. 柱穴P 041　遺物出土状況（西から）

76. 調査区　全景（南から）

77. 調査区　全景（東から）

78. 土器群　189　遺物出土状況（東から）



79. 土器群　180　遺物出土状況（東から）

80. 寒川先生　液状化痕跡の調査（1）

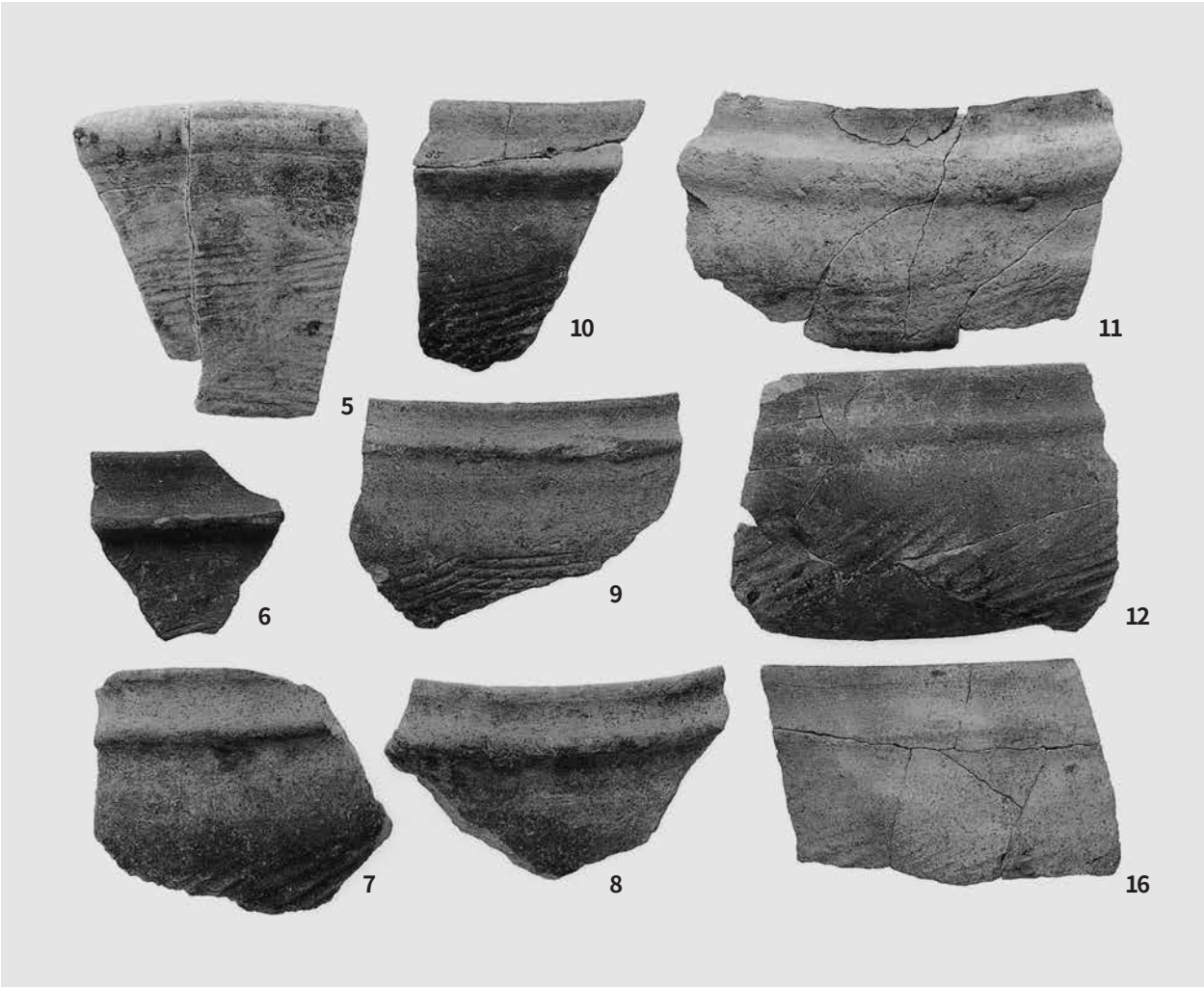
81. 寒川先生　液状化痕跡の調査（2）

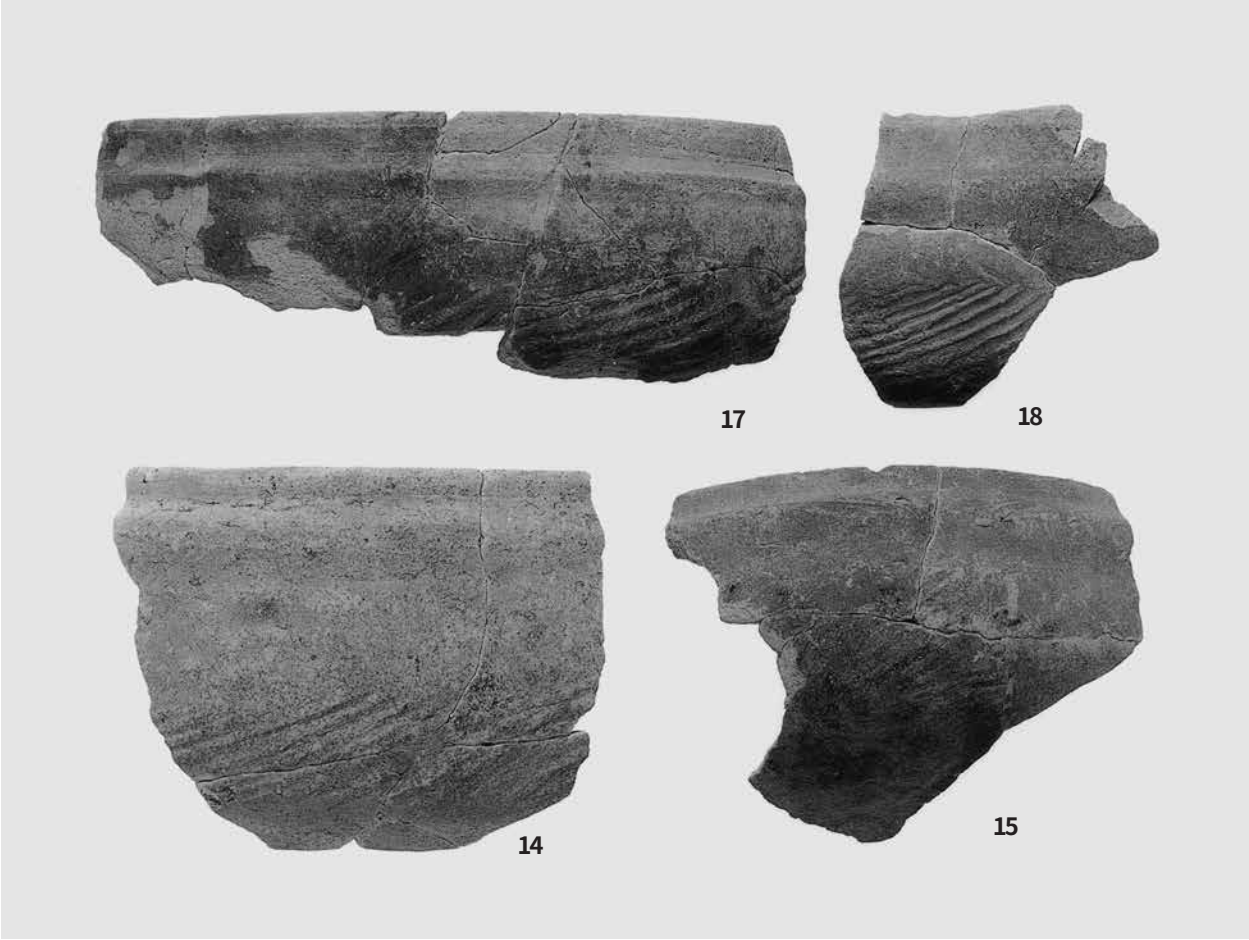
82. 今里先生　調査状況見学

83. 姫路市立飾磨小学校６年生　見学会

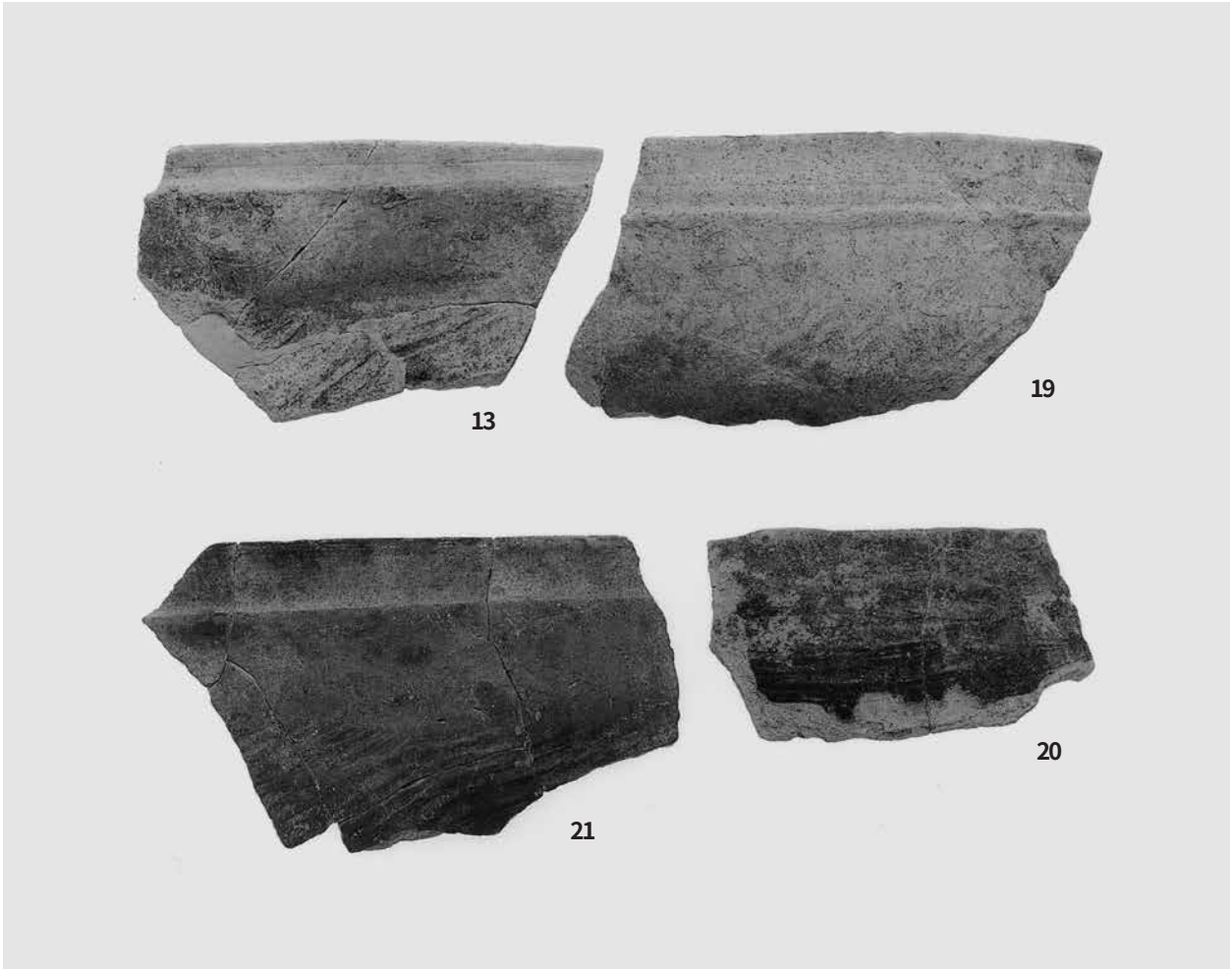
84. 現地説明会（1）

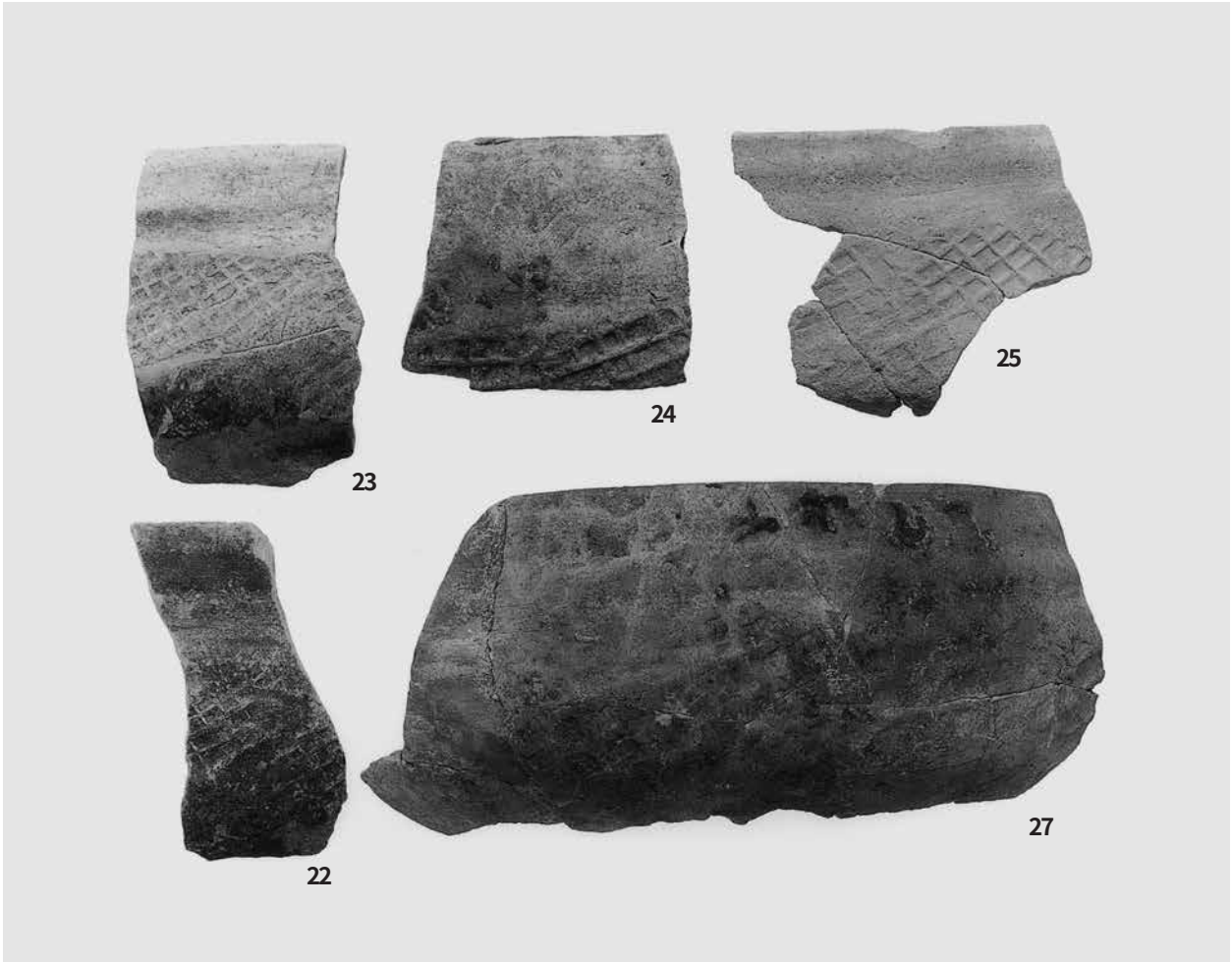
85. 現地説明会（2）



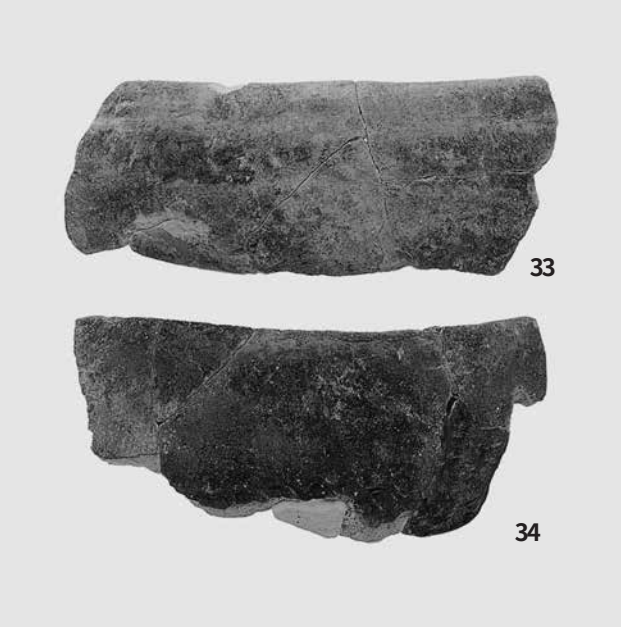


溝 SD 001出土　鍋

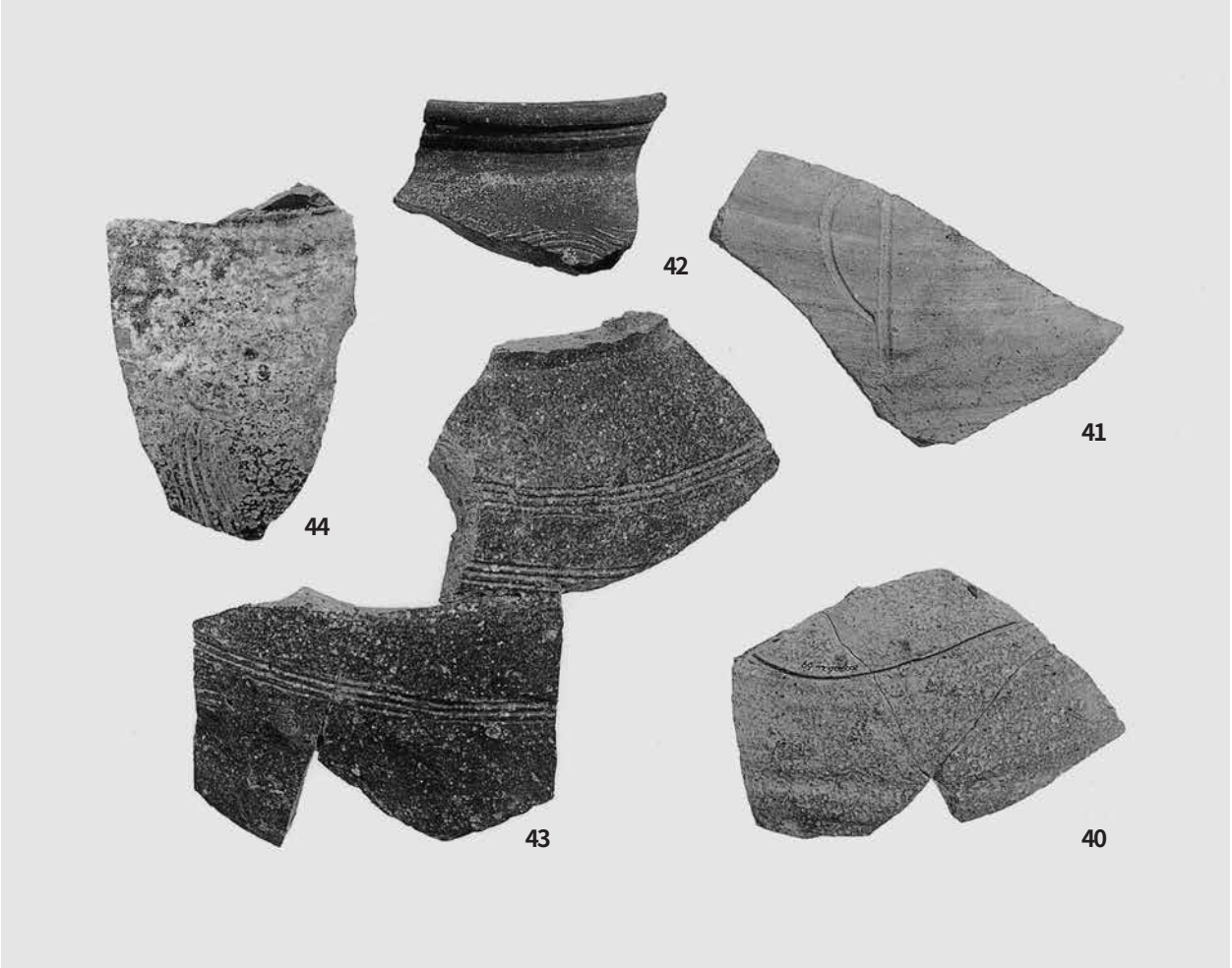


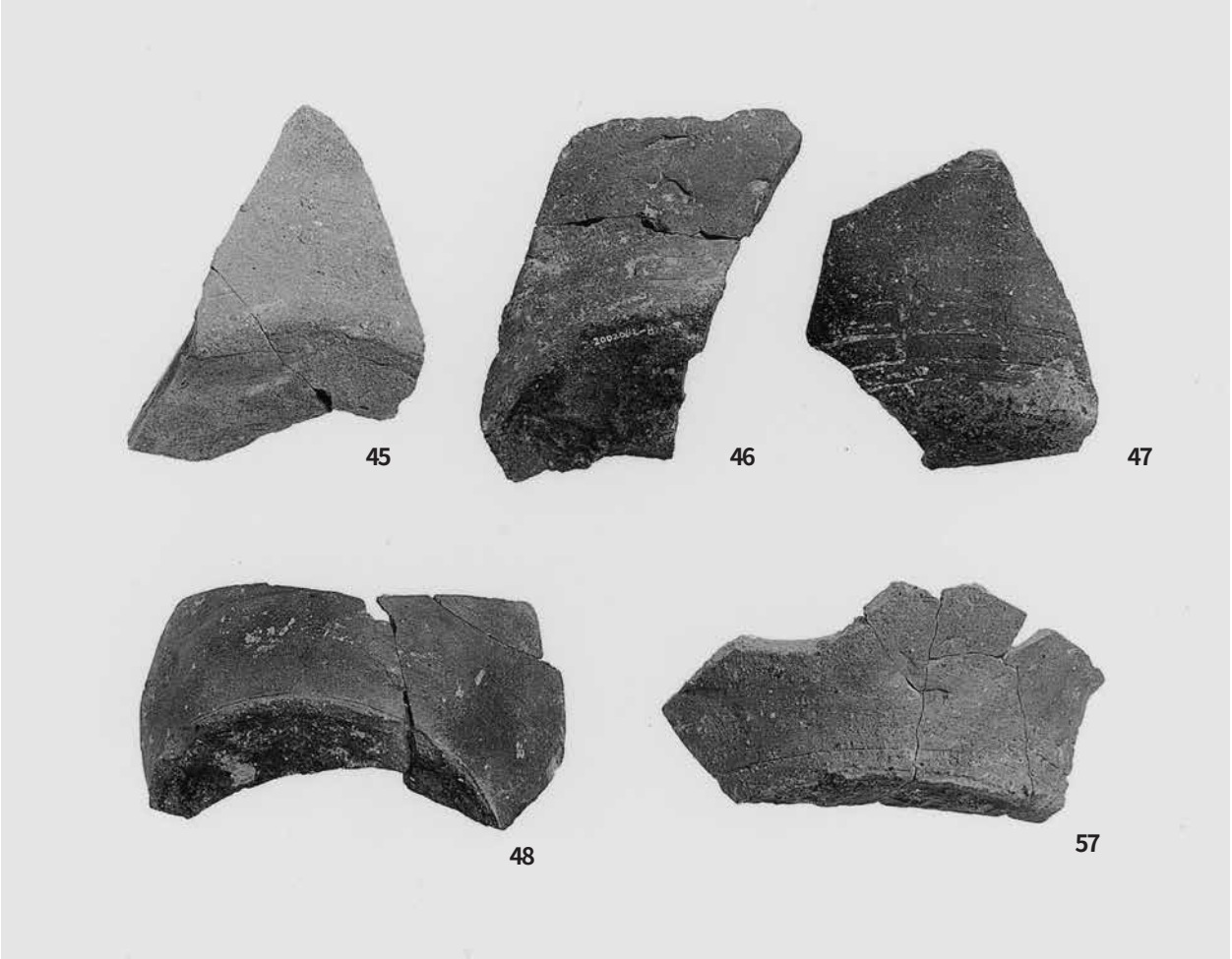


溝 SD 001出土　鍋

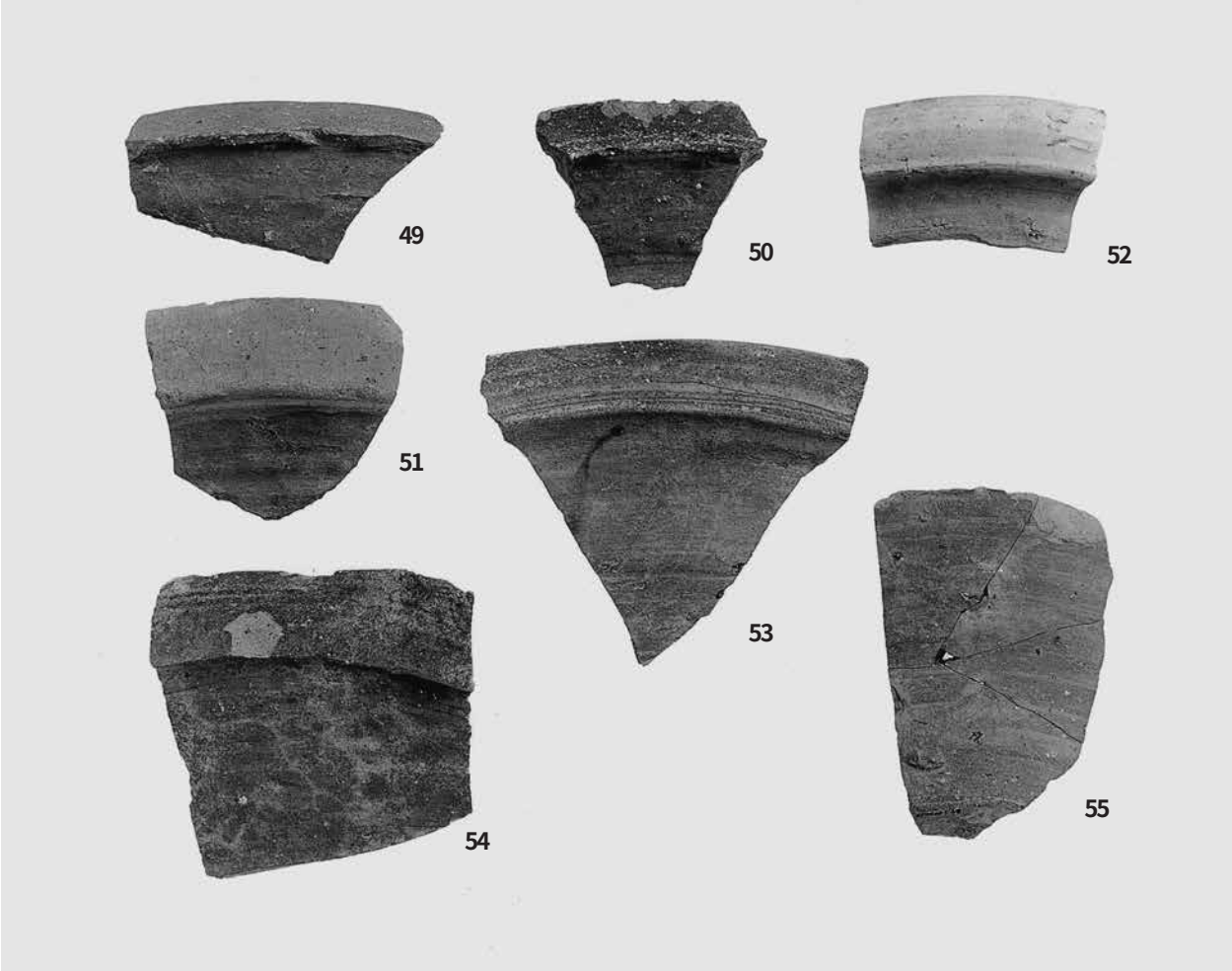


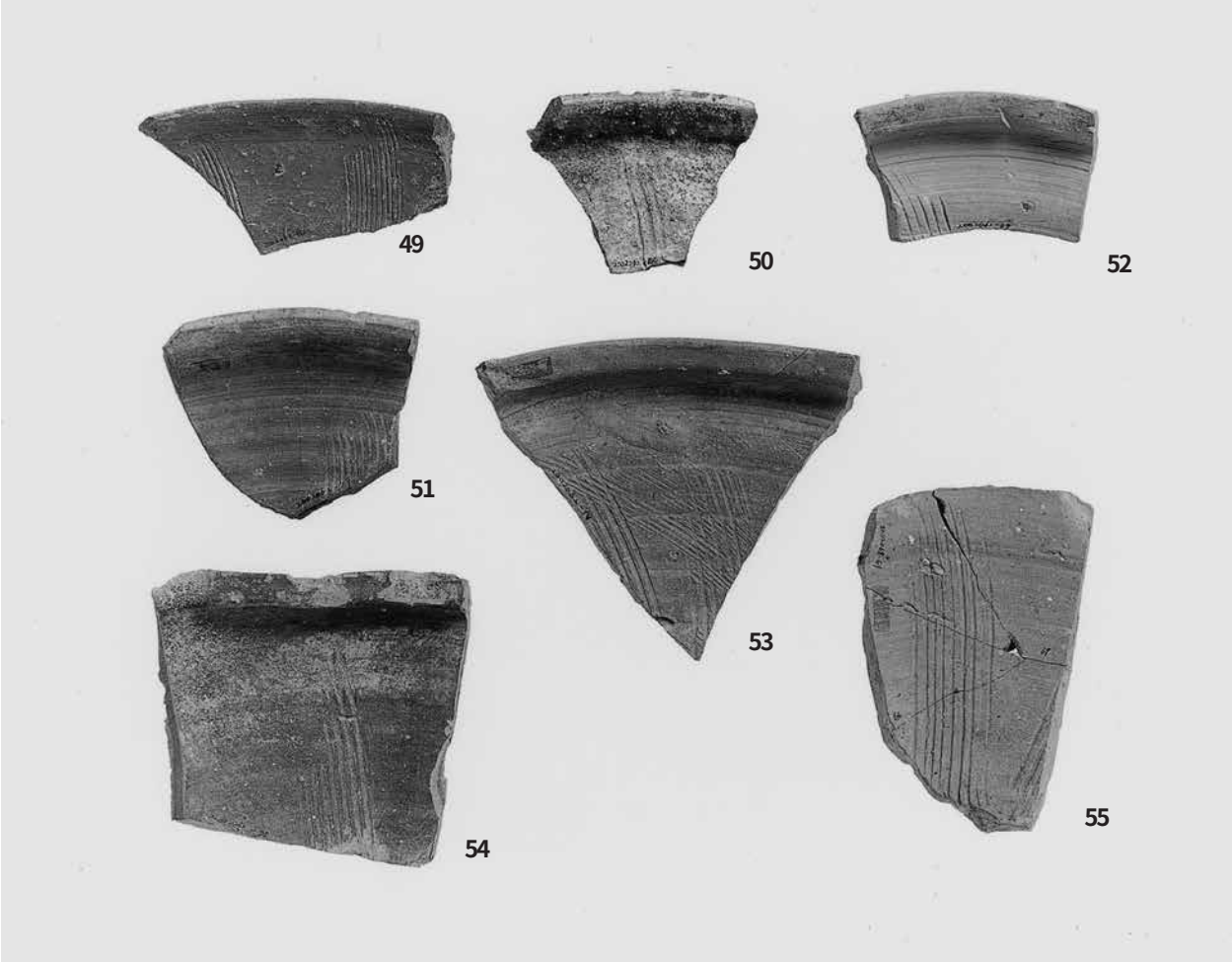
溝 SD 001出土　鍋



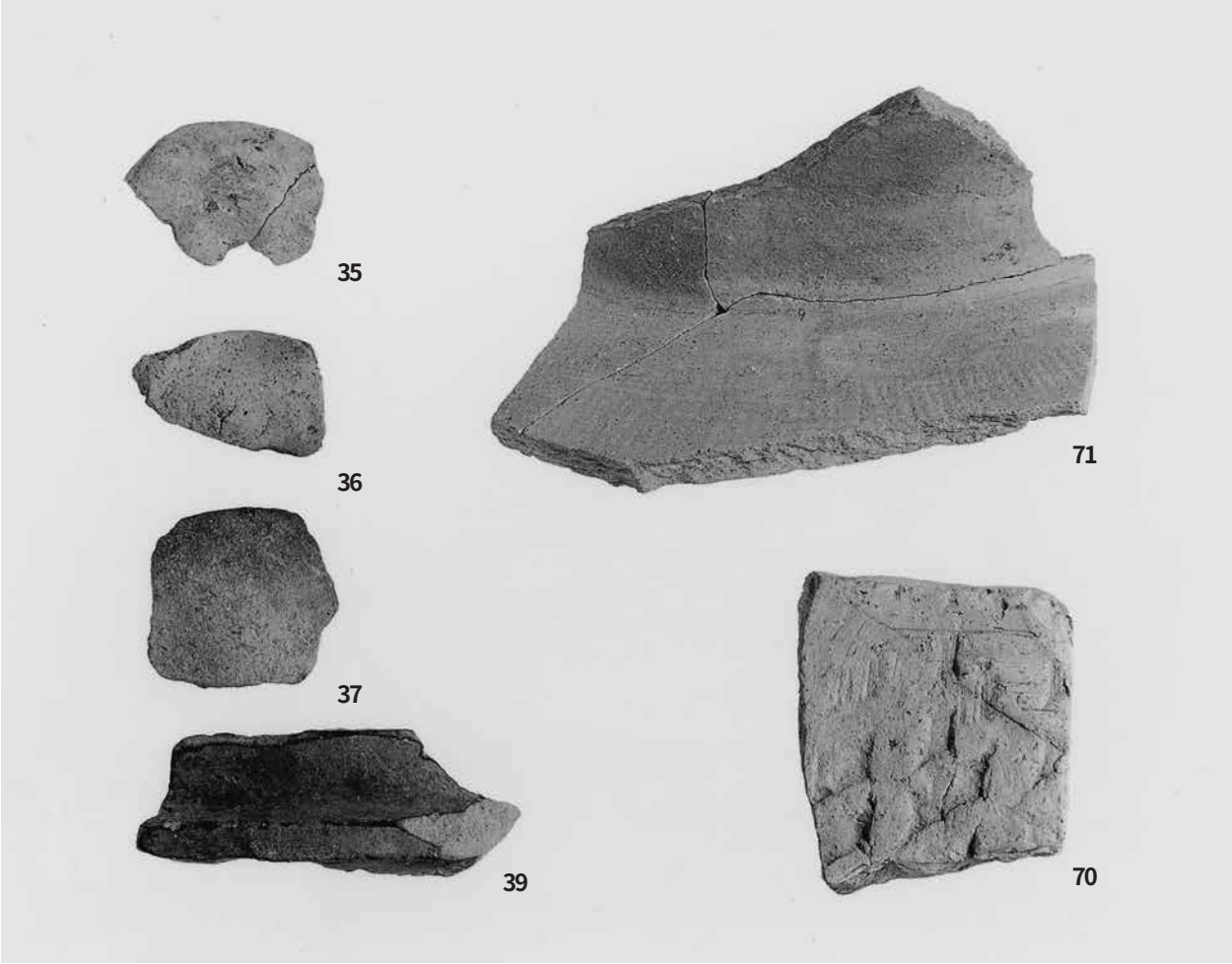


溝 SD 001出土　備前焼壷・甕

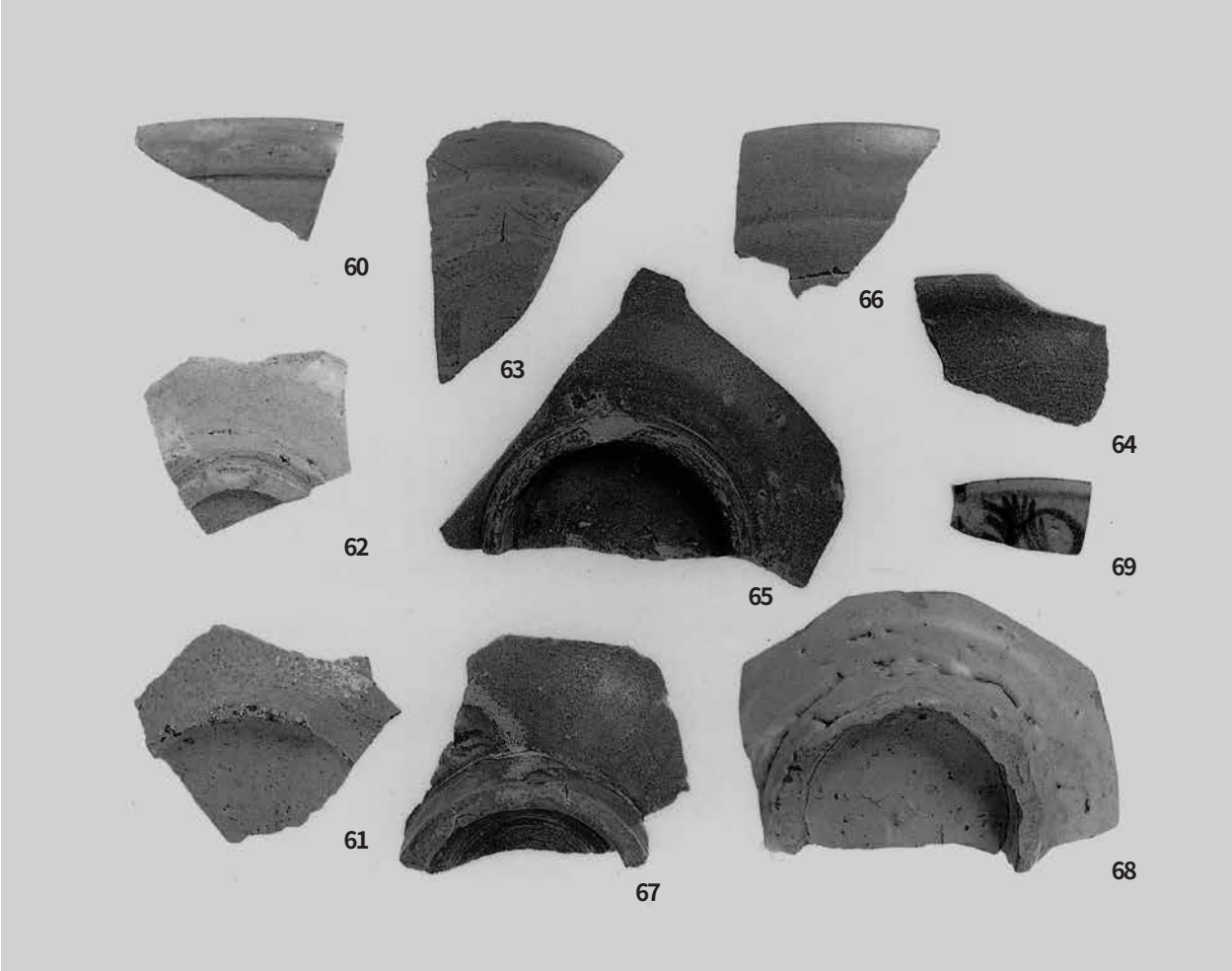


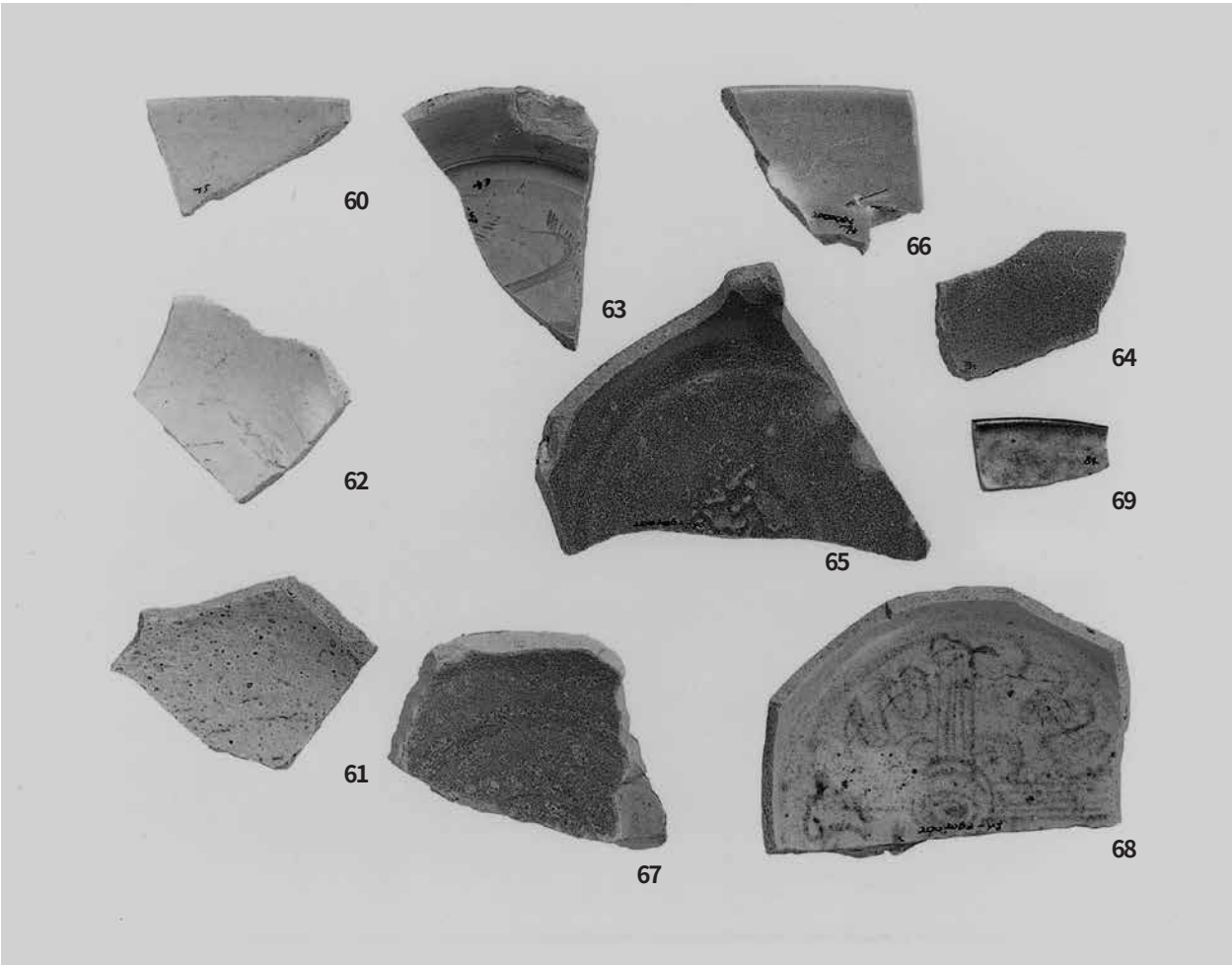


溝 SD 001出土　備前焼擂鉢

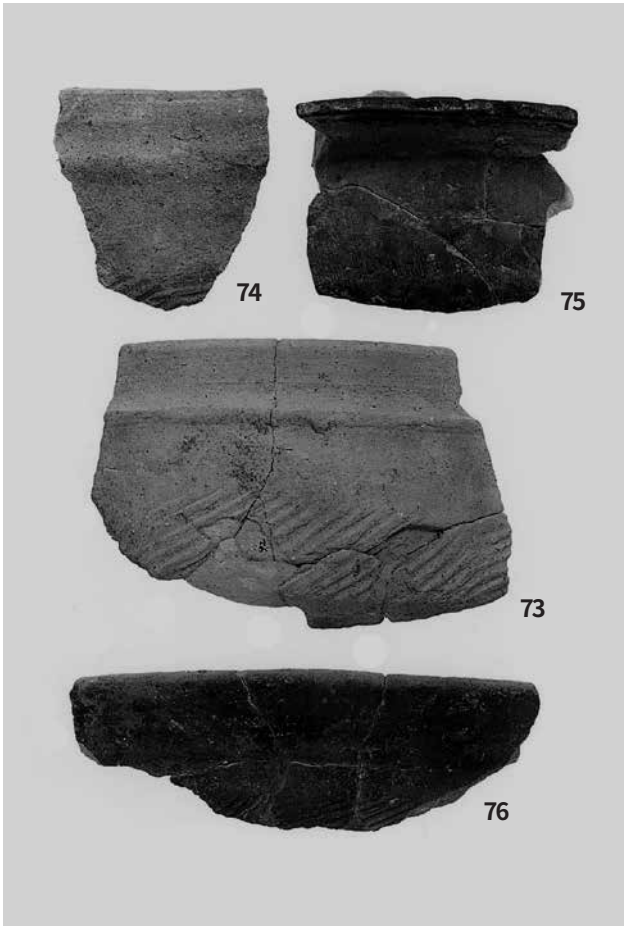


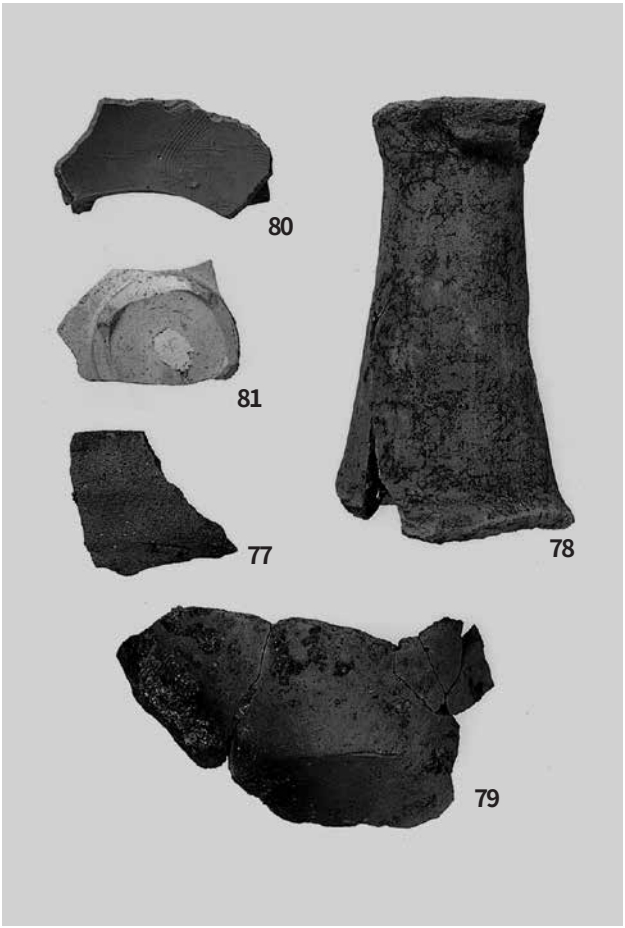
溝 SD 001出土　備前焼甕　その他土器

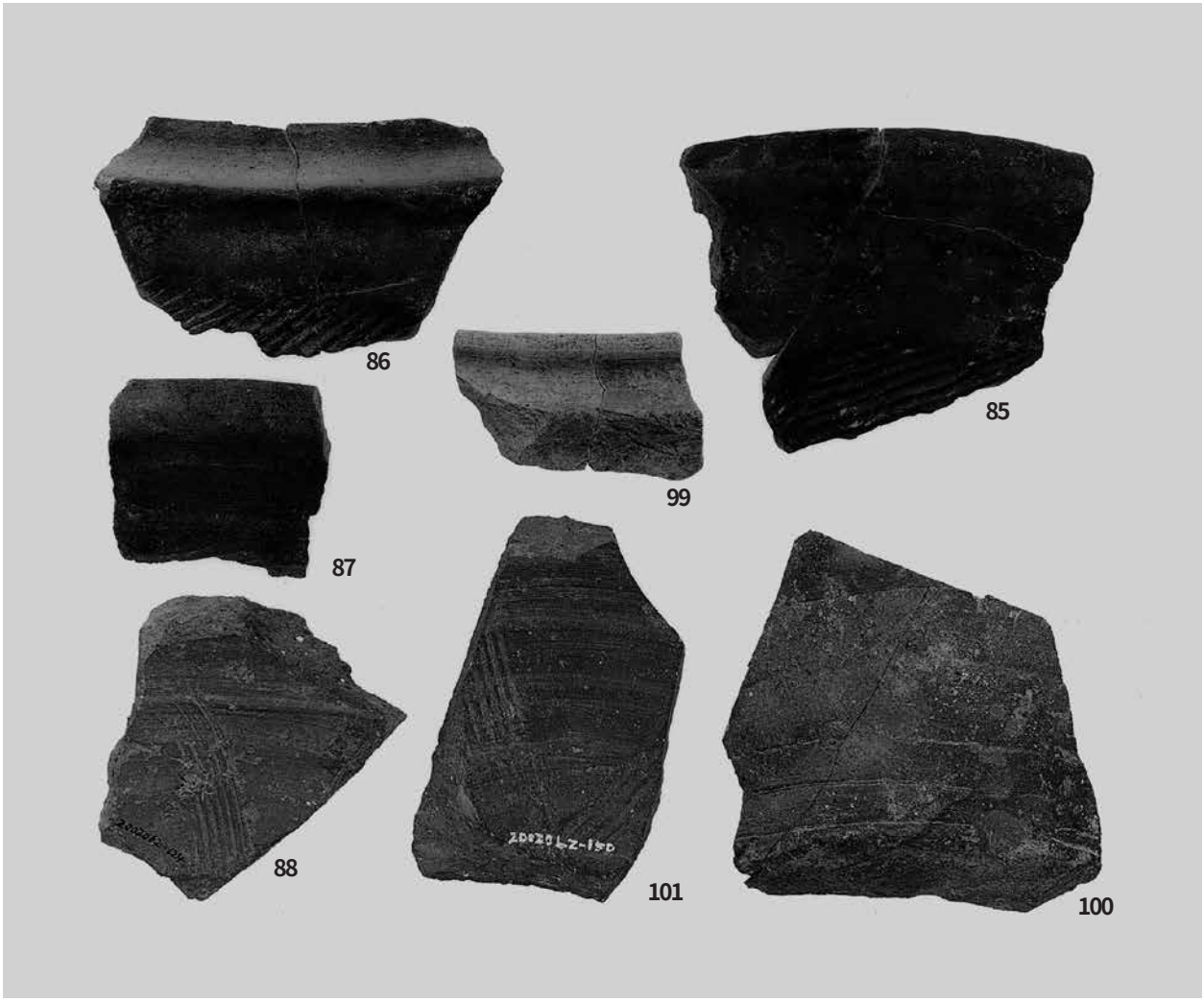




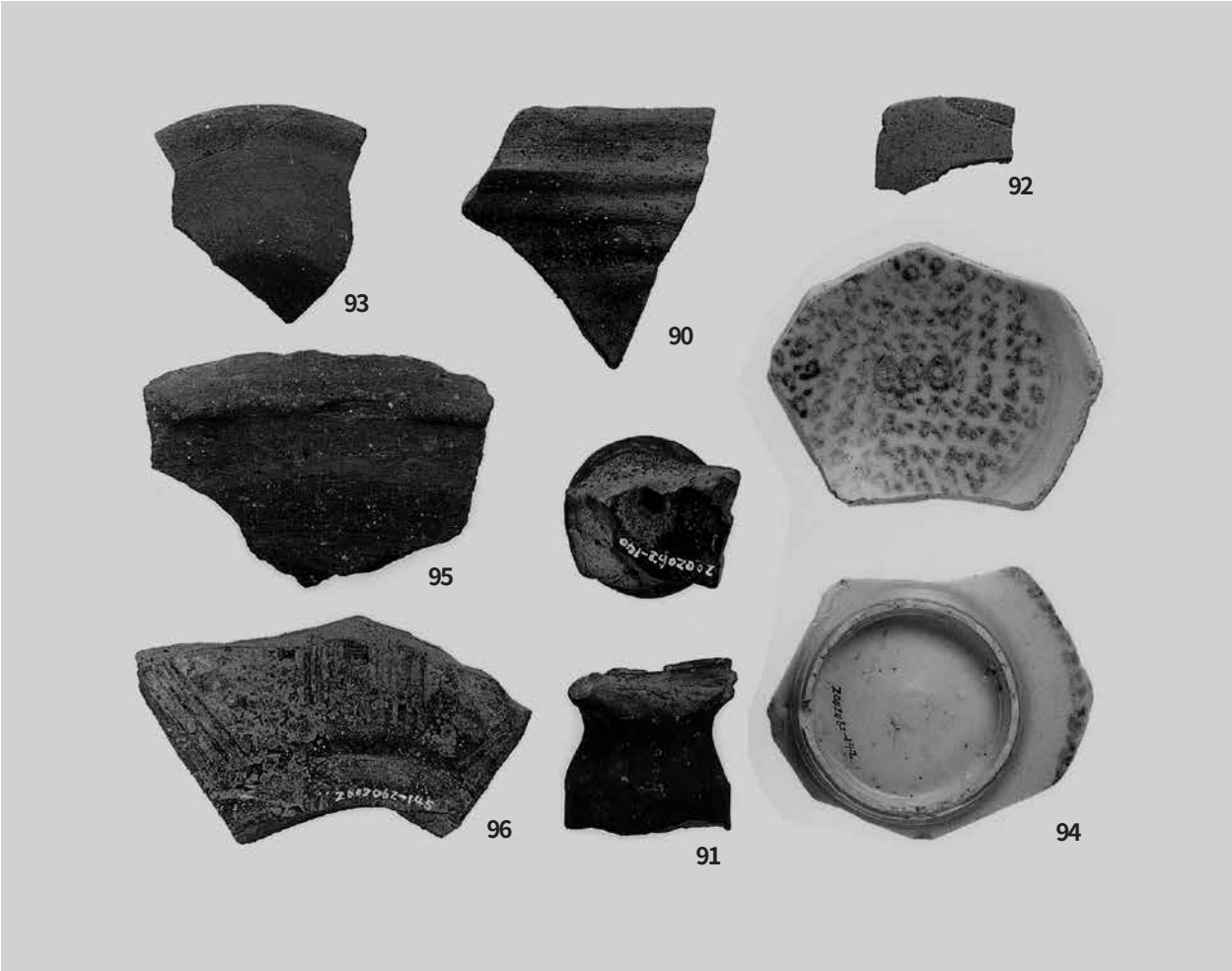
溝 SD 001出土　磁器

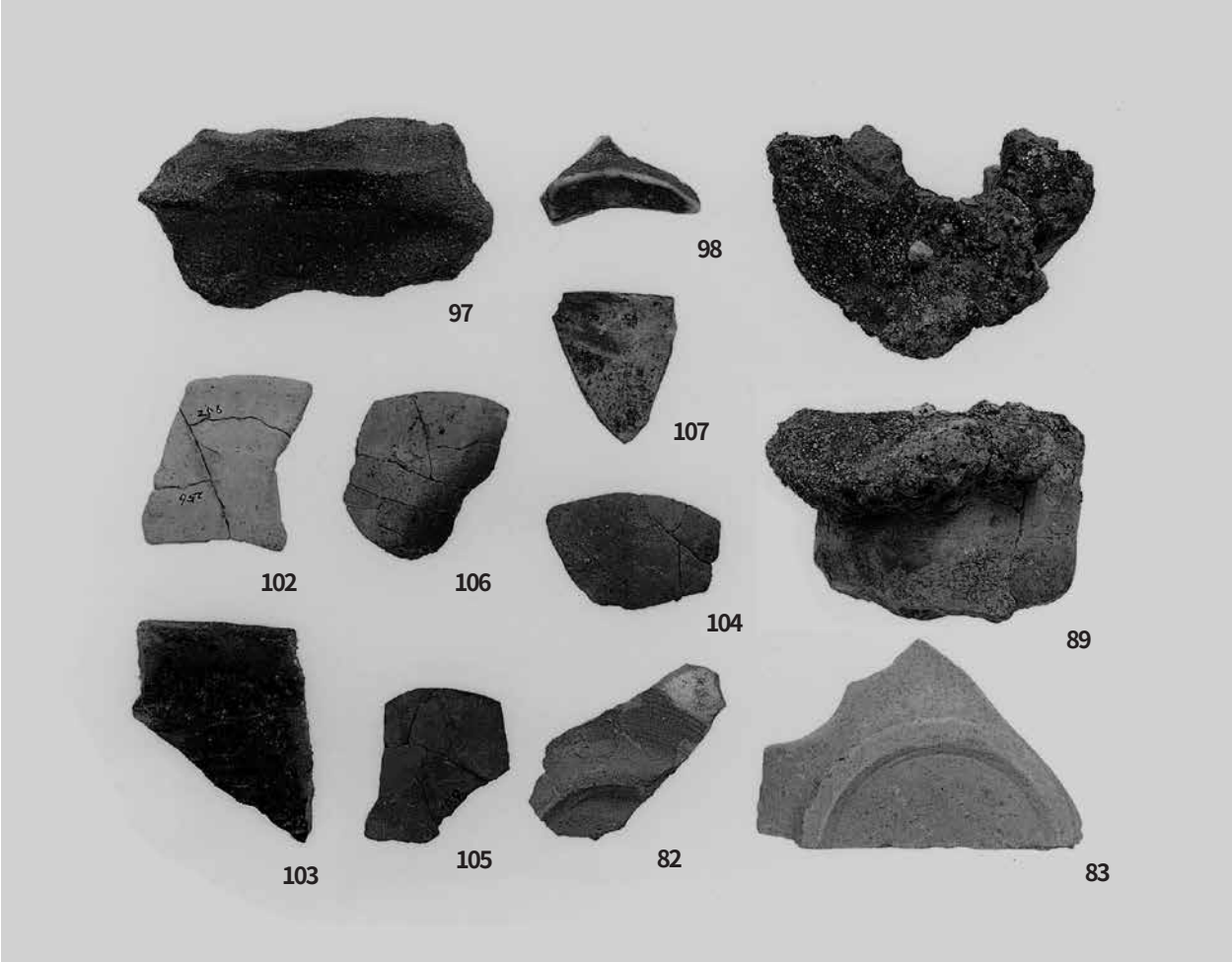






第１面出土　土器





第１面出土　土器

38

127

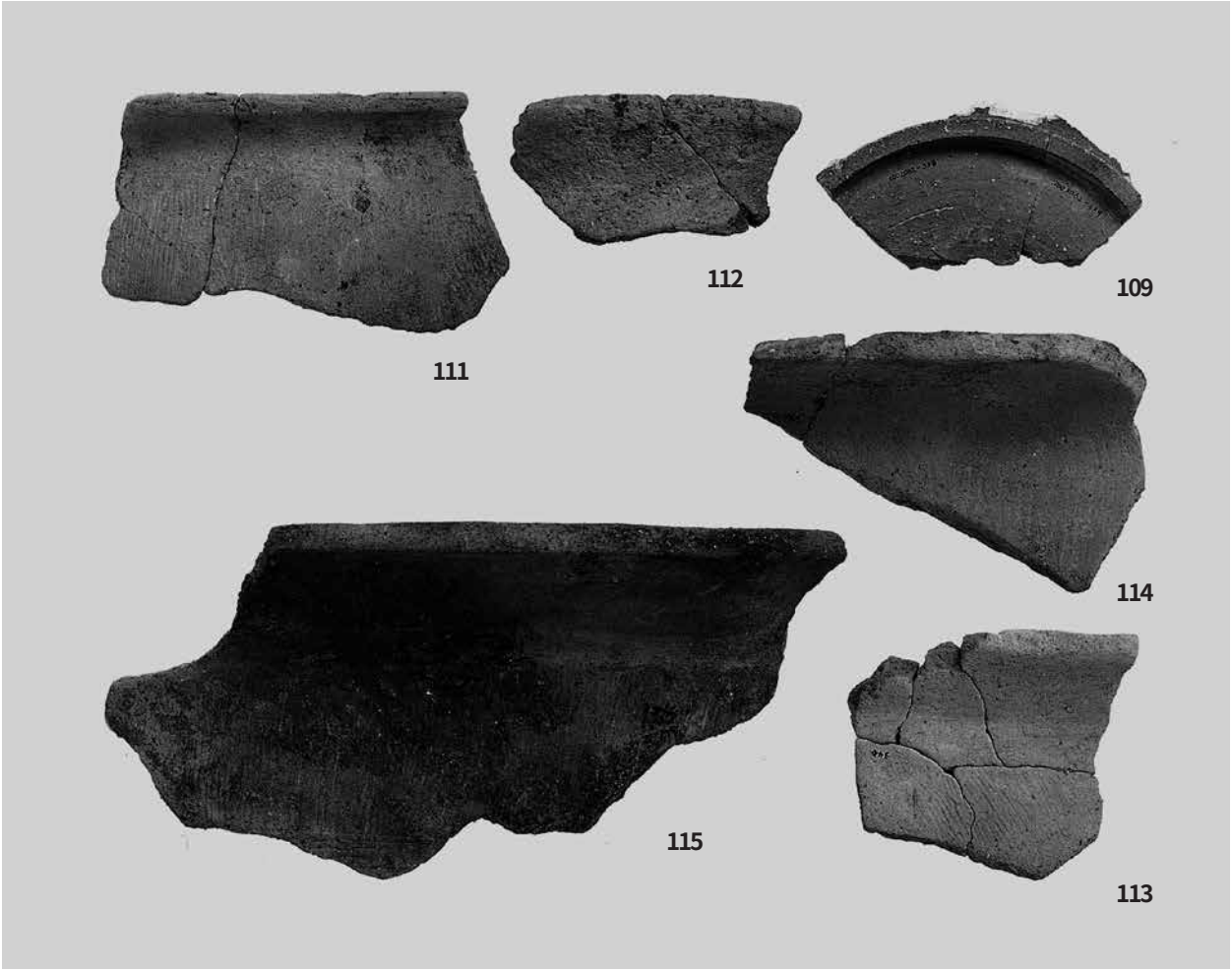
84

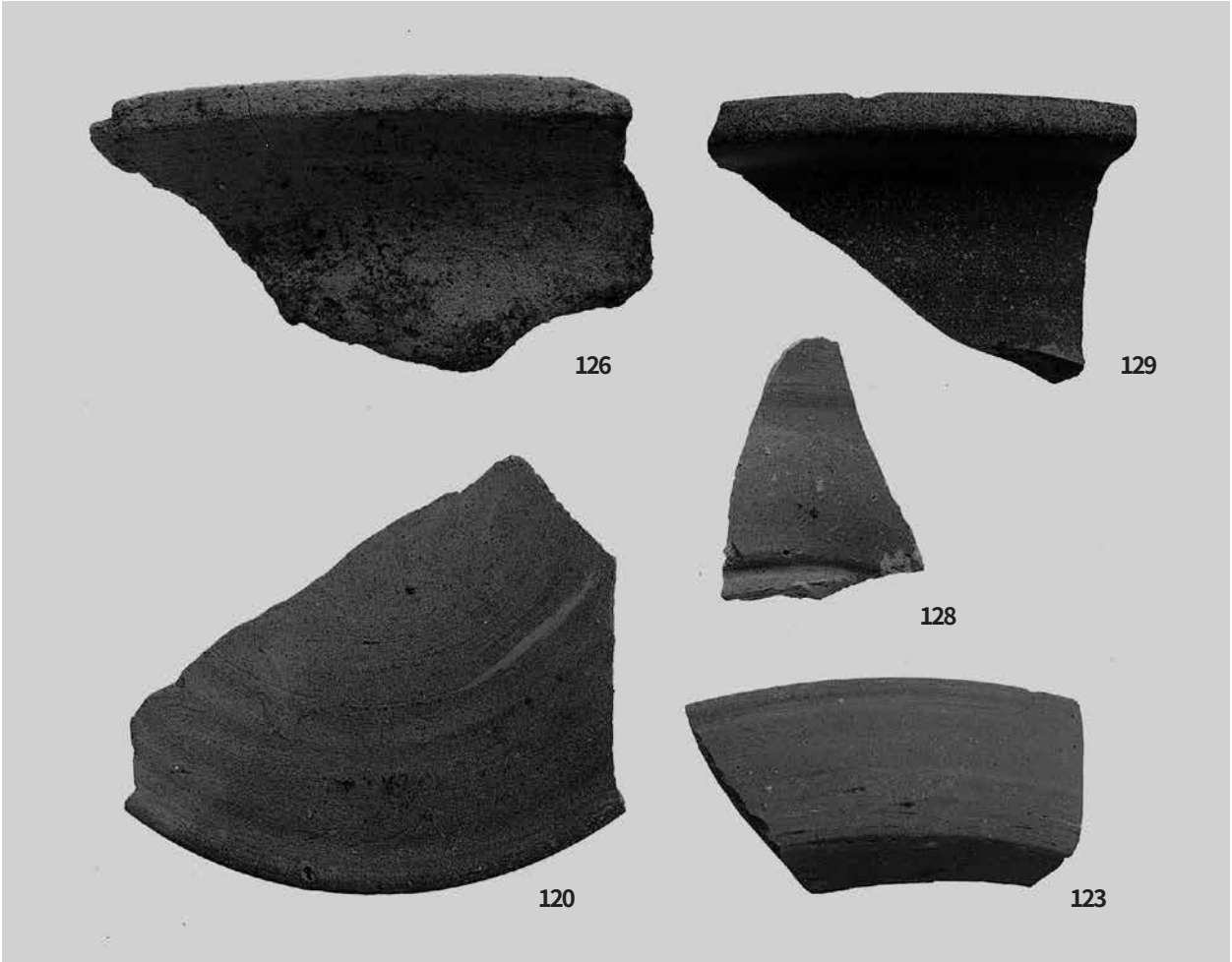
122

134

72

第１・２面出土　土器





第２面出土　土器

116

117

118

108

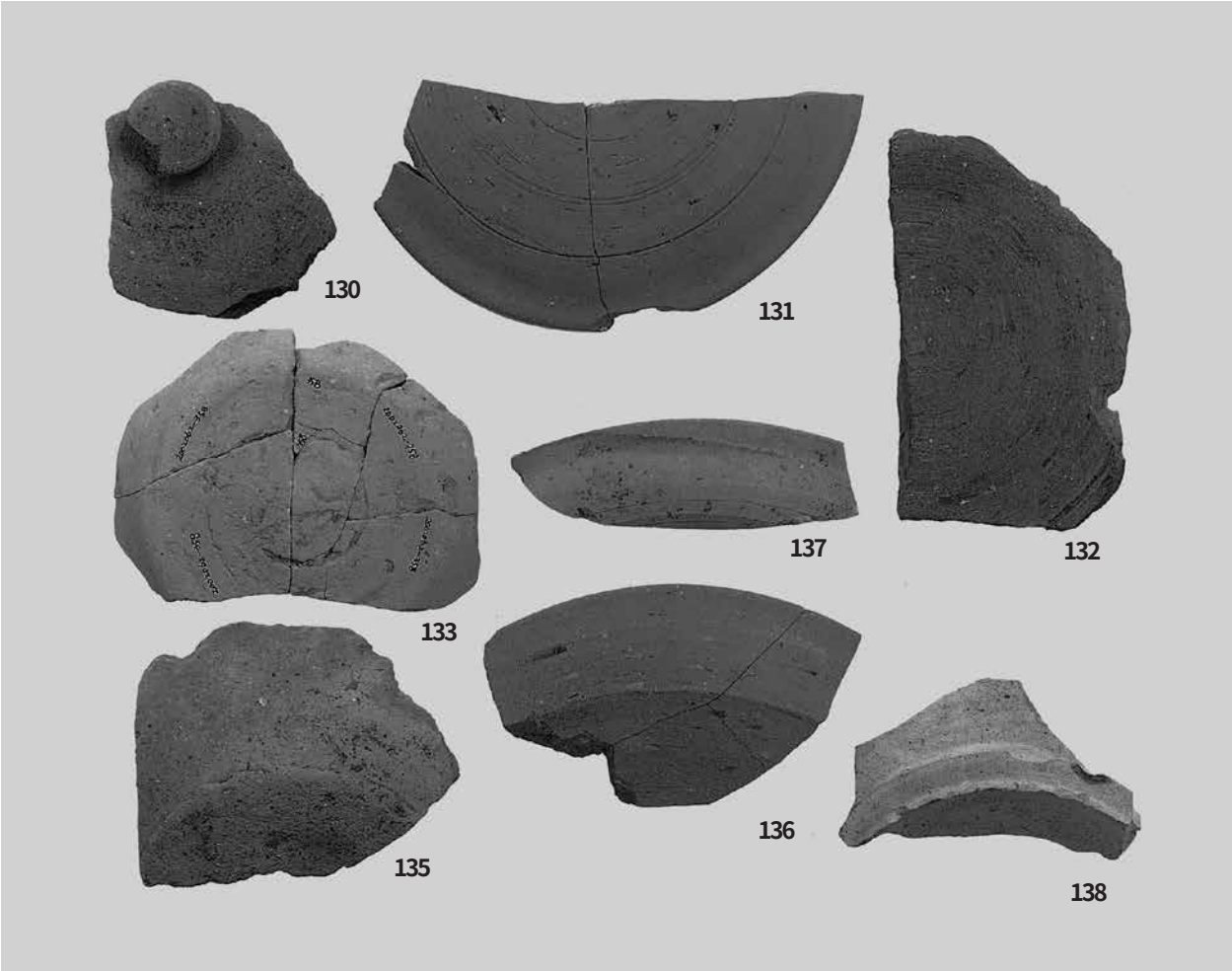
124

110

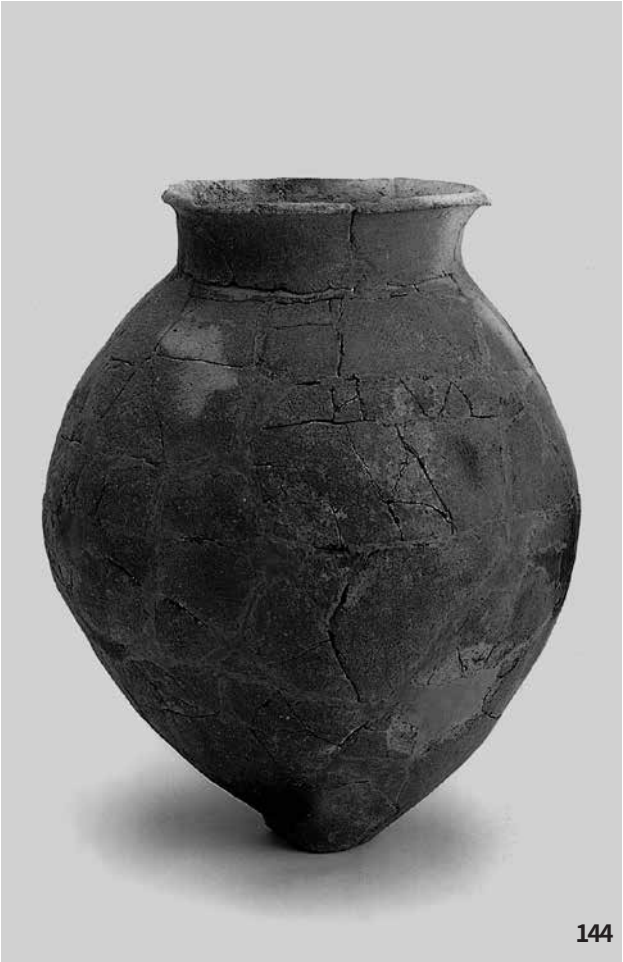
125

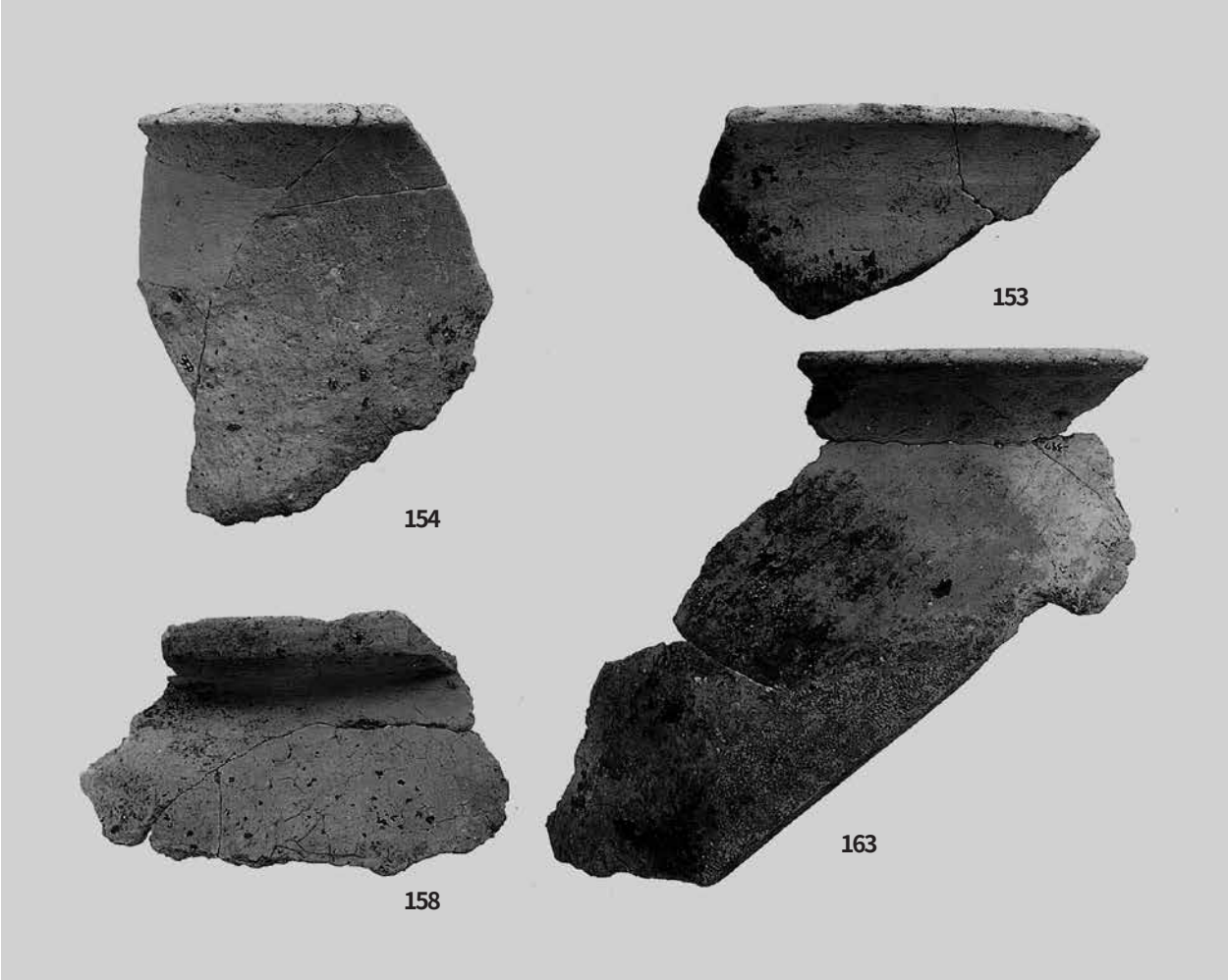
119

第２面出土　土器

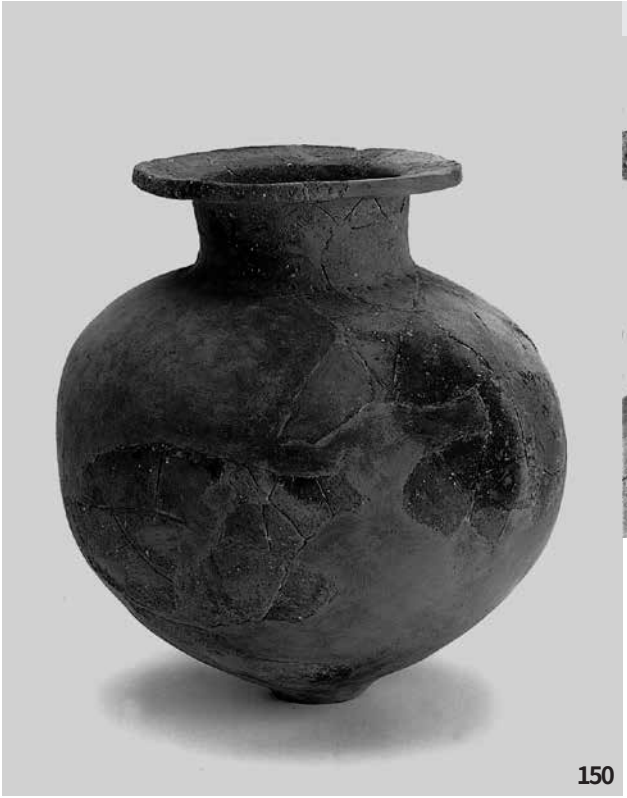


第２面包含層出土　土器

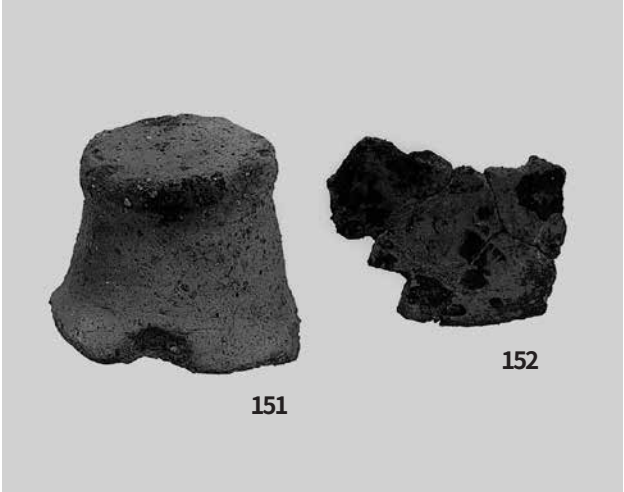




第３面出土　土器


150

146


151

152

147

148

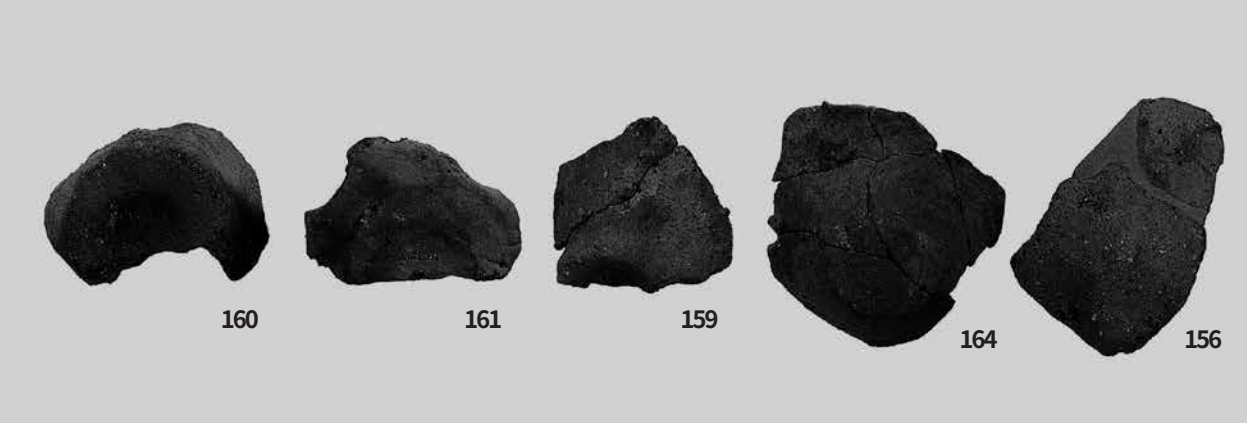
第３面出土　土器

145

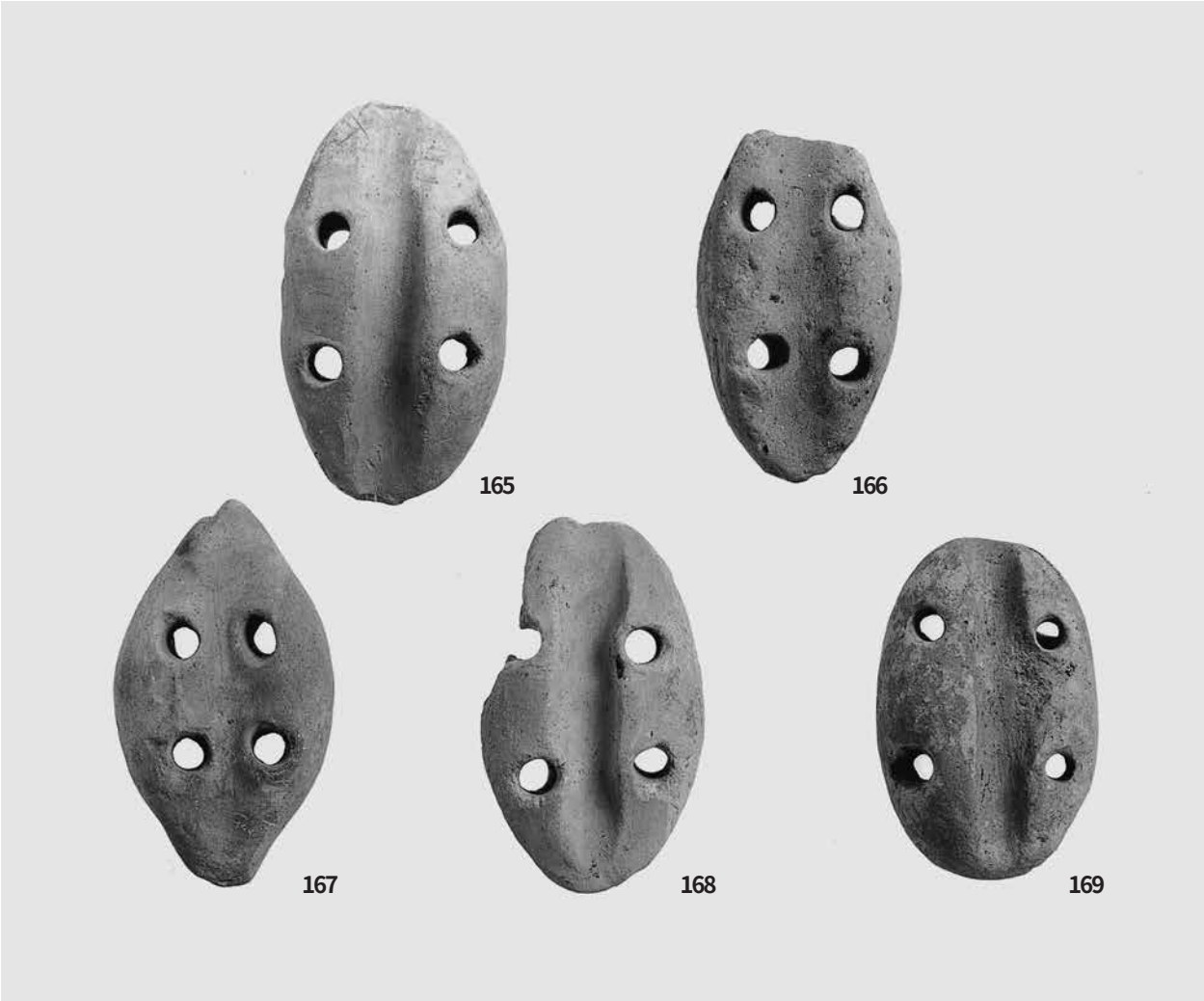
155

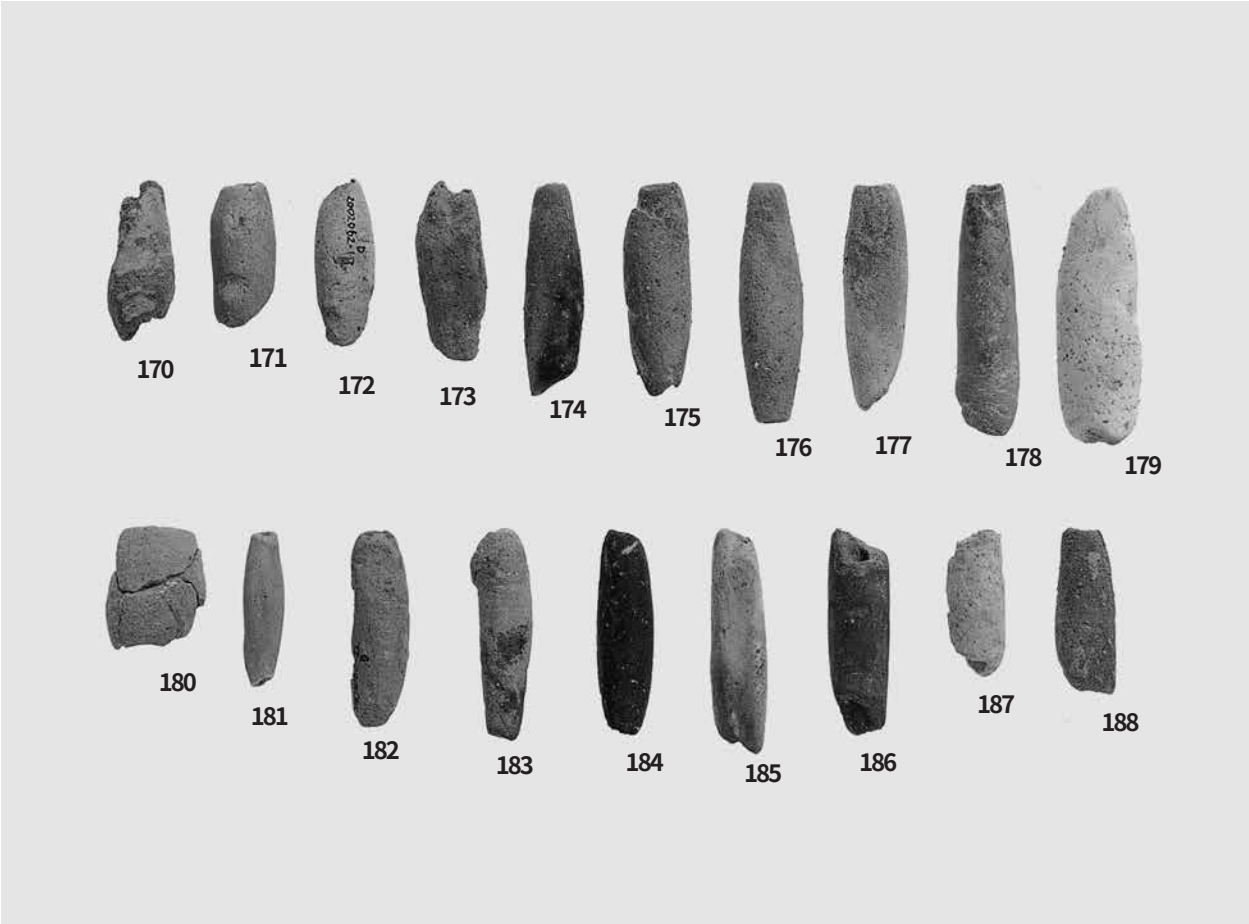
162

157

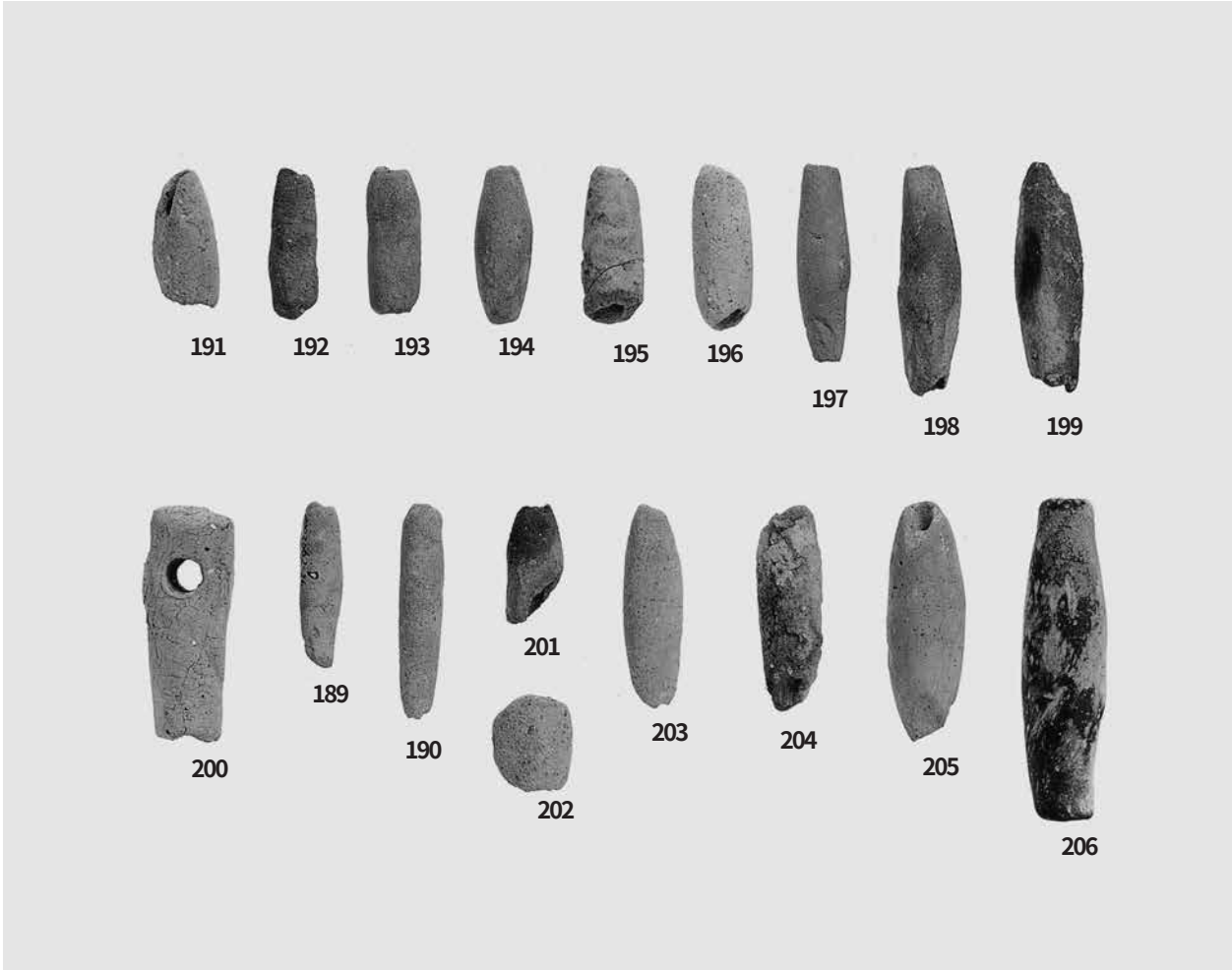


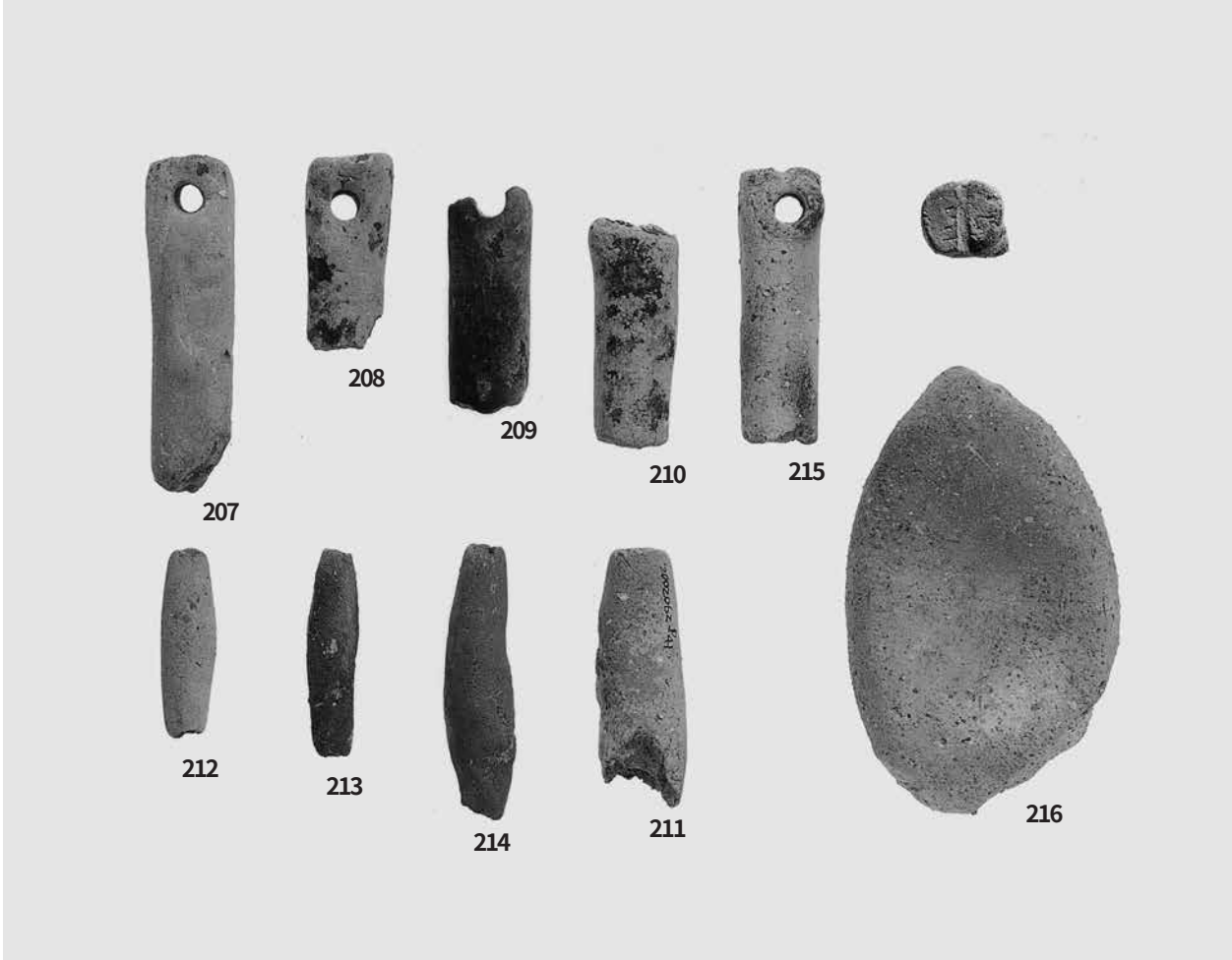
第３面出土　土器


165
166
167
168
169

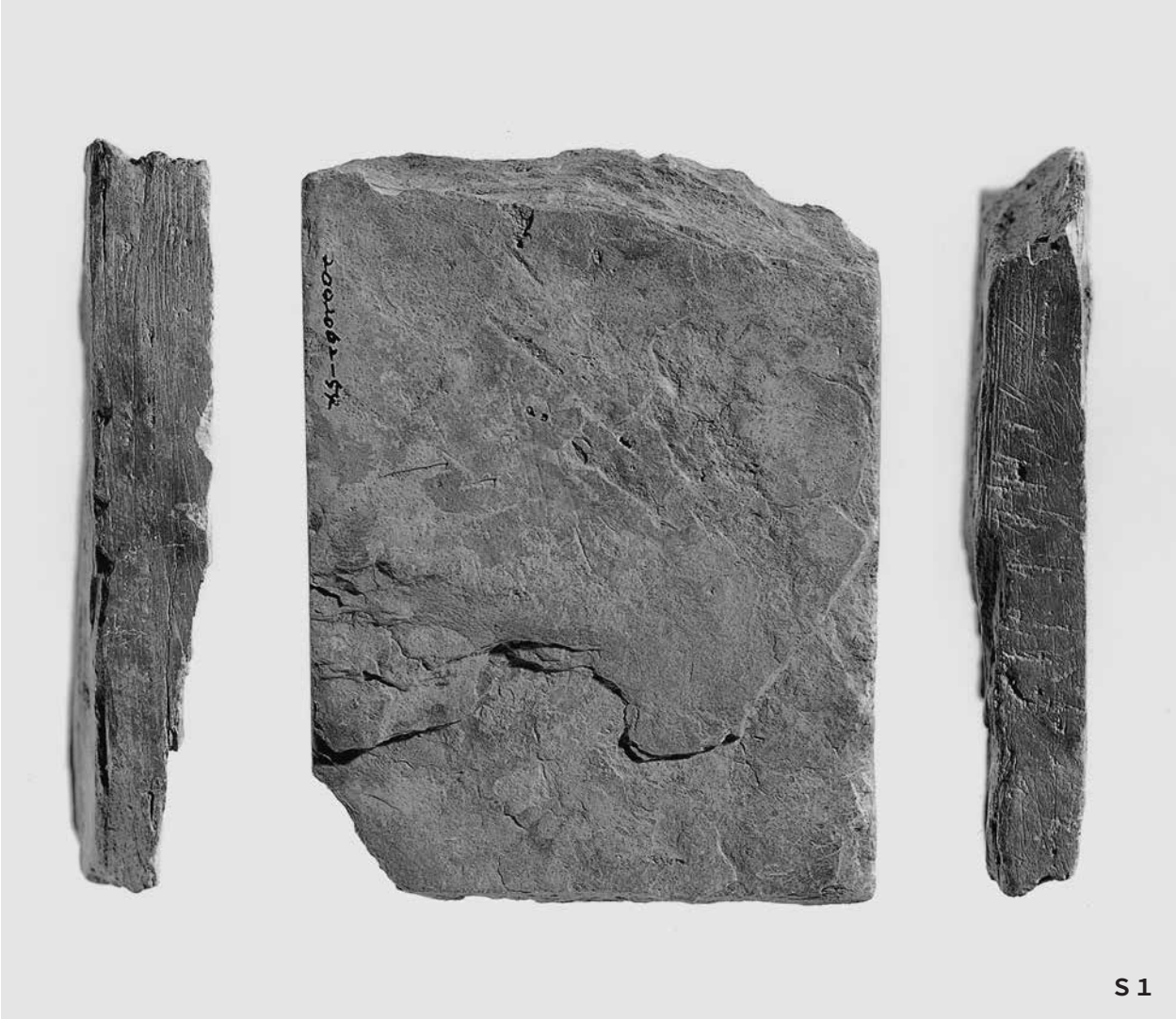

170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188

土錘(1)


191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
189
190
201
202
203
204
205
206


207
208
209
210
215
212
213
214
211
216

土錘（2）



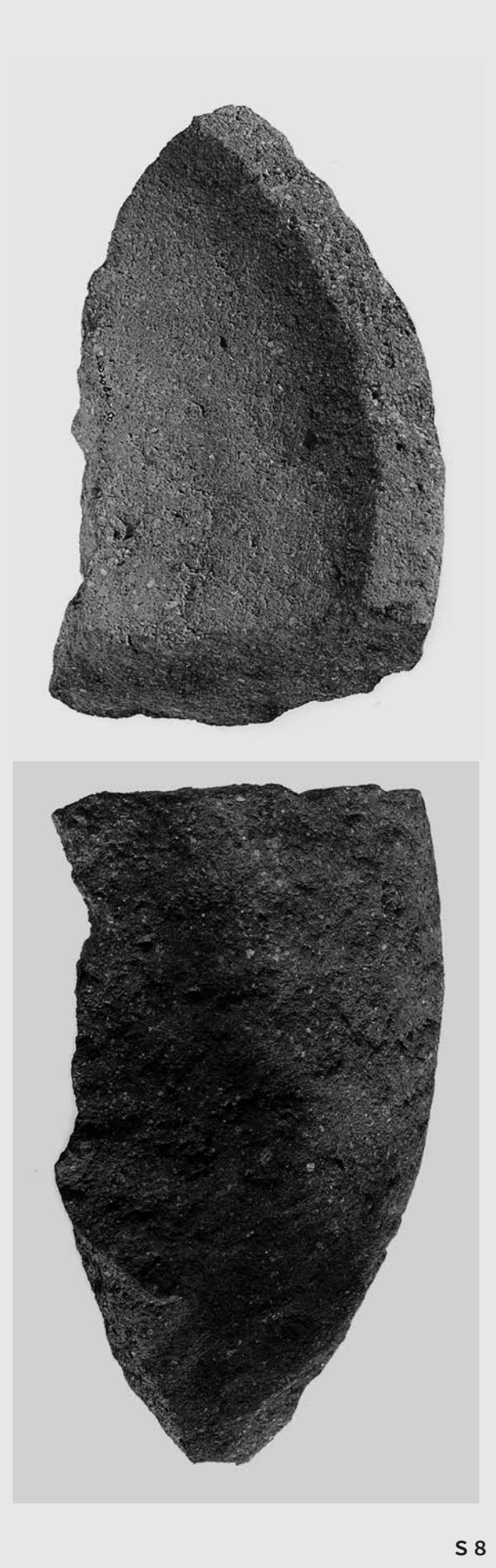
石器(1)

S 2

S 7

石器（2）

S 5



S 8

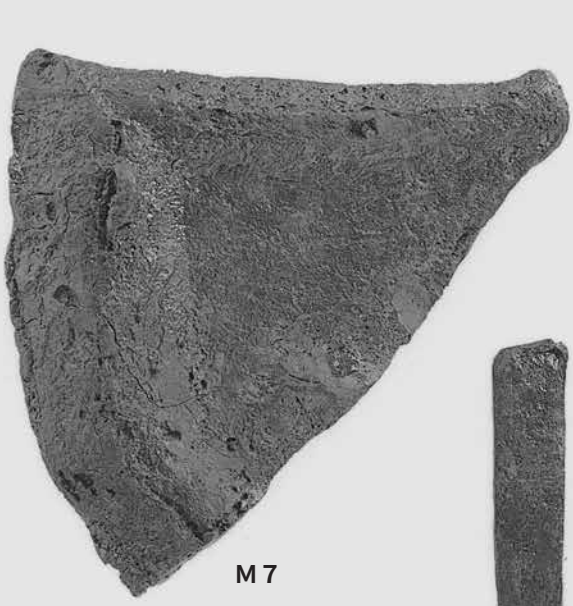
石器（3）

S 3

S 4

石器（4）

S9



M7

M4

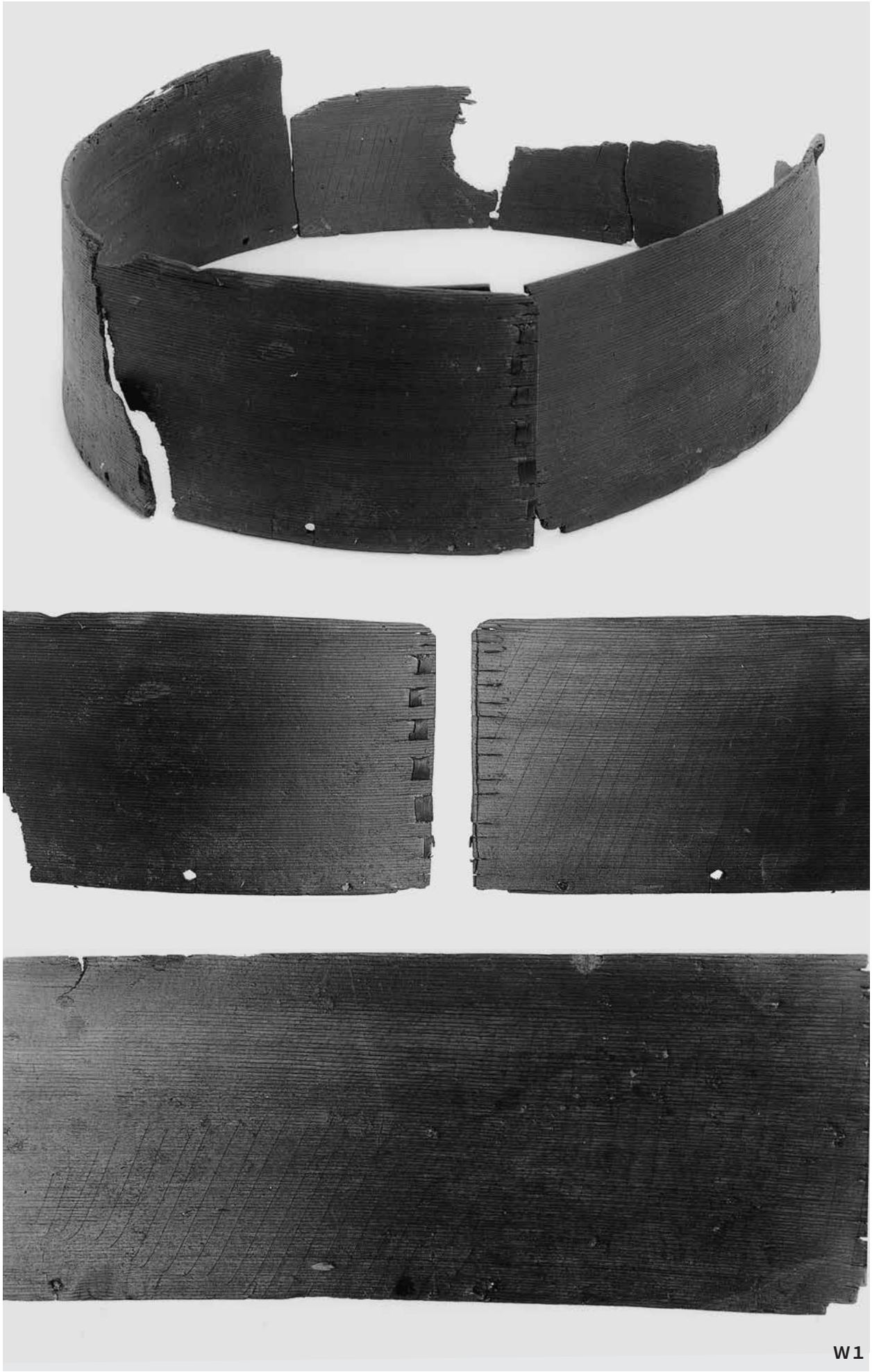
M1

M6

M5

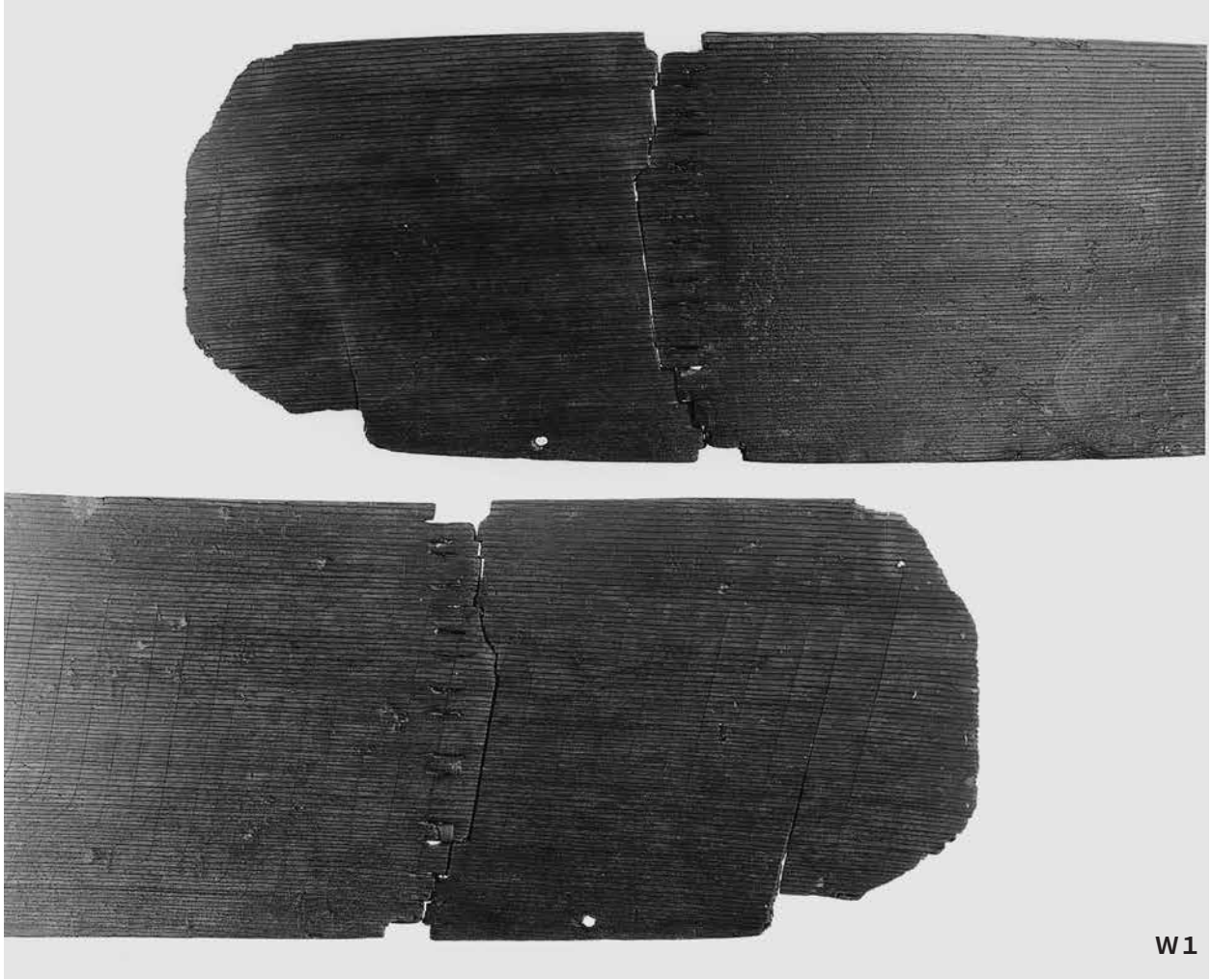
M3

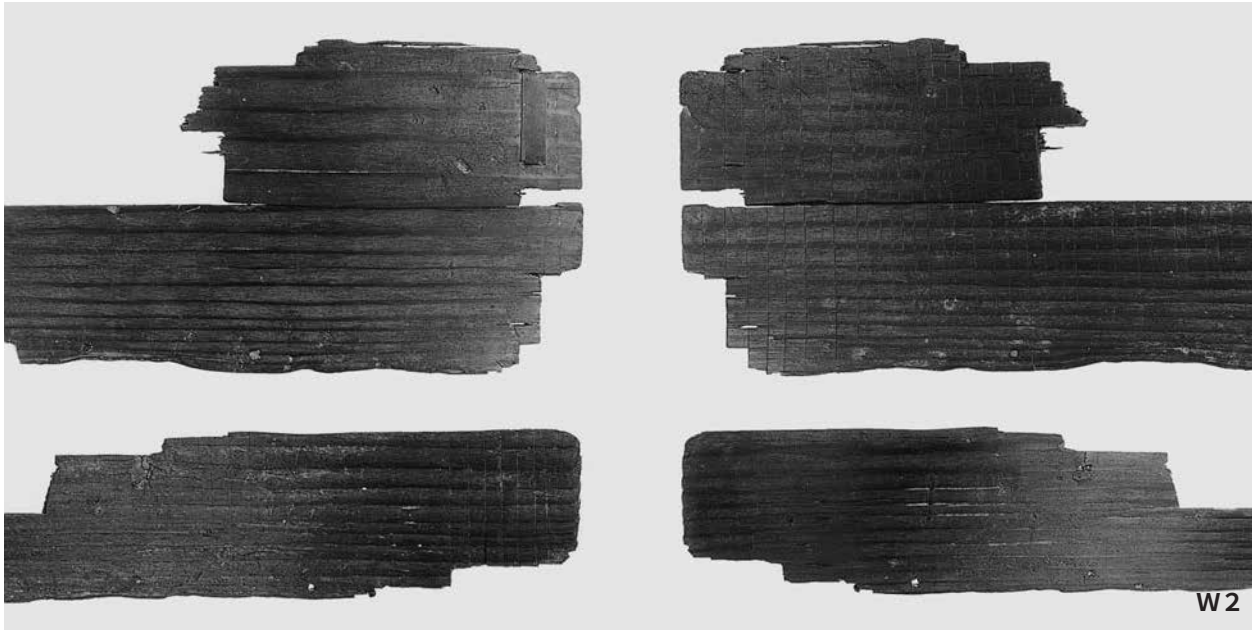
石器(5)・鉄器

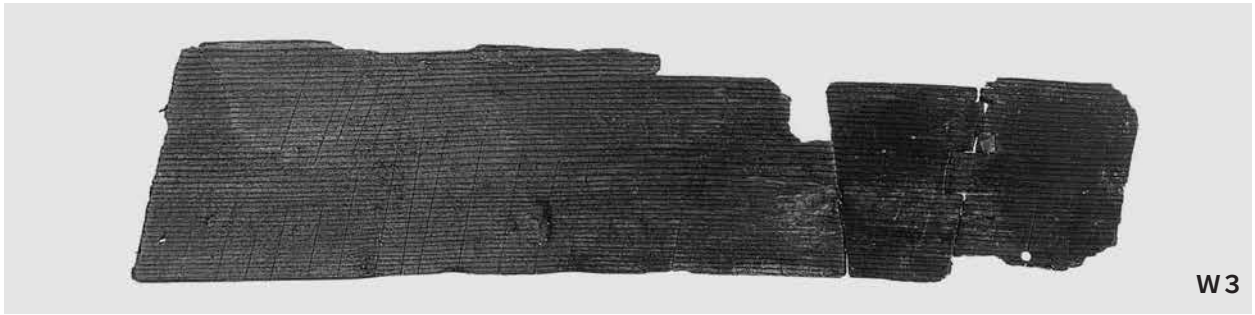


W1

木器(1)







木器(2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみどおりいせき
書名	南通り遺跡
副書名	国道250号（飾磨バイパス）沿道環境改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第376冊
編著者名	篠宮　正・寒川　旭・パリノ・サーヴェイ㈱
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1-1　TEL 079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10-1　TEL 078-341-7711
発行年月日	2010（平成22）年3月18日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（調査番号）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南通り遺跡	兵庫県姫路市飾磨区中島	28225	020577	34度47分37秒	134度40分51秒	確認調査 2001年8月20日～24日 本発掘調査 2002年5月17日～7月17日	確認調査（2001109）352㎡ 本発掘調査（2002062）742㎡	国道250号（飾磨バイパス）沿道環境改善事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南通り遺跡	集落	弥生時代 奈良時代 中世後期	土器群 土坑・溝 掘立柱建物・土坑・溝	弥生土器 須恵器・土師器・製塩土器・土錘 土師器・備前焼・土錘・石臼	

要約	市川河口部での遺跡調査。 弥生時代後期、奈良時代、中世後期の3面を調査。 弥生時代は遺構は存在していないが、土器群を検出。 奈良時代は被熱のある土坑と土器群を調査。 中世後期は、土錘が多量に出土し、漁村集落の様相を示す。

＊緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告　第376冊

南　通　り　遺　跡

国道250号（飾磨バイパス）沿道環境改善事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年3月18日　発行

編　集　　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
Tel　079-437-5589
発　行　　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
印　刷　　岸　本　印　刷　所